Ⅵ 岩田古墳群第9・11・12・13号墳

第1章 序　説

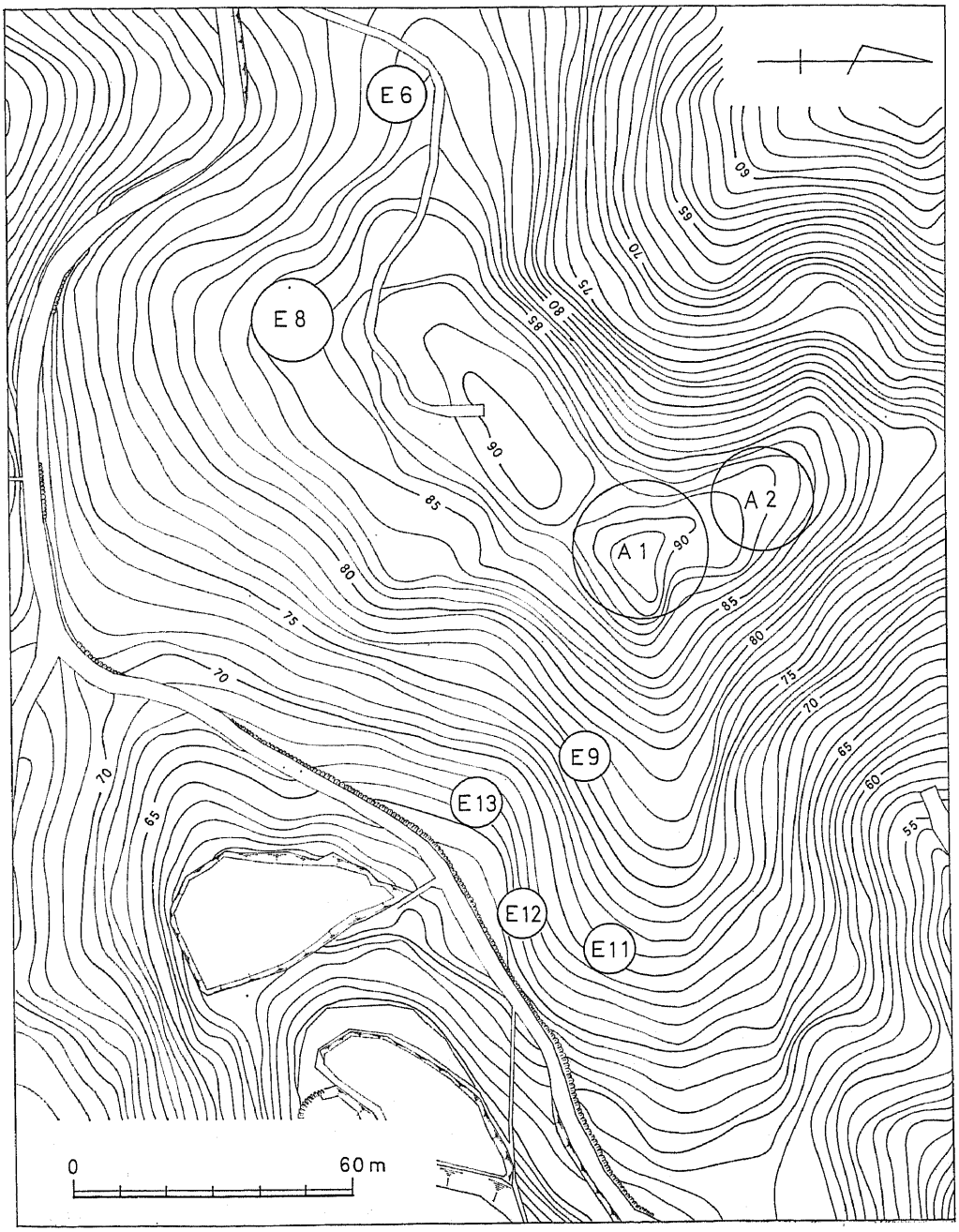
岩田古墳群第9号墳（略記号E9），第11号墳（E11），第12号墳（E12），第13号墳（E13）の古墳4基は，ともに岡山県赤磐郡山陽町河本字石江107～109番地の，埋積平地を臨む丘陵上の傾斜面，約25m×40m程の範囲内に近接して群在する。いずれも丘陵傾斜面を利用して溝状に掘り込んだ掘り方内に，半地下式の横穴式石室を構築した小円墳と推察されるが，すでに石材採掘等によって大破され，墳丘は原形を全く留めないまでに変貌し，石室も二次埋積によって完全に埋没した状態で，その残骸が辛うじて遺存する程度のものが多かった。したがってこれらの古墳は事前の分布調査など，外表観察の段階ではその存在を知ることができなかったのである。

岡山県と山陽町の間で締結された，昭和47年度山陽団地埋蔵文化財発掘調査委託契約（通算第9次）にともなう，発掘調査対象遺跡の一つである弥生時代集落址，用木山遺跡第3地点の発掘調査を実施中に，当該遺跡内に複合立地する岩田第9号墳，第11号墳，第12号墳の3基を，また昭和48年度委託契約（通算第10次）にもとづく，用木山遺跡第2地点の発掘調査中に岩田第13号墳を，夫々偶然に掘り当て発見したのである。各古墳とも発見と同時に発掘調査進行中の集落遺跡の調査と併行させて，山陽町教育委員会が発掘調査を実施した。個々の古墳の発掘調査の経過概要は下記のとおりであるが，いずれも集落遺跡の発掘調査と併行調査のため，実測および写真撮影の記録作業が遅れがちとなり，また他の地区の発掘調査が緊急を要するなどして，しばしば調査が中断されるなど，一貫した集中的発掘調査の体制が組めなかった。そのため調査期間は各古墳ともかなりの日数を要しているが，実質的な調査日数はいずれも数日間の調査行程で終了している。岩田第9号墳など3基の古墳が発見された用木山遺跡第3地点の発掘調査は，昭和47年4月20日から同30日までと，同年7月25日から11月3日までの2次にわたって実施した。

岩田第9号墳は用木山遺跡第3地点D3グリットにおいて，4月27日発見された。直ちに30日までをかけて残存石室のほぼ全貌を露呈したところで一時中断，9月1日発掘調査を再開，2日まで床面の発掘と写真撮影，9月6日と11日に石室の実測，22日に石室裏側と掘り方を調べるトレンチ発掘，30日と10月2日に石室および掘り方の断面図を実測，本古墳の発掘調査を終了した。この間実質調査日数は約10日間である。第11号墳は第3地点K13グリットにて8月24日発見，26日までの内3日間をかけて石室発掘，9月30日から10月4日までに石室の実測および出土状況の写真撮影と出土遺物の取りあげ，その間10月2日に石室裏側と掘り方内トレンチ発掘，10月5日石室および掘り方の断面図を実測して発掘調査を終了した。実質発掘調査所要日数は約8日間である。第12号墳は第3地点N11グリットにおいて8月30日発見，9月4日までをかけて石室を発掘，9月20日実測準備，21日から28日までの内6日間を要して，実測および出土状況などの写真撮影と遺物の取りあげを行なって発掘調査を終了した。実質発掘調査所要日数は約12日間である。なお本古墳は発掘調査終了後の10月11日，石室下層に複合する弥生時代竪穴式住居址の発掘調査のため，石室の大部分

を私たち調査団の手によって取り壊した。

岩田第13号墳が発見された用木山遺跡第２地点の発掘調査は，前後３回にわたって実施されたが，なかでも第３次調査は昭和47年10月12日から，昭和48年７月27日までの長期におよんだ。岩田第13号墳はこの第３次発掘調査の期間中，昭和48年１月29日に第２地点Ｃ５グリットにおいて発見された。原位置を保つ石材はほとんど遺存しなかったが，２月１日までをかけて石材を発掘，３月



第62図　岩田第９，11，12，13号墳周辺地形図

16日，19日，20日，22日の４日間で実測および出土状況の写真撮影，遊離石材の除去と遺物の取りあげを行ない発掘調査を終了した。実質発掘調査所要日数は約７日間である。同年６月28日には，本古墳と複合立地する竪穴式住居址発掘調査のため，石材の一部を除去した。

以上の発掘調査古墳４基および用木山遺跡第２・３地点は，発掘調査終了後の昭和48年１月23日と同年12月26日の２回にわたり，住宅団地造成工事によってその基盤である丘陵もろとも削平されて消滅した。すなわち１月23日に第９号墳と第11号墳が，12月26日に第12号墳と第13号墳が重機械によって破壊されたのである。現在は分譲住宅地として階段状に整地され，行政地番も山陽団地３丁目と新しく定められ，昔日の面影はどこにも留めていないのである。

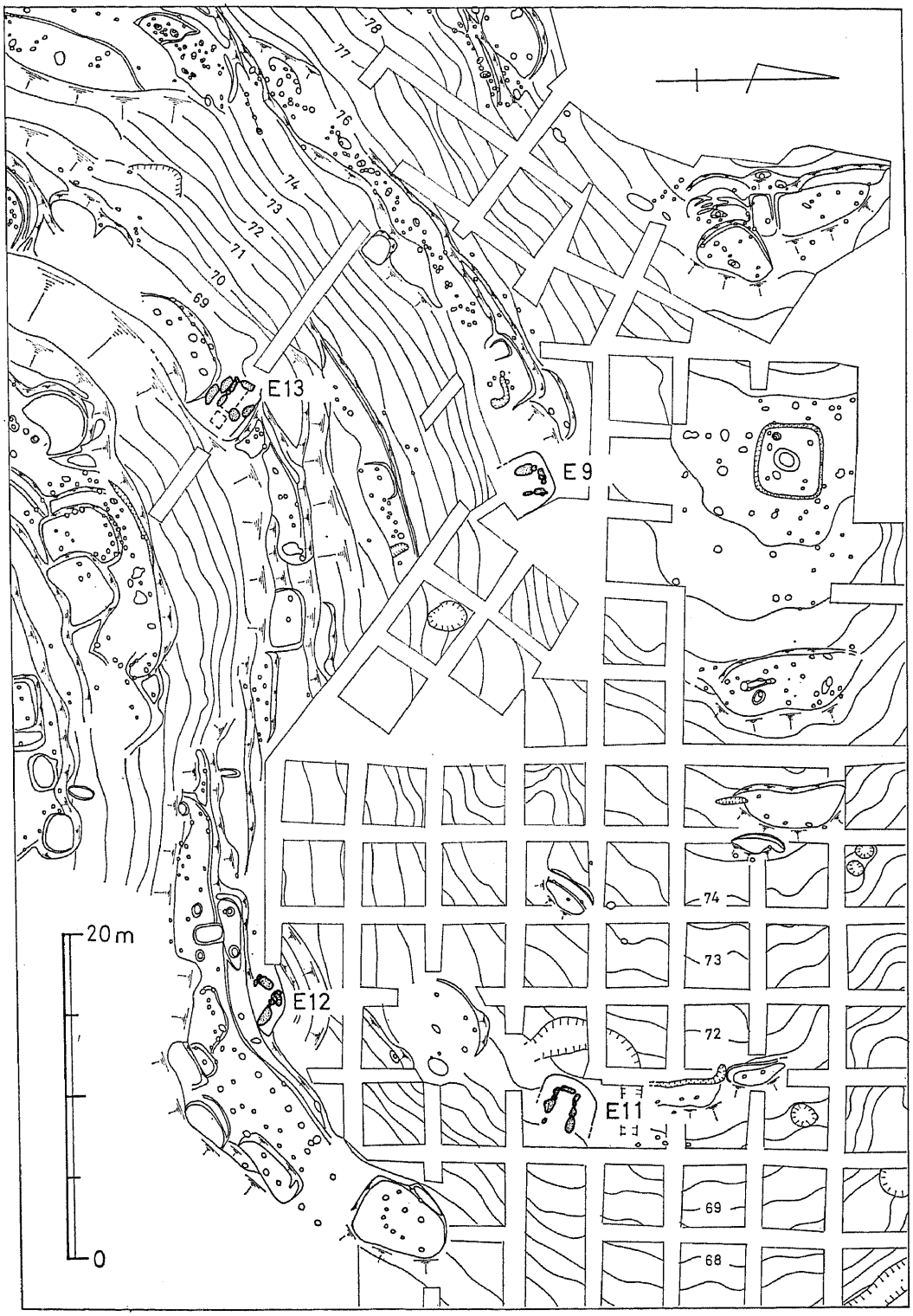
第２章　立地と調査前の概況

岡山県営山陽住宅団地の開発事業用地となった東高月丘陵群は，盆地状の埋積地の一角に張りだした方約 1,000m，平地との平均比高約40mほどの低丘陵群で，多くの尾根支脈を分出しながら広がっている。当岩田古墳群が所在する用木山は，この丘陵群のほぼ中ほどにあって，標高92mと最高位を占めるが，なだらかな亀甲形をした丘陵頂を形成し，ちょうど寄せ棟づくりの尾根状に，四方へ緩やかに下降しながらのびる丘陵尾根支脈を分岐している。

この用木山丘陵一帯は，今次開発事業が始められるまでは松林であったが，同時にまた用木山遺跡等の弥生時代集落遺跡をはじめ，当地域における初現的な様相を示す用木古墳群16基，横穴式石室を内部主体とする当岩田古墳群９基，古墳時代後半から奈良・平安時代へいたる土壙墓の散在など，多種多様の遺跡が，互いに同一立地に重複しながら集中的に所在する地域でもある（P29—図４）。

岩田第９号墳等４基の古墳は，用木第１号墳の立地する用木山頂から東方へ緩やかに下降する尾根支脈の，稜線およびその南斜面に群在する（図62）。すなわち第９号墳は用木第１号墳の東約55m，尾根主軸の南約12mの稜線肩部にあたる標高約75.5mに位置する。また第11号墳は第９号墳の東約38m，標高約70mの尾根上に，第12号墳は第11号墳の南南西約20m，標高約67mの南斜面に所在する。そして第13号墳は第12号墳の西約37m，第９号墳の南西約18m，標高約66mの南西斜面に立地する。したがって４基の残存石室の中心を結ぶと，長辺約38m，短辺約19mの平行四辺形の各頂角に位置することになる。

岩田第９号墳の西南西約70mに岩田第８号墳，さらにその北西約65mに第６号墳があり，第11号墳の東約75mに岩田第14号墳，谷水田一つを隔てた南東約 200mの，さくら山尾根上には岩田第１号墳が所在して，それらは互に指呼の間に望見できるのである。しかしこれら４基の古墳からの眺望は，当該地が東南へ湾曲する小谷頭上の傾斜面に位置しているため，東南方向を除く他の方角は，夫々隣接する尾根支脈の稜線によって大部分を遮ぎられ，その視界は大きく限定されている。尾根上に立地する第９号墳および第11号墳と，平地に向かって張りだした南斜面に位置する第12号墳はまだしも，谷懐状の南西斜面のそれも立地の低い第13号墳は，埋積平地をほとんど望見することができない。



第63図　岩田9，11，12，13号墳周辺遺構出土状況

以上の各古墳の立地等に関する所見は，いずれも発掘調査終了後の現状によるものである。当該地が風化の進んだ花崗岩の媒乱土で形成され，またかなりの傾斜面に立地することもあって，崩れやすい地形であるためか，各古墳ともすでに前述もしたとおり石材採掘等によって，大きく破壊されているにもかかわらず，その後の風化や流土の影響で墳丘は全く原形を留めず，また盗掘坑も二次的堆積土によって完全に埋没するなど，自然地形に近い状態に還元していて，当初の分布調査や外表観察の段階では，その存在に気付かなかった。今にして思えば，地形の高い側の馬蹄形状の周溝や石室掘り方など，僅かにではあってもその痕跡が地表面に残っていたはずである。しかし当時は，この丘陵には昭和初期に施工されたと伝えられる植林用の砂防段が設けられ，またその他にも丘陵斜面に不定形な掘り込みの跡が多く見受けられて，その判別はできなかった。当初この地を弥生時代の集落遺跡としてチエックしていたこともあって，こうした不明の人工的な掘り込み痕跡については，竪穴式住居などを建築するための整地跡などと，生活址にともなう遺構の残痕と一括して理解したのである。

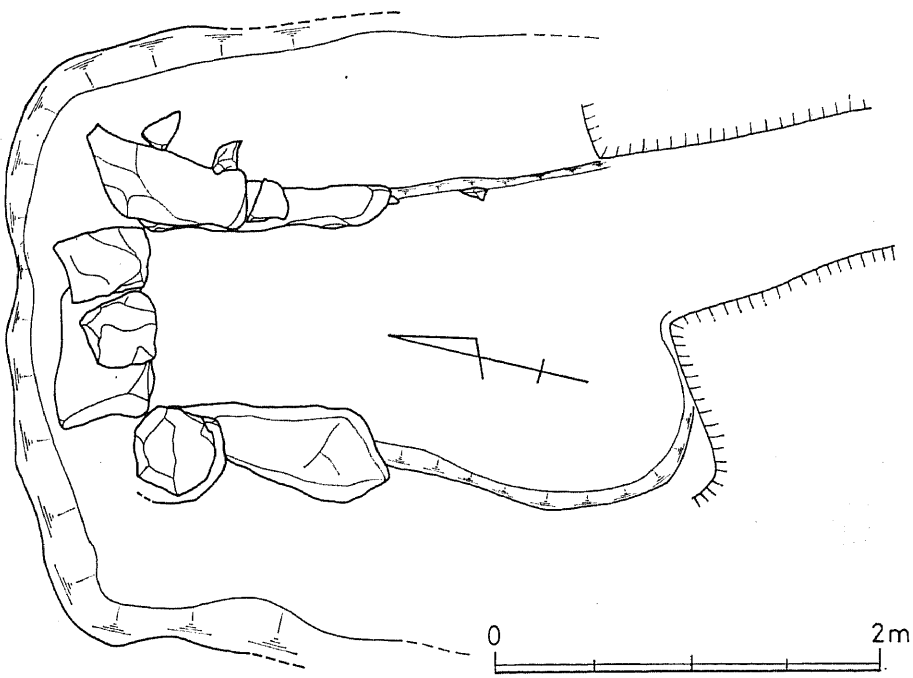
第3章　岩田第9号墳

第1節　遺構の出土状況

本古墳は，東へなだらかに下降する丘陵尾根支脈の稜線から南へ約12m片寄った，これから急傾斜面に臨もうとする肩部に，南に開口する横穴式石室の奥壁を置く小円墳であったと推察される。しかし，すでに石材採掘等によって大破され，さらにその後の風化や流土等によって墳丘の高まりや墳域なども損なわれ，調査時における外観ではその存在は全く認められなかった。発掘調査の結果，石室の奥壁およびそれに接する両側壁と床面，ならびに石室外周の掘り方の一部を僅かに遺存する程度である（図64，図版36）。

横穴式石室を構築するための掘り方は，丘陵傾斜面を利用して，地形の低い南側から等高線に直交する方位で溝状に掘り込まれている。現状で確認できる地山生き土上面での現存掘り方上端巾約3.2m，同奥行長約2.3m，底面巾約3.0m，同奥行長約3.9m，掘り込みの最も深い北小口壁面の深さ約1.2mを測る。掘り込みの角度はいずれもやや上方に開く外傾を示し，底面もほぼ平らに整然と掘られているが，石室構築の際に石材に合せて，底面や壁面をさらに掘り込んで調整した跡を残す。掘り方底面は現存部で地形の低い側の南へ約5度の緩い下傾をみせるが，その外方は44度の急斜面となっている。掘り方の現存奥行 3.9mから推察して，おそらくは掘り方の土砂等を下方に埋めだして，石室床面を若干延長整地して，半地下式の横穴式石室を構築したものと考えられるが，調査時点では，直接丘陵地山の生き土に掘り込んだ部分のみの遺存で，原況は明らかでない。

石室は天井石のすべてと側壁の大部分はすでに持ち去られ，奥壁とそれに接する両側壁の根石各1個分が，コの字形に遺存するのみである。奥壁を背にして左側壁長1.3m，右側壁長1.77m，石室巾0.95mを測る。しかし石室床面は側壁に較べてやや保存状態が良好で，奥壁から約22mの長さの水平面を保ち，床面に木棺1体分の痕跡をとどめている。また側壁の現存しない部分において，

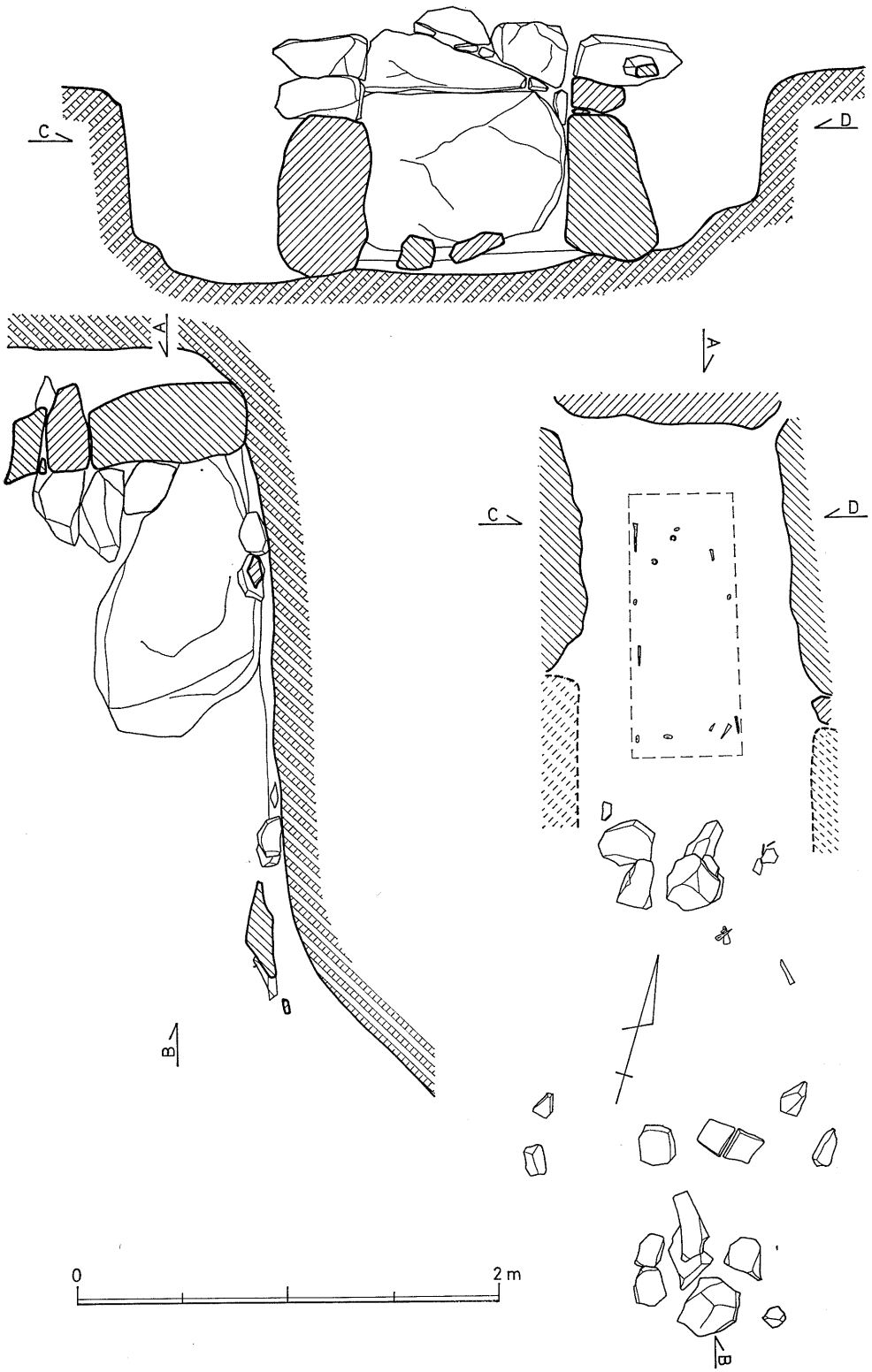


第64図　岩田第9号墳出土状況図

残存側壁の延長線上に根石の抜き取りを思わせる痕跡が2か所認められたが，その実際は明らかでない。石室長軸中心線の方位は北14度西を示し，ほぼ南南東に開口部をもつ。石室構築に用いられた石材は，現存する限りではすべて当丘陵に多く産出する花崗岩の自然転石である（図65，66）。

奥壁は巾0.98m，高さ0.73m，厚さ0.4mのやや扁平な石材を，掘り方の北小口壁面から約17cm離れた中心線上にほぼ垂直に立て，その上段に図示したごとく，高さ15cm～25cm程度の石材3個を横口積みにして天部を揃え，石材間の隙間には小割石を詰めて調整している。現状における奥壁高は約 1.1mであるがその形状から推察して，天井石はすでに失なわれているものの，奥壁の全原況をほぼ保つものと思われる。側壁は左右両側壁とも，長さ約1.4m，高さ約0.8m程度のやや大形の石材を，広口面を石室内側に揃えて立てて根石として，その上に小形の石材を横口または小口積みにして構築したものと推察されるが，現存部が僅かのため詳細は明らかでない。両側壁根石よりも奥壁根石が先に置かれていること，および側壁は持ち送りとならず垂直に近い築造であることが指摘できるほかは，石材間の隙間への粘土等の充填や，赤色顔料の塗布の有無の施設については不明である。

床面の木棺は，奥壁の南32cmに北小口を置いて石室のほぼ中央部の床面上に，長方形の腐蝕土面と直立した鉄釘数本の検出から確認できた。腐蝕土面での長さ 125cm，巾54cm，直立釘間での長さ98cm，巾44cmを測りやや小形である。棺内北小口部床面に金環1対，西棺側部に刀子1，南小口東隅に鉄鏃が検出された。この形状からおそらく頭位を奥壁側の北に置いての埋葬と推定される。このほか，棺の南約50cmの石室床面に，意識的に置かれた数個の石材と，鉄鏃，鉄釘，須恵器断片若干の遊離散在が認められ，棺の存在が想定されるものの，現存石室外で撹乱されているおそれも強

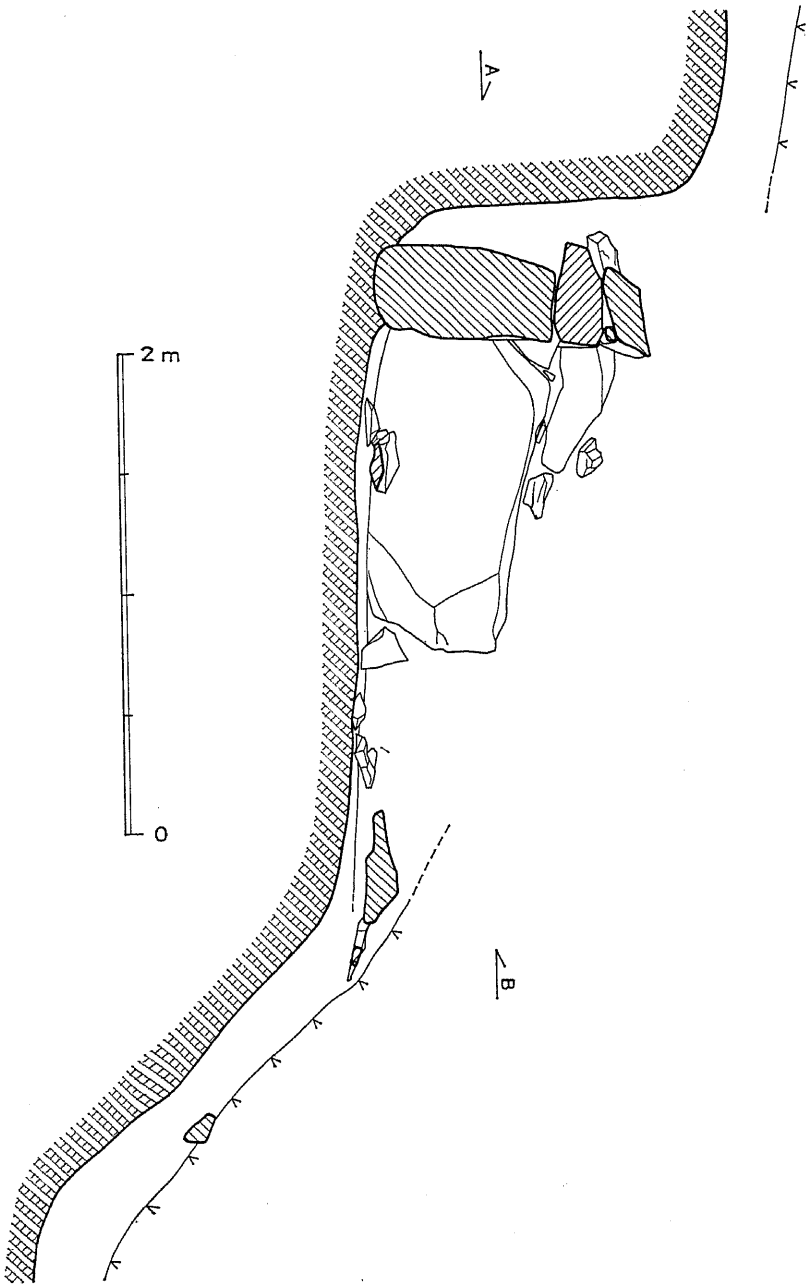


第65図　岩田第9号墳石室実測図 (1)

く詳細は不明である。なお石室南側の急斜面にも，10数個の石材が崩落した状態で検出されたが，石室の残存状況等と合せ考えて，当古墳関連の石材であったろうと推察できる程度である。

第2節　出土遺物

本古墳の石室内およびその周辺部からの出土遺物は，須恵器断片約30片，金環2，鉄鏃4，刀子1，鉄釘約10本分である。石室床面の木棺内発見の金環2，刀子1，鉄鏃1および棺鉄釘7のほかは石室床面を含む石室埋土および周辺部における遊離発見である。

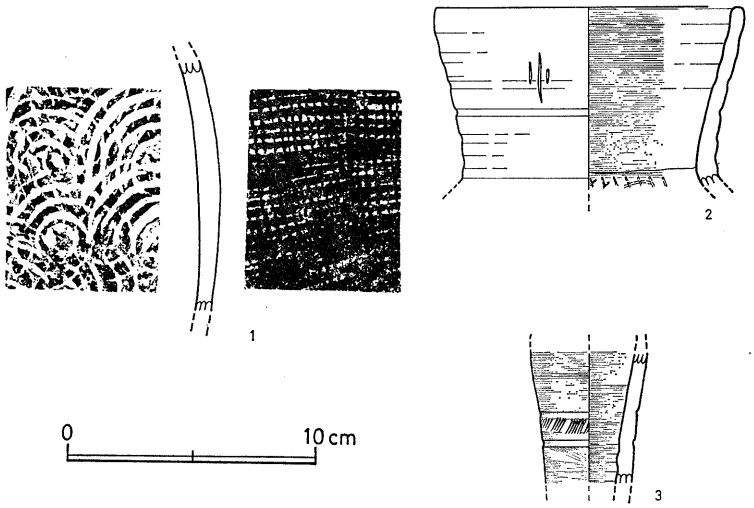


第66図　岩田第9号墳石室実測図 (2)

1. 須恵器片

総数32片の破損した小断片で，すべて遊離検出である。原器形の判別できないものが多く，図示できるものも僅かである（図67）。出土片を検討した結果，直口壺，長首壺各1個体分，平瓶2個体分を確認できたが，坏片と断定できるものは存在しなかった。しかし当該地は集落址および古墳時代後期の土壙墓が所在して，周辺部にもかなりの量の須恵器片が散在しているため，

一概にここで発見した須恵器片を，本古墳と直接的に結びつけることはできない。参考までに口頸部に凹線をもち，鋭いへら先状の工具で窯印状の刻印を付したもの（図67—2）などが認められる。



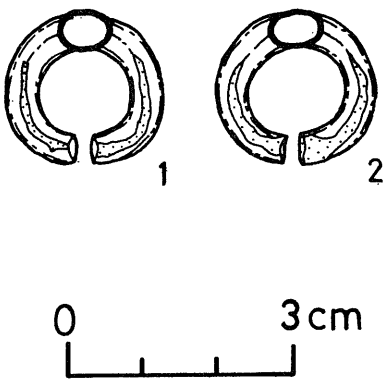
第67図　岩田第9号墳出土須恵器実測図

2．金環（図68，図版46）

銅地金張り製の2個である。どちらも同巧同大のやや小形のつくりで一対となるものである。断面が楕円形を呈する棒銅を円形に曲げ，切り口のつき合せ部を約 0.2㎝間隙をもたせたつくりである。表面に張られた金は若干の剝脱はあるものの，比較的に遺存度が良好で今も黄金色の光沢を保つ。(1)の外径2.15㎝×2.00㎝，内径1.15㎝×1.05㎝，体部径0.70㎝×0.50㎝，突き合せ部間隙巾0.18㎝，(2)の外径2.15㎝×2.00㎝，内径1.20㎝×1.10㎝，体部径0.70㎝×0.48㎝，突き合せ部間隙巾0.12㎝を測る。

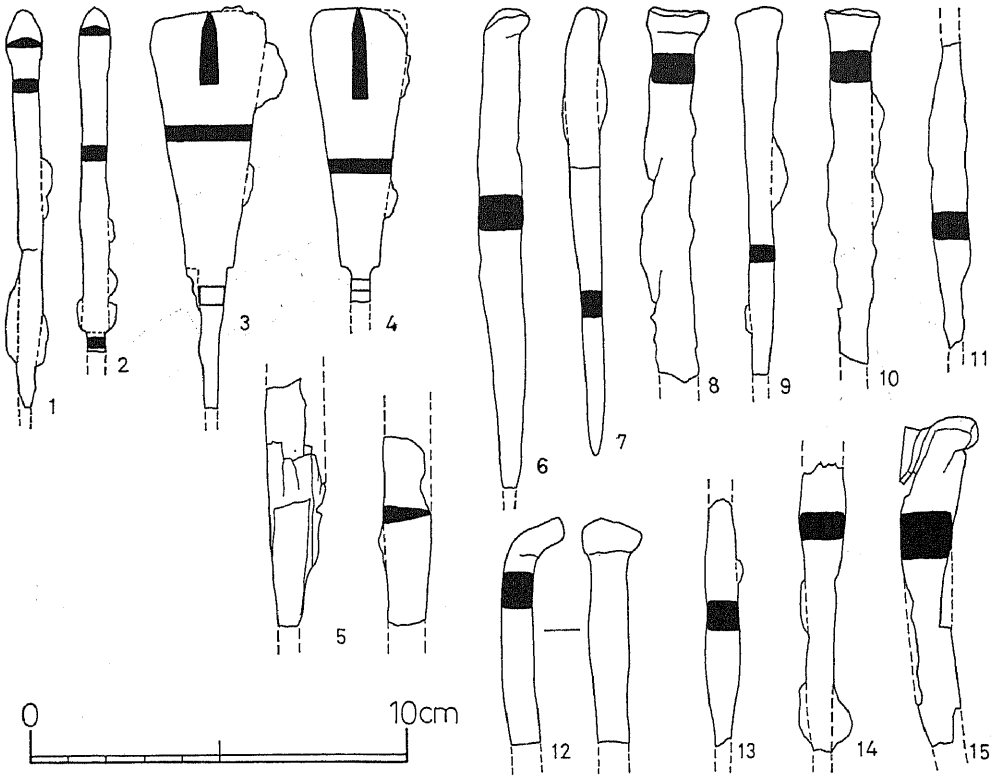
3．鉄鏃（図69，図版44）

尖根式鉄鏃2本，鏨頭式鉄鏃2本の計4本である。いずれも錆化が著しいうえに茎部端を欠損しているため，全形は不明である。尖根式鉄鏃は，鏃身部が楕円形，横断面がかまぼこ形を呈する長さ約1.5㎝，巾0.9㎝と小さく鋭いつくりである。茎部は長さ約7㎝，巾0.6㎝，厚さ0.4㎝の断面長方形を呈する平角状，根部は段をもって一まわり細くなる巾0.4㎝，厚さ0.3㎝，先端になるにつれてさらに細まる角錘形の形式と推察されるが，先端部がいずれも欠損しているため不明である。先に報告した岩田第8号墳出土の同形式鉄鏃に類似し，原形は全長12㎝～13㎝程度の鉄鏃であったろうと考えられる。



第68図　第9号墳出土金環

鏨頭式鉄鏃は，どちらも鏃身は逆台形状を呈し鏑や返刺をもたない。刃先部断面は二等辺三角形，横断面は長方形を示す。篦被はもたず直接細長い平角状の茎がつくつくりであるが，茎端部を欠損している。(3)は木棺内南小口で検出されたもので現存全長10.5㎝，身部先端巾2.9㎝，関部巾1.3㎝，身部長7.1㎝，身部厚0.4㎝，茎部付根巾0.8㎝，同厚さ0.5㎝を測る。(4)は現存全長7.8㎝，身部先端巾2.5㎝，関部巾1.0㎝身部長6.9㎝，身部厚0.4㎝，茎部付根巾0.5㎝，同厚0.3㎝を測る。



第69図　岩田第9号墳出土鉄器実測図

4. 刀子（図69，図版44）

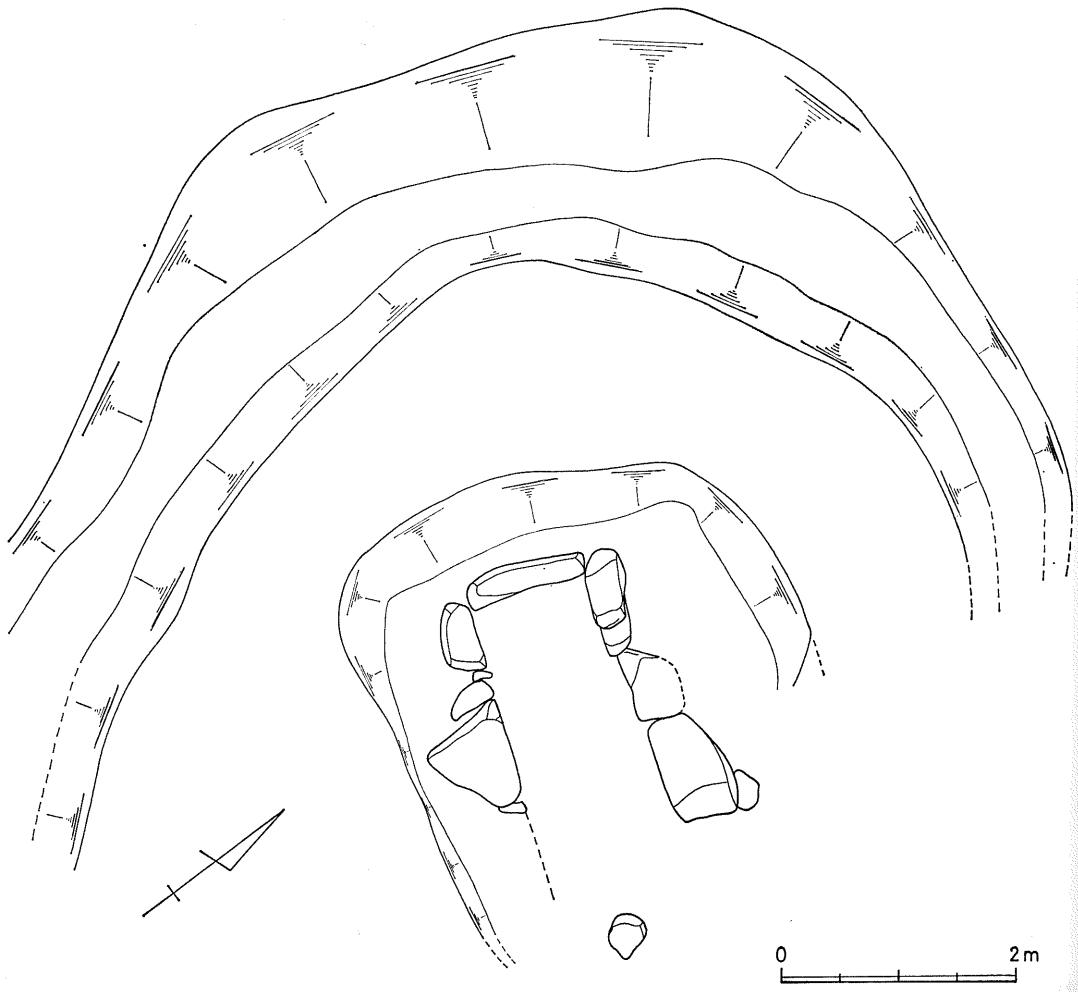
石室床面木棺内検出の刀子片である。錆化が著しい折損片2片(5)を発見したが，同一個体と思われるにもかかわらず接合できなかった2片を合せての現存全長11.3cmを測るが，原全形は全く不明である。鍛造によるつくりで断面が二等辺三角形を呈すること，他の一辺は柄状を呈し，木質が遺存することなどから刀子と推察できる程度である。

5. 鉄釘（図96，図版44）

石室床面木棺痕跡部7本，その他3本分計10本分の出土である。特に木棺痕跡部の出土状況から，これらの鉄釘は棺を組み立てるために用いられた釘と考えられる。錆化折損等が多く全形の明らかなものが少なく，また鍛造のため計測値にかなりのばらつきも認められるものの，いずれもほぼ同巧同大のつくりである。ほぼ全形を保つ(6)(7)について概要を記せば，断面長方形を呈する角釘で，頭部を扁平に打ち広げて一方に折り曲げて傘状にした，鉄道犬釘に似たつくりである。(6)は全長約13cm，中央部断面1.2cm×1.0cm，(7)は全長11.9cm，中央部断面0.8cm×0.5cmを測る。

第4章　岩田第11号墳

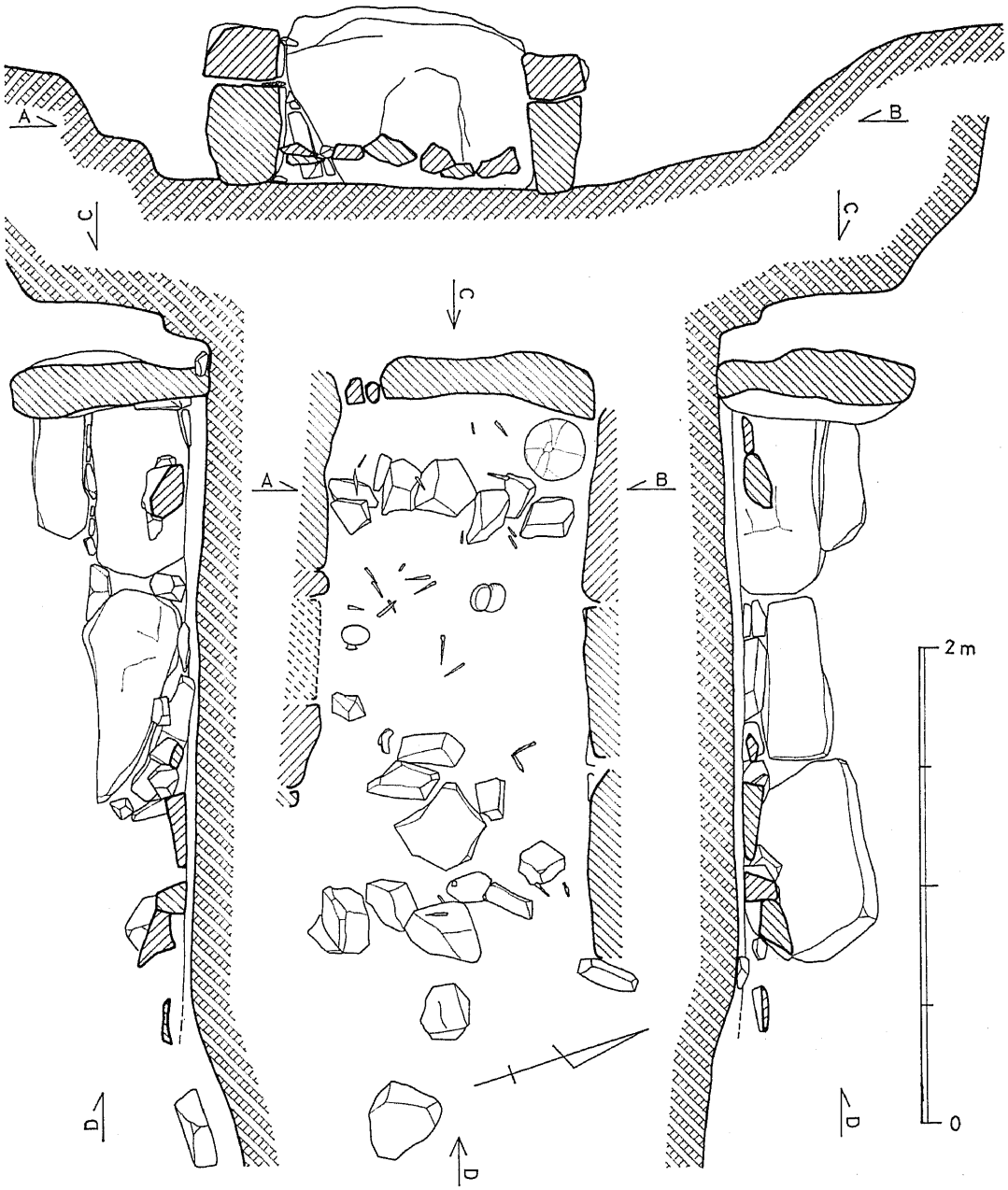
第1節　遺構の出土状況



第70図　岩田第11号墳出土状況図

第９号墳の東約38m，第12号墳の北北東約20mの，東へなだらかに降る丘陵尾根支脈の標高約70mの稜線上に，尾根走向に沿って東へ開口する横穴式石室の奥壁を置く円墳である。第９号墳の場合と同様にすでに大破されたうえに，その後の流土や埋積のため，墳丘は流され盗掘坑も埋没して，自然地形と変らない状態となって，外見ではその存在はわからないほどである。発掘調査の結果，石室と掘り方および周湟の一部が検出され，古墳の構造と規模の一端を知り得た。古墳は丘陵傾斜面を利用して，地形の低い東から溝状に掘り込み，下方に埋めだして石室床面をつくり半地下式の横穴式石室を構築した後，地形の高い西方の尾根部を掘って，周湟および墳域を画するとともに，その土で石室を覆って封土とした円墳である。（図70，図版38）。

周湟は図示したごとく，掘り方の西小口から約1.75m西方に内縁部をおいて，やや不定形ながら石室外方をほぼ半円形に繞るが，約1000分の25の勾配をもつ尾根巾の狭い稜線にあり，また崩流し易い花崗岩風化土で形成されているため，やっとその痕跡をとどめる程度の遺存である。現状で掘り込みが確認できる現存地山生き土面巾約1.5m～2.3m，横断面は浅い円孤状を呈し最深部の深さ約15cm，周湟底中心推定径約 9.1mを測る。当該地表土層のその後の風化流失の度合が不明のた



第71図　岩田第11号墳石室実測図

め，周湟の原況は明らかでないが，本古墳は石室長軸に沿って長径をもつ平面形が楕円形の小形円墳と推察され，石室に直交する短径は約９ｍ前後と推測される。

石室掘り方は，地形の低い東から尾根主軸に沿って，底面をほぼ水平な長方形の溝状に掘っている。封土が全く認められないほど表土層が流失して，掘り方の全原形も明らかでないが，現状での掘り方上面巾約 3.6ｍ，底面巾約3.1ｍ奥行長約2.75ｍ，最も深い西小口壁の深さ1.1ｍである。掘り込み壁面は原則として両側面は上開きの外傾，奥壁はほぼ垂直であるが，図示したように部分的

には段状を呈したり，石材に合せて調整掘りをしたところも見受けられる。また石室の規模や形状から，掘り方の土砂を地形の低い東斜面に埋めだして，石室床面を延長していたものと考えられるが，現状では流失していて定かではない。

石室は，奥壁と両側壁の根石数個分を残す程度であるが，石材は現存する限りではすべて当丘陵に数多く産出する花崗岩の自然転石である。奥壁は巾 103cm，高さ83cm，厚さ約25cmの扁平な石材を，掘り方西小口壁面から約13cmに，ほぼ垂直に立てて鑑石としているが，掘り方長軸中心線よりかなり南にずれている。側壁は奥壁を背にして左側壁の根石３個分2.3m，右側壁の根石２個分1.7mの遺存である。長さ約80cm～90cm，高さ約35cm～40cm程度の石材を，ほぼ天を揃えて横口に並らべて根石としているが，奥壁の石材を左右から挟んだ形に置いている。上段はやや小形の石材を横口または小口積みで，ほぼ垂直に２段ないし３段積みあげ，石材間の隙間には小割り石を詰めて調整したものと推察されるが，現状では奥壁に接する２段目の石材が，両側壁に各１個遺存するのみで，その実態は不詳である。現存石室巾1.1m，高さ0.8mを測るが，奥壁や両側壁の形状から，原形は今少し高く築かれていたものと思われる。石室の長軸中心線の方位は北74度西を指し，ほぼ東南東に開口部をもつ。

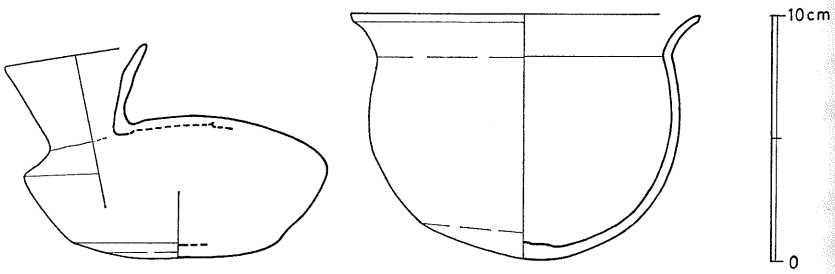
床面は巾1.1m～1.15m，奥行長約2.5mのほぼ水平面を保つが，約20個の20cm～30cm大程度の花崗岩割り石と，鉄釘等の遺物がほぼ全面に散在し，なかには床面よりも20cmばかり上方に遊離する遺物もあり，石室の遺存状況と考え合せて，盗掘時の攪乱を想起させる。しかし，奥壁から約30cm東の床面には，花崗岩割り石９個を使って，奥壁と平行に石室巾いっぱいの横一列に並らべ，またその東約 1.6mには崩落はしているものの，それと対応する石材が認められ，その間に鉄釘多数が散在することから，被葬者を木棺に納めての埋葬と，棺台としての石材を想定できる。鉄釘以外の遺物としては，奥壁に接して北隅みの床面に土師器大皿２枚が，ふせた状態で重ねて置かれ（図版40）奥壁から約80cm，北側壁から35cm，床面上方約15cmに土師器深鉢，同じく奥壁から95cm，南側壁から15cmの床面に須恵器平瓶，その東約45cmの床面上に須恵器高坏片が遊離検出された。

第２節　出　土　遺　物

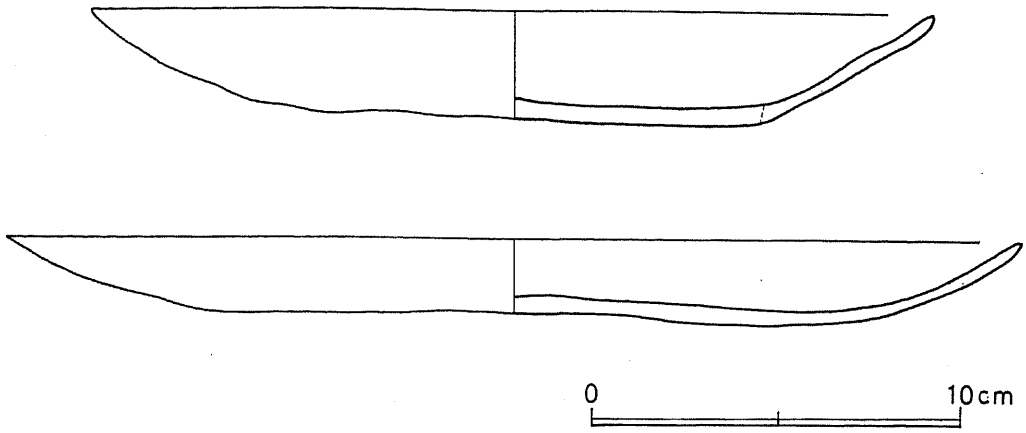
本古墳石室内出土の遺物は，土師器大皿２，同深鉢１，須恵器平瓶１，同高坏片１個体分の計５個体と，鉄釘約20本分である。土師器大皿のほかはいずれも石室内遊離発見である。

1．須恵器（図72，図版46）

完形の平瓶と高坏片各１個体である。高坏は小断片となって詳細が不明で図示もできないため，こ



第72図　岩田第11号墳出土土器実測図（1）



第73図　岩田第11号墳出土土器実測図 (2)

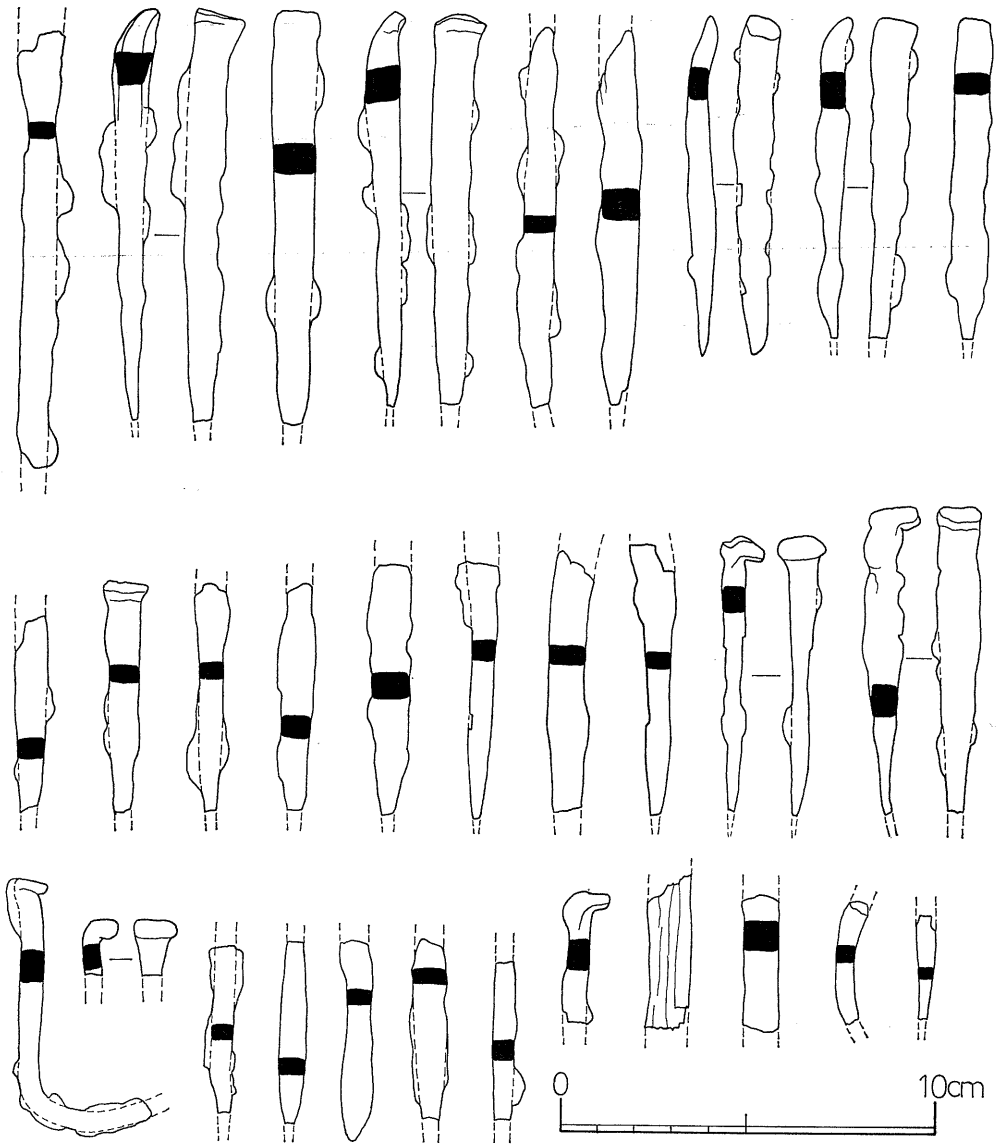
こでは平瓶についてのみ記述する。平瓶は最大径12.2cm，器高8.6cm，器胴高8.6cm，口縁径5.6cm同高 3.8cmと小形のものである。肩部が張って稜をもつやや扁平な器胴に，外傾した口縁がつく形式である。器胴底部はへら削り，その他はなでによって調整されている。焼成は普通で青灰色を呈するが，上面となる器胴天部と口縁内側のほぼ全面に，黄緑色をした自然釉をかぶり光沢をもつ。胎土に砂粒を多く含む。

2．土師器（図72・73，図版46）

深鉢形土器1と大皿2の計3個体分である。いずれも土圧等によって一括破片となっていたが，接合によってほぼ完形に復元できた。深鉢形土器は口縁径14.2cm，胴部最大径13.2cm，器高8.6cmと小形のものである。丸底の器胴の口縁部をくの字形に外反させている。胎土は精選された良質粘土が用いられ細砂粒をかなり含む。内外面ともなで調整が施され，外表は暗赤褐色，内面は黒灰色を呈するが，土鍋として使用されているらしく，外表の全面や口縁端にいたるまで，二次的に火を受けた煤の付着が目立つ。大皿は径27.4cm，底面径17.8cm，器高2.6cmのものと，径22.7cm，底面径12.5cm，器高 3.2cmの2枚である。どちらも底面径が大きく平らで，口縁部のみをやや外湾させてつまみあげた扁平なつくりである。大形のものの方が径に対して器高が低く，糸底のない西洋皿形，小形のものは径に対してやや深くスープ皿の形状を呈する。いずれも器表の荒れが著しくて整形手法は明らかでないが，底部の一部にへら削りの跡を残し，そのほかはなで調整と推察される。胎土に2mm大程度までの石英粒を多く含み，焼成は軟質でいずれも明黄褐色を呈するが，部分的に赤褐色斑をみせ，焼歪みが若干認められる。

3．鉄釘（図74，図版44）

石室床面の約 1.8mの範囲に集中的に遊離散在していた。錆化が著しいうえに折損したものが多くて，正確な本数は識別できなかったが，約20本程度と推定される。いずれも角形をした鉄道犬釘形の鍛造品で，計測値もかなりの個体差を示すが，大別して全長約11cm，頭部の太さ0.8cm×1.0cmのものと，全長約 7.5cm，頭部の太さ0.6cm×0.9cm大の二種類が存在する。出土の形態および第8



第74図　岩田第11号墳鉄釘実測図

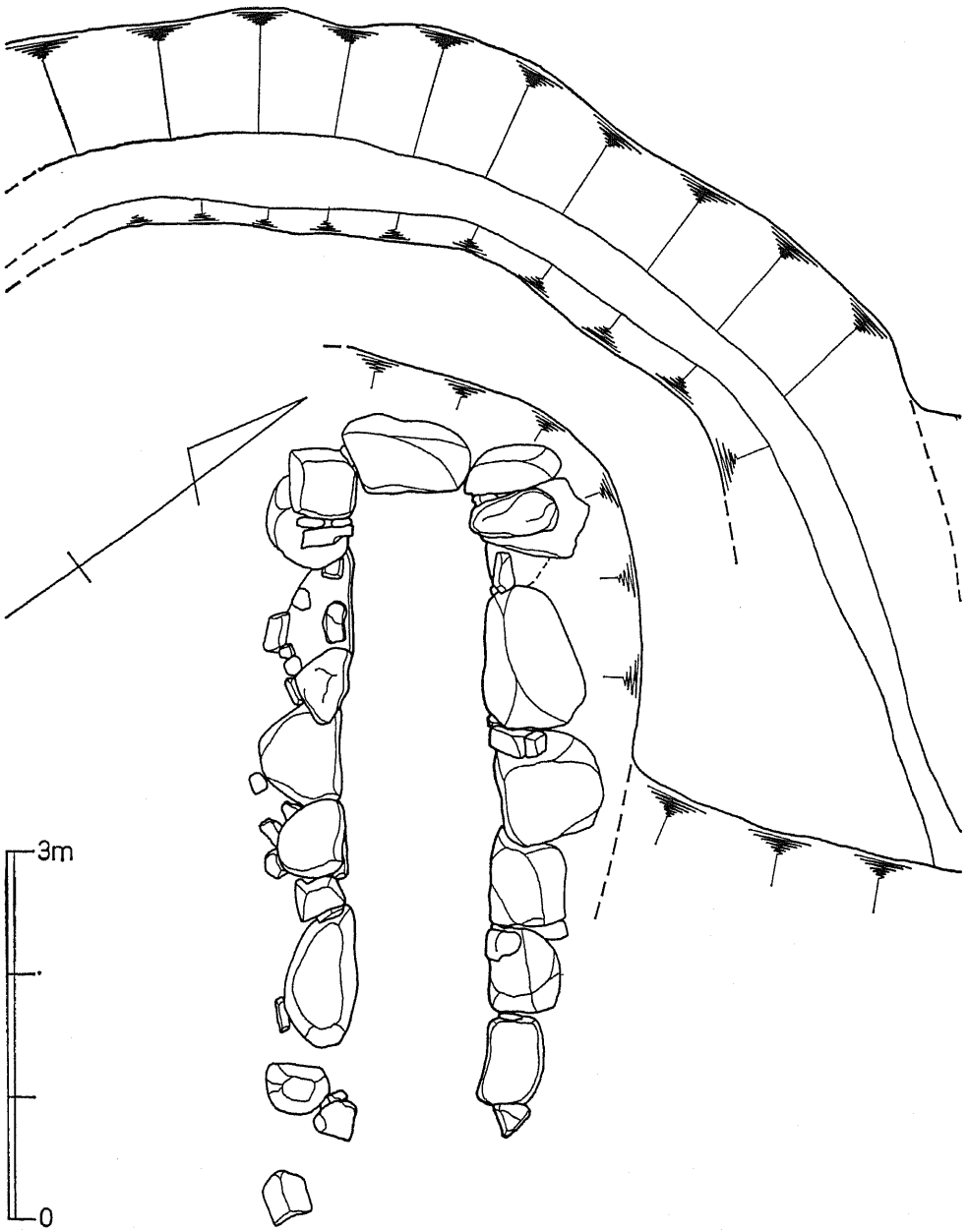
号墳羨道部木棺が計24本の釘を使用していることからえ考て，1主体分の釘と想定できるが，石室の保存状態などから確証はない。

第5章　岩田第12号墳

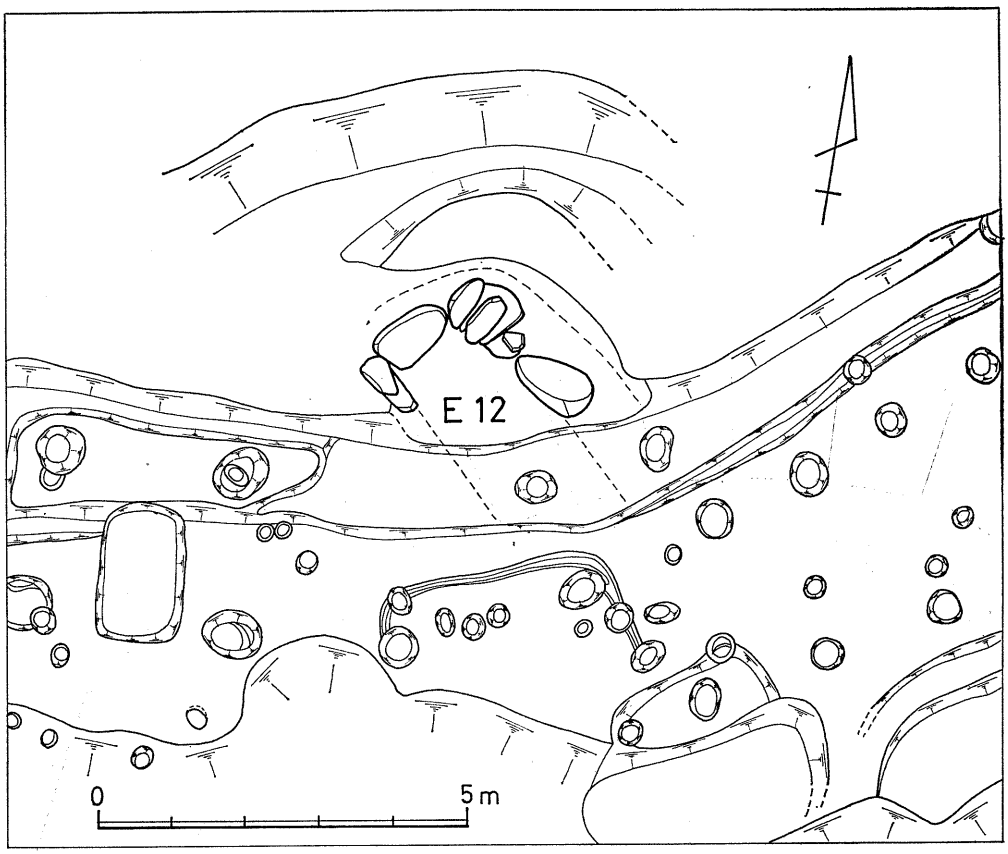
第1節　遺構の出土状況

本古墳は，第11号墳の南南西約20mの丘陵尾根支脈の南側斜面に立地する，南東に開口部をもつ

横穴式石室を内部主体とした円墳である（図75，図版41）。そこは尾根稜線からの水平距離約24m同比高 3.8m，標高約67mの地点にあたり，眼下約10mには小谷頭水田を臨める場所である。1000分の27とかなりの傾斜面にあるが，当該丘陵に複合立地する弥生時代の竪穴式住居址の水平地面を利用して，その直下から丘陵傾斜面へかけて築造していた。しかし，調査前の外観は前述の第９号墳や第11号墳の場合と同様に，すでに大破されているにもかかわらず，その後の流土や埋没によって，墳丘らしい面影は全くとどめていなかった。発掘調査の結果，石室は天井石のすべてと側壁上段部の石材をほとんど持ち去られていたが，奥壁および両側壁の根石と床面は保存状態が比較的良



第75図　岩田第12号墳出土状況図

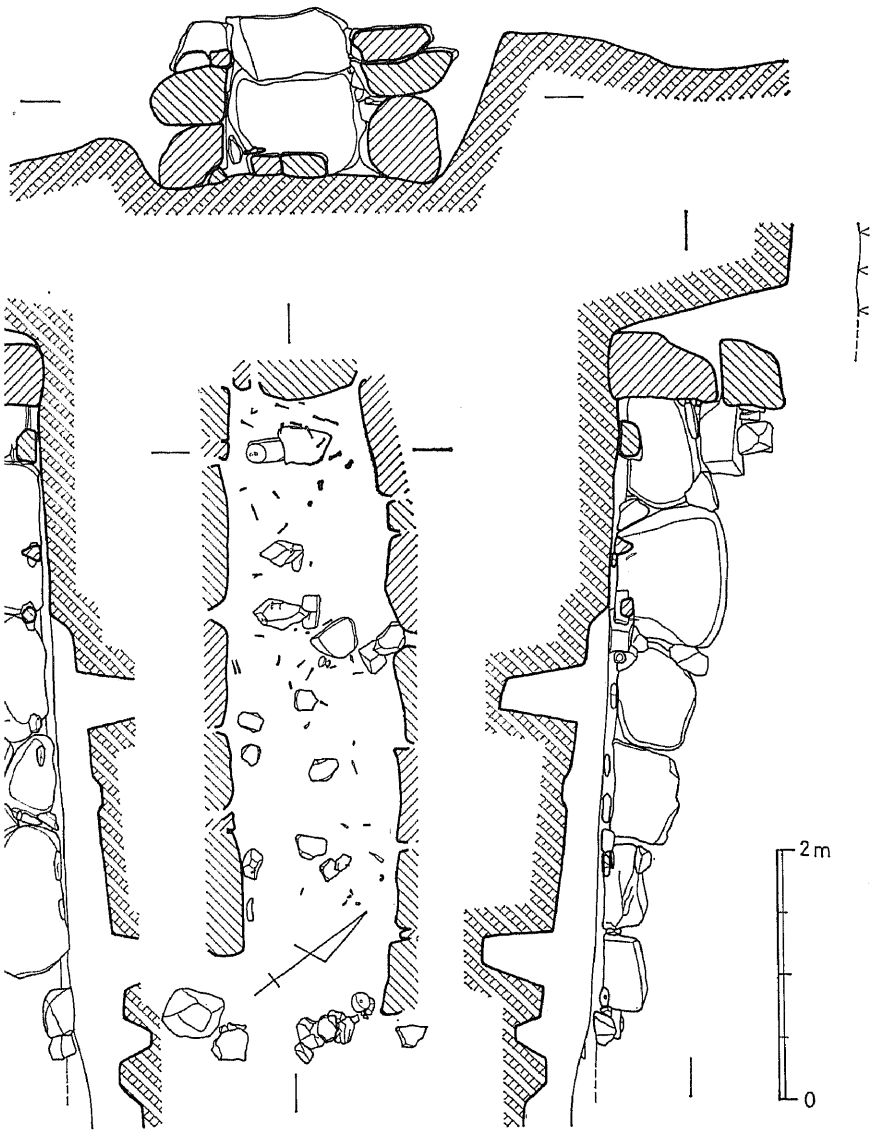


第76図　岩田第12号墳と住居地関連図

好で，さらに石室掘り方と周溝の一部が遺存することから，本古墳の概要を知ることができた。

周溝は，その掘り込みが確認できる現存地山生き土上面が，現地表下約80cmとかなり深く埋没していた。これは本古墳立地が弥生時代の竪穴式住居を建築するための，テラス状の整地面を利用している関係から，丘陵上方からの流失土による二次堆積と考えられる。したがって周溝はこの二次堆積層に掘り込まれた可能性も強く，現に西端部では竪穴住居址の埋積土内に掘り込まれているが，現状ではその識別はできなかった。現存地山生き土面えの掘り込みの遺存は僅かで，現状で確認できる周溝は，石室掘り方の北西小口から約１mに周溝内縁をおいて，巾約1.75mで半径約５mの円弧状に繞る。横断面はカーブの緩い上向きの抛物線を呈し，最深部での深さ約25cmを測る。もとは地形の高い側の墳端外方にのみ，半円形に繞らされた周溝であったと考えられるが，その実態は不詳である。本古墳の規模は石室長軸方向にやや長い長径をもつ，短径10m前後の小円墳と推定される。

石室の掘り方は丘陵斜面の等高線に斜交して，地形の低い南東側から掘り込まれているが，その大部分が弥生時代生活面上の二次的埋積土内で，層序的識別が困難のため，地形の高い丘陵地上に掘られた部分のみしか確認できなかった。掘り方壁面が現存するのは，奥小口と地形の高い北東側面約３mである。掘り込みの最も深い奥小口部で，現存掘り方壁面約 1.3m，現地表からの深さ約



岩田第12号墳石室実測図

ﾐ巾約3.5m，同底面巾 約2.7mである。掘り込みの角度はやや上開きの外傾で整然は奥行約 5.5mの長方形水平面に整地されている。底面が住居址と複合する南半で方約20cmの埋積土層内に掘り方底面をおいている。

したとおり，天井石と閉鎖設備のすべてと，両側壁上段部の石材ほとんどをすでにるが，奥壁と両側壁の根石および石室床面の保存度はかなり良好であった（図77，

段で構成されている。下段は巾 113cm，高さ88cm，厚さ53cmの石材を掘り方奥壁底，上段は巾98cm，高さ50cm，厚さ53cmの角形石材を横口にして，やや持ち送り気味現存奥壁高 135cmはその形状からみて，原石室内法高をほぼ保つものと思われる。

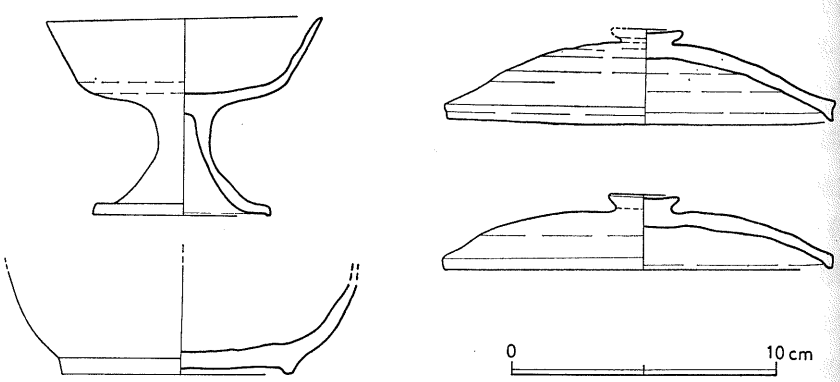
側壁は奥壁に接する一部を除いては，両側壁ともほとんどが根石のみの残存である。奥壁を背にして左側壁は根石６個4.95m，右側壁は根石５個4.6mを測る。両側壁とも根石は長さ65cm～120cm，高さ40cm～65cm大程度のやや大形の石材を，石室内側に面を揃えて横口または広口に並べているが，左側壁の奥から２番目の石材は高さ90cmと高く注目された。上段は高さ30cm前後のやや小形の石材を２段程度，小口または横口積みにして築き，石材間の隙間には小割り石を詰めて調整したと思われが，現状では上下段部石材が僅かであるため詳細は不明である。最もよく残る奥壁に接する部分では，３段構築でやや持ち送りとなり，両側壁が奥壁を挟む形を呈していた。石室の横巾は奥壁部床面 1.08m，同現存部上端で9.6m，奥壁から約2.5mの最広部床面で1.4mとやや胴張り形を呈し，長軸中心線の方位は北53度西を指す。また石室構築に使用された石材は，現存する限りではすべて当丘陵に数多く産出する，花崗岩の自然転石である。

床面は奥行長約 5.2mの水平面を保つが，20cm～30cm大程度の花崗岩礫約25個と，多数の鉄釘および若干の土器などが散在していた。石室の保存度などから推察して盗掘時の撹乱が想起されるが，石材の配置や鉄釘の散り方を検討すると，本古墳葬送時のようすをかなりよくとどめているようである。奥壁から約35cmと175cmの２か所に，２～３個の石材を横に並らべて台状に組んでいる。両者の間隔は中心距離で 140cmを測り，各巾は55cmと64cmである。この石組みの間には数多くの釘が集中して散っていたが，なかでも石室中心線に近い 154cmの間には，先端を上にした直立状の釘５本がほぼ等間隔で１列に並らび，また奥壁側の石組み上にも６本が載るなど石組みを棺台とした木棺の安置が推定される。さらにこの石組みの南東約80cm，すなわち奥壁から約2.4m と 3.9 m の 1.5mの間には，巾約60cmで左右に対となる計６個の石材があり，その北隅床面に金環１個と多数の鉄釘が散在するなど，少くとも２体以上の木棺が埋葬されていたことを示している。

その他の副葬遺物は数は少ないが，奥壁から45cm，右側壁から20cmの棺台状石組み上に須恵器蓋１，その南の両石組みの中間あたりの床面に，２片に折損遊離する刀子が約30cm離れて検出された。また奥壁から76cmの床面に遊離した須恵器高坏１，左側壁の現存部南端に接した床面に，須恵器蓋と土師器坏の一括破片各１が重なって発見された。

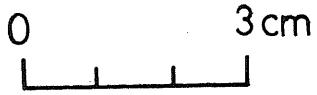
第２節　出　土　遺　物

石室内出土の遺物は土器４，金環１，刀子２，鉄釘推定約36本分，その他器種不明鉄器片若干である。石室規模の割に副葬遺物が少ない。石室の遺存度からみ



第78図　岩田第12号墳出土土器実測図

ても盗掘時の散逸が充分考えられるが，破片の検出もほとんどなく，もともと供献物の少ない古墳かも知れない。



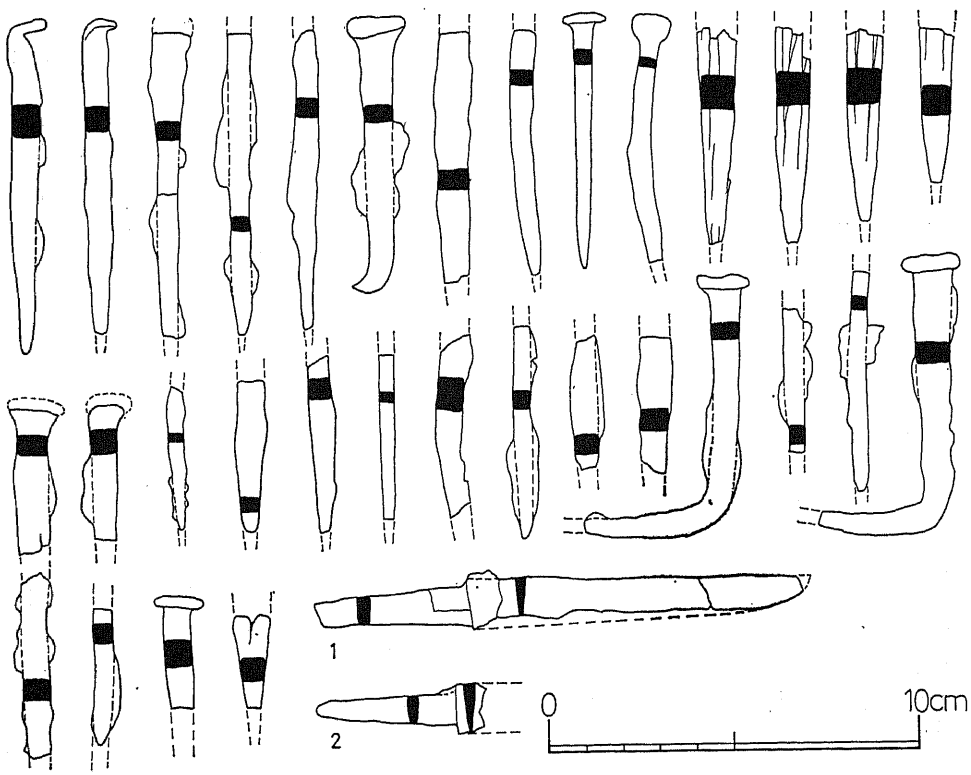
第79図　金環実測図

1. 須恵器（図78，図版46）

高坏1，蓋2の3点である。高坏は完形で器高 7.3cm，口径10.4cm，底部径6.7cm，坏部高3.3cm，脚高4cm，脚柱径2cmの全体に器壁も薄く丸味をもった華奢なつくりの無文である。胎土に細砂粒を含み焼成は良好で灰白色を呈する。調整は全面なでである。蓋はつまみを有するほぼ同巧同大のものである。器高は 2.8cmと3.6cmと差異をみせるが，径はともに14.8cm，つまみも径2.7cm，天部中央がやや凹む高さ 0.6cmの扁平なものである。どちらも胎土に細砂粒を含み焼成はやや軟質で灰白色を呈する。天部外表にへら削りが認められるほかは，内外面とも横なで調整が施されている。

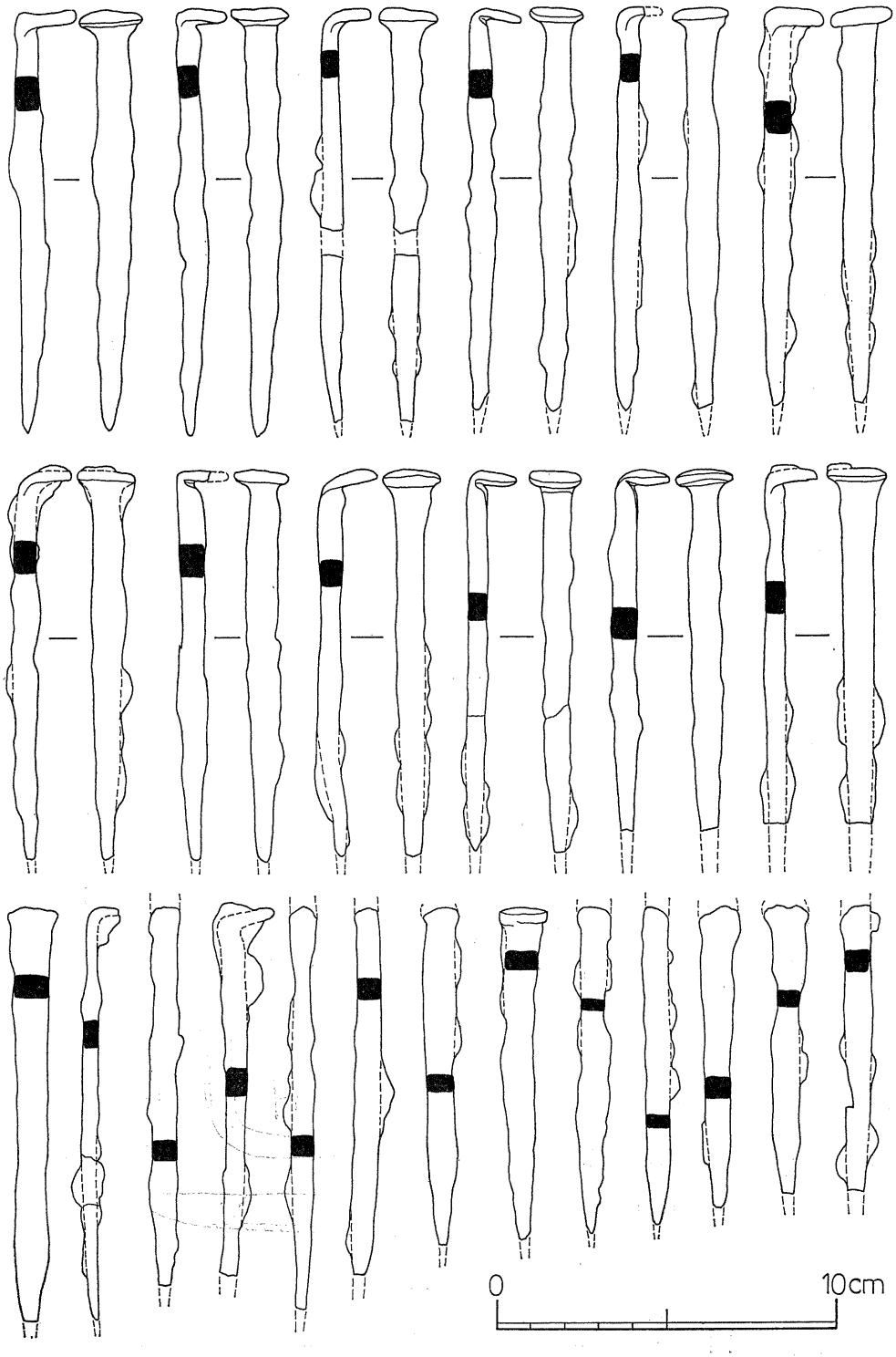
2. 土師器（図78，図版46）

糸底のついた土師器坏である。破片となっていたが接合によりかなり復元できた。しかし口縁端が欠損するため，全原形は計測できない。推定器高4.3cm，同口縁径13.4cm，底部径8.8cmを測る。黄褐色を呈し胎土に2mm大程度までの砂粒を多く含むが，器壁が荒れているため，調整手法は不明



第80図　岩田第12号墳出土鉄器実測図

である。



第81図　岩田第12号墳出土鉄釘実測図

3. 金環（図79）

やや小形の銅地金張り製の金環１個である。断面楕円形をした棒銅を円形に曲げ，切り口の突合せ部を約 0.2cm間隙をもたせたつくりである。表面に張られた金は部分的に剝脱はあるものの，比較的に保存度が良好で今も黄金色の光沢を放つ。外径2.2cm×2.3cm，内径 1.25cm × 1.3cm，体部径 0.5cm×0.75cmを測る。

4. 刀子（図80）

錆化折損した刀子片２個体分である。１振りは接合によってほぼ大要を知ることができるが，他はやっと確認できる程度の遺存である。(1)は現存長13cmを測るが，切先を一部欠損するため，原形は13.5cm程度のものと思われる。刀身部はやせて刃巾の計測ができないが，鍛造による断面二等三角形を呈するつくりである。茎は断面長方形の平角である。茎長4.1cm，同巾0.8cm，同厚0.3cm，刀身部長 8.9cm，同現存巾1.1cm，同背部厚0.3cmを測る。(2)は茎部と刀身部の一部を僅かに残すのみである。現存長4.4cm，刀身部巾1.3cm，背巾0.3cm，茎長3.7cmを測る。

5. 鉄釘（図80・81，図版45）

錆化が著しいうえに折損品が多くて正確な本数は識別できないが，検討の結果少なくとも36本以上はあると推定される。いずれも角形をした鍛造品で，頭部を傘状に広げて一方に折り曲げたつくりで，計測値もかなりのばらつきを示すが，大別して全長約12cm，頭部の太さ0.8cm×0.9cmのものと，全長 8.5cm，頭部の太さ 0.7cm×0.6cmの２種類があり，数の上では太形のものが勝り，奥壁に近い方に集中していた。なかに２本頭部から約 6.5cmのところで意識的に，直角に折り曲げた形状を示すものが検出され注目された。

6. その他不明鉄器片

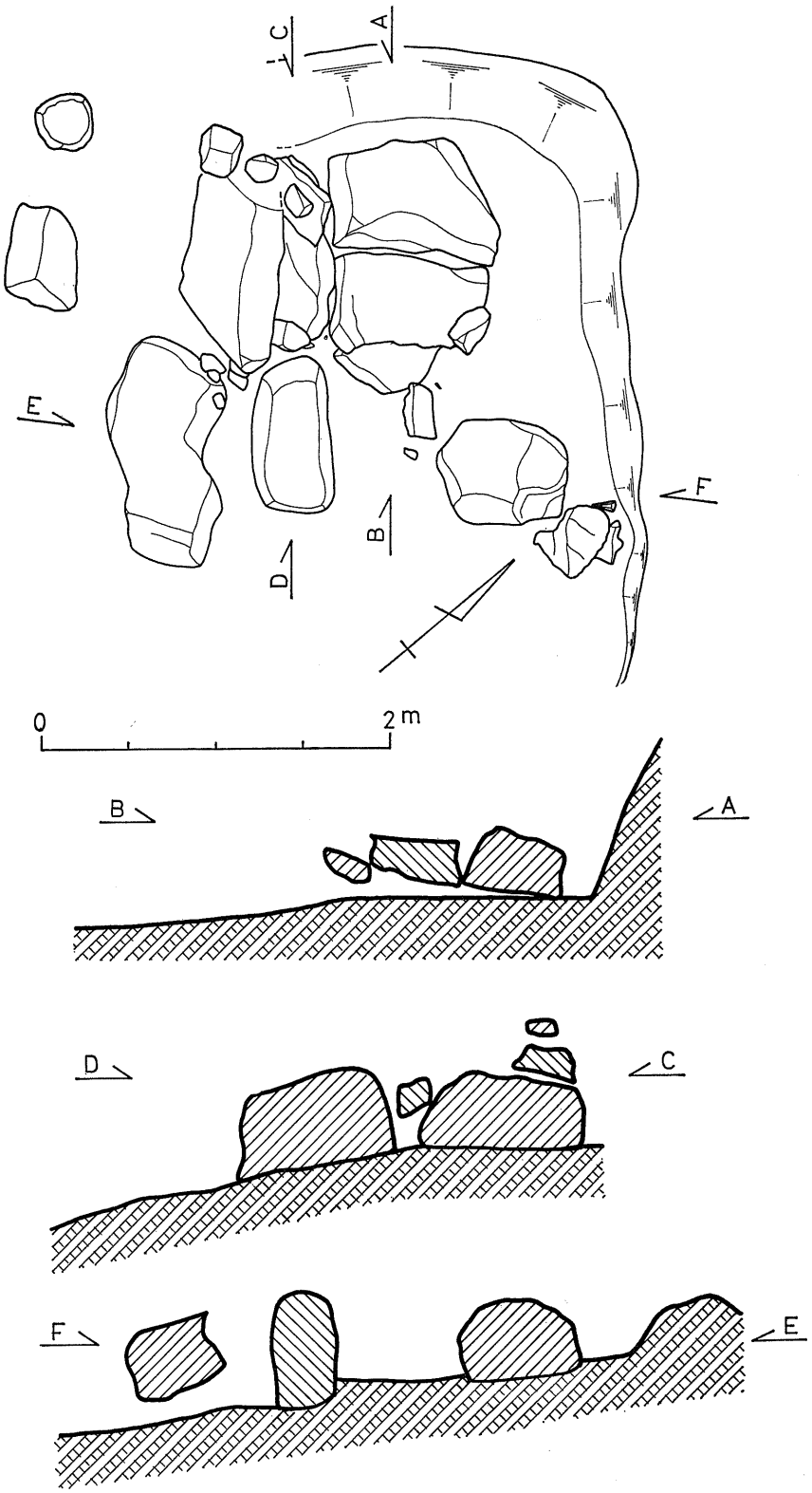
上記の他器種不明の鉄器片若干が発見されている。いずれも小断片であるが，断面形が１辺 0.4cm程度の鉄鏃茎を思わせる角柱状断片が約６片と，鉋を思わせる巾0.7cm，厚さ 0.25cmの薄板状のもの１片であるが，その原形は明らかでない。

第６章　岩田第13号墳

第１節　遺構の出土状況

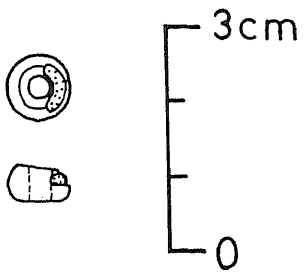
本古墳は第９号墳の南西約18m，第12号墳の西約37m，標高66mの谷懐状となった南東急斜面に立地する。もとは南東方向に開口する横穴式石室を内部主体とした小円墳と推察されるが，発掘調査時の現状は第82図にも示したとおり，壊滅状態となった石室の石材数個と掘り方の一部が埋没しているのみで，やっとその痕跡をとどめる程度である（図版43）。

古墳が築造されたところは，勾配が1000分の45とかなりの急斜面で，発掘調査前の地形測量では



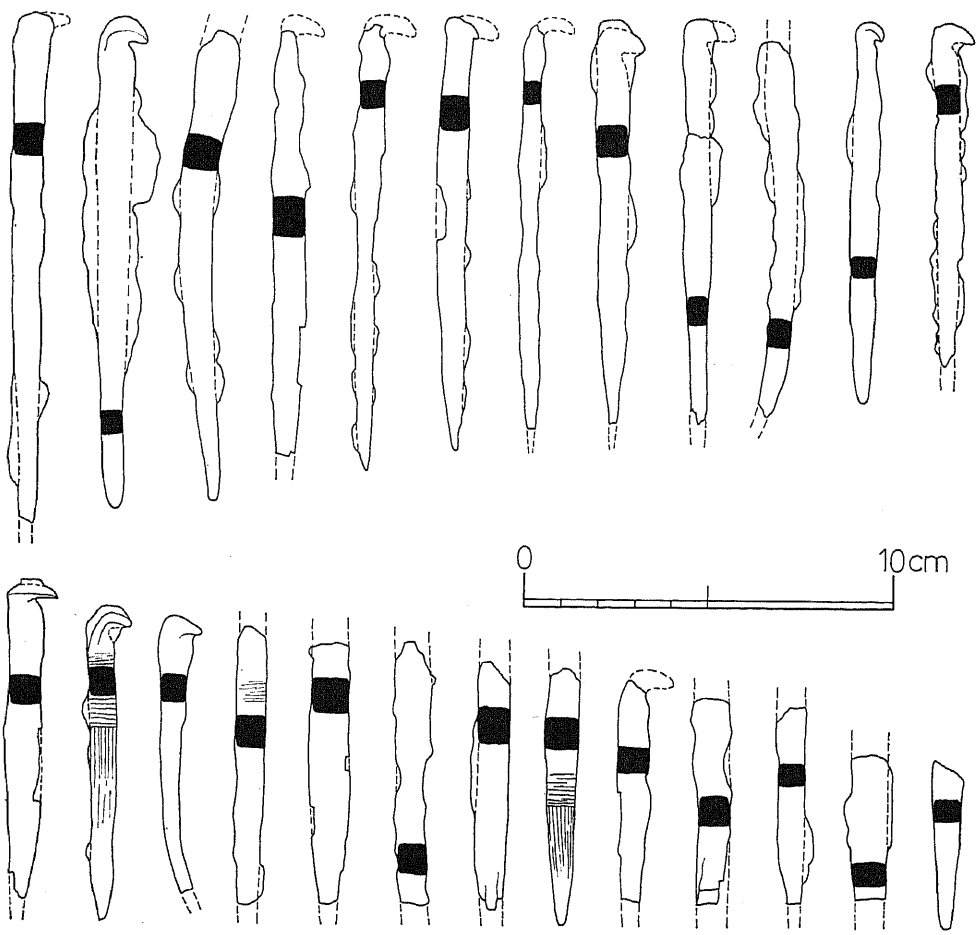
第82図　岩田第13号墳出土状況図

等高線にほぼ直交する巾約3m，奥行約4m，最大深約 0.8mの溝状の掘り込み跡が認められたが，墳丘らしい高まりもまた石材も認められず，古墳の存在には全く気付かなかった。当該地は用木山遺跡の中心部にあたり，弥生時代の単位住居址群が輻輳して，丘陵斜面に大きく掘り込んだ棚田状の整地痕が多く残り，現地表の等高線も大きく乱れをみせている。本古墳もこうした造成面の一つが，丘陵斜面を約 1.5mの深さで切り込んだ崖状の上縁肩部に立地している。そのため石室掘り方も，地形の高い奥壁部は，丘陵地山生き土に直接掘り込まれて現存するものの，その大部分は旧生活面への二次的埋積層内に構築されていることになり，古墳の保存と構築の識別をより困難にしている。



第83図　ガラス小玉

周溝の痕跡は精査を試みたが検出できなかった。石室掘り方は等高線にほぼ直交して，地形の低い南東側から掘り込まれているが，現状では奥壁部と東側面の一部だけが遺存している。現存部での掘り方は奥行長約3.4mを測るが，水平面長は1.4mの遺存，掘り方上端巾は約 1.8m，奥小口壁の深さは約1 mを測り，原掘り方上端巾はその形状から約 2.8m程度と推察されるが詳細は不明で



第84図　岩田第13号墳出土鉄釘実測図

ある。

石室は図示したごとく，約10個の石材を一括して集めた状態で検出された。第81図断面C—Dの2個がほぼ原位置を保つと思われる他は，すべて移動され遊離していた。この2個の石材を当石室の，奥壁を背にして右側壁根石とすれば，石室内法巾約80～90cmの，長軸中心線の方位が北50度西を指す小規模な横穴式石室となるが，その他の構造については不明である。なお検出された石材はすべて当丘陵に数多く産出する花崗岩の自然転石である。

床面は荒れて殆んど水平面を保たない。遊離石材の下にガラス小玉1点と鉄釘数本を遊離検出したのみである。このほか石材の南東約 1.5mの傾斜面で，図版43に示したように約1 mの範囲にわたって，鉄釘10数本が散在していたが，石室床面との比高も約30cm下方となるため，原位置とは考えられない。また本古墳の東南東約12m，比高約 3.5m下方にあたる丘陵斜面の埋土中に，遊離した土師質亀甲形陶棺の蓋部小断片が1点発見された。本古墳に最も近い地点であり，本古墳に埋納された可能性もないとは断言できない。全山剝土しての調査にもかかわらず，単片のみの検出でもあり，本古墳のほかにもすでに破壊され消滅した古墳の存在も予想されるので，ここでは付記するにとどめたい 。

第2節　出　土　遺　物

石室内および石室外方を含めても，ガラス小玉1点および鉄釘約20本の出土のみである。ガラス小玉（図83）は風化が進み崩解寸前の状態であるが，もと黄緑色をしたものと思われる。現存径0.79cm，器厚 0.4cm，断面太鼓胴形をしたやや扁平なつくりである。鉄釘（図84）は約20本検出したが，銹化が著しく折損するものもかなりある。断面長方形をした鍛造の角釘で長さ10.5cm～13cm頭部の巾 0.8cm角程度のものが多く，前記3古墳出土のものとほぼ同巧同大である。

第7章　ま　と　め

1. 岩田古墳群第9号墳，第11号墳，第12号墳，第13号墳の4基の古墳は，丘陵尾根支脈稜線およびその傾斜面の，約25m×40mほどの範囲内に群在する，横穴式石室を内部主体とした，径10m前後の規模の小さい円墳であったと推察される。
2. 各古墳ともすでに石材採掘の目的で大破されたうえ，その後の風化や流土によって墳丘は消滅し，盗掘坑も埋没していて，外表観察ではその存在も全くわからないほどになっていた。したがって，各古墳の外形や規模および外部施設等についての詳細や，正確な計測値等は不明である。
3. 発掘調査の結果，各古墳とも天井石および羨門の閉塞施設のすべてと側壁上段等の大部分の石材をすでに持ち去られ，残骸となった石室掘り方および石室の一部を残すのみであるが，いずれも当丘陵に産出する花崗岩の自然転石で構築された，袖をもたない小規模な横穴式石室で，ほぼ同巧手法の築造と考えられる。
4. 各古墳の築造過程はいずれも，①丘陵傾斜面を利用して地形の低い側から，溝状の深い石室掘

り方を掘りこむと同時に，その土砂を下方に埋めだして平らな石室床面を造成する。②掘り方内に半地下式の横穴式石室を構築する。③地形の高い側の丘陵尾根または傾斜面を半円形の周溝状に掘り，墳域を画するとともに，その土を盛って石室を覆い墳丘を整え完成する。そのため墳形は真円とはならず，石室長軸方向に長径をもつ，楕円形状の平面プランを示す円墳と推察される。

5. 第９号墳は現存石室長約2.2mのみの遺存である。現存石室巾0.95m，同石室高1.1mを測るが，奥壁は原全高を保つと思われ，小規模な横穴式石室である。床面に釘打ちされた木棺痕跡１と，金環１，鉄鏃４，刀子１，須恵器片若干を出土した。

6. 第11号墳は現存石室長約 2.5mの遺存である。したがって原石室長および高さは不明，床面巾1.1mを測る。石室床上に小石材を並べた跡とその周辺に鉄釘約20本が散在し，石材を利用した棺台に載る木棺埋葬が推察される。出土遺物は土師器鉢１，皿２，須恵器平瓶１，同高坏片１個体分と僅かである。地形の高い側の石室外縁に推定径約９m，巾３m，深さ0.15mで半円形に繞る周溝状の浅い溝跡が僅かに認められ，本古墳の原径は10m前後の小円墳と推察できる。

7. 第12号墳は現存石室長約5.2mと遺存度がかなり良好である。現存石室高約 1.32mを測りやや持ち送り積み，石室巾は奥壁部1.08m，中央部1.40mと胴張り形を示す。床面上に小石材を利用した棺台と鉄釘約35本が散在し，２体以上の木棺埋葬が推察される。副葬品として金環１，刀子２須恵器蓋２，同高坏１，土師器坏１を検出した。地形の高い側の石室外縁に周溝らしい溝状遺構の痕跡が僅かに残り，もと径10m程度の円墳と推定できる。

8. 第13号墳は壊滅状態となった掘り方と石材を若干残すのみである。その形態からもと石室高約１m，同巾 0.9m程度の小横穴式石室と推察され，鉄釘約20本およびガラス小玉１個を遊離検出した。

9. 以上の事柄を総合してこれらの古墳は，いずれも石室長約５m，同高さ約１m，同巾約１m程度の袖をもたない小横穴式石室内に，釘打ちされた木棺１～３体程度を埋葬したものと推定される。

10. 各古墳の築造年代については，それを知る重要な手がかりとなる遺物の出土例が少なく，詳細は明らかにできないが，石室の構築手法等に共通点が多く，ほぼ同時期の葬造と思われる。第11号墳出土の須恵器平瓶および第12号墳出土の須恵器高坏は，ともにその編年観からみて６世紀終末ないし７世紀初頭の特徴を示し，石室の構造も横穴式石室としては後出の形態をみせることから，早くても６世紀後半，常識的には６世紀末の所産と考えるのが妥当と思われる。

11. 各古墳とも石室をすでに大破され，床面も撹乱によって荒らされているため，副葬品も盗掘時等に持ち去られたり，散逸している可能性も充分考えられる。しかしそれにしても鉄釘の遺存にくらべて，副葬品は破片等を含めて検出例がきわめて僅少である。別稿に記載した岩田第８号墳および第14号墳はともに大形の横穴式石室墳で多数の追葬が行われ，副葬遺物も豊富な古墳であるが，これらの遺物の大部分は比較的早い時期の被葬者に対する供献物であって，追葬後半の被葬者への直接的な副葬物はほとんど認められなかった。これらの古墳は規模も小さく後出性からみて，もともと副葬品の貧弱な葬送とも考えられるのである。

Ⅶ 岩田古墳群第14号墳

第1章 序　説

岩田古墳群第14号墳（略記号E14）は，岡山県赤磐郡山陽町河本字大片山 680番地の，埋積平地に向けて張りだした愛宕山丘陵の南斜面中腹に所在する，右袖の横穴式石室を内部主体とした円墳である。すでに石材採掘等のために破壊されているうえに，その後の風化や流土によって，墳丘の高まりも全く認められないほど原形を損なわれ，事前の分布調査などの外表観察では，その存在を知ることができなかった古墳である。

岡山県知事と山陽町長間で昭和48年４月１日付締結の，昭和48年度山陽団地埋蔵文化財発掘調査委託契約（通算第10次）に基づいて，山陽町教育委員会が，当丘陵一帯に広がって所在する弥生時代集落址・愛宕山遺跡第１地点の発掘調査を実施していたところ，偶然に本古墳の石室を掘り当て発見したものである。愛宕山遺跡第１地点の発掘調査は，昭和48年９月11日から昭和49年３月18日までの，約６か月間を要して実施されたが，本古墳は昭和48年10月16日に発見され，ただちに前記集落遺跡の発掘調査と併行して，同年11月22日までをかけて発掘調査を行なった。

本古墳は発掘調査の結果，石室の天井石および羨門閉塞施設の石材すべてと，側壁上段部の一部をすでに持ち去られているものの，側壁および床面の保存度は良好でほぼ原況を保っていた。現存石室長11.8m，玄室高2.7mを測り，横穴式石室としては規模も大きく，床上には700点を越える豊富な副葬遺物とともに，多数の木棺の痕跡が認められ，被葬者の追葬過程を知る手がかりが得られるなど，多くの問題を提起する貴重な古墳であることが明らかとなった。山陽町教育委員会では，本古墳は現状保存すべきであるとの結論に達し，岡山県教育委員会文化課と協議のうえ，昭和48年11月８日，事業主体者である岡山県土木部に対してその旨を要請した。早速三者協議会をはじめ関係機関での協議が重ねられた結果，同年12月６日に，住宅団地の事業計画を一部設計変更して，歴史教材公園的な性格をもたせた児童公園の中に取り込む形で，現状保存することに決定されたのである。

その間，石室床面の遺物がほぼ出揃った10月28日の日曜日に，本古墳の発掘調査現場の一般公開を実施したところ，400名を越える参加者があったのをはじめ，11月25日には吉備の歴史を語る会約60名，12月９日には岡山の文化財を守る会約20名，昭和49年１月15日には岡山大学考古学研究部の学生35名など，数多くの見学者が訪れ，本古墳の現状保存の要望が高かった。また文書による保存要請も，岡山県遺跡保護調査団，岡山の文化財を守る会，赤磐の自然と文化財を守る会，岡山県文化団体連絡協議会などから寄せられる等，本古墳保存の声は大きな盛りあがりをみせ，私たちにとっては，事業主体者をはじめ関係機関に対して保存協議を進めるうえでの，力強い支えと励ましとなった。誌上を借りて厚く謝意を表したい。

本古墳の具体的な保存方法については，昭和49年２月17日の山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会，同年３月１日の岡山県教育委員会文化課と岡山県遺跡保護調査団との定例埋蔵文化財保護連絡

協議会において討議され，対策委員ならびに県内研究者の諸先生方から，貴重な意見や教示をいただいた。その結果本古墳の保安上から，玄室部の天井を推定復元して保存することになったのである。昭和49年６月６日から約１か月をかけて，本古墳の修復工事が行なわれたが，現実には，住宅団地の造成レベルが現地形よりも約３m地下げをして整地されるため，もとは丘陵傾斜面を利用して溝状の深い掘り方を設け，その中に半地下式の横穴式石室を構築していたものが，平地に築かれた墳丘の高い円墳に変貌したり，側壁の胴部が土圧によって大きく張り出して，局部的な重量に耐えられない状況で天井に石材を載せることができず，また修復部が明瞭に判別できる方がよいとの考えから，天井は鉄筋コンクリート張りにして重圧の軽減と均等化をさせて固めるなど，厳密な意味での現状保存はできなかった。しかし，こうした大規模な開発事業では，一度その遺跡が「記録保存」と決定されて発掘調査が実施されれば，調査の結果重要な遺跡と判明しても，事業計画を変更しての現状保存はきわめて困難である。本古墳の場合も決して満足のいく保存とはいえないまでも，当事業用地内における数少ない設計変更をしての保存を獲ち得たことは，一つの成果として評価したい。

第２章　調査経過の概要

- 昭和48年10月16日，愛宕山遺跡第１地点のＥグリットおよびＧグリットの調査中，現地表下約60cmに横穴式石室残骸を発見，天井石はすでに失なっているものの，側壁の遺存度は良好なもよう。岡山県教育委員会はじめ関係機関へ連絡協議の結果，岩田古墳群第14号墳と命名して，愛宕山遺跡第１地点とともに併行発掘調査を実施と決定された。
- 10月17日，石室残存部上面露呈作業，本日約50cm掘りさげ，右袖式の石室とわかる。
- 10月18日，石室内発掘，本日現地表下約1.5mまで掘りさげる。石室長11.8m，玄室長5.5m，石室巾は本日の時点で2.2mを測る。
- 10月19日，現状地形測量 100分の１，50cmコンター，石室内発掘，床面が近くなり，須恵器18，馬具片などの遺物が出土しはじめる。
- 10月20日，石室内発掘，奥壁部に多量の一括土器群発見本日約30を検出，床面の遺存度は良好で木棺の痕跡と鉄釘の散在が認められる。多数埋葬の可能性が強い。
- 10月21日，雨天に備え石室上方にシートで屋根を組む，石室内発掘，遊離土器片および鉄器片の出土状況平面図実測10分の１。
- 10月22日，遺物出土状況部分写真撮影，遊離物レベルをとって取りあげ，鉄器片46，玉類15，須恵器２，石室高2.7m，同巾2.35mとなる。
- 10月23日，石室内発掘，木棺痕跡玄室部で計６棺を検出，いずれも釘打ちの箱形棺と推定される。奥壁一括土器80を越える。他に金環７，第１号棺内に環頭太刀１を発見写真撮影，本日より交替制で夜警を置く。
- 10月24日，床面の木棺痕追求および奥壁部一括土器群発掘，遊離遺物実測とりあげ。
- 10月25日，石室内床面清掃，出土状況写真撮影，土器 157，直刀４，杏葉３，金環13等となる。

◦10月26日，棺別写真撮影，石室床面プラン実測10分の１。
◦10月27日，床面プラン実測10分の１，第１号棺プラン実測５分の１，部分写真撮影。羨道部発掘。
◦10月28日，現地一般公開日，約400名参加，本古墳現状保存の声が多かった。
◦10月29日，石室床面プラン実測10分の１，第３・６号棺プラン実測５分の１，第６号棺の下方に上下に重なる棺を検出。
◦10月30日，床面プラン実測（完），第２・５号棺プラン実測５分の１，第６号棺を縦に切断して第７号棺を発掘，約20cm上下差がある。
◦10月31日，第４・５号棺プラン実測５分の１，玄室俯瞰写真撮影。
◦11月１日，第１号棺～第３号棺，第４号棺～第６号棺の横断面セクション実測10分の１。
◦11日２日，第１号棺～第４号棺，第２号棺～第５号棺，第３号棺～第６号棺の各連続縦断面セクション実測10分の１。
◦11月３日，第１号棺～第３号棺内の遺物取りあげ，第１号棺下層発掘２本目の環頭太刀を発見。第７号棺発掘。
◦11月４日，第１号棺～第３号棺の各下層発掘，奥壁部の一括土器群は第１号棺の下へのび，須恵器台付壺が多い。羨道部遺物取りあげ清掃。写真撮影。
◦11月５日，各棺の下層発掘，第１号棺実測５分の１。
◦11月６日，第１号棺環頭太刀取りあげ，奥壁一括土器の取りあげにかかる。土器の間に鉄鏃や馬具片などの鉄器片多し，各棺の下層発掘，写真撮影。
◦11月７日，各棺の下層発掘，特に第１号棺の下に遺物多し，須恵器12，雲珠１，杏葉２，ガラス玉２を検出，また玄室袖部の一括土器取りあげにかかる。第１号棺～第３号棺，第４号棺～第６号棺の床面下のセクション実測10分の１。
◦11月８日，玄室床面清掃，写真撮影，棺の下から出土した遺物の出土状況実測10分の１。本古墳の現状保存を岡山県土木部へ正式に要請。
◦11月９日，雨天のため内業，出土遺物，諸記録整理。山陽町教委，岡山県教委，岡山県土木部の三者協議会，本古墳の保存について協議を行なう。
◦11月10日，床面の石材実測，全遺物取りあげ，写真撮影，本日をもって夜警終了。
◦11月11日，日曜日全休。
◦11月12日，石室セクション実測10分の１，石室現存部上面および掘り方の輪郭露呈作業。
◦11月13日，同上，石室床面十文字トレンチ発掘，写真撮影。
◦11月14日，石室外方へ十文字トレンチ発掘（1.2m巾），掘り方と石室裏側の控え積み等の検出にかかる。
◦11月15日，同上，石室壁面実測準備，枡割り作業。
◦11月16日，トレンチ発掘，奥壁後方約６mに周溝状溝遺構検出，弥生時代竪穴式住居址と複合，拡大発掘にかかる。奥壁実測10分の１。
◦11月17日，トレンチおよび周溝部発掘，側壁実測10分の１。

◦11月18日，トレンチおよび周溝部発掘，側壁実測10分の1。
◦11月19日，トレンチ発掘，本日をもって発掘作業はほぼ完了，後は実測を残すのみ，作業員本隊は集落址調査に主力を投入。側壁実測10分の1。
◦11月20日，側壁実測10分の1，トレンチセクション10分の1，石室現存部上面清掃写真撮影。出土土器水洗整理。
◦11月21日，トレンチセクション実測10分の1，石室現存部上面および掘り方と周溝の関係図測量20分の1。
◦11月22日，石室床面プラン実測10分の1，石室現存部上面測量20分の1，本日をもって本古墳の発掘調査終了。
◦11月25日，吉備の歴史を語る会一行約60名現地見学。
◦12月6日，本古墳を児童公園に取り込んで保存と決定。
◦12月7日～8日，保存決定にともない，トレンチ埋め戻し作業。
◦12月9日，岡山の文化財を守る会一行約20名現地見学。
◦昭和49年1月15日，岡山大学考古学研究部の学生約35名現地見学。
◦1月16日，三者協議会，本古墳保存方法について協議。
◦2月17日，山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会，本古墳の具体的保存方法についても諮問，教示を受ける。
◦2月22日，三者協議会を本古墳現地にて開催，保存方法協議，玄室部のみ天井を推定復元して土盛り保存と決定。
◦6月6日～6月28日，本古墳修復工事を調査員が立ち合い，土木業者が施工した。

第3章　立地と調査前の概況

住宅団地開発事業用地となった東高月丘陵群のほぼ中ほどにあって，標高92mと最高位を占める用木山の丘陵頂から，東へ向けてなだらかに下降する丘陵尾根支脈は，用木山頂から約140mを隔てた標高58m付近で鞍部をつくり，そこから再び隆起をみせて約70mの東に，埋積平地に向けて張りだした愛宕山と呼ばれる標高67mの丘陵頂を形成している。本古墳はその鞍部からやや愛宕山寄りの，尾根稜線に近い南斜面に築造されている（図4・85）。そこは尾根支脈稜線上の緩傾斜が，眼下の巾40mほどの小谷頭に向けて下降傾斜度を増そうとする肩部にあたり，谷水田面との比高約15m，埋積平地との比高約45mの立地を占める。したがって当地は北側に尾根支脈を背負い，西から南にかけては同じ用木山から派生したさくら山の尾根支脈が，視界を遮ぎるように谷水田を隔てた南に平行して走るため，本古墳は谷懐状の低斜面に位置する形となって，僅かに南東方向にしか眺望視野は開けていない。

この愛宕山から用木山を経てさくら山に至る丘陵上には，ほぼ全域の広い範囲にわたって営なまれた弥生時代の集落遺跡のほかに，多種多様の遺跡がそれと複合して高い密度をもって所在する。横穴式石室を内部主体とする当岩田古墳群もその一つであるが，本古墳はその中でも北東端に立地

している。本古墳の西方約100mの用木山尾根支脈には岩田第9号墳など4基が近接して営なまれ谷水田一つを隔てた南南東約 180mのさくら山尾根支脈上には，岩田第1号墳が立地している。また本古墳の西約30mの傾斜面には須恵器を伴出する5基の土壙墓が密集するのをはじめ，北東約40mには白磁を伴出する土壙墓が存在するなど，古墳時代後期から平安時代に至る埋葬遺跡が点々と散在している。さらに本古墳の南約 150mのさくら山頂上には，さくら山方形台状墓2基，西方約160mの用木山から北東にのびる尾根支脈上には，当地方で初現的な様相を示す用木古墳群16基，東北東約60mの愛宕山丘陵頂一帯には，弥生時代中期後半を盛期とする 300基からなる土壙墓群が密集しているのである（図4）。

本古墳周辺一帯の丘陵上は，今次開発事業が計画されるまでは自生の松林であった。事前の分布調査の段階では，本古墳は墳丘らしい高まりも認められず，その存在は全く気付かなかった。花崗岩媒乱土で形成された当丘陵地内にあって，当該地のみが赤味を帯びた粘土質で形成されていることもあって，古くから村人たちの壁土や農業用灌漑池の剛土の採土場となり，本古墳の東に近接した部分にも大きな掘り込み跡が残るなど，表土層にかなりの乱れをみせていた程度である。その後丘陵鞍部を約3mの深さで掘り割って，工事用道路が南北に敷設された時点で，その崖面に弥生式土器片を含む有機土層が検出されたことから，弥生時代の集落遺跡の可能性が強いとして事前調査の対象となり，発掘調査の結果本古墳の石室を掘りあて発見したのである。

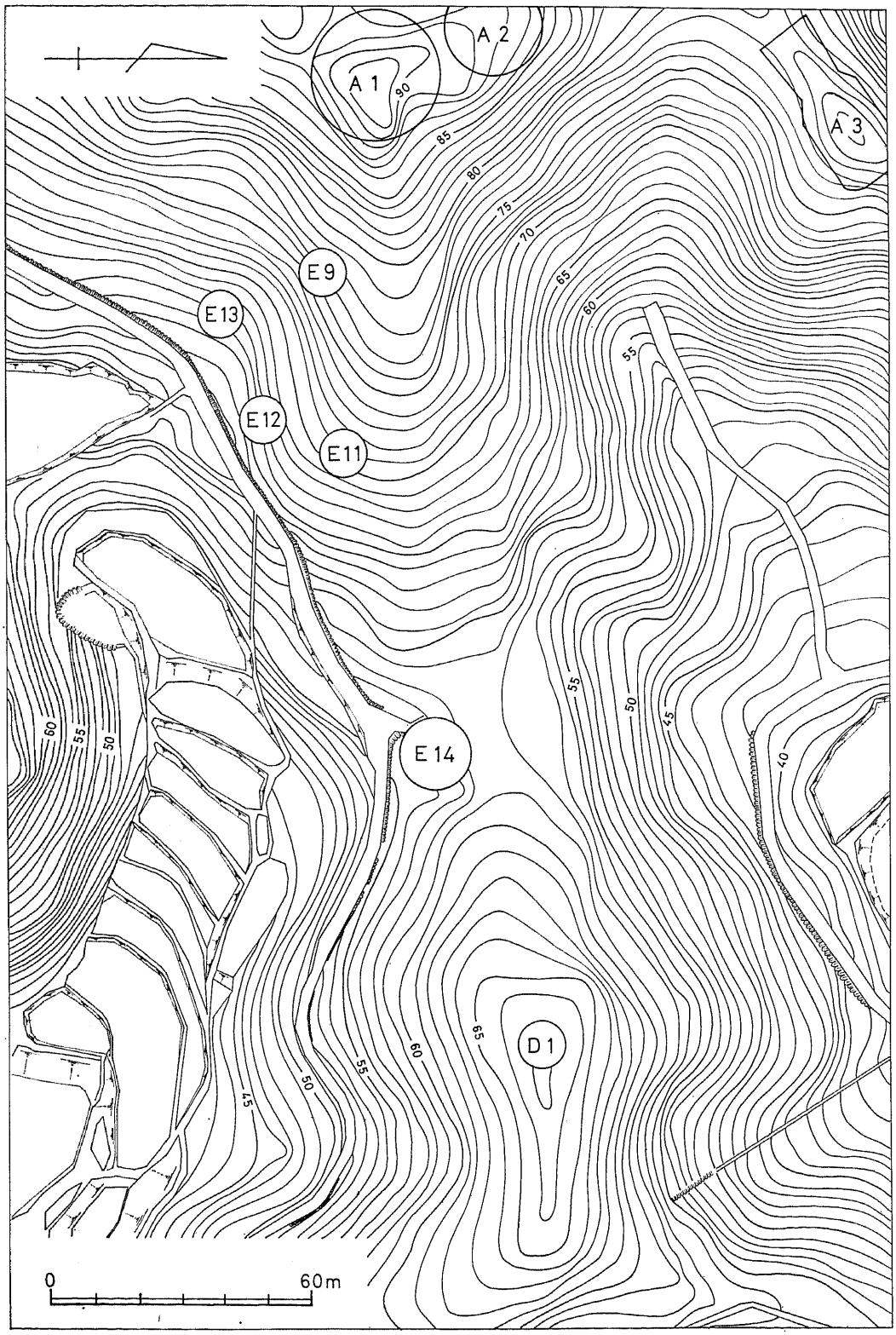
発掘調査の結果明らかとなったことであるが，本古墳も石材採掘の目的ですでに破壊され，天井石と羨門閉塞施設の石材をすべて持ち去られていたが，その際の採掘坑が露天掘りの形で，現丘陵地表面に窪みとなって遺存していたのを，後の採土痕などと混同して見落していた。また墳丘は大半が流失していたが，当該地が鞍部に近い緩斜面のため，地形の高い東西の尾根からの流土が二次堆積となって，約60cm～80cmの高さに埋積して，自然地形に近い状態と変貌していたのである。

第4章　遺構および遺物の出土状況

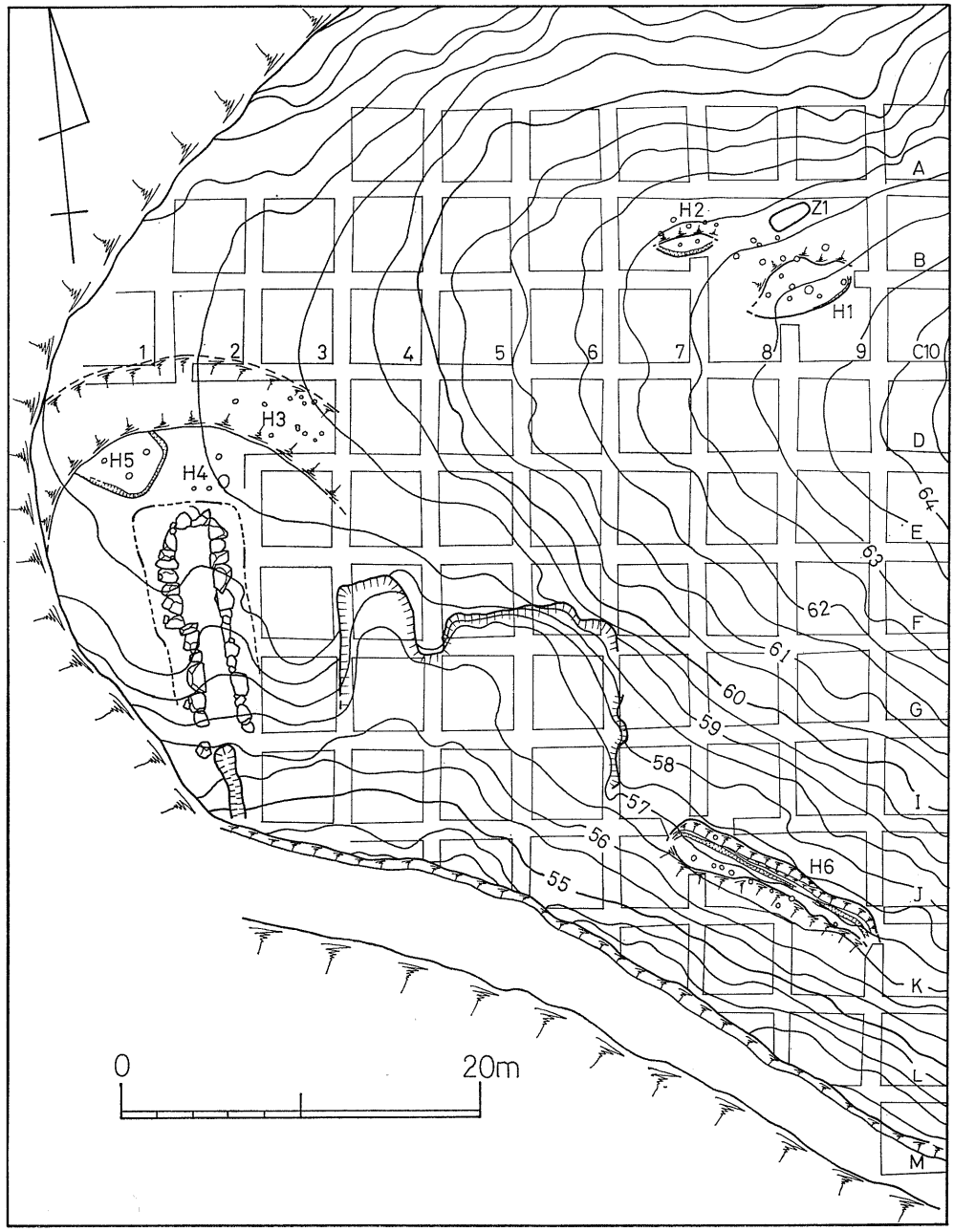
第1節　墳　丘

本古墳は前述もしたように，墳丘の上から露天掘りで石材を採掘しているため，墳形を大きく損なっているうえに，その後の流土や二次堆積によって，残存石材の上端部が再び60cm～80cmも埋没するなど，採石坑も含めて自然地形と変らない状態となり，墳丘の痕跡をほとんどとどめていない。したがって本古墳の外形や外部施設，ならびに規模等についての詳細は明らかでない。

本古墳の築成は，丘陵尾根支脈の鞍部に形成された僅かな平坦部に立地する，弥生時代の竪穴住居を建築するための整地跡を利用して，若干の削平整地を施して玄室部分程度の水平面をつくり，地形の低い南斜面から溝状の深い石室掘り方を掘り込んで，その中に横穴式石室を構築している。石室掘り方の深さは約 2.5mと深く，石室壁高とほぼ一致する。したがって当初の丘陵削平整地面の上方に突出する部分は，側壁上段の一部と天井石だけである。仮に封土が石室を被覆し墳形を整える程度と仮定すると，推定墳丘高は天井石の長さ約3m，同高さ約1mとみて，当初の削平整地



第85図　岩田第14号墳周辺地形図



第86図　岩田第14号墳調査後地形図

面から少くとも1.8mないし２mの盛りあげが必要と思われる。

また本古墳周辺の丘陵上を，墳域の確認および複合立地する可能性のある弥生集落址の探査と合せて，表土層の全面剝土調査を実施したところ，墳形の高い石室北側の丘陵尾根支脈稜線部の，現地表下約70cmの二次堆積層の下に，地山生き土面を掘り込んだ周溝を想起させる溝状遺構が検出された。この溝状遺構は竪穴式住居址の床面を切って掘られているため，正確な掘り込み上端が確認できないが，現存部での石室奥壁内側上端からの距離は，内縁部で5.97m，外縁部で10.5mを測り

内縁部半径約 9.85m，現存部中心角約120度の扇形で石室奥壁部の外周を繞る形を呈している。横断面形はカーブの緩い上向き抛物線を示し，平均巾約 4.5m，最大深0.32mを測る。溝状遺構底部はほぼ水平面を保ち，地形の低くなる両端部は自然消滅の形状をみせている。したがって本古墳の周湟は地形の高い側にだけ，墳域を画するとともに盛り土の採土を兼ねた円弧周湟と推定される。

以上を総合して本古墳の外形および規模を想定すると，外形は周湟の形状から円墳，径は周湟内縁径約20m，また石室奥壁と周湟内縁までの距離約６m，現存石室長11.8mなどからも約20m前後墳高は周湟と奥壁の間隔が６mとかなりあることから，地形の高い北からみて約 2.5m，地形の低い南からみて約４m程度であったろうと推察される。

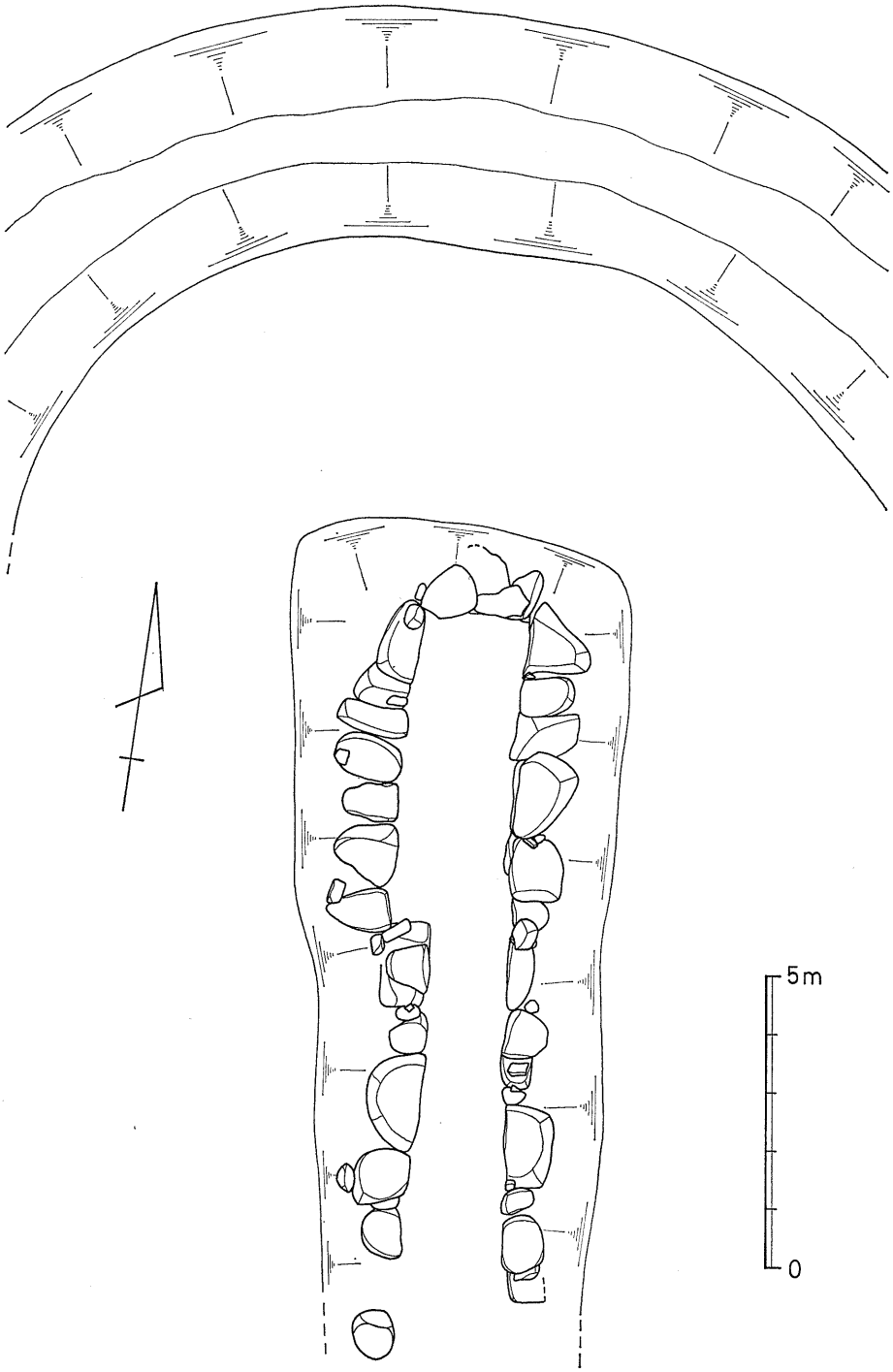
第２節　石室掘り方

石室の掘り方は丘陵傾斜面を利用して地形の低い南側から，当該地の等高線に直交する形で北向きに，石室規模に合せて溝状に大きく掘り込まれていた。現状で掘り方の掘り込み上端が確認できる現存地山生き土上面での形状は，地形の高い玄室部にあたる部分はほぼ平らに削平整地を施し，地形の低い羨道部にあたる部分では，傾斜地形面に掘り込んでいるようである。しかし，本古墳は発掘調査の過程で保存協議の対象となり，協議の結果現状保存と決定されたため，掘り方内の発掘は部分的なトレンチ調査によって，その大要を知るにとどめた（図87，88）。

掘り込みの確認できる現存地山生き土上面での掘り方プランは，奥壁部の広い台形状を呈していた。これは本古墳の石室が右袖石室のため羨道部に対して奥壁部が広いことと，奥壁部に対して羨門部が 1.7mと地形が低く，かなりの傾斜面にある関係から，それだけ奥壁部の掘り込みが深くなることによると思われる。羨門部端が一部削平されているため掘り方の全長は明確ではないが，現存掘り込み上縁部での奥行長13.5m，玄室奥壁部巾6.5m，羨道中央部巾 4.85mを測り，掘り方の長軸中心線の方位は北９度西を指す。

掘り方の底面はほぼ平らで整然と掘られているが，奥壁部に対して地形の低くなる羨門部に向けて下傾をしている。傾斜の度合は一定ではなく，奥壁部から約９mまでは比高12cmと緩傾斜であるのに対して，そこから羨門部にかけての約３mの間では，比高約50cmとかなりの急傾斜となり，その部分では底部を埋め戻して床面を整えている。底面のプランは玄室の羨道の巾差に従うように，巾差のある長方形２つを袖のある西側に段差をもたせて，縦長に連らねた形状を示し，玄室部巾5.65m，羨道部巾4.4m，奥行長12.7mを測る。

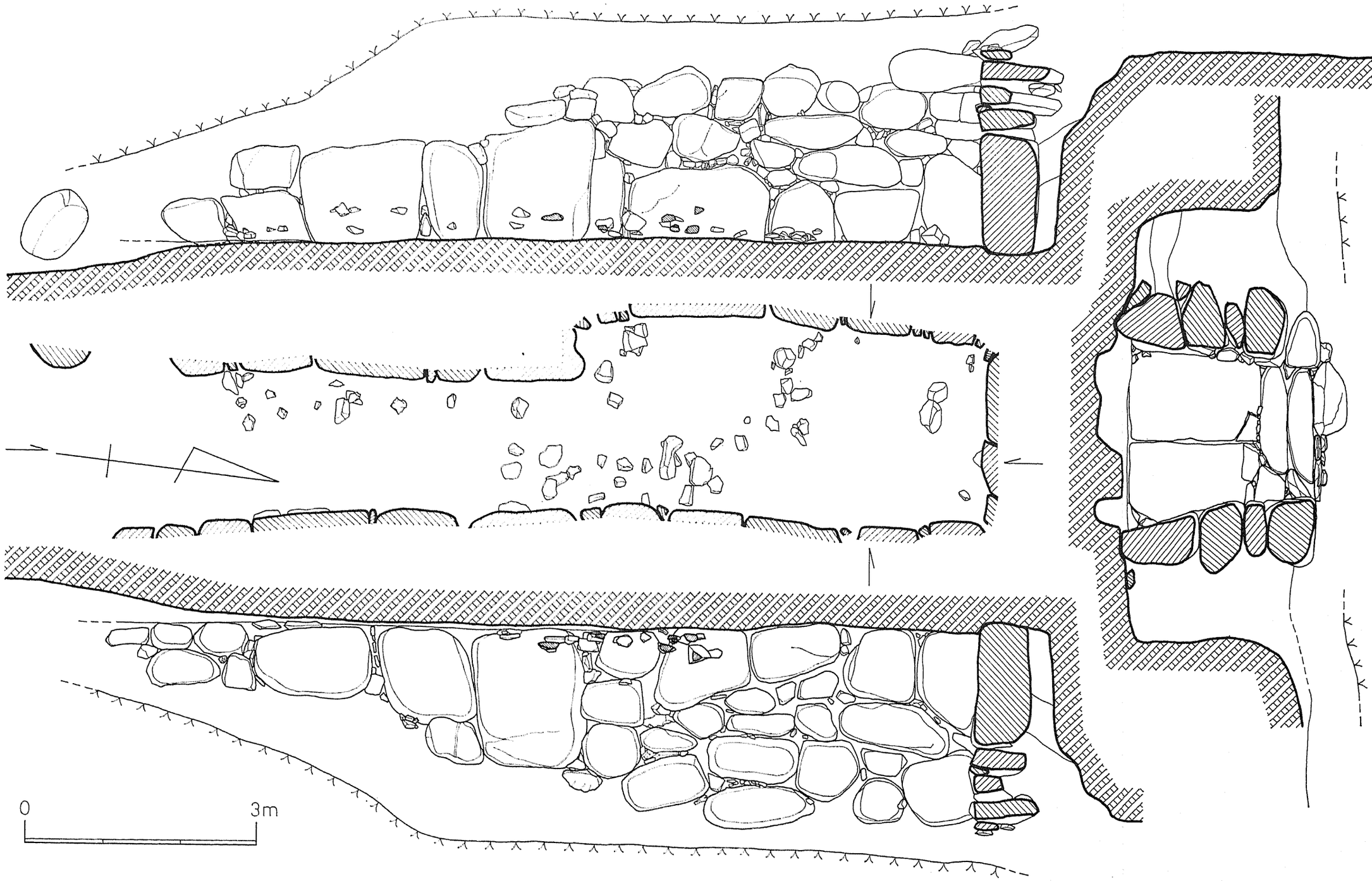
掘り込みの壁面は，部分的に施したトレンチ調査の限りでは，奥壁部は掘り込み上端から約1.08mぐらいまでは段状部をもつ斜傾，それより下方約 1.5mは垂直に近い外傾を示し，側面はいずれも上方に広がる外傾で，比較的に整然と掘られている。掘り方内に構築された石室と掘り方の巾にはかなりの余裕があるためか，掘り方底面に根石を安定するための若干の掘り込みが認められるほかには，石室石材の裏側端部が掘り方壁面に当るなどの，調整掘り等の跡は見られない。また掘り込みの上端面は，本古墳築造にあたって削平された竪穴式住居址との切り合いの形状からみて，ほぼ原況を保っているように推察される。掘り込みの深さは地形の高い奥壁部で2.54m，玄室と羨道の境界部で1.7m，地形の低くなる羨門部付近ではその深さは自然消滅の形状を示す。



第87図　岩田第14号墳周溝と掘り方関係図

第3節　石　　室

本古墳の石室は，前節で述べた掘り方内半地下式に構築された右袖の横穴式石室である（図88，図版48～50）。すでに石材採掘の目的で盗掘されていて，調査時の現状は天井石および羨門閉塞施



第88図　岩田第14号墳石室実測図

設のすべてと，側壁上段の石材の一部を持ち去られ，残存石室もその後の二次堆積によって完全に埋没していた。しかし，石材の採掘が露天掘りの形で行なわれ，比較的採取し易い天井石等の上方石材および羨門部のみにとどめられていることもあって，側壁および石室床面の保存状態は羨門部の一部を除いては良好で，玄室の石室高も含めてほぼ原況を保っていると推察された。

石室の構築に用いられた石材は，現存する限りではすべて当丘陵に産出する花崗岩の自然転石である。原則として根石に大形の石材を用い，上段にやや小形の石材を使って構築しているが，石材間に生じた隙間には花崗岩の小割り石を充鎮して調整している。玄室部はやや持ち送り積み，羨道部はほぼ垂直に築かれている。壁面の粘土等による目張りや，赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。

現存の石室床面を基準とした石室全長11.8m，玄室長5.5m，羨道長6.3m，玄室巾は奥壁部2.36m，羨道との境部2.52m，中央最広部2.68mとやや胴張り形を示す。羨門巾は玄室付近1.58m，羨門付近1.9mと入り口側にやや広がる形状を呈している。石室の高さは奥壁高2.7mとほぼ原高を保つが，羨道の現存最高側壁高は2.04mである。石室全体の長軸中心線の方位は北９度西を示し，ほぼ南に開口しているが，玄室と羨道の個々の長軸中心線は，玄室が北７度西，羨道が北10度西と約３度の開きをみせ，玄室に対して羨道が若干東へ振った形状となっている。

奥壁は扁平な石材２個を広口に並べて立てた根石上に，横長石材を小口積みに２段重ねた構築である。すなわち根石は高さ180cm，巾130cm，厚さ75cmの石材と，高さ165cm，巾約100cm，厚さ約76cmの石材２個を，掘り方底面を約20cm掘り窪めて，広口面を揃えて垂直に立て，背丈の低い方の石材上には小石材を積んで天を合せている。上段部は同一石材を半裁したと思われる高さ約35cm，巾約 150cmの横長の割り石材２個を，横口積みにして上下２段に重ね，巾の足りない部分は小石材で補なって築いている。いずれも精選した石材が用いられ，石面も揃い石材間の隙間も少なく，総体的によく整った奥壁となっている。奥壁最上端部に小割り石数個が部分的に並べられているが，これはその形状から推して，奥壁と天井石との間に詰めこまれた石材と思われ，奥壁が原況を保つことの証明となるものである。なお奥壁高は2.7mを測り，上端まで垂直に構築されている。

側壁は，入り口付近が削平されていて，根石も含めて若干は持ち去られている可能性もあり，また上段部の石材の一部も採石されて欠損しているなどのため全形は不明であるが，大要は次のとおりである。

玄室部側壁は左右ともほぼ同巧の築造である。最下段の根石はやや大形の石材を，広口または横口にして石室内側に石面を揃えるように並べて置き，その上段は扁平な石材を横口積みに積みあげている。各段の高さを揃えながら築くということは，あまり意識されていないようで不揃いである。しかしほとんどの石材が横長の水平位を保って築かれ，根石も含めて原則としては４段の築成と思われる。石材のすべてが丸味をもった自然転石であるため，石材間の隙間も多く，その間には小石材を充鎮して調整している。また玄室部の側壁は石室規模が大きいこともあって，左右両側壁とも持ち送り積みとなって，天部の狭い内傾を示す。例を奥壁から１mの横断面でみると，床面巾2.6mに対して，2.7m高い側壁上端巾は1.73mとなり，その内傾角度は西側壁82度，東側壁79度を測る。

羨道部の側壁は，羨門閉塞施設の石材すべてと，側壁上段部の大部分の石材をすでに持ち去られ，その全貌は明らかでないが，左右両側壁とも玄室に近い各３個の根石は，大形の石材を広口面を内側に揃えて垂直に立て，その他の部分は小形石材を横口または小口積みにして構築している。玄室に近い大形石材のなかでも，玄室との境にあたる根石は特に大きく，袖部境の西根石は床面からの高さ160㎝，巾140㎝，厚さ約80㎝の直方形の石材を，玄室側壁面より約70㎝東へずらせて垂直に立て，玄室と羨道の間仕切りとしている。すなわち石材の北小口が玄室の妻壁，広口面が羨道側壁となっている。またこれと対応する東側壁の根石も，大きさ形状を揃えた石材を選び，高さ 185㎝，巾 148㎝の長方形石材を広口面を内側にして垂直に立てている。羨道部側壁は前述のとおり完存しないため詳細は明らかでなく，高さや全長等の正確な計測もできないが，現況から判断して持ち送りはないと推察される。また玄室に近い西側壁の一部に，上端部を揃え天井石との調整詰めを思わせる部分が遺存して，側壁高2.04ｍを測る。もしこれが羨道側壁の原高をとどめているとすれば，玄室高 2.7ｍに較べて約70㎝低い。当該地の丘陵傾斜面の傾状と合せ考えて，玄室よりも羨道の天井が段違いに，一段低くなる構造の横穴式石室であった可能性が強いと思われる。

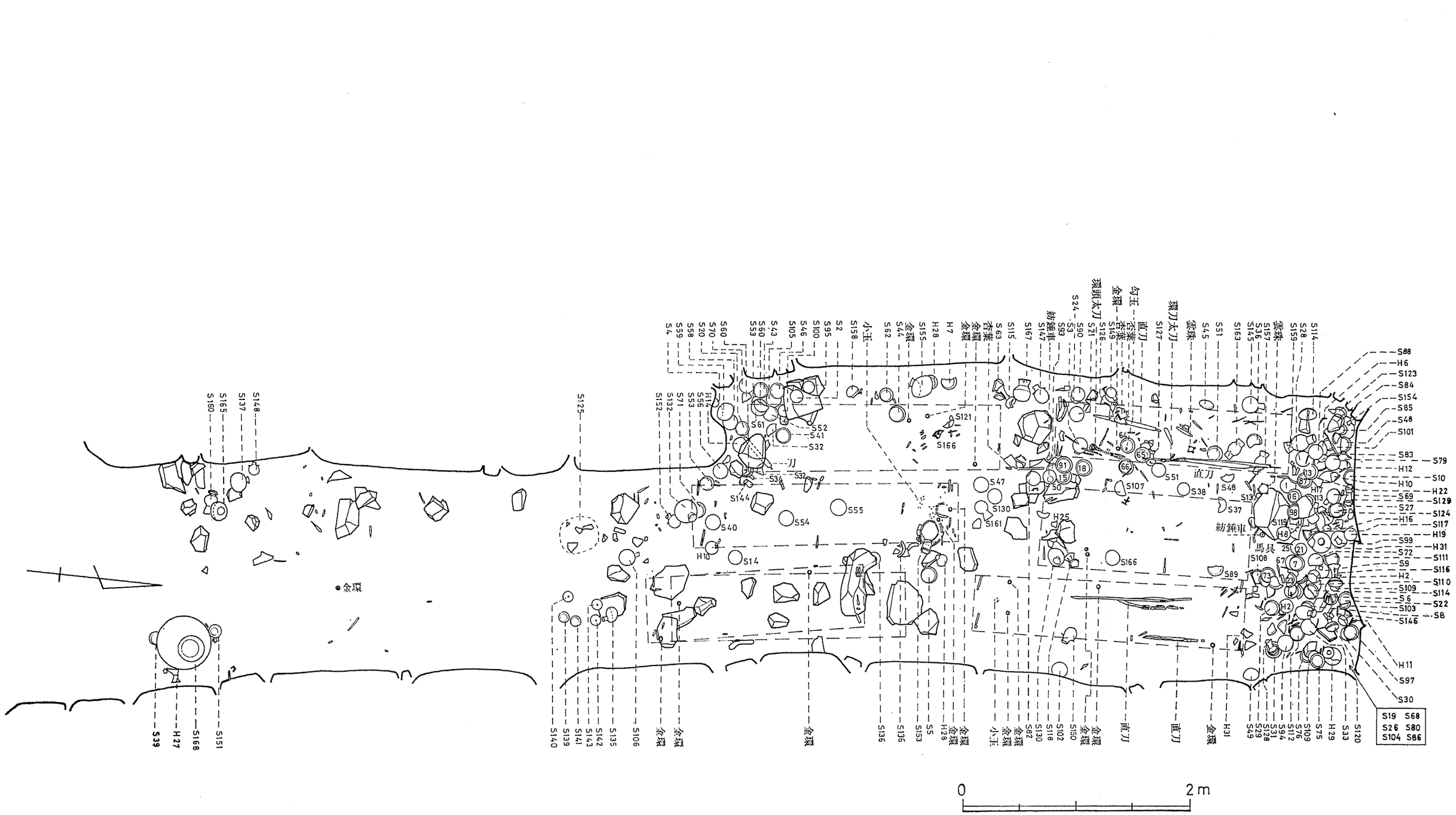
石室の構築順序は，最初に奥壁の根石を立て，次にそれに接する両側壁の根石を奥壁の左右から挟むように置き，これを基準として入り口方向に順次構築している。ただし玄室に近い羨道部の根石は，あらかじめ計画に従って予定の位置を定め，玄室の石材をそれに合せて積み方を配慮したらしい点も見受けられた。また上段部の築造に関しても常に奥壁部が先行しているようである。

石室と掘り方の関係は，奥壁の根石は掘り方北小口壁から約26㎝の距離に，掘り方底面を約20㎝掘り窪めて固定され，石室は掘り方の中央に整然と構築されている。掘り方の巾 6.5ｍに対して，石室外法巾約 3.9ｍが示すとおり，側壁背面と掘り方壁面の間隔は，左右両側とも約１ｍの余裕をもっている。各壁面とも石室の裏側に裏込めや控え積みの石材は施されていない。石室と掘り方の間は，当地を形成する赤褐色の粘質土と，当該地に複合立地する弥生時代集落によって生じた，弥生式土器片や灰などを包含する暗灰色の有機土を，叩き締めながら順次埋め戻した形状を示している。石室全長11.8ｍに対して掘り方床面長13ｍ，，石室側壁高2.7ｍに対して掘り方の深さ2.5ｍは先の両者の横巾と合せ考えて，掘り方内に当横穴式石室がちようどすっぽりと入る大きさである。このことは，本古墳の石室や掘り方は，当初から計画された設計があって，それに合せて掘り方が掘られ，石室が構築されていることを物語るものと推察される。

石室の床面は，本古墳への追葬の過程でかなり手が加えられ，築成時の原形とは変貌しているようである。発掘調査終了後のトレンチ調査による断面観察も含めて原形を推察すると，石室を構築した後に掘り方底面に有機物を含まない丘陵地山生き土を，約10㎝の厚さに敷いて，床面をほぼ平らに整地しているようである。床面は玄室部においては水平面を保つが，羨道部は入り口に向けて緩い下傾をみせ， 6.3ｍの間で７㎝の比高を測る。床面下に溝状遺構等の排水施設は何も認められず，また礫床とか板石を敷く等の特別な施設も施されていない。

第４節　遺物の出土状況

石室床面および副葬遺物等の保存状況は，羨道の一部を除いては，石室の上方がすでに大きく損



第89図　岩田第14号墳石室床面遺物出土状況

なわれているにもかかわらず，きわめて良好であった。それは本古墳の盗掘が出土品の採集が目的ではなくて，単に石材の採取を目的として行なわれ，それも石材を上に引き上げる露天掘りで実施されているため，比較的に採取しやすい表土面から浅いところの，天井石や側壁上段部および羨門部の石材を取る程度にとどめられていることや，石室が深いうえに採掘時にはすでに石室内に土砂が埋積していたらしく，床面の保存には条件に恵まれていたと考えられる。

石室内の埋積土を掘り降す過程で，羨道入り口に近い東側壁にもたれる形で須恵器大壺が最初に発見されたのに続いて，玄室床面の上方約30cmぐらいから鉄器片や須恵器などが出土しはじめ，最終的には第89図に示したように，木棺の痕跡７を含めて多量の遺物が発見された。なかでも玄室内では足の踏み場もないほどの密度での出土である（図版51～59）。

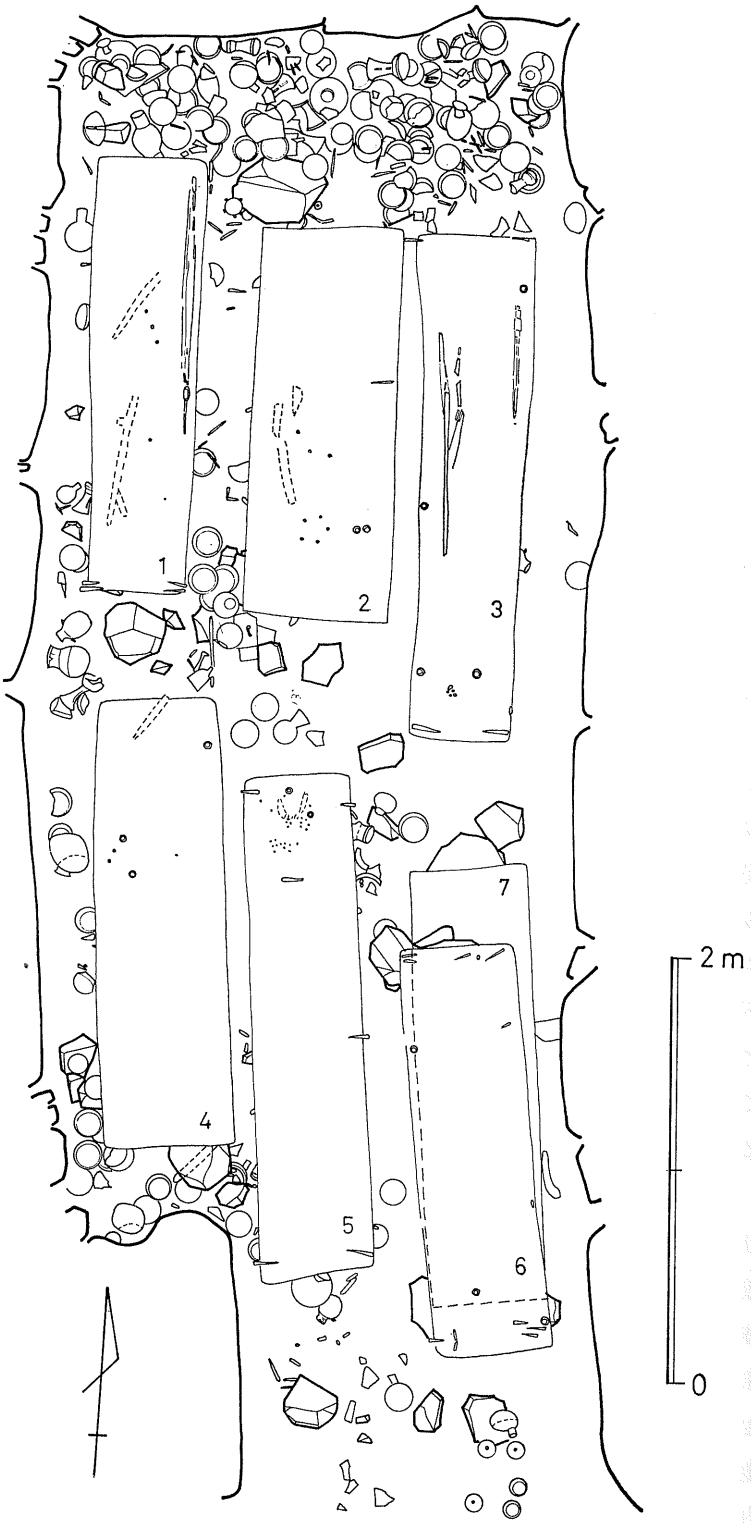
遺物が発見されはじめた当初は，小石材とともに撹乱遊離した状況を示し，床面からもかなり上位に浮いた形状のため，石材採掘時等における盗掘による撹乱かと思われた。しかし，その後すぐに第90図にも示したように，玄室床面全域に配置された木棺の痕跡が発見され，棺に用いられた鉄釘等の出土状態から，少くとも玄室内の床面は，本古墳葬送の最終期の原況をほぼそのままの状態に保っているようである。したがって遊離している遺物も後世の盗掘等による撹乱ではなくて，そのほとんどのものは，当石室内への被葬者を追葬する過程における，取りかたずけとか整理などによる二次的移動と理解される。

木棺はいずれもすでに腐朽していて，断片的な一部を除いてはほとんど現存しないが，玄室底部の埋土内に黒色の有機腐蝕土面となって，薄い幕状の棺底面の痕跡をとどめ，その面上に量的には少ないが棺内副葬品と思われる直刀，金環，玉類などとともに，遺存状態は極めて悪いながらも，局部的な残影となって検出されるなどによって，その存在を知ることができた。なかでも木棺の組み立てに使用された鉄釘のうちで，底板を打ちつけた釘が，そのまま直立した状態で遺存するものや，棺の小口部等の側板を横から打ちつけた釘が，棺の腐朽にともなってほぼその形状を保って直下に落ちているなど，棺の構造と規模を知る大きな手がかりを得ることができた。今回の発掘調査では第89～91図にも示したように，玄室底部において計７棺を検出したが，個々の棺の形状については次節で記述するので，ここでは総体的な配置関係や出土遺物等の関連から，被葬者の埋葬過程について若干ふれてみたい。

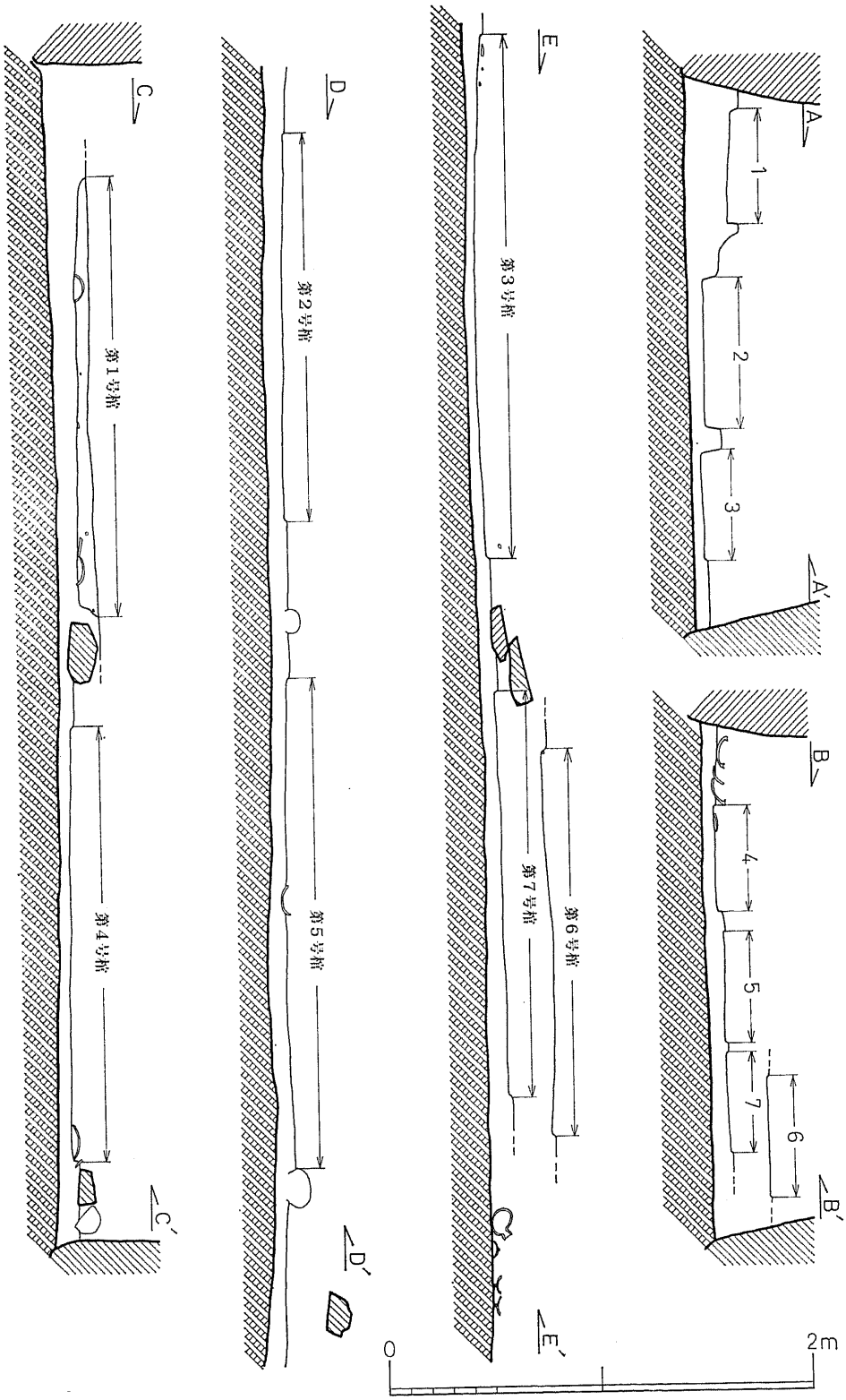
検出できた木棺の痕跡は先述もしたとおり計７棺である。第７号棺の上方に重なる第６号棺を除けば，平面プランでみると奥壁部を約１mあけて，玄室底面いっぱいに横３列縦２段に並べて，比較的に整然と計画性をもって配置されている(図90・91，図版49)。しかし各棺の床面レベルは，追葬の度ごとに棺を安置する場所を整備しなおしたためか，かなりの高低差をみせ，最も差の大きい第１号棺と第３号棺の間では，比高14cmを測る。また各棺を埋納するための施設として，第６号棺および第７号棺は，扁平な花崗岩の割り石を用いて棺台としているが，その他の棺は石室底面に整地する程度で，直接整地面の上に安置していたようである。なお各棺の埋葬順序については，各棺内に年代差を示すだけの副葬遺物を伴なわないために明らかでない。ただその配置の状況等から常識的に判断すると，奥壁に近い３棺が先行し，第７号棺の床上約20cmに床面を置く第６号棺が，一番遅れて埋葬されたであろうと推測できる程度である。

しかし，発掘調査時に確認できたこれらの棺について，石室内出土の土器や鉄器等の多くの遺物の出土状況と対比してみると，本古墳の被葬者は現認できる7棺のほかに，さらにこれらに先行する何体かの被葬者のあったことが明らかである。

本古墳石室内出土の遺物は多種多様で量的にもきわめて豊富である。出土点数は 700点を越えるが，後に述べる現存する棺内遺物を除いた他のほとんどは，本古墳葬送の過程で取りかたずけたり，集められた状態の二次的移動をされ，その大半は奥壁部と玄室袖部隅にある西側壁近くに集中していた。たとえば出土点数約 220点におよぶ土器についてみると，総出土数の約60%にあたる 135点が，奥壁部床面に山積みされた状態に集められ，袖部隅に26点，第1号棺下方を中心とした奥壁に近い側壁沿いに24点，第6号棺の南小口外方の玄室から約1 mの羨道東側壁寄りの床面に6点，羨道入り口近くの両側壁部に，左右に対応するような形で各4点がグループとなって認められるほかは，玄室内の床面下に散在する形での遊離埋没である。また鉄器についても土



第90図　岩田第14号墳木棺配置図



第91図　岩田第14号墳木棺床面部断面図

器の場合とほぼ同様で，その大半は奥壁部の土器片とともに混在する形で集められているが，なかでも尖根式鉄鏃は奥壁部の東側壁寄りに集中し，第３号棺の北小口下方にまでおよんでいる。それに較べて馬具片は羨道の床面にも鞍金具の断片や留金具片が散見されるなど，石室底部全域の埋土中に広く遊離散在していたが，鐙の鎖片が奥壁の東端部と中程に分散するのはまだしも，同一個体の轡片が奥壁中央からやや西寄りのところと，奥壁から 2.7m も離れた第１号棺南小口の外方に分かれ，また第１号棺床下の埋土内を中心に鐘形杏葉５枚が，それらを包括したままの状態で無雑作に撹乱整地し直された形状で検出された。さらに第１号棺の下方には先述の土器や馬具のほかに，環頭太刀２振りをはじめ，金環や勾玉などの装身具および鉄釘等も発見され，第１号棺に先行する被葬者の存在を物語っていた。

なお今までふれなかったが，奥壁の南約1.6mから2.8mにかけての石室掘り方底面に，第88図の石室横断面図にも示したような長径約 1.2m，巾約1.5m，深さ約0.5mほどの不定形な穴が掘り込まれて，その中には黒色の有機腐蝕土と，それに混じって土器片や鉄器片も若干発見された。この穴は玄室側壁の根石下底よりもさらに深く掘り降されていて，全面発掘すると側壁の崩落する危険もあり，当古墳が現状保存と決定した関係から，巾30cmのトレンチ調査にとどめたため，その全容および目的は明確ではない。しかし中から出土した土器片が奥壁部の一括土器群の須恵器片と接合でき，同一個体のものを含むことや，穴の上方に位置する第１号棺および第２号棺が，ともに穴を埋めた後の整地面上に納められていることなどから，この穴は本古墳への葬送が開始されて後，第１号棺および第２号棺の埋葬が行なわれる間に，何らかの目的で掘られ埋め戻されたものである。ここで大胆な推察が許されるならば，本古墳が築成されて追葬が行なわれる過程で，玄室内がいっぱいになって整理する必要を生じ，土器等の個形物は集めて奥壁部や袖部，あるいは側壁沿いの比較的邪魔にならない場所にまとめ，汚物状のものを底面下に穴を掘って埋め，床面には若干の新しい土を補充して整地し直し，次の埋葬に備えたものと思われる。

現存する棺のうち奥壁に近い第１号棺～第３号棺は，ともに奥壁部の一括遺物を避けるように，奥壁から約１mを離して北小口を置いているが，第１号棺は一括遺物群の上方整地面に置かれ，第３号棺も一連の鉄鏃群の上方に棺の北小口を置いている。第２号棺は直接的には一括遺物上には存在しないが，第１号棺と同様掘り込み穴の埋め戻し後の埋葬である。また羨道側にある棺も，第４号棺は袖隅に集められた一括土器の上に載り，第５号棺も散在土器等を棺床下に包含した整地面上にあるなど，いずれも一括遺物群をはじめとした遊離または二次的移動遺物よりも，遅れて埋葬された状況を示している。そしてまた玄室内出土の須恵器は編年観からみて，ほとんど年代差を示さない。現存する個々の棺内に供献された副葬品はいずれも貧弱であるが，不明の第７号棺を除いては，少くとも玄室内においては埋葬後に，棺内および床面を変動された形跡を示さない。こうした後期横穴式石室への追葬の場合，その終期に近い被葬者に対しては，もともとたいした供献物は伴なわなかったと考えられる。少くとも鐘形杏葉を含む盛装用馬具２組，環頭太刀２振りを含む直刀や刀子など，滑石製紡錘車２個，金環や勾玉等の装身具，100本を越える鉄鏃，220点を越える土器群等の豊富な副葬品を供献された被葬者は，果して幾人であったか，私たちが調査した時点ではすでに知見することできない，現存７棺に先行する被葬者に対するものである。

第88図の石室平面図に示した石室内に散在する石材は，底面上の約30cmぐらいにまで浮いていた幾つかの石材と，第６号棺および第７号棺の棺台に用いられた石材のほかは，そのほとんどが現存木棺のベースとなった二次的整地面下に，遊離遺物とともに混在していた。したがってこれらの石材は後世の撹乱は受けてなく，現存木棺の埋葬に先行して，何らかの目的によって石室内に搬入されたものである。可能性の一つとしては，本古墳への早期に埋葬された人達に対する葬送施設，おそらくは棺台等に用いられたものと考えられるのである。

また羨道部への埋葬の有無については現状では確認できなかった。玄室に近い羨道の東側壁に沿った床面に，やや時代の降る抓みのついた須恵器蓋５個が整然と並べられていたり，小石材の散在と遺物等も散見されて，追葬主体の埋納された可能性はあるものの，その確証は何も得られない。

第５節　埋　葬　主　体

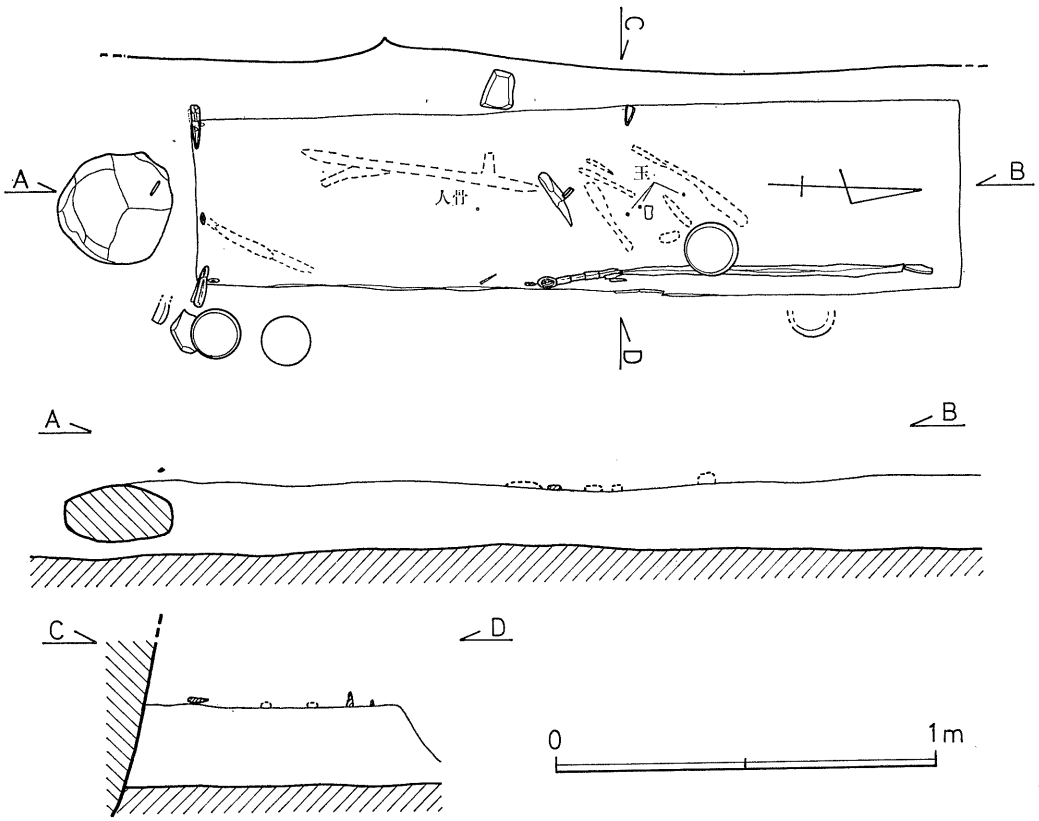
本古墳発掘調査にともなう埋葬主体で確認できたものは，先述もしたように木棺痕跡７棺である。実際にはこれに先行する被葬者の存在も推察できるのであるが，現存しないため，ここでは確認できた７棺について，個々の出土状況について概述する。各棺毎の計測値および棺内副葬遺物については表示のとおりである。

表40　岩田第14号墳現存木棺一覧

棺	推定計測値 長さ	推定計測値 巾	第１号棺を基準とした床比高	掘り方底面との床比高	棺内副葬遺物	備考
	cm	cm	cm	cm		
第１号棺	200	44	0	+20	直刀１，ガラス玉３？	直立釘５，落下釘４
第２号棺	183	70	−11	＋９	金環２，ガラス玉７？	落下釘４
第３号棺	234	49	−16	＋５	直刀３，金環４，ガラス玉４，管玉１	直立釘１，落下釘７
第４号棺	212	60	−15	＋５	金環３，ガラス玉２	落下釘２
第５号棺	231	55	−12	＋３	金環２，ガラス玉１，土玉21	落下釘11
第６号棺	188	53	＋７	+25	金環２	直立釘７，落下釘８，棺台石
第７号棺	205	46	−13	＋５	金環１	落下釘４，棺台石

第１号棺（図92，図版53）

第１号棺は玄室北西隅にあたる奥壁から55cmに北小口を置いて，西側壁に沿ってそれに接するように納められている。並接する第２号棺との間隔24.5cm，直列する第４号棺との距離49cmを測る。当棺葬送に先行する須恵器をはじめ数多くの遺物を敷き込んだ整地面上に位置するため，本来の石室底面よりも約20cmとかなり高位に棺床面を置いている。棺内副葬遺物と確言できるものは，東棺側に接して北部に納められた太刀１振りのみである。棺床面は腐蝕土層となってほぼその輪郭を遺



第92図　岩田第14号墳第1号棺実測図

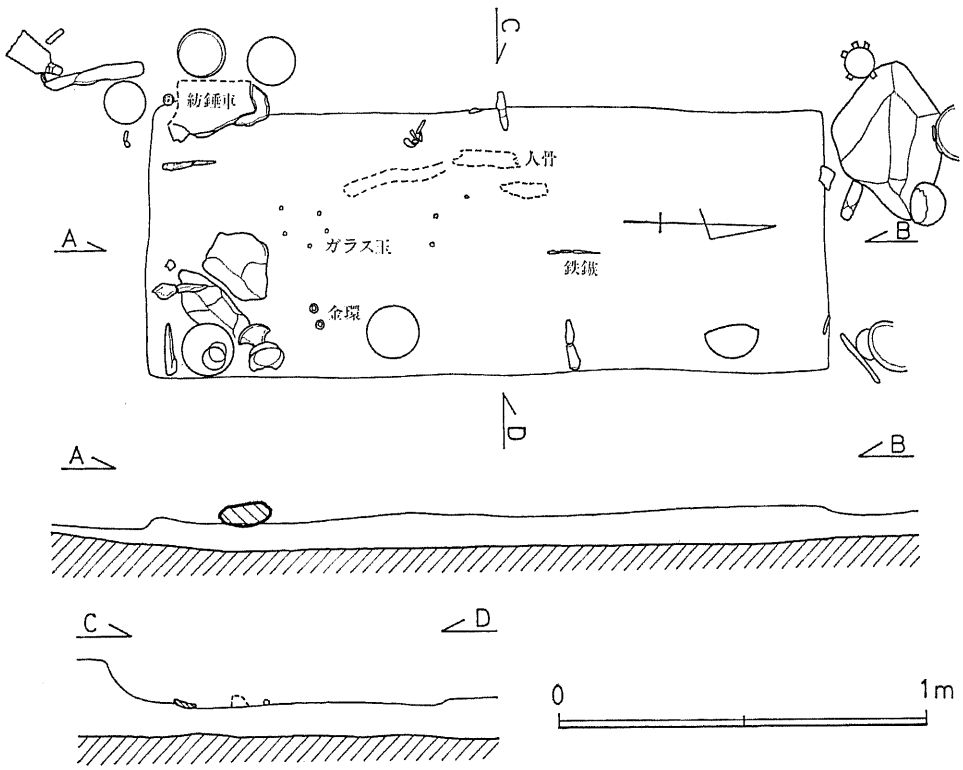
存し，粉状の残影となった灰白色の遺体も検出されたが，取りあげることはできなかった。棺北小口から約80cmの棺長軸線上を中心として，腐蝕土面上に3個のガラス玉が検出され，棺内副葬の可能性が強いが，先述もした当棺床下に敷き込まれた遺物群との関係もあって断定は困難である。

本棺は直刀の外縁に沿って棺側板の一部が遺存し，棺の南小口3本と東西両棺側中央部付近に対応する形で各1本の，棺底板を打ちつけたと思われる先端を上に向けて直立する鉄釘と，南小口では側板を横から打ちつけた鉄釘が，棺の腐朽にともなってそのまま直下に落ちた形で東西各2本が検出された。このことから本棺の構造と規模を知る大きな手がかりを得ることができた。すなわち本棺は小口板を両側板が左右から挟む形で上下に各2本の釘で打ちつけられ，さらに底板は上に載る枠部外法と等しいかより大きい板が使用されているのである。残存棺材および鉄釘から本棺の規模を推定すると，長さ200cm，巾44cmの長方形箱形木棺となる。

参考までに本棺床下に敷き込まれていた遺物を列記すると，土器21，環頭太刀2，馬具轡1，鐘形杏葉3，雲珠1，金環1，勾玉1，ガラス玉3，その他刀子や鉄鏃等の小鉄器片約30片である。

第2号棺（図93，図版53）

玄室の奥壁寄りに並ぶ3棺の中央に位置する。腐蝕土面と鉄釘，副葬品と遺骸残影等によって，その存在と輪郭をほぼ確認できる程度の遺存である。棺の床面は長方形プランを示し，長さ183cm

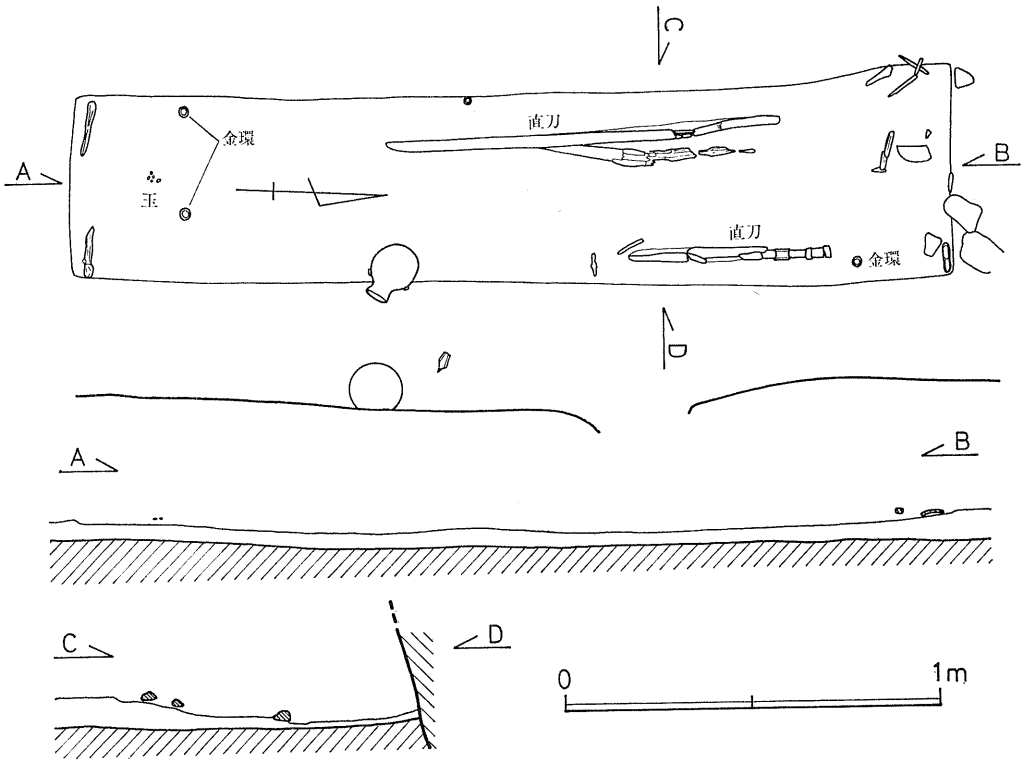


第93図　岩田第14号墳第2号棺実測図

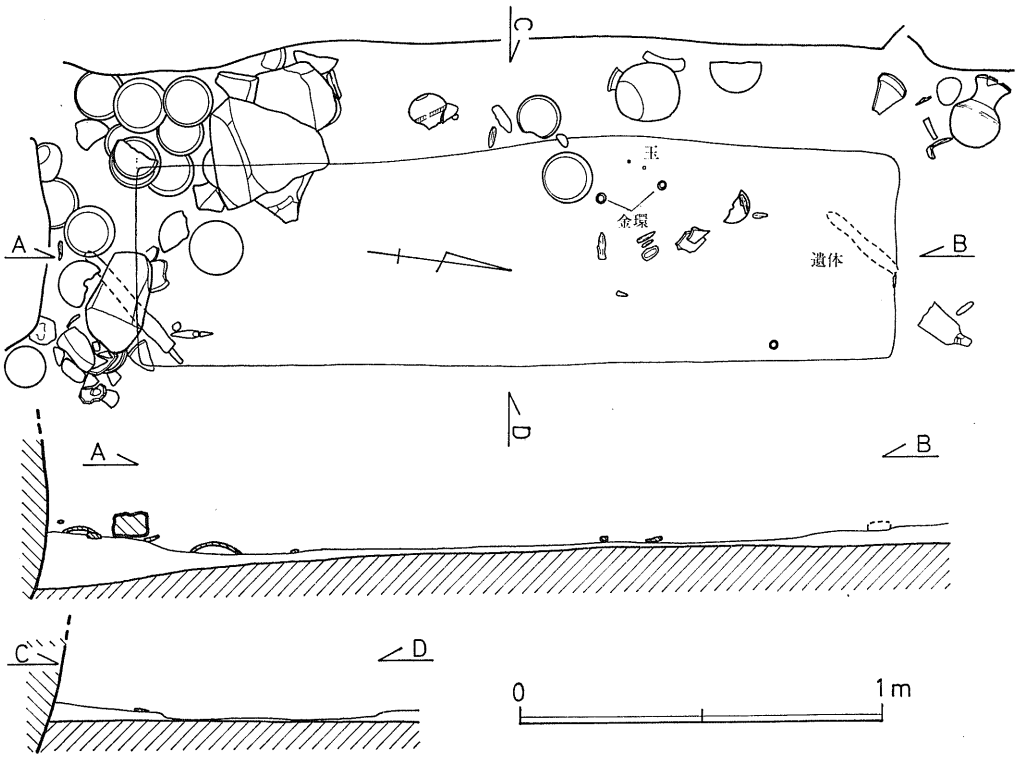
巾70cmを測る。奥壁から90cmのところに北小口を置き，隣接する第1号棺と24.5cm，第3号棺と11cm，第5号棺と72cmの間隔である。棺床面下に先行遺物の敷き込みも少なく，掘り方底面の上方約9cmに棺床面をおいている。棺の南小口から45cm，東側縁から約15cmの床面上に金環1対と，南小口から35cm～85cmの間の床面上に計7個のガラス小玉が検出され，いずれも棺内副葬品と推察されるが，床面上の発掘にともなってその周辺からさらに12個のガラス玉が発見された。棺の腐朽にともなって陥没した可能性も強いので，一応総計19個のガラス玉を当棺内副葬遺物として取り扱かうことにした。実測図中の石材および土器と鉄鏃はすべて棺床面下の遺物である。なお本棺南小口西隅外方に接して，滑石製紡錘車1点が遊離出土していることを付記しておく。

第3号棺（図94，図版53）

玄室北東隅にあたる奥壁から98cmに北小口を置いて，東側壁から34cmに側壁と平行に納められた長方形箱形木棺である。西に並接する第2号棺と11cm，南に直列する第7号棺と60cmの間隔を保つ。床面下に敷きこむ遺物も少なく，掘り方底面の上方約5cmに床面を置くが，北小口部では奥壁部に集められた一括遺物のうちの，鉄鏃群の上に載り本棺の埋納が，それらに後出の様相を示している。棺両小口の隅部に落下釘ならびに1本の直立釘が検出され，腐蝕土面と合せて本棺の規模を長さ 234cm，巾49cmと知ることができた。棺の両側に沿ってやや北寄りに，西側に2振り，東側に1振りの計3振りの直刀と，南小口から約22cmの長軸中心線上にガラス玉4，管玉1が一括して検出され，同じく南小口から約30cmの床面上に約27cm離れて1対の金環が，当棺内副葬遺物として発



第94図　岩田第14号墳第3号棺実測図



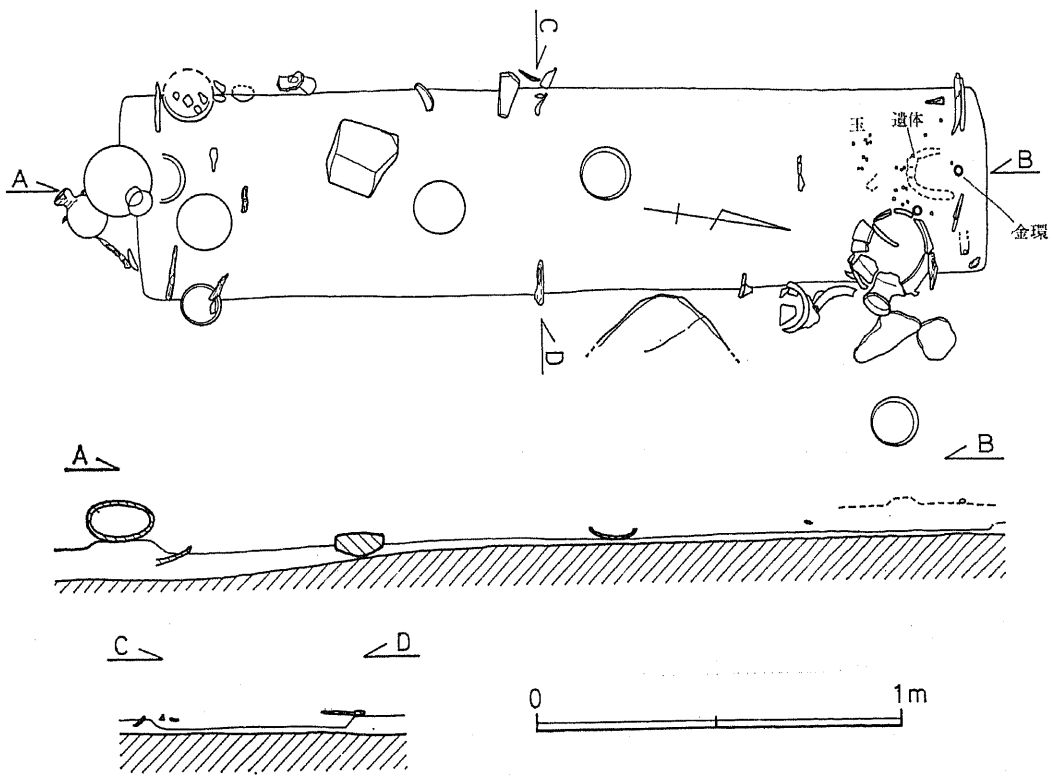
第95図　岩田第14号墳第4号棺実測図

見された。さらに南小口から 104cmの西側縁上と，北小口から25cm，東側縁から５cmの床面上に各１個の金環が発見されたが，この両者は対とならず，西側板部の金環は第１号棺床下の金環と，また北小口金環は第４号棺北小口金環と同巧同大で対となる可能性が強く，本棺埋葬に先行する被葬者への供献と考えた方がより妥当のようである。

第４号棺（図95，図版54）

玄室袖部隅に埋納された長方形箱形木棺である。袖部妻石から北へ25cmに南小口を置き，西側壁から平均28cmにそれと平行に西側板を置いて納められている。並接する第５号棺との間隔10cm，北側の第１号棺との距離49cmを測る。袖隅に集められた遺物群を棺の南小口が踏んでいるが，ちょうどその部分は石室掘り方底面が深くなっているため，棺床面と石室掘り方底面との平均比高は約５cmと僅かである。腐蝕土面を基準とした本棺床面の規模は長さ 212cm，巾60cmを測る。棺内副葬遺物としては，棺の北小口から約75cm，西側縁から15cmのところを中心として，南北に約17cm離れて１対の金環と，その西方棺の西側縁近くに２個のガラス小玉が考えられる。他に北小口から33cmの東側縁の近くに金環１個が発見されたが，先述の第３号棺遊離の金環と対となる可能性が強く，北小口から外方にかけて検出される遺体残影とともに，本棺埋葬に先行するものと考えられる。また実測図に示した土器群はすべて本棺床面下検出のものである。

第５号棺（図96，図版54）

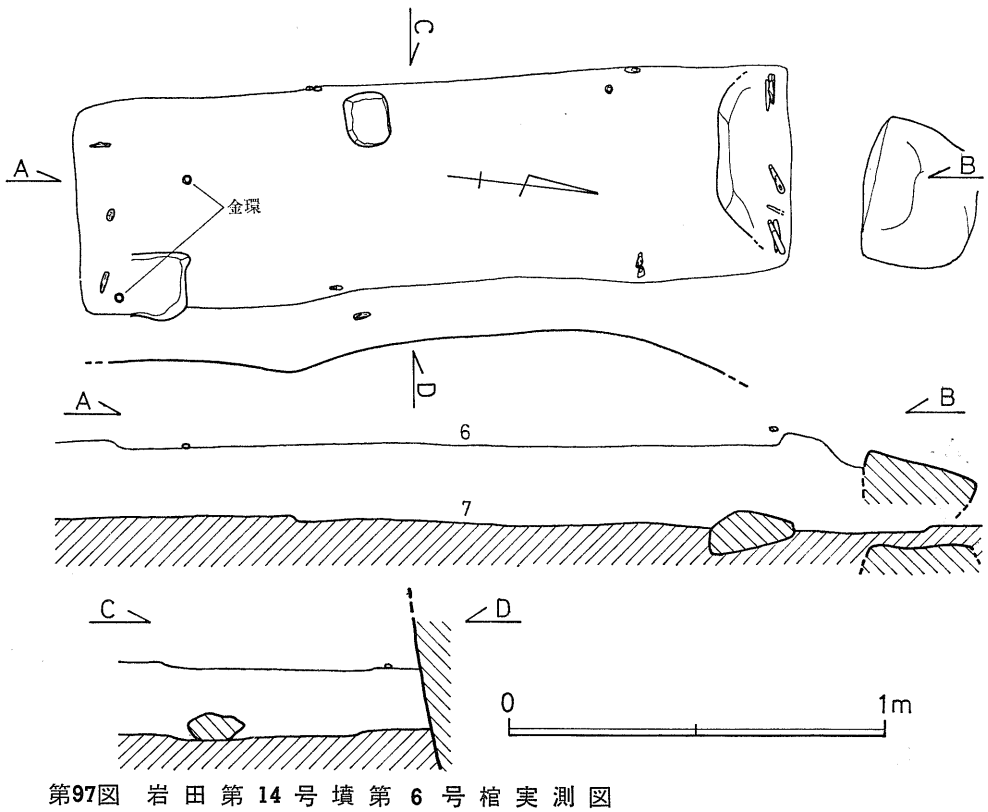


第96図　岩田第14号墳第５号棺実測図

第４号棺の東約10cmに平行して並ぶ長方形箱形木棺の床面痕跡であるが，小口部をやや南にずらして置かれているため，南小口部は約20cmばかり羨道部にかかっている。東に並ぶ第７号棺と25cm北の第３号棺との距離72cmを測る。腐蝕土面と掘り方底面の比高は平均３cmであるが，後述の人骨および玉類の高さと底面の比高は８cmを測り，本来の棺床面は今少し高位にあったことを示している。棺の両小口の両側および側縁中央部に鉄釘が検出され；その形状と床面腐蝕土面とを合せ考えて，棺の長さ 231cm，巾55cmと推測される。棺床面の北小口に近い長軸線を中心にして，遺骸顎部と金環１対，土製練玉21，ガラス小玉１が一括発見された。頭位を北に置いた被葬者の着装遺物と考えられる。その他図示した石材および遺物は，鉄釘を除いてすべて床面下の敷き込みである。北小口西隅の大形須恵質提瓶は，棺台として用いられたかあるいは高く露呈して邪魔になったためか意識的に破砕された形状を呈し注目された。

第６号棺（図97，図版54・55）

第５号棺の東に並存する第７号棺の上方に南にややずれてはいるが，ほぼ上下に重なるように埋葬された長方形箱形木棺である。第７号棺より約34cm南にずれ，東側壁の約18cm西に東棺側を置いている。したがって本棺は羨道部に約37cmはみ出した形となり，西に隣接する第５号棺と水平距離で20cm，北の第３号墳南小口との距離96cmを測り，先行する第７号棺の床面より約20cm上方に床面を置いている。花崗岩石材を棺底両小口に使用して棺台としているが，現存木棺の中で最終期に埋



第97図　岩田第14号墳第６号棺実測図

納されたためか，棺の組み立てに用いられた鉄釘の遺存状態は良好で，特に小口部においては埋土中に直立釘も含めてよくその原況を保っていた（図版55）。本棺の規模は長さ 188cm，巾53cmと推測され，その構造は第1号棺の場合とほぼ同巧の手法である。棺床面の南小口部東隅と，同南小口から29cm，西棺側から63cmの距離をもって金環1対が発見された。

第7号棺

第6号棺の床面下約20cmに上下に重なって埋葬された，長方形箱形の木棺である。第6号棺埋葬の際に大きく痛められ，実測はできなかったが，第6号棺と同様石材を用いて両小口部に棺台を設けていた。北小口を第6号棺より約35cm北に置き，西に並ぶ第5号棺と25cm，北の第3号棺と90cmの位置にあり，棺床面は掘り方底面の上方約5cmに置いている。棺床面の推定規模は長さ 205cm，巾46cmと推測される。鉄釘2本の落下のほか，北小口から約80cmの西棺側近くに金環1個だけを検出した。

第5章　出　土　遺　物

本古墳の発掘調査にともなう石室内からの出土遺物は，表41にも示したように総個体数は 700点を越え，質量ともにかなり豊富である。しかし前述もしたごとく現存する棺内副葬遺物は貧弱であり，その他の大部分の遺物は，本古墳への追葬の過程で二次的な移動が行なわれ，それも現在確認できるどの棺よりも先行する様相を示している。そのため各被葬者ごとに対応できる副葬遺物数は極めて限定され，葬送の年代を知る大きな手がかりとなる土器についても，羨道床面の一部を除いては，さしたる編年的差異を示さない。したがって本稿では出土遺物を全体的に各器種ごとにまとめ，順次その概要を記すことにした。出土遺物の量も多く個々の遺物について列記するには，本書のスペースの関係もあるため記述の便宜上，個々の遺物の計測値や胎土焼成等については，できるだけ器種ごとにまとめて表示した。実測図および表の遺物番号は本文の遺物番号に対応し共通である。

第1節　須恵質土器

推定も含めて総検出個体数は 308個体以上にのぼる。各器種別個体数は表41，出土状況は図89および表42を参照されたい。器種別個体数では坏の類が全体の約76%にあたる 234個体を占め，その反面横瓶1個体，短頸坩4個体，平瓶5個体などが少ない特徴を示す。

発見された須恵器の大半は奥壁部と玄室袖隅に寄せ集められているが，玄室の西側壁沿いや，現存木棺床部の整地面の下に敷きこまれたものもかなりある。ほとんどの須恵器が追葬の過程での二次的移動を受け，その扱いはぞんざいである。例えば上下に重ねて対となる坏の蓋(71)と身(39)が，玄室内の第5号棺床下と約4.8m離れた羨道入り口の東側壁付近から発見されたり，有蓋短頸坩(166)の蓋と身が，第2号棺床下と第4号棺床下の約 1.9mに分散して出土した。すでに破損した土器で

表41　岩田第14号墳石室内出土遺物個体数一覧

土器			
種類		推定個体数	実測個体数
須恵器	坏身	98	52
	坏蓋	136	56
	台付有蓋坏	7	6
	高坏	15	12
	蓋	5	5
	瑯	6	5
	平瓶	5	4
	提瓶	11	11
	横瓶	1	1
	有蓋短頸坩	4	2
	台付直口坩	11	9
	壺	9	5
小計		308	168
土師器	皿	17	12
	椀	14	9
	高坏	9	8
	坩(含台付)	5	3
小計		45	32

装身具			
金環		17	15
玉類	勾玉	1	1
	管玉	1	1
	彩色玉	1	1
	棗玉	1	1
	ガラス玉	44	36
	土製練玉	21	21
小計		86	61

鉄器			
種類		推定個体数	実測個体数
武器	直刀	5	5
	環頭太刀	2	2
	剣？	1	1
	短刀	2	2
	蕨手刀子	2	2
	刀子	18	15
	鉾等	4	4
	鉄鏃(尖)	90	60
	鉄鏃(平)	24	24
小計		148	115
馬具	鐘形杏葉	5	5
	雲珠	1	1
	轡	2	2
	鐙鎖	3	3
	鐙飾金具	断片 13	断片 5
	鞍飾金具	断片 10	断片 7
	辻金具	1	1
	留金具	8	8
	鋲具	7	7
小計		(馬具2組分か)	

鉄釘・鎹		
釘	75	68
鎹	38	28
小計	113	76

その他		
滑石製紡錘車	2	2
木棺材	若干	—

※　推定個体数は最小確認値を表わし，表示数以上という意味である。

も，第１号棺南小口外方の高坏（115）が，約3.1m離れた奥壁部の細片と同一個体であったり，第４号棺床下の坏片(62)が4.15mの距離にある奥壁遊離片と接合して完形復元でき，さらには玄室底面下に掘られたピット内の，床下約40cmで発見した破片が第１号棺床下の坏(36)と接合できるなど，かなり撹乱遊離された形態を示している。

しかしこうした出土状況のなかで，完形を保つものもかなり多く，接合によってほぼ完形に復元できたものを加えると，全検出個体数の約52%にあたる 160個体を占める。反面その他の破片は断片的な小破片が多く，ほとんど接合できない。完形の30%～60%大に復元できるものは僅かに８例を数えるのみである。接合できない遊離片総数329片を分類して個体数を検討すると，少くとも140個体以上となるほどである。したがって本古墳出土の須恵器は，完形またはそれに近く接合復元できるものか，あるいは単片的な遊離断片のいずれかであり，その中間的なあり方は示さないのである。このことは，本古墳への葬送のある時期に，すでに埋納されていた副葬品類を，奥壁部や玄室袖部隅などに寄せ集めたり，玄室床面を整地しなおしたときには，その取り扱いはかなり粗雑ではあるが，副葬品類を石室外等へ持ち出すことはしないで，石室内において処理したことを物語るものと思われるが，その他の小断片の存在については明確にできなかった。

これらの断片の多くは，本古墳出土の完形および復元土器群とほぼ同時期のものが大半を占め，なかにやや先行するものや糸底のついた坏などかなり時代の降るものも含まれる。そして当然のことかも知れないが，先述の土器群と同時期までのものは，玄室内の奥壁や袖部あるいは床面下等の土器群として混在し，時代の降るものは，羨道部床面や遊離埋積土中からの検出が多い。当該地周辺には本古墳の時期に前後する須恵器２～３点を伴出する土壙墓や，須恵器片の散布も見られ，石室の遺存状況と合せ考えて，これらの小破片のなかには本古墳葬送に直接ともなうもののほかに，追葬の過程における混入や，後世の石室破壊時等の流入などの可能性も考えられる。したがって本稿では実測が可能程度に復元でき，本古墳葬送と直接的にかかわりのある供献物と推察できる，168点を中心に記述することとする。

1. 坏 身（図98，99・図版61）

総検出個体数は79個体であるが，そのうち完形を保つものは32個体，接合によってほぼ完形復元できたものは20個体と保存状態はかなり良好である。口径11.8cm～12.8cm，受部最大径14.2cm～15.3cm，器高3.6cm～4.6cmの範囲内のものが多いが，表43にも示したように個々の器形ごとの径と高さの比率等に関してはかなりのばらつきをみせる。総体的に立ちあがりが低く内傾しているが，器壁が薄くて立ちあがりのシャープなものと，器壁が厚く受部の張りだしの短いものとがある。整形仕あげは器表底部はへら削り，体部および内面はすべて横なで調整である。

(1)均整のとれた良品，立ちあがりの内傾が著しく0.75cmと低い。器表の約半分は灰釉をかぶり白斑をみせ，立ちあがりの一部に鉄錆が付着している。(2)受部が厚く外方に高く斜傾しているため，立ちあがりは0.35cmしか突出しない。(3)器表の約50%に灰釉をかぶり灰白色を呈し，指圧凹痕が目立つ。受部に重ね焼きの際に付着したと思われる約８cmの長さの粘土痕がある。(4)受部を極端につまみだし立ちあがりは内湾して 0.5cmと低い。内外面とも仕あげ調整は粗雑で外表の一部に鉄錆が

表42　岩田第14号墳須恵器出土地点一覧

土器番号	品名
奥壁部一括	
1	坏身
6	坏身
7	坏身
8	坏身
9	坏身
10	坏身
11	坏身
12	坏身
13	坏身
16	坏身
17	坏身
19	坏身
22	坏身
23	坏身
25	坏身
26	坏身
27	坏身
28	坏身
29	坏身
30	坏身
31	坏身
33	坏身
48	坏身
49	坏身
67	坏蓋
68	坏蓋
69	坏蓋
72	坏蓋
73	坏蓋
74	坏蓋
75	坏蓋
76	坏蓋
77	坏蓋
78	坏蓋
79	坏蓋
80	坏蓋
81	坏蓋
83	坏蓋
84	坏蓋
85	坏蓋
86	坏蓋
87	坏蓋
88	坏蓋
89	坏蓋
94	坏蓋
96	坏蓋
97	坏蓋
98	坏蓋
99	坏蓋
101	坏蓋
103	坏蓋
104	坏蓋
108	坏蓋
109	台付坏
109	台付坏蓋
110	台付坏
110	台付坏蓋
111	台付坏
111	台付坏蓋
112	台付坏
112	台付坏蓋
113	台付坩
113	台付坩蓋
114	台付坩
114	台付坩蓋
116	高坏
117	高坏
119	高坏
120	高坏
122	高坏
123	高坏
124	高坏
129	甕
129	甕
131	甕
138	坩
146	提瓶
154	提瓶
156	台付坩
164	台付坩
第1号棺下付近	
3	坏身
21	坏身
24	坏身
36	坏身
45	坏身
51	坏身
64	坏蓋
65	坏蓋
66	坏蓋
90	坏蓋
126	高坏
127	甕
130	甕
145	提瓶
149	提瓶
157	台付坩
159	台付坩
163	台付坩
第1・2号棺南	
15	坏身
18	坏身
47	坏身
50	坏身
82	坏蓋
91	坏蓋
93	坏蓋
115	高坏
134	平瓶
147	提瓶
161	台付坩
167	壺
第4号棺の下	
44	坏身
62	坏蓋
63	坏蓋
82	坏蓋
121	高坏
155	横瓶
158	台付坩
166	短頸坩蓋
玄室袖部一括	
2	坏身
4	坏身
20	坏身
32	坏身
35	坏身
41	坏身
42	坏身
43	坏身
46	坏身
52	坏身
56	坏蓋
57	坏蓋
58	坏蓋
59	坏蓋
60	坏蓋
61	坏蓋
70	坏蓋
92	坏蓋
95	坏蓋
100	坏蓋
105	坏蓋
144	提瓶
第2号棺の下	
37	坏身
38	坏身
107	坏蓋
118	高坏
133	平瓶
166	短頸坩
第3号棺の下	
102	坏蓋
150	提瓶
第5号棺下付近	
5	坏身
14	坏身
40	坏身
53	坏蓋
54	坏蓋
55	坏蓋
71	坏蓋
132	平瓶
136	壺
152	提瓶
153	提瓶
羨道第6号棺南	
106	坏蓋
125	高坏
135	平瓶
139	蓋
140	蓋
141	蓋
142	蓋
143	蓋
162	台付坩
羨門部東	
39	坏身
151	提瓶
168	大壺
羨門部西	
137	壺
148	提瓶
160	台付坩
165	短頸坩

付着している。(5)受部が外方に高く斜傾するため立ちあがりは0.32cmしか突出しない，焼歪みのためかなり湾曲している。(6)焼成は軟かく瓦器に近い。したがって器表は荒れてざらっとしている。(7)完形特記事項なし。(8)細砂を含むが胎土は良質である。焼成は軟らかく外表の調整は粗雑である。(9)胎土に3㎜大の礫をかなり含みやや焼歪みをみせる。外表に小粘土塊の付着と鉄錆が認められる。(10)胎土に3㎜大の礫を含みロクロ回転による引き傷が目立つ。

(11)器表の整形はやや粗雑，受部に重ね焼の際の粘土の付着が約7cm残り(67)とのセット関係が明らかとなった。(12)焼成は軟質だが均整のとれた良品，外表に焼成時の付着と思われる小粘土塊が2か所見られる。(13)焼成は堅緻で立ちあがりもシャープ，器表に灰釉をかぶり白斑および黒斑が全域にみられる。(14)底部が焼歪みによって凹み器高 2.1cmと扁平な形である。(15)均整のとれた良品，内面はていねいななで調整がされている。(16)外表底部に螺線状のへら削り痕が顕著に残り，一部に鉄錆の付着が認められる。(17)やや焼歪みをみせ，外表へら削りは受部近くまでおよぶ，立ちあがりから受部にかけての一部に鉄錆が付着し，内面のなで調整はていねいである。(18)完形特記事項なし。(19)内面中央部に青海波状の圧痕を残し立ちあがりに鉄錆が付着する。(104)と対となる。(20)立ちあがりはシャープではないが0.9cmと高い。外表の一部に鉄錆の付着がある。

(21)～(25)はほぼ同巧手法のものである。(21)内面底部に指圧条痕が顕著で仕上げなで調整もていねいである。(22)の外表の一部に鉄錆，(23)と(24)に大豆粒大の粘土塊の付着，(23)底部に焼歪みが見られる。ともに3㎜～4㎜大の礫をかなり含む。(24)は(64)と対となる。(26)内面中央部に青海波状の圧痕を残すが，なで調整はていねいである。その反面外表は3㎜大の礫が露呈しロクロ回転による引き回し傷が目立つ。(86)と対となる。(27)器形の均整はとれているが，内外面とも4㎜大までの礫の突出が目立つ。(28)内面なで調整もていねいで均整のとれた良品である。(29)胎土に砂粒を含むがきめが細かく良好である。(30)受部に僅かに鉄錆が付着，内面仕あげ調整は施されていない。(97)と対になる。

(31)均整のとれた良品，径15.7cmは本古墳出土の坏身中最大である。器表底面にへら状施文具によるX形の窯印があり，(81)と対になる。外表の一部に鉄錆が付着する。(32)受部と立ちあがりの境に凹線状の溝をもつ均整のとれた良品，器表底面にへら状施文具による3条の沈線が，巾5cm，長さ14.5cmにわたって施されている。(33)立ちあがりを反りをもって内傾が著しい。内面なで調整はていねいである。(34)受部と立ちあがりの境に凹線状の明瞭な溝を繞らせ，外表全面に灰釉をかぶり灰白色斑が広がっている。(35)外表に自然釉をかぶり黒灰色の光沢を放つ部分がある。器表底部に巾 1.7cm，長さ10.8cmの2条の窯印状の平行沈線が施されている。(105)と対となる。(36)外表一面に自然釉をかぶり白斑が見られる。内部なで調整はていねいである。(37)胎土のきめは細かく良質である。径に較べて器高が低く扁平な形である。(38)焼成は軟質ながら均整のとれた良品，外表底面のヘラ削りの稜がシャープに残る。(39)径13.9cmは本古墳出土坏身中最小，外表全面に灰釉をかぶり灰褐色と黒灰色の斑文をみせ(71)と対となる。器表の一部に不定形な小粘土塊が付着する。(40)やや焼歪みをみせるが(82)と対になる。

(41)大きく焼歪み深い椀状を呈すが(58)と対になる。(42)受部は外方に高く斜傾，椀状を呈し器高も4.6cmと高く(59)と対になる。(43)底部が焼歪んで平らとなりへら削りや指圧条痕が明瞭に残る。仕あげ調整のなでは認められない。(44)立ちあがりが低く器高も 3.2cmと扁平なつくりである。(45)焼成は

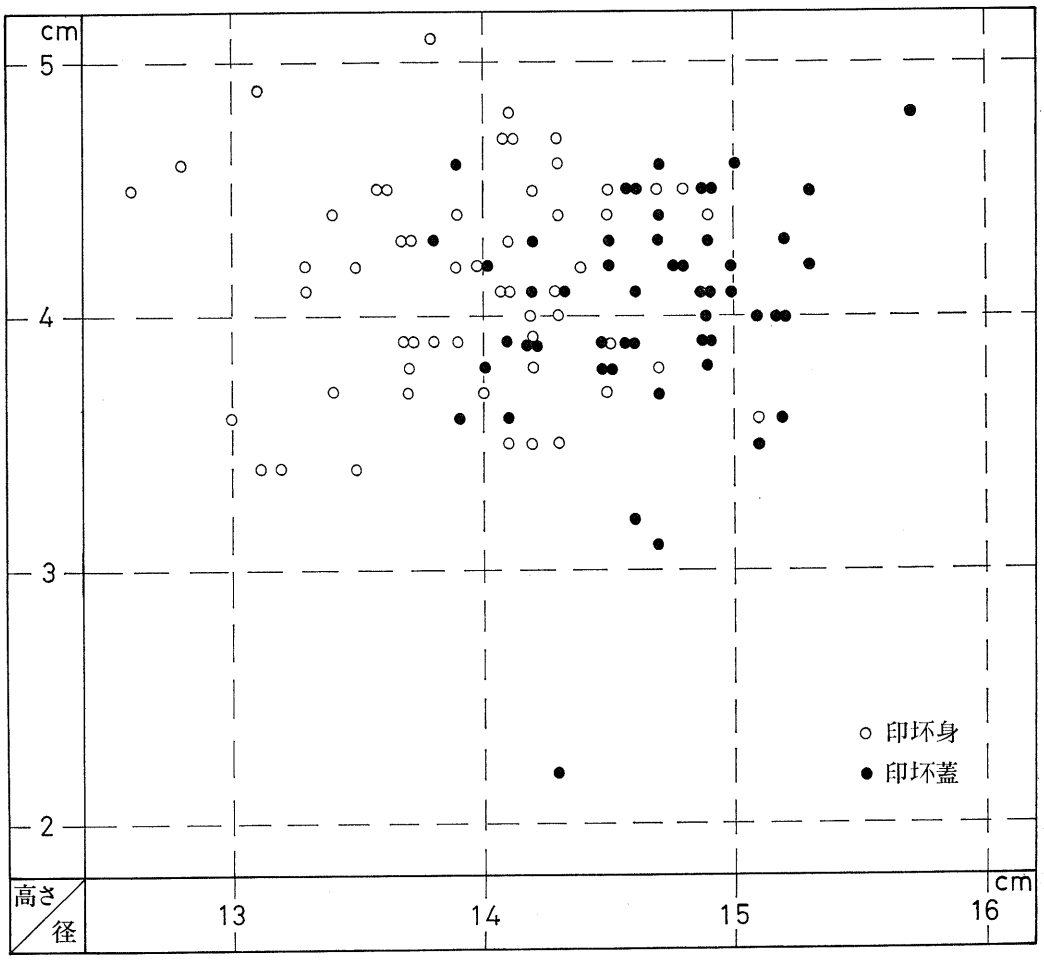
表43　岩田第14号墳出土須恵器坏身　　（単位cm）

土器番号	口　径	最大径	器　高	色　調	胎　土	焼　戦	備　考
1	12.8	14.0	3.8	暗青灰色	砂粒を含む	普　通	完形，稀に７㎜大の礫を含む
2	11.5	14.3	4.1	灰　色	砂粒を含む	普　通	完形復元，（95）と対になる
3	12.8	15.2	4.3	暗青灰色	砂粒を含む	普　通	完形，受部に重ね焼痕あり
4	12.8	14.8	4.2	淡青灰色	砂粒を多く含む	普　通	完形，調整粗雑
5	11.3	13.8	4.3	灰　色	細砂を多く含む	普　通	完形，(62)と対，焼歪みあり
6	12.5	14.2	4.1	灰白色	砂礫を含む	軟　質	ほぼ完形に復元
7	12.1	14.0	4.2	青灰色	砂粒を多く含む	普　通	完形，稀に５㎜大の礫を含む
8	12.5	15.0	4.1	灰白色	細砂を含む	軟　質	ほぼ完形に復元
9	12.4	14.5	4.3	暗青灰色	砂礫を含む	普　通	完形，やや焼歪みをみせる
10	12.0	14.5	4.2	青灰色	砂礫を含む	堅　緻	完形
11	12.2	14.5	3.8	青灰色	砂礫を含む	普　通	完形，（67）と対になる
12	11.8	14.3	2.0	灰　色	砂粒を含む	軟　質	完形復元（77）と対になる
13	12.2	14.6	4.1	青灰色	砂礫を含む	堅　緻	完形，稀に７㎜大の礫を含む
14	12.2	14.7	3.1	暗青灰色	砂粒を含む	普　通	完形復元
15	12.1	14.6	3.9	青灰色	細砂を含む	普　通	完形
16	12.0	14.5	3.9	青灰色	砂礫を含む	堅　緻	ほぼ完形
17	12.7	14.9	4.5	暗青灰色	細砂を含む	普　通	完形復元，焼歪みをみせる
18	12.8	14.2	3.9	淡青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形，８㎜大の礫を含む
19	12.2	14.7	3.7	淡青灰色	砂粒を含む	普　通	完形，（104）と対になる
20	12.5	14.9	3.9	暗青灰色	砂礫を含む	普　通	完形
21	12.4	14.5	3.8	青灰色	砂礫を含む	普　通	完形
22	12.7	14.2	4.3	青灰色	砂粒を多く含む	やや軟質	完形
23	12.5	14.9	4.1	青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形復元，３㎜大の礫を含む
24	12.7	14.2	3.9	青灰色	砂礫を多く含む	普　通	完形（64）と対になる
25	13.8	15.2	4.2	淡青灰色	砂粒を含む	普　通	ほぼ完形
26	13.8	14.7	4.3	淡青灰色	砂礫を多く含む	やや軟質	完形（86）と対になる
27	12.4	14.9	4.3	暗青灰色	砂礫を多く含む	堅　緻	完形
28	12.6	14.9	4.5	青灰色	砂粒を含む	普　通	ほぼ完形
29	12.0	14.7	4.6	青灰色	砂粒を含む	普　通	完形復元

土器番号	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	備考
30	13.1	15.2	4.0	外面青灰色，内面灰白色	砂粒を含む	やや軟質	完形，(97)と対になる
31	13.2	15.7	4.8	暗青灰色	細砂粒を含む	堅緻	完形(81)と対になる
32	12.1	14.7	4.4	暗青灰色	砂粒を含む	普通	ほぼ完形復元
33	12.3	15.3	4.2	青灰色，断面赤褐色	砂礫を含む	普通	ほぼ完形復元
34	11.8	14.5	3.9	青灰色，断面赤褐色	砂粒を含む	堅緻	ほぼ完形復元
35	12.5	14.9	4.0	青灰色	砂礫を含む	普通	ほぼ完形，(105)と対になる
36	12.4	14.9	3.9	青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形
37	12.5	15.1	3.5	青灰色	砂粒，雲母を含む	普通	約80%復元
38	12.3	14.6	4.6	灰白色	砂粒を含む	軟質	完形，(71)と対になる
39	11.4	13.9	3.6	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形，(82)と対になる
40	12.5	14.9	4.1	青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形(58)と対になる
41	12.3	15.0	4.6	青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形復元(59)と対になる
42	11.8	13.9	4.6	淡青灰色	細砂粒を含む	堅緻	完形
43	12.5	14.9	3.8	淡青灰色	砂粒，雲母を含む	やや軟質	完形
44	12.0	14.6	3.2	青灰色	砂礫を含む	普通	完形
45	12.6	15.1	4.0	淡青灰色	砂粒を含む	やや軟質	完形
46	12.1	14.6	4.5	青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形
47	12.8	14.2	3.6	暗青灰色	砂粒を含む	普通	完形
48	12.5	14.8	4.2	暗青灰色	砂粒を含む	普通	復元復元
49	11.8	14.1	3.9	暗青灰色	砂粒を含む	普通	完形
50	12.9	15.2	3.6	暗青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形
51	12.3	15.2	4.0	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形
52	13.3	15.3	4.5	灰白色	砂粒を含む	普通	完形(70)と対になる

やや軟質だが胎土や形状は均整のとれた良品，立ちあがりの内傾が著しい。(46)焼歪みをみせるが仕あげ調整もやや粗雑である。(47)均整のとれた良品で仕あげ調整もていねいである。(48)やや焼歪みをみせるが内外面ともなで調整はていねいである。(49)外表底面のへら削り痕が著しく，内面中央部はなで仕あげ後に平らなものを押しつけた痕跡を残す。(50)底部が焼歪みで一部窪んでいるが仕あげ調整はていねいである。(51)形状および仕あげ調整とも良好であるが，焼成時のひび割れが大きく残る。(52)細砂を多量に含み内面仕あげ調整はていねいだが外表は粗雑，外表底面にへら描きによる巾1.1cm，長さ10cmの2条の平行沈線が施され，(70)と対になる。

表44　岩田第14号墳出土坏計測値別分布表



2．坏蓋（図99，100・図版60）

計 136個体分を検出したが実測可能のものは56個体である。なかに２例だけ径が11cmに満たない小形品を含むが，径13.1cm～14.5cm，器高3.3cm～4.9cmのものが多い。しかし個々の計測値は表46表44にも示したように，その範囲内でかなりのばらつきをみせる。大部分の坏蓋は器表に稜をもたず椀状に丸味をもち，口縁端部もまるくおさめた同巧の作りであるが，中に幾つか肩部に弱い稜をもち，口縁端部を薄く内側に斜傾させ段をもたせたものがある。整形仕あげは器表天部はへら削り，その他と内面は横なで調整である。

(53)やや焼歪みをみせ，内面横なで調整は雑，外面天部の削りも部分によっては削り残りをみせる。口縁近くに鉄錆の付着がある。(54)底部が平らとなりやや扁平な形状を呈するが，整形および調整はともに良好である。(55)器表全面に灰釉をかぶり部分的に黒斑が見られる。外表の調整はやや粗雑で小粘土塊が付着している。(56)器表天部のへら削り痕は明瞭で径 6.5cmの平滑面を有し，へら描による長さ 2.5cmの直線状の沈線１条が認められる。また口縁部外方に僅かだが小刻文が繞っている。(57)器高 4.9cmと深く，口縁部がやや内傾して最大径を体部にもつ椀状を呈するが，口縁部が焼

表45　岩田第14号墳坏蓋と身のセット関係および出土状況

坏　身		坏　蓋		両者間距離
土器番号	出土場所	土器番号	出土場所	
2	玄室袖隅一括	95	玄室袖隅一括	12cm
5	第7号棺北西隅外方	62	第4号棺と西側壁間	163
11	奥壁中央付近	67	奥壁中央部	15
12	奥壁東半部	77	奥壁東部	41
19	奥壁北東隅	104	奥壁北東隅	20
24	第1号棺下北東隅	64	第1号棺下中央付近	60
26	奥壁北東隅	86	奥壁北東隅	8
30	奥壁東部付近	97	奥壁北東付近	上下に重なる
31	奥壁東部付近	81	奥壁東部付近	10
35	玄室袖隅一括	105	玄室袖部一括	28
39	羨門東側壁付近	71	第5号棺南小口下	480
40	第5号棺下南小口	82	第2号棺南小口外方	290
41	玄室袖隅一括	58	玄室袖隅一括	47
42	玄室袖隅一括	59	玄室袖隅一括	45
52	玄室袖隅一括	70	玄室袖隅一括	33

歪みによるゆがみをみせる。(58)大きく焼歪みをみせ器壁の厚いつくりである。器表の指圧条痕が目立ち仕あげ調整もやや荒いが(41)と対になる。(59)径に対して器高が高く椀状を呈し(42)と対になる。器壁が厚く体部の一部に気泡によるふくらみがある。(60)扁平なつくりで整形仕あげもやや粗雑。器表の一部に鉄錆が付着する。

(61)天部がやや窪み扁平，口縁端を鋭くつまみ内側に斜傾させ段をもつ。胎土も良質で整形仕あげもていねいである。外表全面に灰釉をかぶり黄褐色の斑文がみられる。(62)深い椀状を呈し(5)と対になる。器表のへら削りはやや粗雑である。(63)若干焼歪みをみせるが胎土や焼成は良好，器胴に弱い稜をもち口縁はやや内湾している。内面天部に平らなものを押しつけた痕跡をかすかに残す。(64)天部は扁平で焼歪みをみせ，整形はやや荒く(24)と対になる。(65)胎土のきめも細かくなで調整もていねいで，外表天部もへら削りの後なで仕あげされている。(66)前記(65)とほぼ同巧である。(67)器表に弱い稜をもち口縁はやや内湾している。口縁端の一部が重ね焼きの際，坏身受け部に癒着して欠損していることから，(11)とのセット関係が判明した。(68)内外面とも灰釉をかぶり黒灰色または灰白色の斑文がみられる。胎土に器壁厚より大きい8㎜大の礫をかなり含み，整形仕あげも粗雑である。(69)扁平なつくりで胎土に4㎜大の礫を多く含み整形もやや荒い。(70)砂粒を多く含み焼成も軟質で器表の荒れも激しいが，均整のとれた良品で(52)と対になる。外表体部に稜をもち口縁はやや外傾，口縁端

表46　岩田第14号墳出土坏蓋

（単位cm）

土器番号	口径	器高	色調	胎土	焼成	備考
53	14.1	4.8	青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形
54	14.3	3.5	青灰色	砂粒，雲母を含む	堅緻	完形
55	14.2	4.5	淡青灰色	砂粒を含む	堅緻	完形，天部にへら記号
56	13.4	3.7	青灰色	砂礫粒を含む	普通	完形復元
57	13.1	4.9	灰色	細砂を含む	軟質	ほぼ完形復元
58	14.1	4.3	青灰色	砂礫を多く含む	普通	完形，（41）と対になる
59	12.8	4.6	淡青灰色	砂粒を含む	堅緻	完形，（42）と対になる
60	13.0	3.6	青灰色	砂礫を含む	普通	完形復元
61	14.1	3.5	灰色	砂粒を含むも良質	堅緻	完形
62	12.6	4.5	淡青灰色	砂粒，雲母を含む	堅緻	完形復元，（5）と対になる
63	13.5	4.2	暗青灰色	砂礫を含む	堅緻	ほぼ完形復元
64	13.7	3.7	青灰色	砂粒を含む	普通	完形，（24）と対になる
65	13.5	3.4	暗青灰色	砂粒を含む	普通	完形
66	14.5	3.9	青灰色	砂粒を含む	普通	完形
67	13.6	4.5	淡青灰色	砂礫を含む	堅緻	ほぼ完形復元
68	13.3	4.2	灰色	砂礫を含む	堅緻	ほぼ完形復元 礫は7㎜大あり（11）と対になる
69	13.2	3.4	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形
70	14.9	4.4	淡青灰色	砂粒を含む	堅緻	完形，（52）と対になる。天部へら記号
71	13.1	3.4	黒灰色	砂粒を含む	堅緻	完形，（39）と対になる
72	14.7	4.5	青灰色	砂礫を含む	堅緻	ほぼ完形復元
73	13.9	4.4	淡青灰色	砂礫を含む	普通	ほぼ完形復元
74	13.7	4.3	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形復元
75	14.0	3.7	青灰色	砂礫を含む	やや軟質	ほぼ完形復元
76	13.9	4.2	暗青灰色	砂粒を含む	普通	完形復元，（12）と対になる
77	13.4	4.4	灰白色	砂礫を含む	軟質	完形復元
78	14.5	4.5	青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形復元
79	14.4	4.2	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形
80	13.6	4.5	暗青灰色	砂粒を若干含む	普通	完形
81	14.8	4.5	暗青灰色	細砂粒を含む，良好	普通	ほぼ完形復元，（31）と対になる

土器番号	口径	器高	色調	胎土	焼成	備考
82	14.3	4.7	青灰色	砂礫を含む	普通	ほぼ完形復元，(40)と対になる
83	14.3	4.1	淡青灰色	砂礫を含む	堅緻	ほぼ完形復元
84	14.2	3.9	青灰色	砂礫を含む	普通	完形
85	13.7	3.8	青灰色	砂粒を含む，良質	堅緻	完形
86	14.3	4.0	淡青灰色	砂粒を含む	普通	完形復元
87	14.1	4.7	青灰色	細砂粒を含む，良質	普通	完形復元
88	14.3	4.6	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形
89	14.1	4.7	淡青灰色	砂粒を含む	やや軟質	完形復元，（29）と対か？
90	14.5	4.4	青灰色	砂粒を含む，良質	堅緻	完形
91	13.9	3.9	暗青灰色	砂礫，雲母を含む	普通	完形復元
92	15.1	3.6	暗青灰色	細砂を含む，良質	堅緻	完形
93	14.5	3.7	青灰色	砂粒を含む	やや軟質	完形
94	14.3	4.4	暗青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形復元
95	13.8	5.1	淡青灰色	砂礫を含む	普通	完形，（2）と対になる
96	14.1	4.1	青灰色	砂礫を含む	普通	完形
97	14.7	3.8	灰白色	砂礫を含む	軟質	完形，（30）と対になる
98	13.7	4.3	青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形
99	13.7	3.9	暗青灰色	砂礫を多く含む	普通	完形
100	14.2	3.8	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形，天部にへら記号
101	13.3	4.1	淡青灰色	砂礫を含む	普通	完形復元
102	13.8	3.9	灰白色	砂礫を含む	軟質	完形復元
103	14.0	4.2	淡青灰色	砂粒を含む	普通	ほぼ完形復元
104	13.7	3.9	淡青灰色	砂粒を含む	普通	完形，（19）と対になる
105	14.1	4.5	青灰色	砂粒を含む	普通	完形復元（35）と対になる，へら記号
106	14.2	3.5	青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形
107	11.0	3.3	青灰色	砂粒を含む，良質	普通	ほぼ完形復元
108	10.7	3.3	青灰色	砂粒を含む，良質	普通	完形

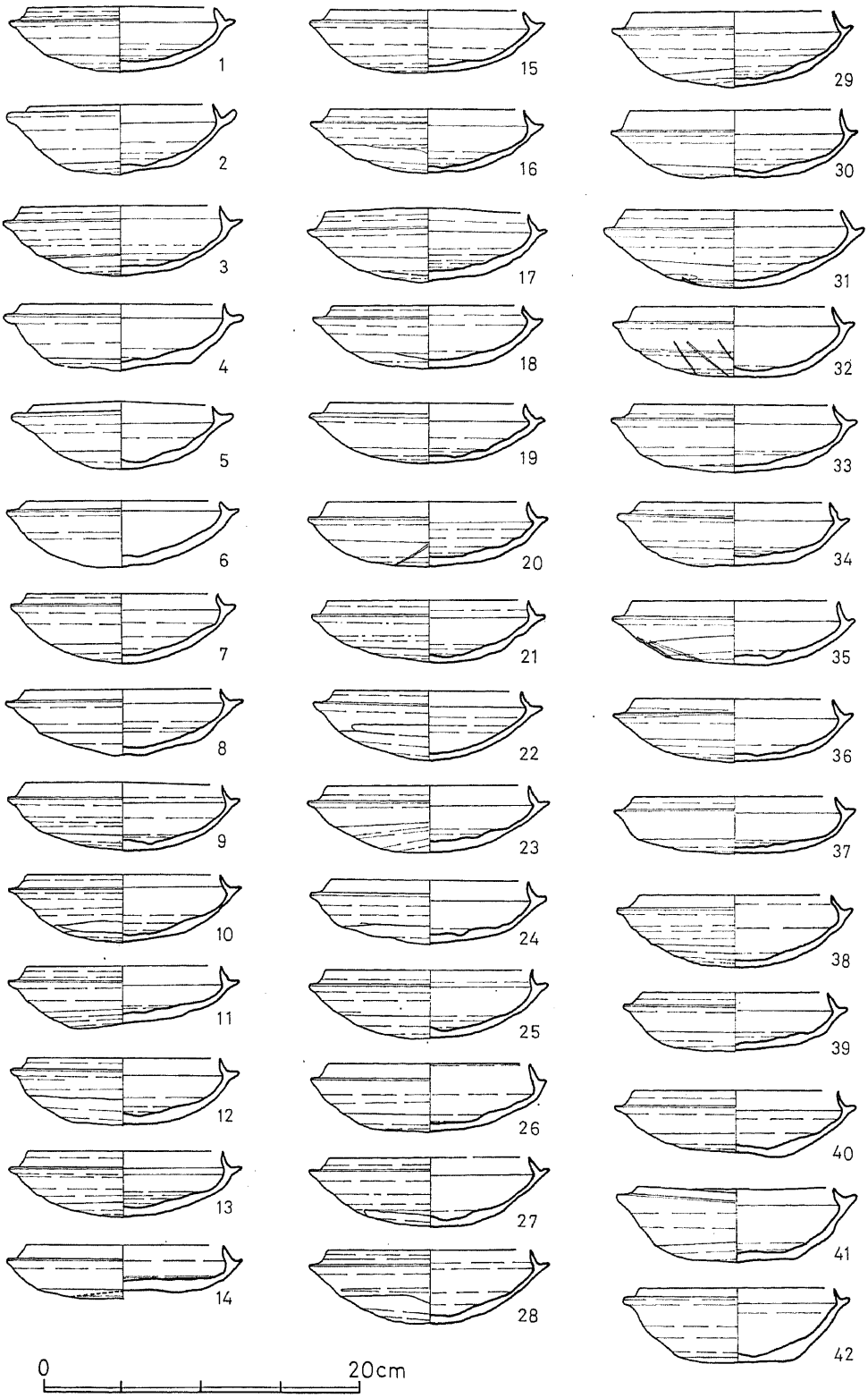
は内側に低く斜傾して段をもつ。口縁部およびへら削りの状況から本古墳出土の坏の中では古い様相を示す。天部外表に2条のへら描きによる平行沈線が施されている。

(71)器壁が厚く扁平なつくりである。器表全面に灰釉をかぶり黒灰色を呈する。(39)と対になる。(72)

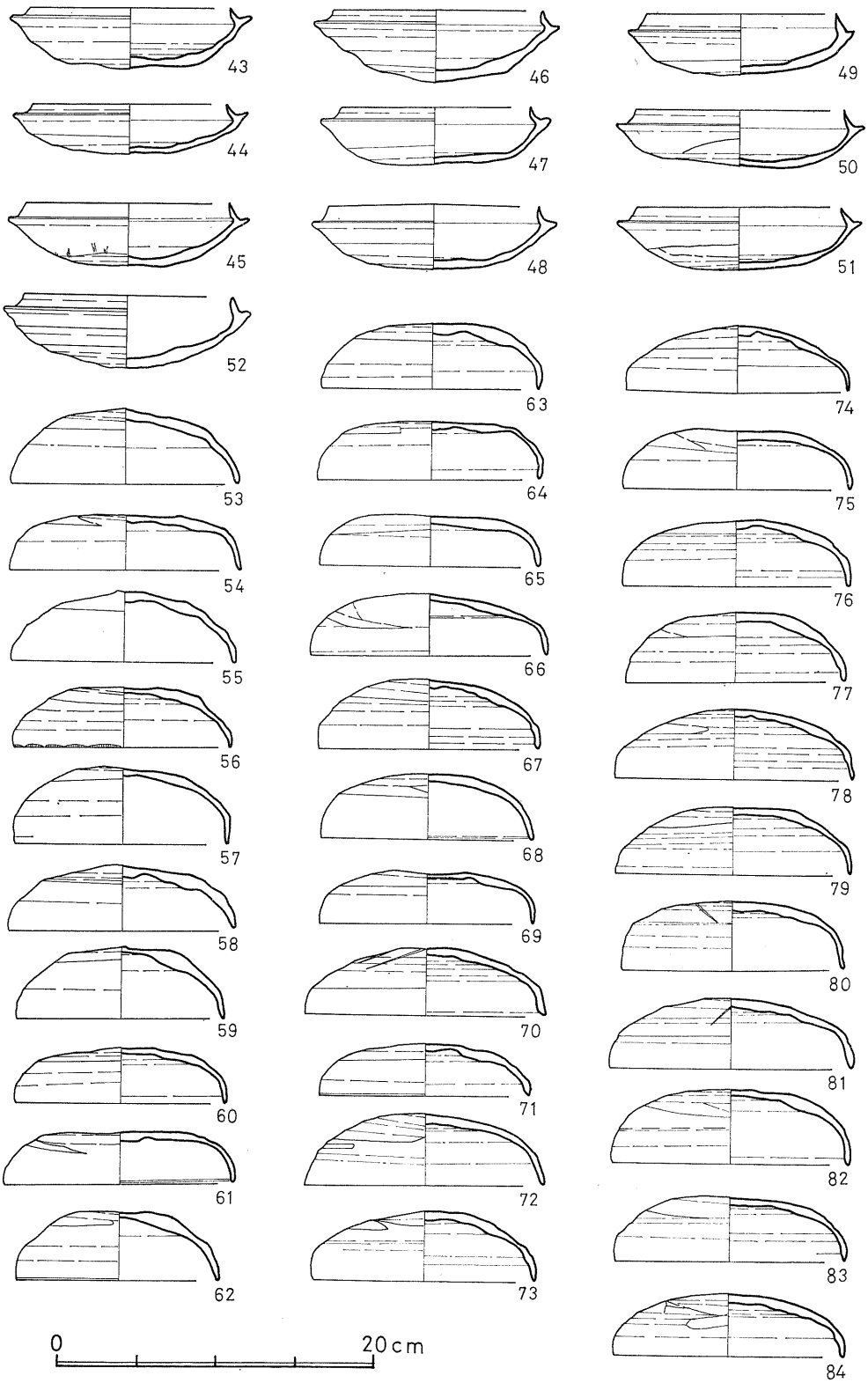
外表体部に弱い稜線をもつが口縁端はまるくおさめている。焼成も堅緻で整形も良好，外表の一部に鉄錆が付着する。(73)口縁部が内湾して立ちあがるため，最大径を体部にもつ。外表全面に灰釉をかぶり灰白色斑がみられる。(74)器表中程の指圧条痕が著しくまた整形も粗雑である。内外面ともに鉄錆が付着している。(75)扁平なつくりである。外表へら削りも２度にわたって施され仕あげのなで調整もていねいで，均整のとれた良品である。(76)内面天部の指圧凹痕が目立つが，なで調整はかなりていねいである。断面は赤褐色を呈し，器表の一部に鉄錆が付着している。(77)焼成は軟質ながら均整のとれた良品(12)と対になる。口縁端部も鋭く仕あげられ，内面のなで調整もていねいである。(78)均整のとれた良品，内面指圧条痕は口縁近くまで認められ，天部では螺線状に繞っている。(79)やや焼歪みをみせるが，なで調整は天部にまで及んでいる。(80)かなりの焼歪みをみせる。器表天部にへら削りの後に，３条のへら描き平行沈線を施している。巾約4.5cm，長さ12.5cmを測る。

(81)胎土はきめ細かく良質，均整のとれた大形の坏で(31)と対になる。器表の天部にへら状施文具による１辺約９cmのX状沈線が施されている。(82)器表体部に稜をもち口縁部はやや内湾して立ちあがる。口縁端外表に斜傾刻文がめぐり，内側は斜傾して段をもち，古い様相を示す。整形調整はやや荒く外表の天部に１辺 8.5cm長のX印沈線が施されている。(40)と対になる。(83)器表の一部に灰釉をかぶり，黒色と灰色の斑文をみせる。内面のなで調整はていねいだが，外表のへら削り部のなでは行なわれていない。(84)器表天部のへら削りはロクロ回転に合せたもののほかに，後から不定方向にさらに削られているが粗雑である。器表の一部に鉄錆が付着する。(85)器壁がやや厚く口縁端外方にへら削り状の痕跡を残す。器表天部はへら削り状の痕跡を残す。器表天部はへら削りの後なでによってその稜線を消している。(86)やや焼歪みをみせるが，均整のとれた良品で(26)と対になる。口縁端外方に斜傾刻印が繞る。(87)器表外面に鉄錆が付着する。(88)口縁部がやや内湾しているが均整のとれた良品，外表天部のへら削りは２回にわたって行なわれている。(89)内面指圧条痕が強く稜をもつ。外面仕あげなでは認められないが均整のとれた良品。(29)と色調や製作技法に共通点が多くセットになる可能性がある。(90)外表天部へら削りの後にはなで調整は施されていない。整形良好である。

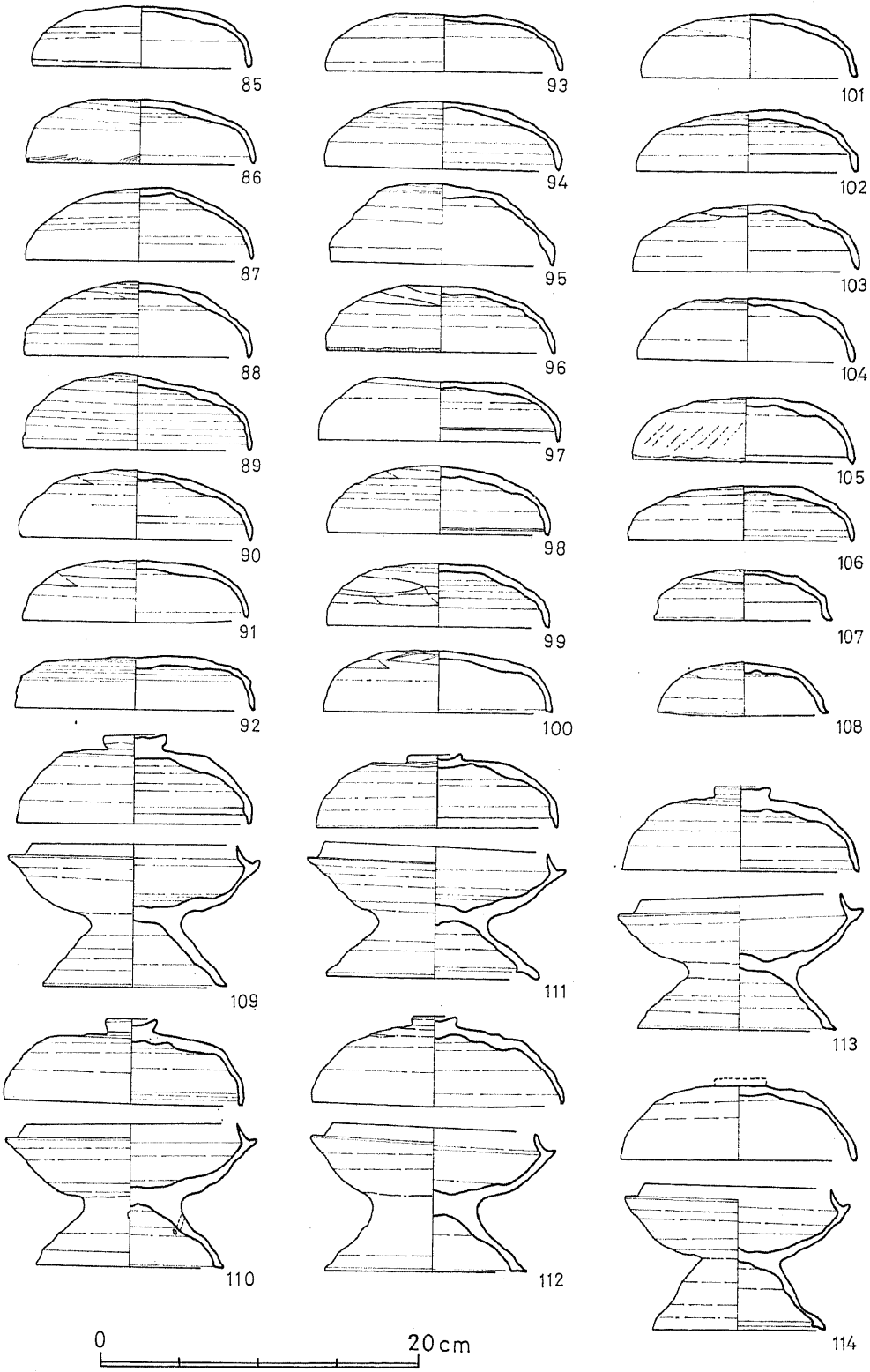
(91)内面天部にスタンプ状圧痕が認められる。外面はへら削りの後全面になで調整され一部に鉄錆が付着する。(92)天部が平らにつくられ扁平な感じを呈する。径15.1cmは本古墳出土坏中最大である。体部外面に明瞭な段をもち，口縁端部も内方に斜傾して，本古墳須恵器の中では最も古い様相を呈する。(93)形態は比較的整っており古い様相を示す。(94)均整のとれた良品，器表全体に灰釉をかぶり，光沢をもった黒斑と灰白色の斑文がみられる。(95)器高 5.1cmは本古墳出土坏中最大で深い椀状を呈するが，整形はやや粗雑である。口縁部は弱い稜をもってやや内湾し最大径は体部にある。指圧条痕が目立ち焼成時の気泡によるコブ状ふくらみが13か所もみられ，(2)と対になる。(96)整形，焼成とも良好，口縁端外辺をへら状のもので斜めに削り，そこに斜行刻文を繞らせている。(97)口縁内側に１条の段をもち均整のとれたつくりである。内面天部に青海波状のスタンプ痕を残し(30)と対になる。(98)やや焼歪みをみせるが元は均整のとれたつくりと思われる。外表２か所鉄錆が付着する。(99)内面天部に何かを押しつけたような跡を残す。外表へら削り等の場合のあてに使用したものかも知れない。外面天部のへら削りは２回施されている。(100)器壁のやや厚いつくりである。器表天部に長さ約11cmにおよぶ２条のへら描き平行沈線と，火走り状の条痕が認められる。



第98図　岩田第14号墳出土須恵器実測図(1)



第99図　岩田第14号墳出土須恵器実測図(2)



第100図　岩田第14号墳出土須恵器実測図(3)

(101) 天部に焼歪みをみせ整形仕あげはやや荒い。内面天部に圧痕と鉄錆の付着が若干認められる。(102) 均整のとれた良品で内面天部に圧痕がある。外面へら削りあとのなで調整はない。(103)特記事項なし。(104)内面天部にスタンプ状の圧痕をかなり広い範囲に残す。鉄錆の付着が著しく(19)と対になる。(105) やや器壁の厚いつくりである。焼成時灰釉をかぶり一部に光沢のある黒斑と灰白色の斑文がある。外表天部に約8㎝長の2条のへら描き平行沈線が施され，(35)と対になる。(106)やや扁平なつくりで器壁も厚いが整形および焼成とも良好である。(107)径11.7㎝，器高3.3㎝と小形，口縁端部を外方へやや拡張し短頸直口坩の蓋の可能性が強い。(108)前述の(107)とほぼ同巧手法のつくりである。外表の一部に鉄錆が付着する。

3. 台付有蓋坏（図100・図版62）

検出した総個体数は7個体分であるが，実測可能のものは6個体である。いずれも玄室奥壁部の一括須恵器群の中から破片となって遊離検出され，完形またはそれに近く接合復元できた。いずれも低平な円形つまみのある蓋に，ラッパ状の低脚のついた，ほぼ同巧同大の台付有蓋坏である。全器高12.7㎝～13.6㎝，蓋径14.8㎝～15.1㎝，同高5.2㎝～5.6㎝，坏部最大径15.2㎝～16.0㎝，台底部径11.7㎝～12.8㎝，身部高8.3㎝～8.9㎝と計測値にややばらつきをみせている。

比較的低温で焼かれているためか焼成は軟質で，本来は淡青灰色のものが煤や灰釉を受けて，器表が黒灰色や灰白色に変色したり，荒れてざらっとした感じになっている。しかし蓋をした状態で幾組づつかを重ね焼きしたらしく，坏部や脚部内面の遺存はよく仕あげのなで調整跡等もよくとどめ，各蓋天部外表には脚底の径に見合う径約11㎝程度の円形な灰をかぶらない面を残している。胎土はおもにきめの細かい精選された粘土を用い，1㎜～2㎜大の砂粒を混入しているが，稀に5㎜大ほどの小礫を含むものがある。整形仕あげは蓋の天部と坏の底部外表はへら削り後の横なで，その他は内外面とも横なで調整である。特に接合部となる蓋のつまみと坏底部では，指圧を加えてのなでがていねいである。施文は(110)の脚部に小円孔3個が穿たれている他はすべて無文である。先に報告した岩田第1号墳および同第8号墳からも，ほぼ同形の台付有蓋坏が出土したが，これらは同心円状の描き目が施されているのと対象的である。

(109)蓋の天部外表は径約9.3㎝をへら削りで平滑に整え，その中央に上部が凹レンズ状に窪んだ扁平なつまみが貼りつけられ重ね焼きの痕跡を残す。坏部の立ちあがりは器壁も薄くシャープだが，かなりそりをもって内傾し，受部も外方に高く斜傾しているので，その比高は0.7㎝と低い。脚と坏部との接合部の径は5.8㎝を測り，脚底面外縁は巾1㎝のへら削りによるシャープな平滑面をもつ。以後の各個体においてもほぼ同巧である。(110) 蓋の天部外表の仕あげ調整はやや粗雑，つまみもその中心からかなりずれ，天部に重ね焼の円形斑を残す。脚部中間に内面から貫孔された小円孔が3方向に穿たれている。小円孔の径は約0.4㎝を測るが，そのうち1個だけが貫通し，他の2孔は内側から突き出された粘土塊がそのまま孔をふさいだ形になっている。おそらく本土器の仕あげ調整後に貫孔されたものと思われる。(111) 蓋の天部外表に重ね焼きの斑文を残す。つまみの貼りつけは雑である。坏部の整形は均整のとれた良品で，脚底部のなで調整もていねいで鋭い稜をもつ。(112)蓋のつまみを接合するときに，天部整形のへら削りの上に径約8.3㎝程度の，粘土の貼

表47　岩田第14号墳出土台付有蓋坏　　（単位cm）

土器番号	全器高	蓋部				台付坏部				
		口径	高さ	つまみ径	つまみ高	口径	最大径	台底部径	台部高	高さ
109	13.6	14.8	5.5	4.1	0.9	13.2	16.0	12.0	4.6	8.7
110	13.5	15.1	5.3	3.5	0.9	13.6	16.0	11.7	4.4	8.8
111	13.3	14.8	5.6	3.4	0.6	13.6	16.0	12.8	4.1	8.3
112	13.6	15.2	5.6	2.9	0.7	13.7	15.3	12.6	4.7	9.0
113	12.7	15.0	5.2	3.7	0.8	13.0	15.7	12.7	4.2	8.5
114	(12.8)	15.0	(4.8)	?	?	12.5	15.2	12.3	4.4	8.9

土器番号	蓋身別	色調		胎土	焼成	備考
		内面	外面			
109	蓋	淡青灰色	淡紫褐色	主に砂粒，稀に5㎜大の礫を含む	軟質，比較的良好	ほぼ完形復元
	身	灰白色	黒灰色	1～2㎜大の砂粒を含む	軟質，やや不良	ほぼ完形復元
110	蓋	淡赤褐色	淡青灰色	主に砂粒，稀に5㎜大の礫を含む	軟質，やや不良	ほぼ完形復元
	身	青灰色	紫灰色	2㎜大までの砂粒を含む	軟質，良好	ほぼ完形復元，脚に3透孔
111	蓋	青灰色	淡紫褐色	細砂粒を含む	軟質，比較的良好	完形復元
	身	灰白色	淡黒灰色	主に砂粒，稀に8㎜大の礫を含む	軟質，やや不良	ほぼ完形復元
112	蓋	淡青灰色	青灰色	細砂粒，稀に4㎜大の礫を含む	軟質，普通	ほぼ完形復元
	身	淡青灰色	淡紫灰色	1～2㎜大までの砂粒を含む	軟質，やや不良	完形復元
113	蓋	青灰色	淡紫灰色	1～2㎜大までの砂粒を含む	軟質，良好	完形復元
	身	灰色	淡紫灰色	1㎝大の礫を含み不良	軟質，やや不良	ほぼ完形復元
114	蓋	灰白色	灰白色	1㎝大の礫を若干含む	軟質，不良	つまみ欠損ほぼ完形復元
	身	淡青灰色	淡紫褐色	1～2㎜大までの砂粒を含む	軟質，普通	ほぼ完形復元

りつけとなでが行なわれているが，かなり粗雑でつまみの径も2.9㎝と他のものより小さい。(113) 蓋の天部外表のへら削りの後を明瞭に残す。脚内面上端部にかすかにへら先状のもので X 形の沈線が1か所施されている。(114) 蓋部のつまみを欠損しているが，焼成前または焼成時の欠損と思われ，脱落面上にも灰釉をかぶっている。この個体だけが蓋部に重ね焼きの痕跡をとどめない。

4.　高坏（図101・図版63）

計15個体分を検出したが図示できるのは12個体である。内7個体は奥壁部一括土器群で発見したが，他の5個体は玄室内木棺床下などに敷き込まれた形で遊離散在していた。いずれも破損して個体によってはかなり広い範囲に散っていたが，後の整理によって，完形またはそれに近く接合復元

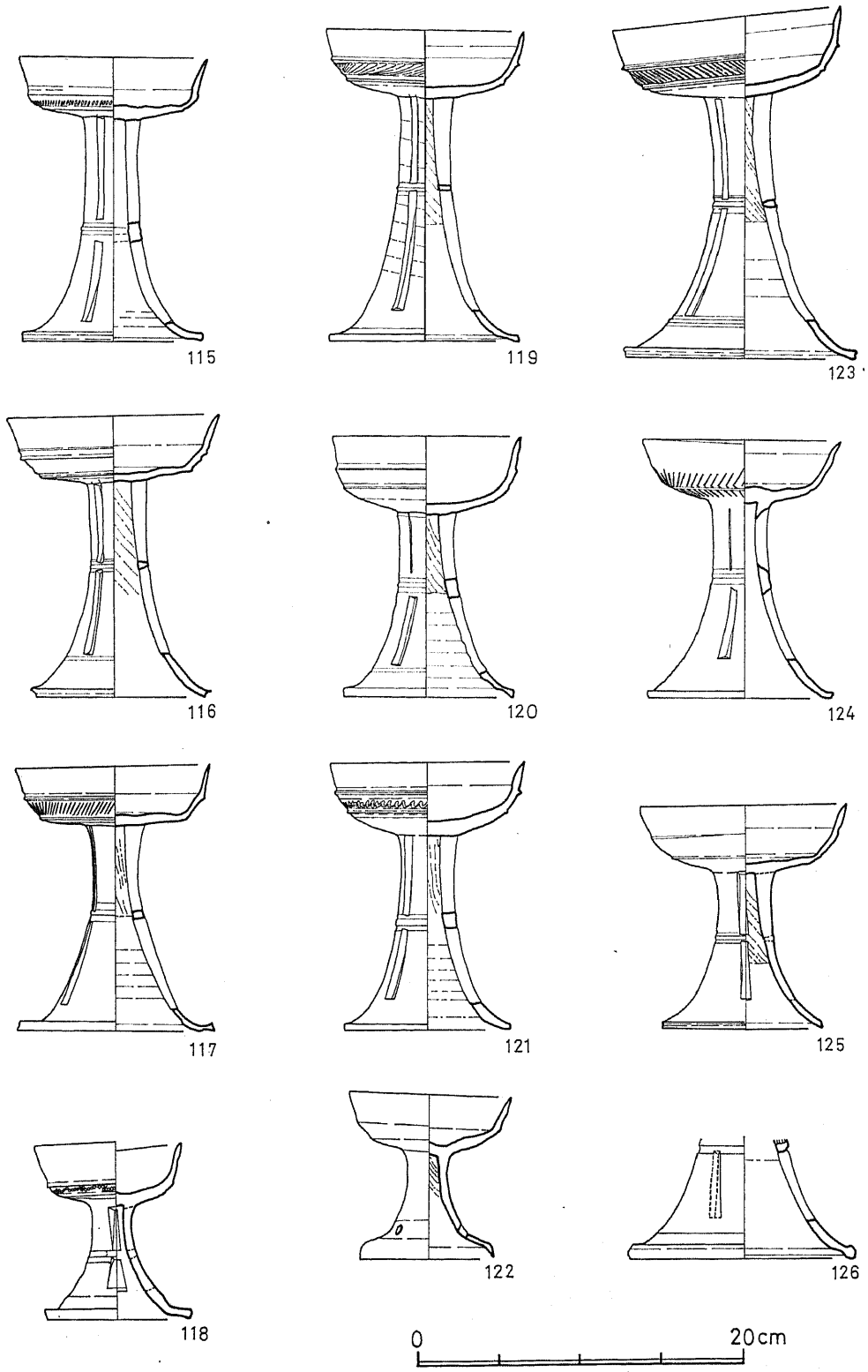
表48　岩田第14号墳出土須恵器高坏　　（単位cm）

土器番号	口　径	脚裾径	脚　高	全器高	色　調	胎　　土	焼　成	備　　考
115	11.3	11.4	13.8	17.5	灰白色	細砂粒を含む．良好	堅　緻	完形復元，２段３方透孔
116	13.3	10.5	13.4	17.4	淡青灰色	砂礫を含む	普　通	ほぼ完形復元，２段３方透孔
117	12.2	12.4	12.5	16.5	青灰色	砂礫を含む	普　通	ほぼ完形復元，２段３方透孔
118	9.6	9.1	7.0	11.1	淡青灰色	砂粒を含む	堅　緻	完形復元，２段２方透孔
119	12.3	11.8	15.0	19.3	青灰色	細砂を含む，良好	堅　緻	ほぼ完形復元，２段３方透孔
120	11.5	10.2	11.4	16.1	青灰色	砂粒を含む	普　通	完形復元，１段３小円孔
121	11.8	10.1	12.0	16.6	灰　色	砂粒を少し含む	堅　緻	完形復元，２段３方透孔
122	10.0	8.1	6.6	10.4	青灰色	砂礫を多く含む	普　通	ほぼ完形復元，２段３方透孔
123	14.1	14.2	16.2	21.9	暗青灰色	細砂粒を含む，良好	堅　緻	ほぼ完形復元，２段３方透孔
124	12.3	11.6	12.3	16.0	青灰色	細砂粒を含む	堅　緻	完形復元，２段３方透孔
125	12.6	10.2	9.5	13.9	青灰色	細砂粒を含む	普　通	完形復元，２段３方透孔
126	?	14.3	?	?	暗青灰色	細砂粒を含む	堅　緻	脚部下半断片

できた。坏部径に較べて脚の細長い長脚高坏が多く，坏部下半に２条の凹線か稜線を繞らせ，その間に文様を施し，脚柱中央部に２条の凹線と３方向２段の長方形透孔を穿ったものが多い。

総体的に胎土のきめも細かく整形および焼成も良好である。整形調整もなでがていねいで，へら削りなどの痕跡はほとんど消去されている。口径10.0cm～14.1cm，器高10.4cm～21.9cmとかなり個体差をみせるが，口径約12.5cm，器高約16cm程度のものが主体である。以後の個別概述の中で脚柱部の透孔は，特別に記述のないものはすべて脚柱中央部に２条の凹線と，その上下に２段３方向への長方形透孔である。

（115）第１号棺と第４号棺の間整地面下から出土，坏下半に２条の稜をもちその間に櫛状施文具による斜傾刺突帯を繞らせている。（116）奥壁部出土，坏下半に２条の鋭い稜を繞らせているがその他は無文である。脚部は脚中央２条凹線とその上下２段３方向長方形透孔であるが，裾部にもう１条の凹線が繞らされている。透孔は脚を坏部に接合した後の貫孔らしく，坏底部に鋭いへら傷が残り，脚内面は貫孔の際の粘土の付着やしぼり目を，上段部までは消し去っていない。（117）奥壁部出土坏下半に突出した鋭い２条の稜を繞らせ，その間にへら描きの斜行沈線文帯を施している。脚袖端はやや拡張した稜をもつ。（118）第２号棺床下出下の小形品である。坏下半に１条の稜とその下方に櫛状施文具による斜行刺突文帯を繞らせている。脚柱中央に２条の凹線とその上下に２段２方向の長方形透孔をもつ。したがって実測図断面の透孔は投影図である。（119）奥壁部出土，坏下半に鋭く突出した２条の稜とその間にへら削り状の斜行文帯を繞らしている。（120）奥壁部出土，坏下半に２条の段状稜線が繞らされているがその他は無文である。脚柱部は２条凹線２段３方向透孔であるが，上段の透孔は一応内部まで通っているものの，へらで直線状に切り込まれただけ



第101図　岩田第14号墳出土須恵器実測図(4)

で，本来の２段透孔への過渡的な様相を示す。

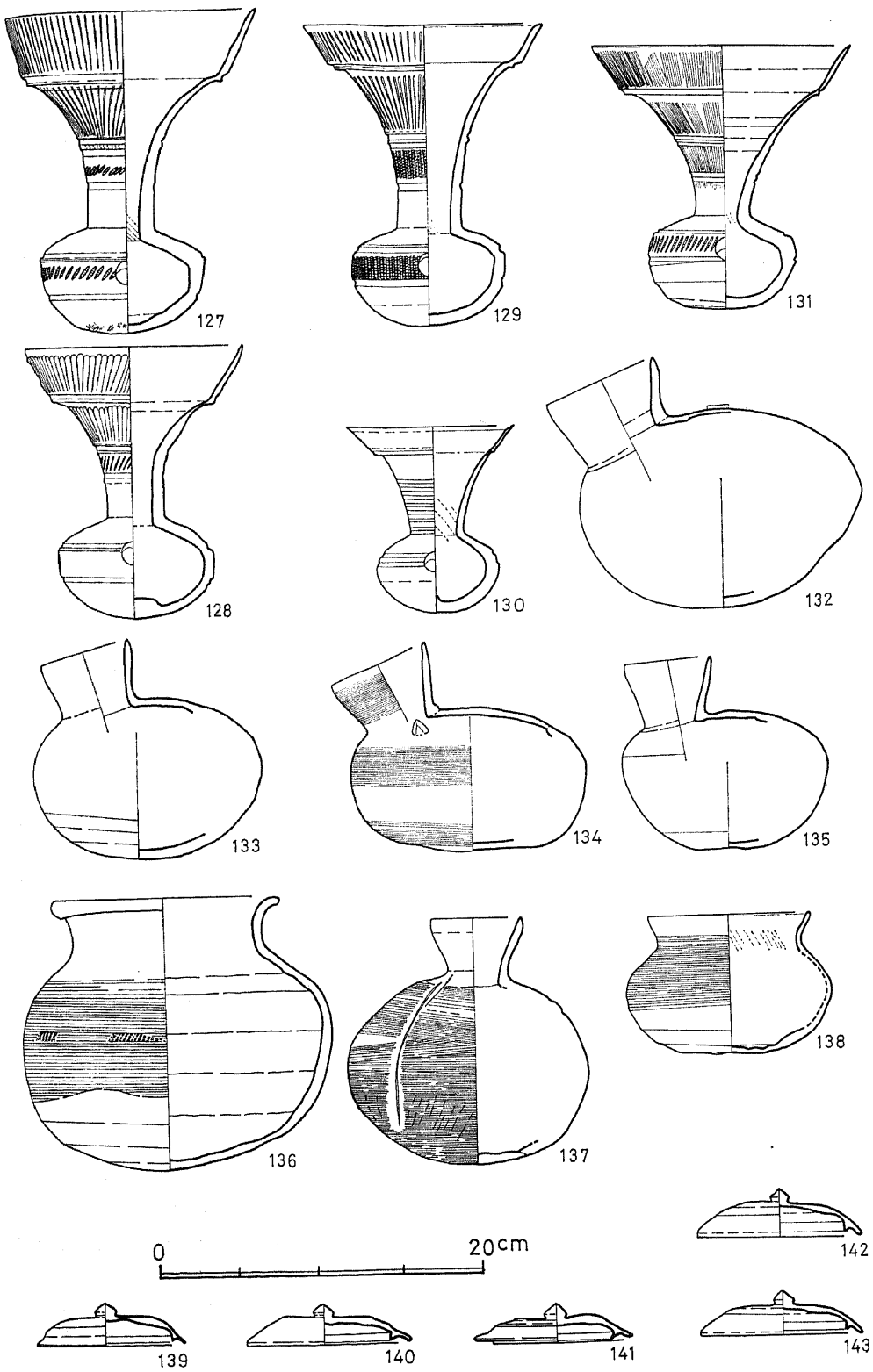
（121）第４号棺下出土，坏下半に段状の２条稜線とその間に櫛描き波状文帯が繞っている。脚内面上半にしぼり目の跡を残し，器表全面に灰釉をかぶって変色している。（122）奥壁部出土の小形品である。脚裾部は内湾させておさめ，脚柱と脚裾の境に３方向に小円孔がある他は無文である。（123）奥壁部出土，器高21.9㎝は本古墳出土高坏中最大である。坏部にやや焼歪みをみせ器表全面に灰釉をかぶっている。坏下半に鋭い２条の稜とその間にへら描きによる斜行沈線文帯を繞らせているが，下段の稜線の上下には各１条の凹線が施されている。（124）奥壁部出土，坏下半に１条の凹線と，その上下に方向が逆になるへら描きの斜行沈線文帯を繞らせている。脚部は２条凹線とその上下２段３方向透孔であるが，上段は直線状で(120)の場合と同様である。(125)第６号棺の南羨道床面出土，坏下半に２条の弱い稜線を繞らしているがその他は無文である。脚部は２条凹線とその上下２段２方向の長方形透孔である。（126）第１号棺下出土の脚底部断片のみである。全容は不明だが，脚底部径10.2㎝，その形状から(117)等とほぼ同巧同大のものと推察される。

5. 瓦泉（図102・図版64）

計６個体を検出したが実測可能のものは５個体である。いずれも奥壁部から玄室北西部の第１号棺床下にかけての遊離発見である。肩部の張った小形の体部に口縁部の大きく開く形式のものである。体部器胴に２条の凹線を繞らせ，その間に櫛状の施文具による刺突文やへら描き文様を施し，頸部はラッパ状に外反して，口縁部との境に鋭い稜をもち，口縁はさらに外傾して大きく広がっている。頸部から口縁部にかけては数条の凹線によって区画され，その間にもへら描きや櫛状施文具による文様が施されているものが多い。胎土は精選された良質の粘土を用い，整形および焼成もともに良好である。器高11.7㎝～20.0㎝，口縁径10.0㎝～16.6㎝と大小の巾はかなりある。

（127）器胴肩部に凹線と稜をもち下半に１条の凹線を繞らせ，その間に円孔１個と櫛状施文具による斜傾刺突文が施されている。口縁部と頸部の間は１条の凹線と鋭い稜をもち，頸部は上に２条，下に１条の凹線によって３区分されている。口縁部は縦にへら削り状の平行文様を施した後，上方口縁端部は横なでによって消している。頸部上段は斜傾へら削り文，中段は斜傾櫛状刺突文，そして最下段は無文である。（128）器胴肩部に凹線と稜をもち，下半はへら削りによる稜線で巾約1.6㎝の垂直面をつくり，そこにへら描きによる斜行平行沈線文を施している。円孔は上方の凹線を切って貫孔されている。口縁部と頸部の境は段状の鋭い稜線によって区画され，さらに頸部は弱い各１条の凹線２本によって上下に３区分されている。口縁部および頸部上段は斜傾したへら削り状の文様，中段部はへら描きによる斜傾沈線が施文され，最下段は無文である。いずれの施文も粗雑で荒い。（129）器胴肩部に深い凹線と鋭い稜をもち，下半にも深い凹線が繞らされて器胴を３区分して，その間に小円孔１と櫛状施文具による縦方向への平行刺突文が密に施されている。口縁部と頸部は１条の深い凹線と鋭い稜線によって区画され，さらに頸部は上に２条，下に１条の凹線を繞らせて３区分されている。口縁部と頸部上段はへら削り状の斜傾平行線，中段は櫛状刺突文による垂直平行文によってともに密に施文され，下段部は無文である。

（130）器高11.7㎝と小形品である。器胴肩部に２条の凹線が繞らされているが，稜線はともなわ



第102 図 岩 田 第 14 号 墳 出 土 須 恵 器 実 測 図 (5)

表49　岩田第14号墳出土須恵器瑞

（単位cm）

土器番号	器高	胴部高	口縁径	くびれ径	胴部径	色調	胎土	焼成	備考
127	20.0	6.5	16.6	4.1	10.3	暗青灰色	細砂粒を含む，良好	堅緻	ほぼ完形復元
128	17.0	6.4	14.0	3.4	9.9	暗青灰色	砂粒を含む，良好	堅緻	ほぼ完形復元
129	18.8	6.2	14.5	3.9	9.2	青灰色	細砂粒を含む，良好	堅緻	完形
130	11.7	4.9	10.0	3.4	7.7	青灰色	砂粒を含む，良好	堅緻	ほぼ完形復元
131	16.4	6.3	16.3	3.4	9.1	黒灰色	砂粒を含を，良好	堅緻	ほぼ完形

ない。円孔は２条の凹線にまたがってその中央に貫孔されている。口縁部と頸部は１条の凹線と鋭い稜によって区画されている。頸部全域に螺線状の弱い描き目が認められる他は無文である。(131)器胴部に巾約 1.6cmの間隔をおいて１条の凹線を繞らせ，その間に小円孔１と櫛状施文具による斜傾刺突文が施されているが，前述のものほど肩部の張りは示さない。口縁部と頸部は１条の凹線と鋭い稜線によって区画され，口縁部は巾約 1.2cmを単位とする櫛状施文具による縦向きの掃き目が施されている。頸部は口縁部と同様施文具による縦向きの掃き目を施した後，その上から上下に各２条の凹線を繞らせて３区分をしている。したがって頸部の文様は凹線によって中間を切られた形状を呈している。施文およびなで等の仕あげ調整はていねいである。

6．平　瓶（図102・図版67）

計５個体分を検出したが実測可能のものは４個体である。いずれも玄室内二次的床面整地面下よりの遊離検出で，実測不能の小断片１の他はすべて完形である。丸味をもった均整のとれた器胴の上部片隅に，上部のやや開いた短頸の口縁部をつけたつくりで，(134) の描き目，(132)と(134)の天部に貼りつけられた各一対の小突起のほかは無文である。胎土，整形，焼成はいずれもていねいかつ良好である。

(132) 玄室第５号棺床下から出土，器胴下半にへら削りの痕跡がかすかに認められる他は，すべてなでによるていねいな仕あげ調整が施されている。器胴天部の口縁近くに，径約１cmの扁平な円形粘土板２個が，約７cmの距離をおいて口縁中心線を対象軸にした形で，対をなして貼りつけられているほかは無文である。器表天部の一部に灰緑色の自然釉がかかり，部分的に不定形な小粘土塊が３か所に付着している。(133) 玄室第２号棺床下から出土した。器胴下半部のへら削り痕のほかはすべてていねいななで調整で，全体として丸味の強い均整のとれたつくりである。器胴上半の外表と，口縁部内側一面に黄緑色の光沢をもった自然釉がかかり，一部では器胴下半に流着している。器胴底部に焼成時に癒着した粘土塊が１か所付着している。(134) 玄室第１号棺と第５号棺の間の整地面下より出土した。器胴底面が焼歪みかあるいは整形時の意識的なものかは不明ながらやや扁平となり，全体的にもやや扁平な形状を呈する。器胴天部外表に中心部から同心円状の描き目が広がり，器胴部は平行描き目となって底部にまでおよび，口縁部外表にも同様に施されている。描き目の密度は１cmに14～15条である。器胴に口頸部をはさむように約８cmの間隔で１対の，つ

表50 岩田第14号墳出土須恵器平瓶 (単位cm)

土器番号	器高	胴部高	口縁径	くびれ径	胴部最大径	色調	胎土	焼成	備考
132	15.6	12.5	7.4	5.9	17.7	淡青灰色	細砂粒を含み良好	堅緻	完形
133	13.6	9.9	5.9	4.6	14.5	青灰色	砂粒を含む	普通	完形
134	13.1	9.0	6.2	4.3	14.3	青灰色	細砂粒を含み良好	堅緻	完形
135	12.1	8.7	5.5	4.0	12.8	淡青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形

表51 岩田第14号墳出土須恵器提瓶 (単位cm)

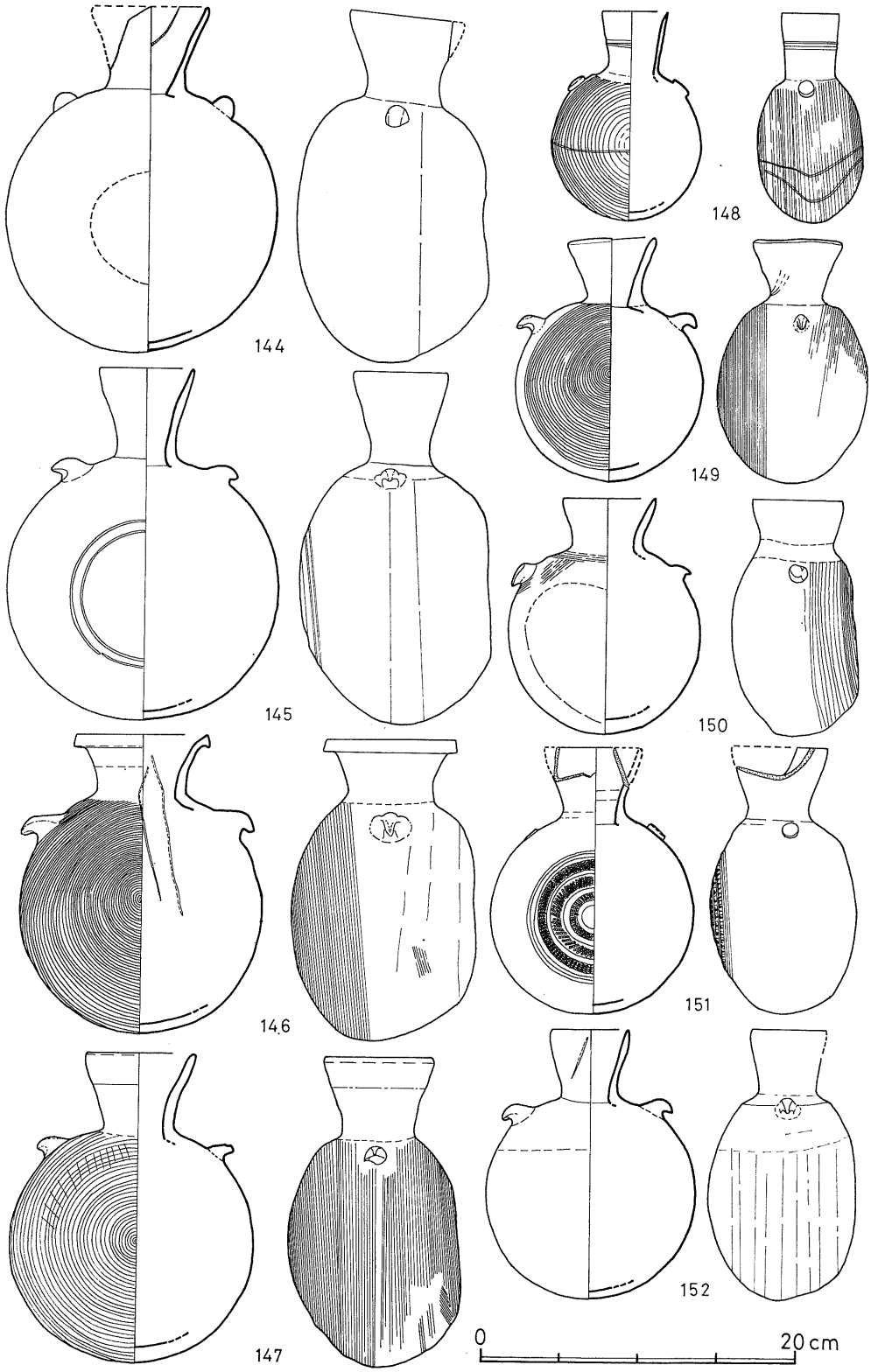
土器番号	全器高	口縁径	最大径	最大厚	頸部径	色調	胎土	焼成	備考
144	22.0	7.0	17.0	11.7	4.4	暗灰色	砂礫を含む	軟質	ほぼ完形復元
145	22.1	5.9	17.1	12.8	3.6	青灰色～灰褐色	砂礫を含む，良好	堅緻	完形
146	18.7	8.3	15.4	11.6	5.3	暗青灰色～灰白色	砂粒を含む，良好	堅緻	完形
147	19.3	7.1	15.3	10.6	4.4	青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形
148	13.1	3.7	9.4	6.6	3.1	青灰色	細砂粒を含む	普通	完形
149	15.4	4.4	11.8	9.4	3.2	淡青灰色	砂礫を含む	やや軟質	完形
150	14.6	5.8	12.0	7.7	4.6	青灰色	砂礫を含む	普通	完形
151	16.3	(6.0)	12.6	9.1	3.7	暗青灰色	砂粒を含む	普通	口縁一部欠損
152	17.1	5.0	13.1	9.2	3.5	暗青灰色	細砂を含む，良質	堅緻	完形
153	25.4	9.5	21.3	15.3	5.2	青灰色	細砂粒を含む，良質	普通	完形復元
154	24.4	8.9	20.1	15.5	5.6	青灰色	砂礫を含む	堅緻	完形

( ) 数字は推定復元値を示す

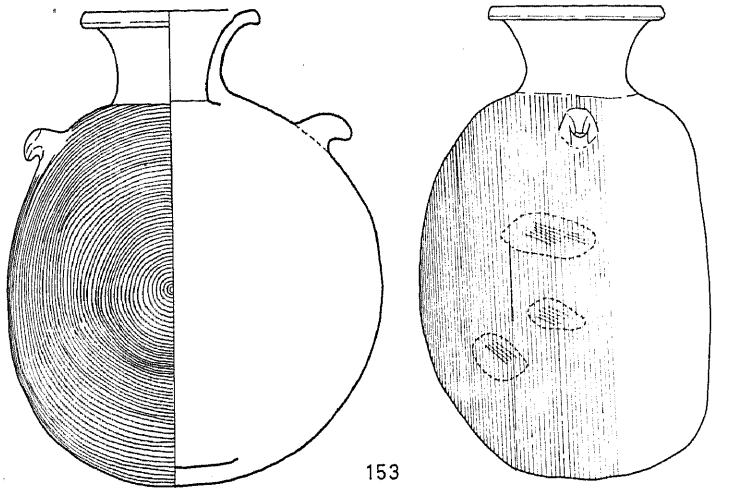
まみ状の小粘土塊が貼りつけられている。形状はやや不整形であるが底面径約1.2cm，高さ約0.9cmの円錐状を呈している。(135) 第6号棺南小口外方の羨道部床面に遊離検出された。無文のやや小形の平瓶である。器胴肩部が若干張った形状を呈し，内面天部に円板状粘土板を貼りつけた痕跡を残す。器胴下半外面にへら跡を残すほかは，すべてなでによる仕あげ調整である。

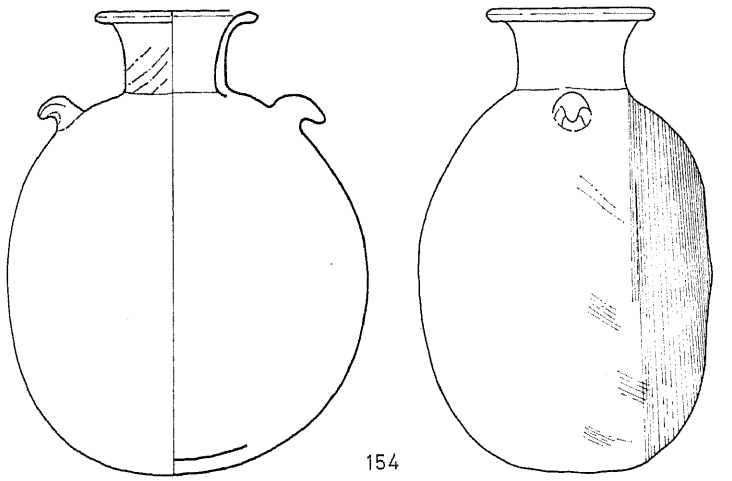
7. 提瓶 (103, 104・図版66, 67)

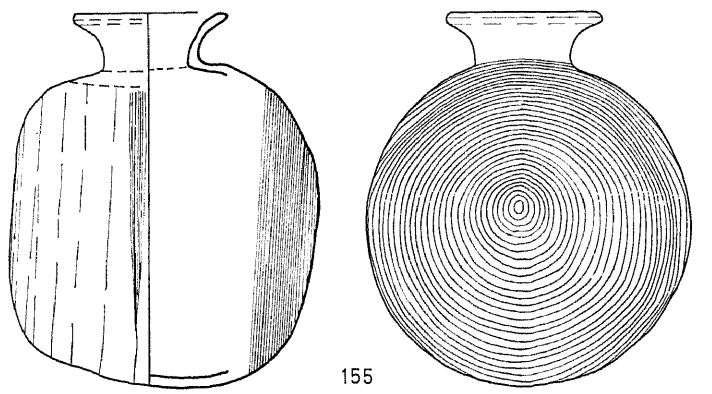
計11個体を検出したが内8個体は完形を保ち，破砕していた3個体もほぼ完形に接合復元できた。奥壁から羨門部にいたる石室床面全域から分散出土した。器高13.1cmの小形品から同25.4cmの大形品までさまざまである。器胴の一面を平らにしたものと，両面とも丸味をもたせたものの2種類があり，いずれも側面の肩部に一対の耳を有する。耳は鉤形が多く，後の個体別記述で特に指適しないものはすべてこの形式である。施文は刺突文1例，無文3例の他は器胴部に同心円状の描き目をもつが，片面のみに施されたものと，両面に施されたものとがある。製作手法は器胴面の一方を底にして壺形の素形をつくり，上部の口部を粘土円板で密閉し，側面に円孔をあけて短頸の口縁

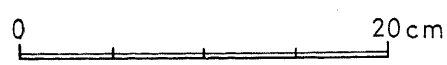


第103図　岩田第14号墳出土須恵器実測図(6)









第104図　岩田第14号墳出土須恵器実測図 (7)

部を接合させたつくりである。ここでは記述の便宜上器胴底面となる面を裏面，円板貼りつけ面を表面として表記する。

(144) 玄室袖部床面に一括破砕片として発見した。裏面は径約8㎝の平坦面，側面にかけてへら削りと叩き目を残す。整形仕あげは内外面ともなで調整され無文である。表面中央部に径7.4㎝の粘土円板を貼りつけた痕跡が明瞭に残る。側面肩部の耳は丸味をもった円錘形である，(145)第1号棺と西側壁の間から出土した。裏面中央に径8.7㎝の平坦面をもち，側面から表面の一部にかけてへら削り痕を残す。表面中央部に粘土円板を貼付した際の整形痕と，その外縁部に段状の2条の弱い稜線がある他は無文である。器表内外面のなで調整は丹念である。

(146) 奥壁一括土器群から出土，裏面から側面下半にかけてのへら削り痕はやや粗雑である。表面のなで調整は良好でその上から，同心円状の描き目が巾1㎝に10条の割りで密に施されている。円板貼りつけの痕跡は消去されて不明である。口頸は外反し口縁部は拡張

されて上下に鋭い稜をもつ。なお器胴表面に2条の平行へら記号があるが，実測図では投影図示した。(147) 第1号棺南小口床下から出土，両面とも丸く整形され，同心円状の描き目が施され，その密度は巾1cmに5～6条である。側面にへら削りと指圧条痕，表面の一部に粘土円板を貼りつける際の叩き目の痕跡を残す。(148) 羨門部西側壁沿いの床面出土，本古墳出土提瓶中最小である。器胴は両面とも丸くつくられ，側面も含めて器表全面に描き目が施されている。表面中央部に径約4.8cmの粘土円板の貼りつけ痕を残す。側面肩部の耳は底平な円板状，頸部中程に2条の凹線が繞らされている。(149) 第1号棺と西側壁間の床面下出土，器胴は両面とも丸くふくらみ，同心円状の描き目が施されているが側面には及んでいない。描き目は表面は巾1cmに10条と密で整然としているが裏面は1cm巾に5～6条と粗く，整形仕あげも荒い。口縁部はかなりの焼歪みをみせる。

(150) 第3号棺床下出土，裏面中央は径約8cmの平坦面をもち，側面下半にかけて描き目が施されているが，表面は仕あげ調整もやや粗雑で無文である。(151) 羨道入り口東側壁部の床面で大形壺とともに出土した。器胴両面とも丸くふくらむが，裏面の整形は粗雑のうえに無文である。表面は中心部に径8.5cmの間に同心円状の凹線6条を繞らせ，その内3帯に櫛状施文具による刺突文を施している。裏面から側面へかけてのへら削り痕は顕著で，側面肩部の耳は低平な円板形である。(152) 第5号棺床下出土，器胴両面とも丸味のあるつくりである。裏面から側面にかけてのへら削り痕は顕著に残るが，表面のなで調整はていねいで全面無文である。(153) 第5号棺北小口床面下に一括破砕片となって出土，器高25.4cmは本古墳出土提瓶中最大である。裏面中央部に径14.2cmの平坦面をもち，側面下半にかけてのへら削り痕は顕著で，側面には板目状の叩き跡の窪みが全域に見られ，表面中央の粘土円板の径は 8.5cmを測る。表面はなで調整の上から螺旋状の描き目が整然と施され，その密度は巾1cmに10条である。口頸は外反し口縁部も拡張されているが，稜はもたず丸くおさめている。(154) 奥壁部一括土器群出土の大形である。裏面から側面にかけてへら削りおよび叩き目の痕跡を僅かに残すが，内外面ともなで調整が施され，底面にのみ巾1cmに7～8条の同心円状の描き目が施されている。口頸部の形状は(153)と同巧である。

8. 横瓶 (図104・図版68)

第4号棺と西側壁間の掘り方底面から出土した完形1個体のみの検出である。通常に見る横瓶に較べてやや寸詰りの形状を呈する。一方の小口部を下にして，やや肩の張った筒形の壺体部をつくり，円板状の粘土板で口部を密閉した後，側面中央部に現在の頸部に合せた円孔をあけ，口頸部を接合したつくりで，基本的には前述の提瓶と同巧手法である。器胴部は製作時の底面となった小口と，側面中央付近まではへら削りおよび板状の叩き締めの後，なで調整が施され，円板貼りつけ部の小口部から側面中央までは，なで調整の後に板目状木口部を施文具とした，同心円状の描き目が施され，その密度は巾1cmに4～5条の割合である。その他の内外面はすべてなで調整である。口

表52 岩田第14号墳出土須恵器横瓶

(単位cm)

土器番号	全器高	口縁径	最大径	最大厚	頸部高	色調	胎土	焼成	備考
155	20.2	8.3	17.5	17.0	3.0	黒灰色	砂粒を含む	堅緻	完形

表53　岩田第14号墳出土須恵器擬宝珠付蓋　（単位cm）

土器番号	最大径	立ちあがり径	全器高	蓋部高	色調	胎土	焼成	備考
139	9.7	7.8	2.7	1.9	青灰色	砂粒を含む	堅緻	完形
140	10.0	7.5	2.4	1.7	青灰色	砂粒を含む	堅緻	完形
141	10.0	7.5	2.4	1.7	淡青灰色	細砂粒を含む	堅緻	完形
142	10.3	8.2	3.0	2.2	暗青灰色	砂粒を含む	普通	完形
143	10.0	8.0	2.7	1.9	暗青灰色	細砂粒を含む	普通	完形

表54　岩田第14号墳出土須恵器坩　（単位cm）

土器番号	器高	口縁径	最大径	頸部径	色調	胎土	焼成	備考
136	17.2	14.4	20.0	11.9	淡青灰色	砂粒を含む	軟質	完形復元
137	15.6	5.4	14.7	3.8	暗青灰色	砂粒を含むも良質	普通	完形
138	8.8	10.1	12.8	9.0	淡青灰色	砂礫を含む	普通	完形

頸部は外反した短頸で口縁端部は丸くおさめている。器表全面に灰釉をかぶり灰褐色の斑文や流れ跡を残す。

9. 擬宝珠付坏（図102・図版69）

第6号棺南小口外方の羨道床面に一括して並べられていた蓋5個体で，いずれも完形である。径9.7cm～10.3cm，全器高2.4cmのほぼ同巧同大の小形品である。浅い皿状につくられ立ちあがりがつまみ出されているがきわめて低く，器形外縁部からは突出しない。外表中央のつまみはいずれも擬宝珠形を呈し，径約1.5m，高さ約0.9cmを測る。器表外面はへら削り後のなで，内面はすべてなで調整によって仕あげられている。本古墳出土の須恵器の中では最も後出のものと思われる。

(139)器表全面に灰釉をかぶり灰褐色に変色，立ちあがりは器縁端部より0.2cmも低い。(140)器表全面に灰釉をかぶり黄緑色のガラス状斑文と灰褐色斑文がまだらに広がっている。外表の一部に小粘土塊の付着がある。(141) 器表の一部に灰釉による灰褐色斑文がある。受部立ちあがりが部分によっては，器形縁端よりも約0.15cm外方に突出すところが見られる。(142)(143)ほぼ同形で受部の立ちあがりは，縁端部と較べて0.3cm低い。

10. 坩（図102・図版69）

坩類は総計14個体を検出したが，台付直口坩および有蓋短頸坩は別に項をたてて後述するので，ここではその他の3個体について概述する。大きさや形状ともに個体差があるが，整形手法は外表底部はへら削りの上からのなで，外表上半部と内面はなで調整である。なお(136)(137)の2個体は器胴部に叩き締めの痕跡を僅かに残す。

(136) 第5号棺北小口東外方から出土，扁平な球形の器胴に広口の外反口頸がつく。底部へら削

り，器胴側面に格子目の叩き跡の痕跡を僅かに残すが，なで調整の後板目木口部による横方向への弱い描き目が施され，口縁端部は丸くおさめている。(137) 羨道入り口近くの西側壁部床面から出土，やや扁平な球形の器胴に，口径の小さい頸部をつけたとっくり形を呈する。現状の底部を上にして通常の壺形土器をつくり，円板状の粘土板で密閉した後，全面に描き目調整を施し反対側を開口して頸部を接合したものである。器胴側面にかすかに板状叩き目が残る。描き目のきめは細かく巾1㎝に13条を数えるが，上方肩部には凹線状の荒い描き目3条が走る。器表側面に縦に1条の鋭いへら描きによる沈線がつけられている。(138) 奥壁一括土器群から出土，やや器胴の張った体部に広口の短頸のつくつくりである。底部はへら削り痕跡が明瞭である。頸部つけ根から器胴下半にかけて，巾1㎝に7～8条の横方向への描き目が施されている。内面は横なで調整が施されているが，頸部ではしぼり込んだ痕跡を消しきっていない。

11. 台付直口坩（図105・図版65）

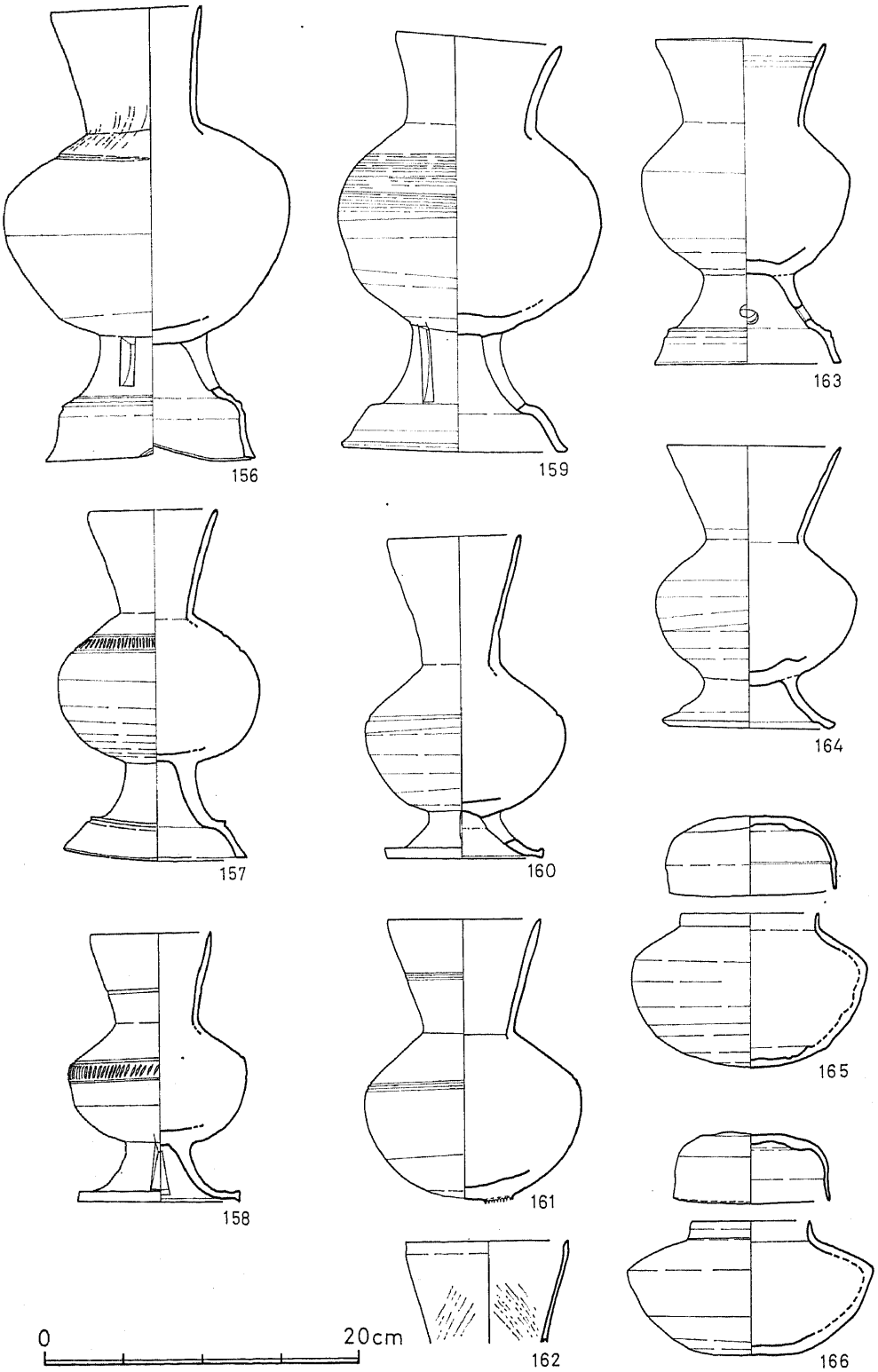
計11個体分の検出であるが完形を保つもの4個体，ほぼ完形に復元できて全貌の判明するもの3個体である。主として奥壁一括土器群から，玄室西側壁に沿った床面の二次的整地面下に敷き込まれた形で発見されたが，羨道入り口近くの床面からも1点出土している。球形の器胴に口頸が高く外傾している直口坩に，脚裾が開く低脚のついた形である。いずれも器胴外表の下半にへら削り調整の跡を残すほかは，内外面とも丹念な横なでによって調整され，整形および焼成は良好である。器高17.6㎝から27.8㎝が示すように，規模や施文手法にかなりの個体差をみせる。

(156) 奥壁部出土，器高27.8㎝は本古墳出土台付直口坩中最大。焼歪みをみせるが整形，焼成ともよく良品である。器胴と頸部の接合時のしぼり痕を残すほかは坩部は無文，脚は下半に鋭い稜とその上下に凹線を繞らせ，3方向に長方形透孔をもつ。(157) 第1号棺床下出土，口頸中央部に弱い凹線1条，器胴肩部に凹線2条とその間にへら描き斜行刻文帯を繞らす。脚裾をほぼ水平に拡げ

表55　岩田第14号墳出土須恵器台付直口坩　　(単位㎝)

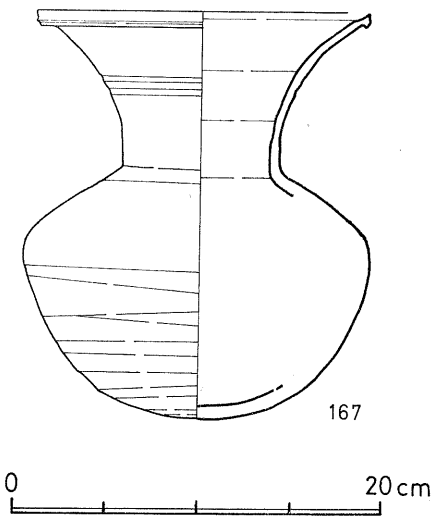
土器番号	器　高	口縁径	最大径	脚底径	脚部高	色　調	胎　　土	焼　成	備　　考
156	27.8	9.4	17.7	8.0	7.6	黒灰色	細砂を若干含む，良質	堅　緻	完形
157	21.6	8.0	12.6	11.0	5.9	青灰色	砂礫を含む	堅　緻	完形
158	16.6	7.4	11.0	10.0	3.7	青灰色	細砂粒を含む，良質	普　通	完形復元
159	25.5	9.8	15.9	13.4	7.7	淡青灰色	砂礫を含む	堅　緻	完形
160	20.0	8.0	12.0	9.6	2.9	灰白色	細砂粒を含む	普　通	完形復元
161	(17.8)	9.3	13.2	?	?	淡青灰色	砂粒を含む	普　通	脚部欠損
162	?	9.6	?	?	?	暗青灰色	細砂粒を含む	堅　緻	口縁部単片
163	19.8	10.7	12.7	11.8	5.4	青灰色	細砂粒を含む，良質	普　通	完形復元
164	17.6	10.7	12.3	10.8	3.0	淡青灰色	細砂粒を含む，良質	普　通	完形

(　) 内数字は現存部計測値



第105図　岩田第14号墳出土須恵器実測図(8)

端部に稜をもつ。脚柱２方向に長方形透孔をもつ。(159) 第１号棺床下出土，器胴は球体に近く下半にへら削り痕，上半に横方向への弱い描き目が見られる。脚部は下半を段状の２段に拡張されているが稜線はない。脚柱の３方向に長方形透孔をもつ。(160) 羨道入り口西側壁部床面出土，やや肩の張った器胴の肩部に弱い凹線１条をもち，口頸は若干外反する。脚は低脚で２方向に鋭いへら先で切り込んだ直線状の透孔をもつ。(161) 第２号棺と第５号棺の中間床面下出土，脚部を欠損し器表の荒れも著しい。口頸部中程と器胴肩部に各２条の弱い凹線を繞らす他は無文である。(162) 第６号南後方から口縁部のみの単片出土，形状から直口坩の形式と推定できるのみで詳細は不明である。(163) 第１号棺床面下出土，器胴肩部がやや張って弱い稜をもつが器胴部は無文，脚下半は鋭い突出した稜をもった２段づくりで，脚中央付近に４方向への径0.8㎝大の小円孔が穿たれている。(164)奥壁部出土，単純なつくりで器胴下半にへら削り痕を残す他は無文である。

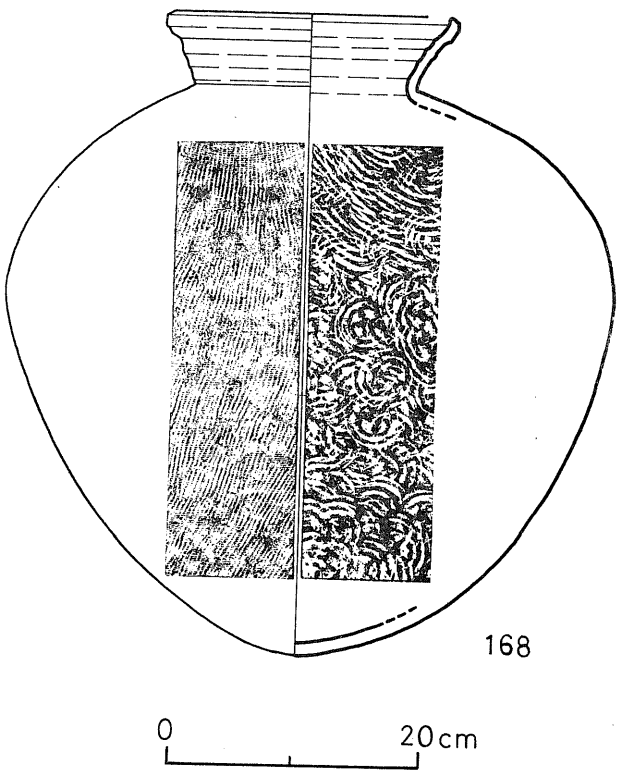


第106図　須恵器実測図 (9)

12. 有蓋短頸坩（図105・図版69）

計４個体検出したが図示できるのは２個体である。蓋と身とのセット関係は (165)は出土地点も一括で信頼できるが，(166) については確実とはいえない。便宜的に対にして図化したものである。

(165) は羨道入り口近くの西側壁寄りの床面からの一括出土である。器胴の肩部の張った短頸坩に坏形の蓋がつく。坩の肩から下半にへら削り痕を残すほかはなで調整の無文である。蓋は大きく焼歪みをみせるが，先述の坏蓋と同巧手法である。(166) 坩部は第２号棺床下，蓋部は第４号棺床下，約1.9m離れての出土である。坩の肩部が稜をもって折れ曲るやや扁平なつくりである。その他の整形手法は前者とほぼ同巧である。



第107図　第14号墳出土須恵器実測図 (10)

表56　岩田第14号墳出土有蓋短頸坩　（単位cm）

土器番号	器種	器高	口縁径	最大径	頸部高	色調	胎土	焼成	備考
165	蓋	4.4	9.8	—	—	青灰色	砂礫を含む	普通	完形，焼歪大
	身	9.7	8.5	14.8	0.8	青灰色	砂礫を含む	普通	完形
166	蓋	5.0	10.4	—	—	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形，焼歪大
	身	8.4	7.6	15.4	1.1	暗青灰色	砂礫を含む	普通	完形

表57　岩田第14号墳出土須恵器壷　（単位cm）

土器番号	器高	口縁径	頸部径	器胴径	器胴高	色調	胎土	焼成	備考
167	22.0	19.7	8.4	18.5	13.4	暗青灰色	砂礫を含む	堅緻，良好	完形復元
168	51.0	23.8	17.6	47.7	45.6	淡青灰色	砂礫を含む	堅緻，良好	完形

13．壷（図106，107・図版68）

壷は２個体の検出である。（167）は第１号棺の南小口外方の西側壁に接して出土した。いちぢく形器胴にラッパ状に大きく開いた口頸のつく，均整のとれた良品である。肩部から下半はへら削りが顕著で砂礫粒も器表に浮いているが，上半および内面は横なで調整で砂粒等はほとんど浮いていない。頸部中央に２条の弱い凹線が認められる他は無文である。口縁端は段をもって拡張され，上下と中間に３条の稜をもつ。（168）羨道入り口東側壁にもたれるようにして検出された大形壷である。若干の焼歪みをみせるが均整のとれた完形を保つ。器胴の最大径がかなり上位にあり，くの字形に外反する短口頸をもつ。器胴の外面は板目状，内面は青海波の叩き目が全体に施され，器表面には横方向へのなで調整痕がみられる。口縁部は内外面とも横なで調整が施され，口縁部は拡張されてその上端部は山形の稜をもって鋭くおさめている。

第２節　土師質土器

本古墳の発掘調査にともなう石室内出土の土師質土器は，その大半は奥壁部に集められた一括遺物群の中に，多量の須恵質土器等と混在していたが，玄室袖部や現存木棺痕跡整地面下に敷き込まれた形でも，かなりの量の遊離検出があった。しかし土師質土器の性質上，その大部分は葬送の過程での二次移動や土圧等によって破砕されて小断片となり，器表などの荒れも著しく接合復元も困難のため，器種の分類や個体数の確認などは明確にできなかった。採集した総破片数は細片も含めて 700片を越すが，現状で分類できた器種別推定個体数は，皿17以上，椀14以上，高坏９以上，坩・鉢５以上の計45個体以上となり，そのうち実測図示できるものは31個体である。

1．皿形土器（図108・図版70）

計17個体検出したが図示できるのは12個体である。接合復元により実測可能のものは比較的に硬い焼成のものに限られる。口縁径11.1cm～14.7cm，器高3.1cm～3.8cmの範囲内に分布するが，器形

表58　岩田第14号墳出土土師質土器出土地点別

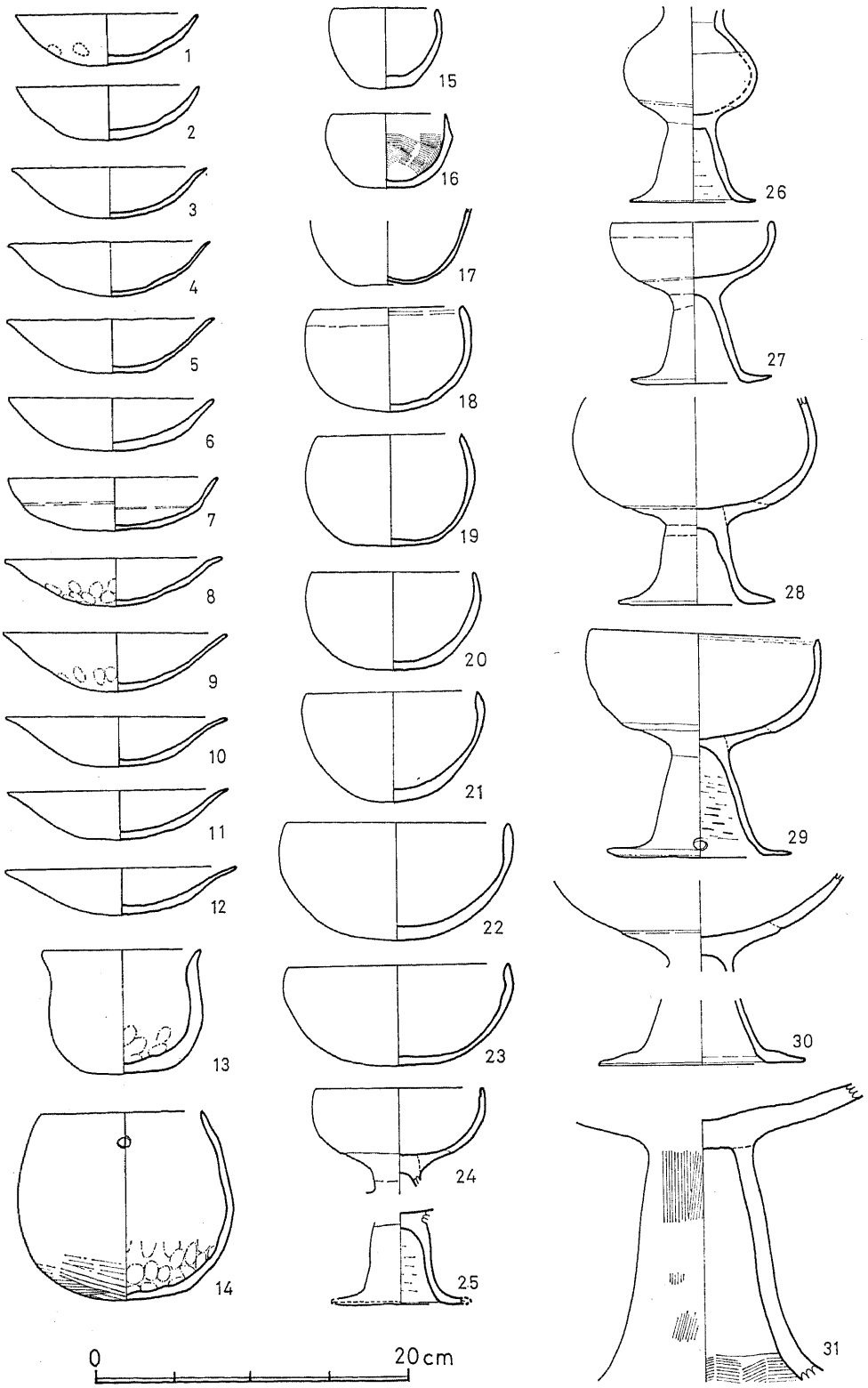
土器番号	器種	出土場所	土器番号	器種	出土場所	土器番号	器種	出土場所
1	皿	4号棺南小口下	12	皿	奥壁東半部	23	椀	奥壁中央付近
2	皿	奥壁中央付近	13	坩	1号棺北小口下	24	高坏	奥壁北東隅
3	皿	奥壁中央根石部	14	深鉢	玄室袖部	25	高坏	2号棺南小口床下
4	皿	1号棺南小口外方	15	椀	1号棺南小口外方	26	台付坩	玄室袖部
5	皿	奥壁中央付近	16	椀	奥壁中央付近	27	高坏	羨道入口東側壁部
6	皿	奥壁西隅	17	椀	奥壁中央付近	28	高坏	2号棺南外方
7	皿	4号棺北小口西方	18	椀	奥壁東半部	29	高坏	奥壁北東隅
8	皿	奥壁中央付近	19	椀	奥壁中央根石部	30	高坏	奥壁東半部
9	皿	奥壁中央付近	20	椀	奥壁中央付近	31	高坏	奥壁中央付近
10	皿	奥壁西半部	21	椀	奥壁西半部	32	皿	奥壁東半部
11	皿	羨道床面	22	椀	奥壁西北隅			

表59　岩田第14号墳出土土師器皿形土器

（単位cm）

土器番号	口縁径	器高	色調	胎土	焼成	備考
1	11.4	3.3	黄褐色	砂粒を多く含む	やや堅緻	完形
2	11.1	3.1	淡黄褐色，黒斑有	細砂粒を含むが良質	やや堅緻	80%まで復元
3	12.2	3.4	淡黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	やや堅緻	ほぼ完形復元
4	13.6	3.4	淡黄褐色	砂粒を多く含む	やや堅緻	80%まで復元
5	13.3	3.8	淡黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	堅緻	75%まで復元
6	13.8	3.4	黄褐色	細砂粒を多く含む	やや堅緻	90%まで復元
7	13.3	3.4	黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	堅緻	60%まで復元
8	13.5	3.5	淡黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	堅緻	完形復元
9	14.1	3.8	黄褐色	細砂，雲母微粒を含む	やや堅緻	ほぼ完形復元
10	14.0	3.2	赤褐色，黒斑有	砂粒を多く含む	堅緻	ほぼ完形復元
11	14.0	3.1	淡黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	やや堅緻	80%まで復元
12	14.7	3.2	淡黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	堅緻	ほぼ完形復元
32	11.5	3.4	黄褐色，黒斑有	砂粒を多く含む	やや堅緻	80%まで復元

は断面形がカーブの緩い円弧状を呈するものと，その口縁部をやや外反して拡げたものとがある。整形仕あげは器表が荒れていて判然としないが，総合的に観察すると，器表底部に指先圧痕がかすかに遺存するほかは，内外面とも口縁部は横なで，その他は不定方向へのなで調整が施され，口縁



第108図　岩田第14号墳出土土師器実測図

表60　岩田第14号墳出土土師器坩，鉢，椀形土器　（単位cm）

土器番号	器　種	口縁径	器胴径	器　高	色　　調	胎　　土	焼　成	備　　考
13	坩	10.2	9.8	7.8	茶　褐　色	細砂粒を多く含む	やや堅緻	完形復元
14	深　鉢	10.0	13.9	11.9	黄褐色，黒斑有	細砂，雲母を少し含む	やや堅緻	完形復元
15	椀	6.8	7.1	5.0	赤　褐　色	細砂を少し含み良質	普　通	ほぼ完形復元
16	椀	7.2	7.6	4.5	褐色，帯赤有	砂粒，雲母を含む	やや堅緻	90%まで復元
17	椀	?	(9.8)	(4.3)	赤　褐　色	細砂を少し含み良質	普　通	70%まで復元
18	椀	(9.7)	(10.7)	(6.6)	黄褐色，帯赤有	細砂を含むが良質	堅　緻	60%まで復元
19	椀	(10.1)	(10.8)	6.4	黄褐色，帯赤有	細砂を含むが良質	堅　緻	70%まで復元
20	椀	10.4	11.0	6.2	黄褐色，帯赤有	細砂を含むが良質	堅　緻	80%まで復元
21	椀	9.6	10.4	6.5	赤　褐　色	細砂を少し含み良質	堅　緻	ほぼ完形復元
22	椀	14.1	14.8	7.4	黄褐色，帯赤有	砂粒を多く含む	やや堅緻	ほぼ完形復元
23	椀	(14.4)	(14.9)	6.3	赤　褐　色	砂粒を多く含む	堅　緻	40%まで復元

（　）内数字は推定復元計測値

端部は指先でつまんで薄く丸味をもたせておさめている。焼成が良好のためか全体的に明るい黄褐色または赤褐色を呈し，なかに赤味を強く有するものや，反対に径4cm～5cmほどの煤による黒斑をみせるものがある。

2．坩・鉢・椀形土器（図108・図版71）

脚をもたない坩・鉢を合せて計18個体分を検出したが，実測図示できるのは坩1，深鉢1，椀9の11個体である。個体数も少なく類似性も強いのでここでは一括して取り扱うことにする。

坩(13)はやや扁平な器底から体部が緩く内湾して立ちあがり，口縁を弱いくの字形に外反させた，器壁の厚い小形品である。器壁が荒れていて整形仕あげの手法は判然としないが，器表底部はへら削り，内面底部に指先圧痕がかすかに認められるほかは，内外面とも横なで調整と思われる。深鉢(14)は器胴最大径を下半にもつ干瓢形を呈するが，均整のとれた良品である。器表底面から胴部下半にかけては不定方向へのへら削り，内面下半に指先圧痕を明瞭に残し，上半部は横なで調整が施されている。口縁端から約2cmの小円孔2つが穿たれ，もと釣手がつけられていた可能性が強い。底部外表に二次的な火炎を受けた煤跡が見られる。

椀（14～23）は口縁径6.8cm，器高5cmの小形品から，口縁径14.1cm，器高7.4cmのものまで大小各種ある。いずれも比較的均整のとれた半球形を呈するが，口縁径の小さいものほど径に対して器高の比率が高く，深いつくりとなり，大半のものが器胴最大径に対して口縁径の方がやや小さい。器表の荒れが著しく整形仕あげの手法は判然としないが，皿の場合とほぼ同巧のものと思われ，なかに刷毛目状の痕跡をかすかにとどめるものも見受けられる。

表61　岩田第14号墳出土土師器台付坩，高坏形土器　　（単位cm）

土器番号	器高	口径	脚底径	脚高	色調	胎土	焼成	備考
26	?	(胴部) 8.5	7.8	4.8	黄褐色	細砂を含むが良質	普通	口縁部欠損
24	?	10.5	?	?	黄褐色，帯赤有	細砂を少し含み良質	やや堅緻	坏部のみ完形復元
25	?	?	(8.9)	5.0	黄褐色	砂粒を含む	堅緻	60%まで復元
27	10.3	10.3	9.3	5.5	淡黄褐色	砂粒を多く含む	堅緻	完形復元
28	(12.8)	(13.4)	9.6	5.2	淡黄褐色	細砂を多く含む	堅緻	70%まで復元
29	13.7	16.2	11.9	6.7	明黄褐色	細砂，雲母を含み良質	堅緻良好	完形復元
30	?	?	13.2	(6.4)	黄褐色	砂粒を多く含む	普通	35%まで復元
31	?	?	?	(15.5)	淡黄褐色	砂礫を多く含む	普通	脚柱部のみ遺存

（ ）内数字は推定復元計測値

3. 台付坩・高坏形土器（図108・図版70，71）

両者を合せて計11個体分を検出したが，実測図示できるのは台付坩1，高坏形7の8個体である。完形復元できるものが少なく，器表も荒れていて詳細の不明のものが多い。

台付坩㉖は口頸部を欠損しているが，裾部の拡張された脚に頸部がやや外傾して立ちあがる直口坩が載る形と思われる。器壁が荒れて剝脱が著しいため不詳である。

高坏㉔は坏部のみ，㉕は脚部のみの出土であるが，その形状から㉗とほぼ同巧同大と思われる。脚裾が極端に折れ曲って扁平に拡がる脚に椀形の坏が載る形式である。㉘㉙はやや型の大きいつくりであるが，㉘は脚内面にへら削り痕を残し，㉙は脚裾部の対面する2方向に径約 0.6cmの小円孔2つが穿たれている。特に㉙は均整のとれた良品で，全体のなで調整も丹念に施され，口縁端部も内側に斜傾させ弱い稜をもち，台椀坏と呼称した方がふさわしい形状を示す。㉚は坏部下半と脚部下半のみの出土で接合できないが，出土状況および胎土焼成等から同一個体と推察される。㉛は脚柱部と坏部下半の一部のみであるが，出土時の形状から，石室底の埋土に残る圧痕を計測すると脚底径約18cm，口縁径約35cmを測った。これは埋土面に残る破砕片からの推測値で，広がっている可能性も強く確実性に乏しいが，いずれにしても大形高坏であることは明言できる。脚柱外表に縦方向と脚裾内面に横方向の刷毛目がかすかに認められる他は，仕あげ調整の手法は不詳である。

第3節　紡　錘　車

玄室底部から遊離発見の滑石製紡錘車2個である。いずれも截頭円錐形を呈するが器胴の中程に稜をもち，下半部側面は垂直となる磨製品である。坏斜面と底面に夫々細い線刻による鋸歯文を主体とした文様帯を有する（図109，図版57，72）。

⑴第2号棺北小口の北方15cm，すなわち奥壁から80cm，西側壁から 112cmの遊離石材下から出土した。黄褐色を呈し器胴全面に横方向への無数の使用条痕と磨耗が著しく，施文の状況も判然とし

表62　岩田第14号墳出土滑石製紡錘車計測値

番　号	器　高	上面径	底面径	孔　径	垂直面高	重　量	備　　考
1	1.80cm	2.49cm	3.48cm	0.60cm	1.10cm	37.0g	文様は上下面共同施文
2	1.68	1.60	3.54	0.70	0.65	30.1	文様は上下面共施文，鉄芯残

ないほどである。器表側斜面に８鋸歯文と，底面に径1.25cmと 1.6cmの同心円２条および外縁部から内行する11鋸歯文帯を繞らせ，鋸歯文内は斜格子状に刻線が施されている。鋸歯文の配列および斜行刻線ともかなり粗雑で，大小差はまだしも大きく重なり合うものもある。

(2)第２号棺南小口の西外方10cm，奥壁から 260cm，西側壁から80cmの二次整地面下に敷き込まれた石材上で発見した。青灰色の滑石製であるが発見時は全面鉄錆で覆われ，径 0.5cm，長さ７cmの鉄製心棒が遺存することから，鉄製品と見誤るほどであった。前者に比してやや扁平で上面に稜をもたず，凸レンズ状にまるく整形しているが，器表は使用条痕と磨耗が認められる。側斜面と底面に刻文が施されているが同巧である。両面とも径1.9cmと2.5cmの同心円２条とその外方に鋸歯文帯が繞らされ，同心円の間と鋸歯内には斜行刻線が施されている。鋸歯文数は側斜面11，底面12でその配置および線刻はともにやや粗雑である。円孔内に鉄芯が今も遺存している。

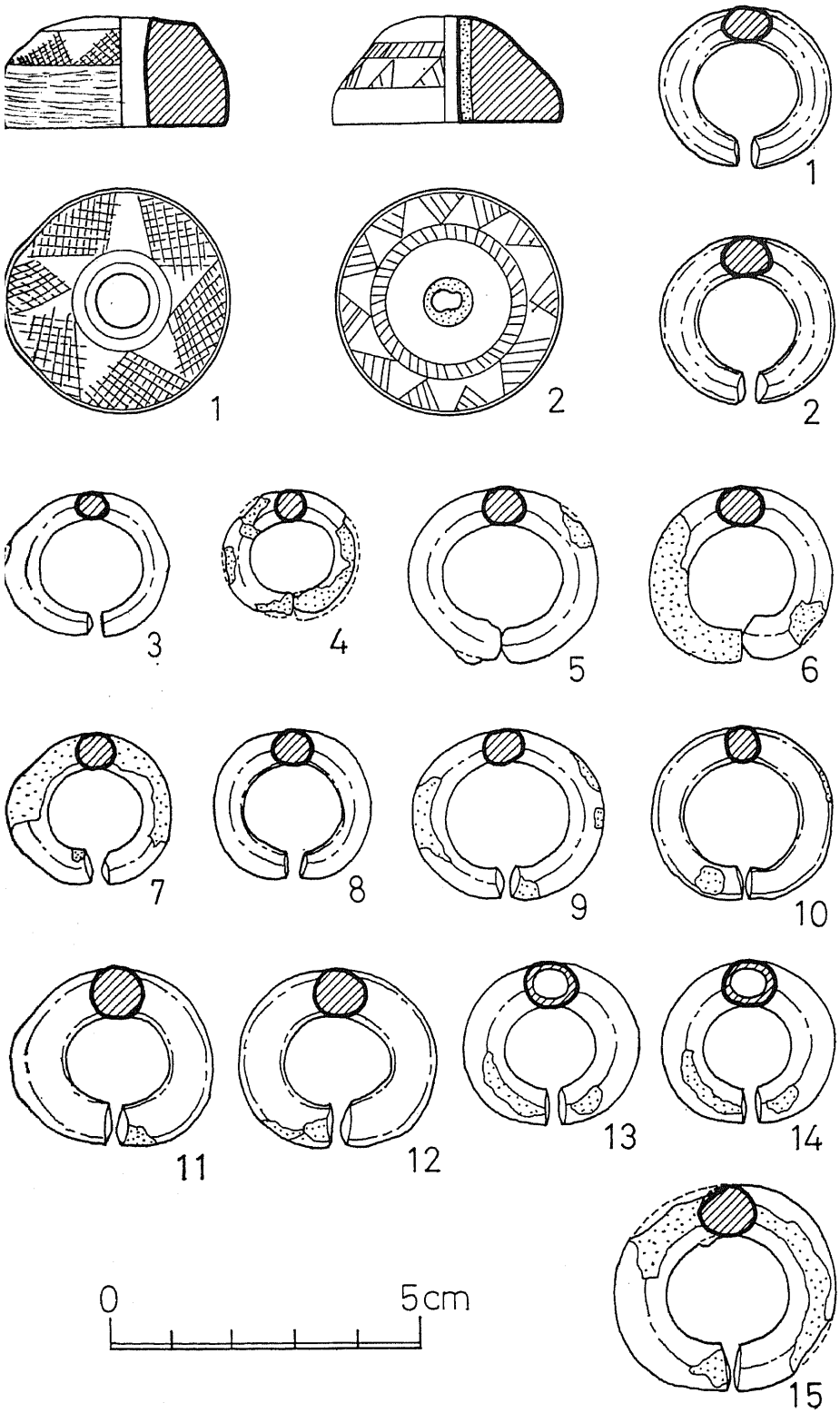
第２節　装　身　具

1. 金環（図109・図版72）

計17点検出したが第４号棺下と羨道床面出土の２点は破損が著しく，やっと存在を認知できる程度で実測図示できるのは15点である。多くは現存木棺床面から直接被葬者に着装した形状で発見されたが，これらの棺に先行する供献物が二次移動によって，遊離分散した物もかなりあった。環の太さや大きさに差はあるが，いずれも断面が円形または楕円形の棒銅を環状に曲げ，切り口の突合せ部を若干間隙をもたせ，器表に金張りを施したつくりである。

(1)(2)第２号棺南東部床面に近接して出土した。ともに中空の銅環の外表に金張りをした同巧同大のつくりで対になる。器表の荒れが著しく剝脱しているため，金は僅かしか遺存しない。本棺被葬者着装遺物と推察される。(3)第１号棺床下遊離出土の細形銅環単品である。器表の緑青錆化と剝脱が著しく，原況が素銅環か金銀張り，またセット関係も不詳である。(4)第３号棺北東隅床面出土の小形の単品である。セット関係も不詳で先行主体副葬品の二次移動と思われる。鉄地金銅張りと推察されるが，錆化と荒れが著しくその実際は不明である。(5)(6)第３号棺南小口近くの床面に近接して出土，ほぼ同巧同大で本棺被葬者の着装遺物と推察される。緑青錆化と剝脱が著しいが金が僅かに遺存して，銅地金張り製と判断される。(7)(8)前者は第３号棺西側部床下，後者は第４号棺北東隅床下出土で約 160cm離れているが，共にほぼ同巧同大のつくりで対となる可能性が強く，先行被葬者の副葬遺物の二次的移動品と推察される。ともに銅地金張り製であるが器表の錆化と剝脱が著しく，金はやっとその痕跡が確認できる程度である。

(9)(10)第４号棺東半の床面に近在出土，同巧同大で対となる。両者とも銅地金張り製で，器表の錆



第109図　岩田第14号墳出土紡錘車・金環実測図

表63　岩田第14号墳出土金環計測値

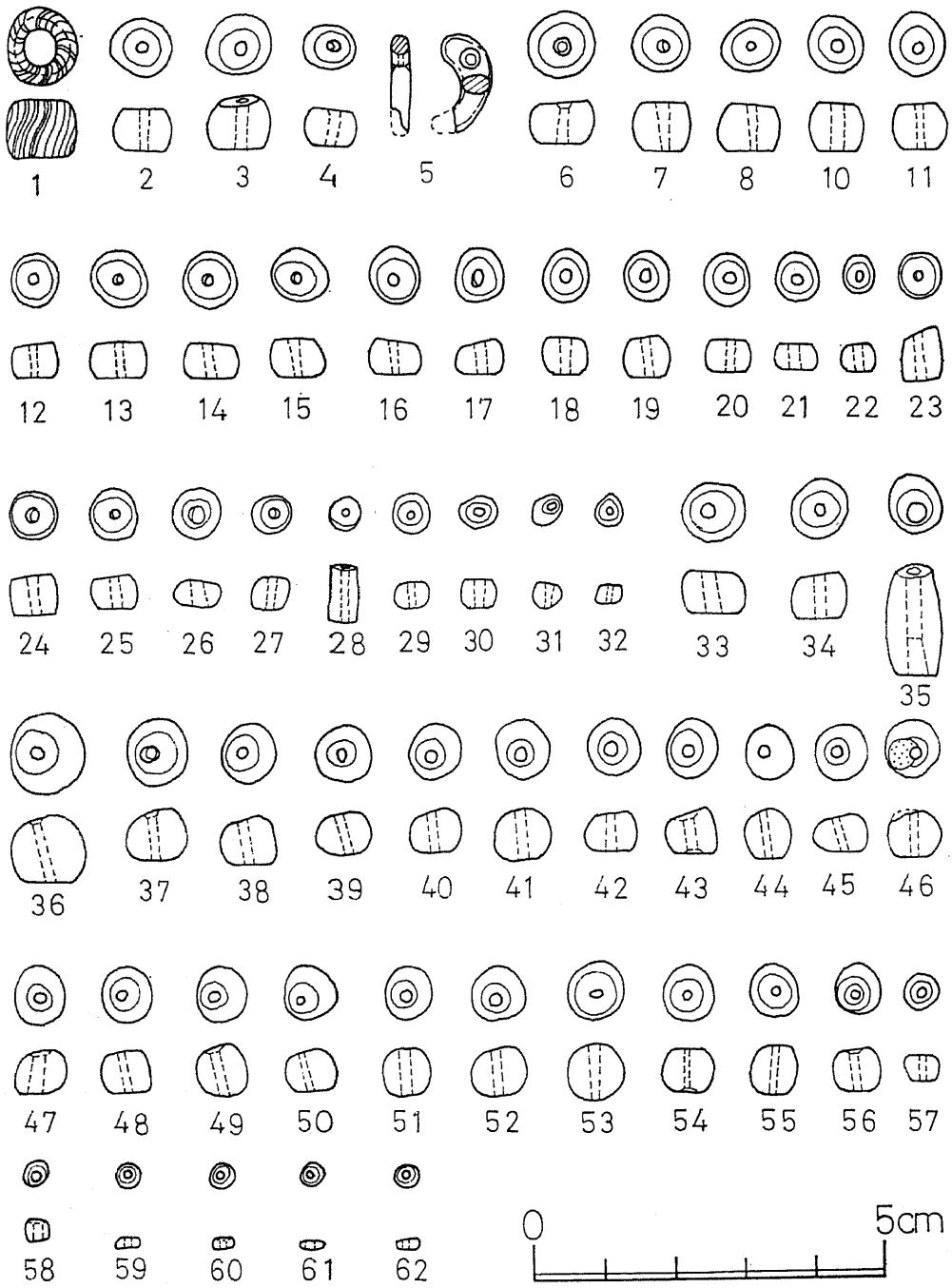
出土地別	遺物番号	外法径 長径	外法径 短径	内法径 長径	内法径 短径	直径 長径	直径 短径	突合せ部間隙巾	重量	備考
		cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	g	
2号棺床面	1	2.80	2.64	1.31	1.20	0.90	0.76	0.18	3.9	銅地金張り中空
	2	2.80	2.59	1.35	1.20	0.88	0.70	0.20	4.9	銅地金張り中空　1と対
1号棺床下	3	2.51	2.24	1.66	1.42	0.41	0.41	0.10	2.3	銅環？
3号棺床面	4	2.16	1.93	1.30	1.11	0.42	0.41	0.08	2.2	鉄地金銅張り？
	5	2.98	2.72	1.67	1.51	0.70	0.61	0	12.7	銅地金張り
	6	2.98	2.81	1.79	1.58	0.66	0.66	0	9.7	銅地金張り　5と対
	7	2.50	2.40	1.41	1.31	0.66	0.57	0.12	8.4	銅地金張り
4号棺床面	8	2.58	2.40	1.48	1.31	0.69	0.55	0.18	10.2	銅地金張り　7と対
	9	2.97	2.68	1.80	1.69	0.59	0.52	0.05	10.5	銅地金張り
	10	2.87	2.70	1.78	1.62	0.60	0.55	0.06	10.6	銅地金張り　9と対
5号棺床面	11	3.19	2.85	1.60	1.29	0.80	0.80	0.10	19.6	銅地表張り不詳
	12	3.20	2.79	1.54	1.30	0.82	0.81	0.10	20.1	銅地表張り不詳　11と対
6号棺床面	13	2.70	2.54	1.55	1.46	0.80	0.59	0.20	15.7	銅地金張り
	14	2.73	2.51	1.59	1.42	0.80	0.59	0.20	16.7	銅地金張り　13と対
7号棺床面	15	3.60	3.21	1.91	1.60	0.90	0.80	0.10	27.8	銅地表張り不詳

化と剝脱が著しいが内側面の金はかなりよく遺存する。(11)(12)第5号棺北小口床面から，遺体下顎と土製練り玉等22点と共に出土した同巧同大の一対である。両者とも器表の荒れが著しくて，金銀等の遺存は認められないが，銅地金張り製と推察される。(13)(14)第6号棺南小口床面から約36cm離れて検出した。両者とも表面に張られた金の遺存は良好で，今も器表全面に金色の光沢を保つ同巧同大の一対である。(15)第7号棺西側部に接し，北小口から80cmの床面で単品出土の大形品である。緑青錆の突出と剝脱が著しく，金銀の張りつけの有無は不詳である。

以上を総合して確実に金環を伴なう棺は，第2号棺～第6号棺の5棺である。第1号棺は金環をもたず，第7号棺は不詳である。また同巧同大の2個を対として考えると，形状の確認できない破損品を別としても，(11)と(2)，(5)と(6)，(7)と(8)，(9)と(10)，(11)と(12)，(13)と(14)の6対の他に，(3)(4)(15)の3個の単品出土があって9対となり，金環を持たない第1号棺を加えると，少くとも本古墳への被葬者数は10人以上と考えられるのである。

2．玉類（図110・図版72）

勾玉，管玉，彩色玉，棗玉各1と，ガラス小玉44，土製練玉21の計86を検出したが，実測図示できるのは破砕しているガラス小玉8を除いた61である。この内現存木棺に確実に共伴するのは第2



第110図　岩田第14号墳出土玉類実測図

棺の管玉とガラス玉の計５点と，第５号棺の土製練玉等計22点のみである。また可能性のあるものとして第２号棺床下があげられるが，その他の玉類は石室底の整地替えの際の二次的移動の可能性が強く，現存する７木棺よりも先行した埋葬に伴なう様相を示す。石室の規模や被葬者数の割には器種や数量が貧弱である。

表64　岩田第14号墳出土玉類計測値

（単位㎜）

番号	器種	色調	胴径	器高	孔径	出土位置	番号	器種	色調	胴径	器高	孔径	出土位置
1	採色玉	4色	11.0	8.1	4.3	奥壁部底	32	ガラス玉	青	4.2	2.9	1.1	3号棺床面
2	ガラス玉	紺	9.5	5.9	2.0	1号棺床面	33	ガラス玉	紺	9.0	6.1	2.1	4号棺床面
3	ガラス玉	紺	6.0	7.6	1.8		34	ガラス玉	紺	8.5	6.5	1.6	
4	ガラス玉	紺	6.9	5.9	1.2		35	棗玉	黒褐	8.6	15.9	2.5	羨道床面
5	勾玉	灰褐	—	13.4	1.5	1号棺床下	36	土製練玉	灰黒	11.8	9.5	1.6	5号棺床面
6	ガラス玉	紺	10.0	7.2	1.8		37	土製練玉	灰黒	9.8	7.0	2.1	
7	ガラス玉	紺	9.1	6.0	1.2		38	土製練玉	灰黒	8.1	7.0	1.2	
8	ガラス玉	紺	7.0	5.2	1.2		39	土製練玉	灰黒	8.3	7.5	1.0	
9	ガラス玉	紺	9.1	7.1	1.2		40	土製練玉	灰黒	8.0	6.6	1.2	
10	ガラス玉	紺	8.6	7.1	1.6	2号棺床面	41	土製練玉	灰黒	8.0	7.1	2.3	
11	ガラス玉	紺	9.0	6.8	1.4		42	土製練玉	灰黒	7.5	6.0	1.1	
12	ガラス玉	紺	7.6	5.0	1.9		43	土製練玉	灰黒	8.2	6.8	2.0	
13	ガラス玉	紺	7.4	5.2	1.3		44	土製練玉	灰黒	7.9	7.1	1.0	
14	ガラス玉	紺	7.9	4.8	1.8		45	土製練玉	灰黒	8.0	5.5	1.3	
15	ガラス玉	紺	7.9	5.1	1.2		46	土製練玉	灰黒	8.7	6.2	1.5	
16	ガラス玉	紺	8.0	5.0	1.7		47	土製練玉	灰黒	8.2	6.2	1.2	
17	ガラス玉	紺	7.4	5.0	1.8	2号棺床下	48	土製練玉	灰黒	7.4	7.0	1.5	
18	ガラス玉	紺	7.1	6.0	1.2		49	土製練玉	灰黒	8.3	7.2	1.6	
19	ガラス玉	紺	8.5	5.7	1.5		50	土製練玉	灰黒	8.0	5.6	1.2	
20	ガラス玉	紺	7.2	4.8	1.1		51	土製練玉	灰黒	8.2	6.5	1.0	
21	ガラス玉	紺	6.8	3.8	1.5		52	土製練玉	灰黒	7.5	6.0	1.1	
22	ガラス玉	紺	5.2	4.0	1.0		53	土製練玉	灰黒	8.0	6.2	1.8	
23	ガラス玉	紺	7.0	7.0	1.7		54	土製練玉	灰黒	7.3	6.0	1.0	
24	ガラス玉	紺	7.2	5.8	2.0		55	土製練玉	灰黒	8.0	6.5	1.4	
25	ガラス玉	紺	7.0	4.9	1.2		56	土製練玉	灰黒	7.6	6.4	1.3	
26	ガラス玉	青	7.6	3.3	2.0		57	ガラス玉	紺	4.9	3.8	0.15	
27	ガラス玉	緑	5.5	4.6	1.2		58	ガラス玉	緑	3.8	3.1	1.0	玄室内遊離
28	管玉	赤褐	4.0	8.1	0.9	3号棺床面	59	ガラス玉	紺	3.6	2.0	0.9	
29	ガラス玉	青	5.9	3.8	1.1		60	ガラス玉	紺	3.5	2.0	0.9	
30	ガラス玉	青	5.2	4.0	1.8		61	ガラス玉	紺	3.5	1.5	0.8	
31	ガラス玉	青	4.8	3.9	1.0		62	ガラス玉	紺	3.5	1.8	0.8	

勾玉(5)は第１号棺床下遊離出土である。黄褐色の滑石製で尾部を若干欠損するが，現存長1.34cm同巾0.7cm，頭部厚0.3cmの扁平な小品である。貫孔は両面からなされ，紐ずれなどの磨耗痕が認められる。

彩色玉(1)は第１号棺北小口外方からの遊離出土である。釉薬で４色に彩色された磁器製品で珍らしい玉である。均整のとれた臼形に製形され，器表全面を斜行流水文形の細い縞模様状に，白，緑黄，緑，黄，赤，黄，緑を一単位として３回繰り返して計24条の縞目となって繞っている。

棗玉(35)は羨道床面遊離検出である。黒褐色を呈する木製品で比重は軽い。縦断面は縦長太鼓胴形，横断面は楕円形を呈し，貫孔は両面から施され中程で若干の段違い状をみせる。器胴表面に木目痕をかすかに残す。

第３号棺南小口床面の一括玉類は管玉１とガラス小玉４の計５である。管玉(28)は赤褐色を呈する鉄石英質製の細身小形品，ガラス小玉（28～32）も径0.42cm～0.59cmの青色半透明の小粒である。その他のガラス小玉は殆んどが遊離品で濃紺色が多く，径１cm，高さ0.72cmのやや大粒品から，径0.35cm，高さ0.15cmの小粒品までさまざまである。概して大形品は上下に稜をもって平滑面を有し，器胴の張った太鼓胴形が多いが，歪みをもつものも目立つ。反対に小粒形はやや扁平なつくりで丸味をもち，形状も均整のとれたものが多い。

第５号棺北小口床面の一括土製練玉（35～56）は，粘土をまるめて焼成した灰黒色の玉である。径11.8cmの大形から径 7.3cmまで，また形状も球形に近いものから同筒形に近いものまで，大きさおよび形状にもかなりのばらつきをみせるが，基本的にはほぼ同巧手法のつくりである。西小口に玉ずれの磨耗痕を残し，21個を連にした長さは約14cmとなる。

第５節　武　　具

1. 直刀（図111，113・図版75）

長短合せて８口発見した。このうち現存本棺床面に副葬された形状を保つのは，第１号棺１口と第３号棺の２口だけである。その他は第１号棺床面下に環頭２を含む２口と，第３号墳床面下，玄室袖隅部，羨道床面に遊離する各１口を除く他の遊離直刀は，いずれも現存木棺群床下に敷き込まれた形で検出され，本古墳への追葬の過程で床面を整地替えする以前の供献と推察される。したがって出土直刀の錆化や欠損も著しく，完存するものは少ない。各部の計測値は表65に示したので，個々の記述は簡略に行なうことにする。いずれも断面は二等辺三角形を呈する鍛造品で鎬はもたない。なお環頭太刀の環頭部２口については，どちらも柄部だけの遊離出土で，刀身部との確実なセット関係が明らかでないため，項を改めて次項において概述したい。

刀１，第１号棺の東棺側に沿うようにして柄部を南，鋒を北に向けて納められた完存品で，全長118cm，刃巾5.4cm，重さ2.66Kgは全体を通じて最大である。錆化をしているものの保存は良好で，刀身の両側に鞘木および織布痕が錆着してその厚さ 2.4cmを測る。元は木鞘に挿入して上を織布に包んでの供献と推察される。その他金具等の附属具は何も検出されなかった。

刀２，第１号棺床面下から遊離出土の刀身部である。環頭(1)と接続するようにくの字形に折れ曲

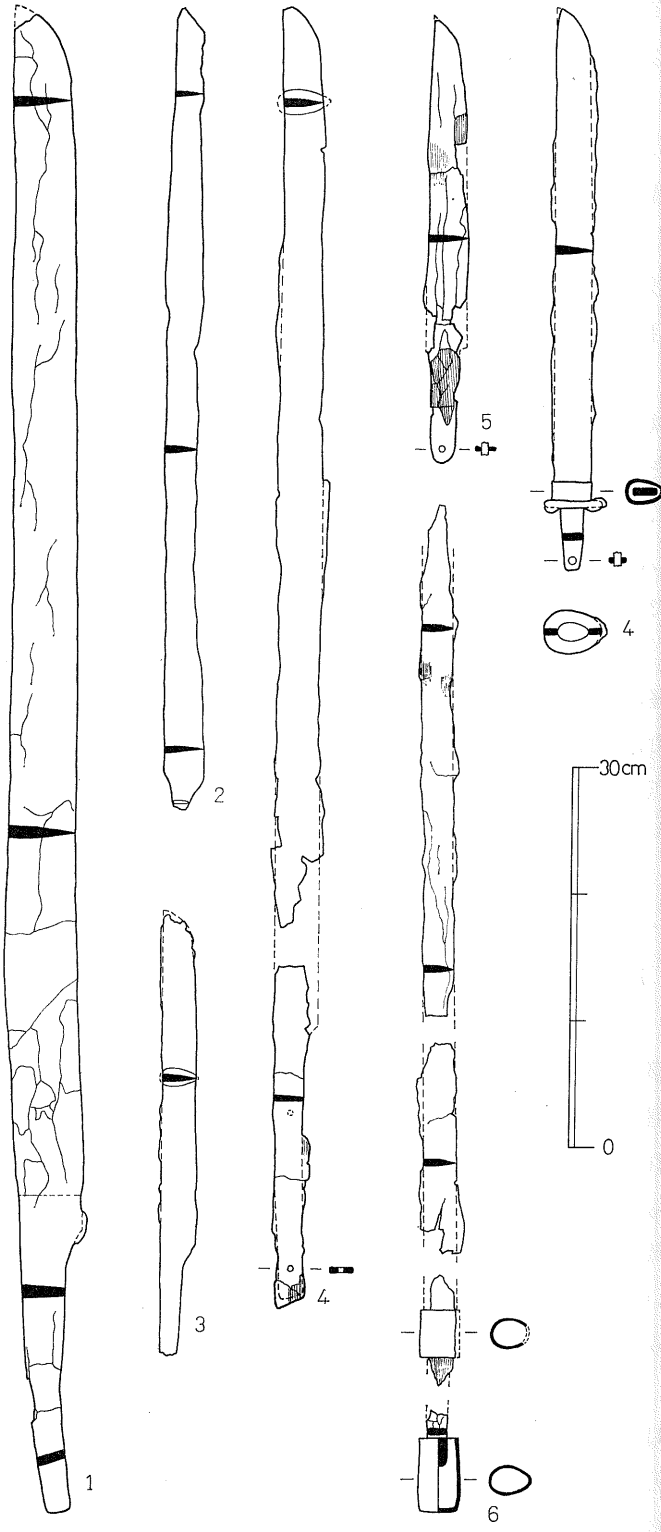
った状態で検出され，あるいは両者は一体となる可能性もある。現存長61.7cmを測るが，両端部を欠損し錆化による痛みも著しいため原況は不詳である。刀身部に反をもたない直刀で，刃巾も３cm足らずと前記(1)に較べて細身であり，実用武具と推察できる。

刀３，刀２と同様第１号棺床下遊離の刀身部である。錆化折損しているものの，接合によってほぼ全形を知り得た。全身45.3cmとやや短いつくりである。刀身の一部両側に木質が錆着し，木鞘に挿入しての供献と思われる。現存鞘部の厚さは1 .6cmを測る。目釘穴は認められない。

刀４，第３号棺の西棺側に沿うようにして床面に，柄部を南，鋒を北に向けて納められた直刀である。錆化が進んで刀身部も腐蝕が著しく，原況で取りあげることができなかったが，出土時の計測で全長 103cmを測った。茎に目釘穴２孔を有し，刀身部に部分的に鞘木の錆着が見られ最大遺存部厚2.1cmを測る。

刀５，第３号棺出土の刀４の柄部の下に，重なるようにして検出された全長35.3cmの短刀である。出土の状況から前者とともに第３号棺副葬と推察される。刀身部の一部と茎の鞘口部に木質が遺存し，木鞘および木柄の刀と推測される。目釘穴は鞘口部は木質遺存のため不明であるが茎端部近くに径 0.6cmの小円孔１個が貫孔されている。

刀６，第３号棺北東部の床面から



第111図　岩田第14号墳出土刀剣実測図

岩田第14号墳出土刀類計測値　　（単位cm）

全長	刃部			茎部			備考
	刃部長	刃部巾	刃部厚	茎部長	茎部巾	茎部厚	
118.4	96.7	5.4	1.4	21.7	3.7～2.4	1.2	1号棺副葬，重さ 2.66Kg
(63.4)	61.7	(2.9)	1.0	—	—	—	1号棺下遊離
(45.3)	(35.1)	3.0	0.6	(7.2)	1.8～1.6	0.7	1号棺下遊離
103.0	81.4	3.6	1.2	21.6	2.3～2.0	0.8	3号棺副葬
35.3	26.5	2.9	0.85	8.8	2.0	0.8	3号棺副葬？
(79.5)	(63.5)	3.1	1.0	16.0	2.0	0.5	3号棺下遊離？
44.2	38.6	3.1	0.8	5.6	1.8	0.6	玄室袖隅部遊離
(42.0)	(26.6)	(4.5)	0.8	15.4	2.6	0.7	羨道床面遊離，図113……18

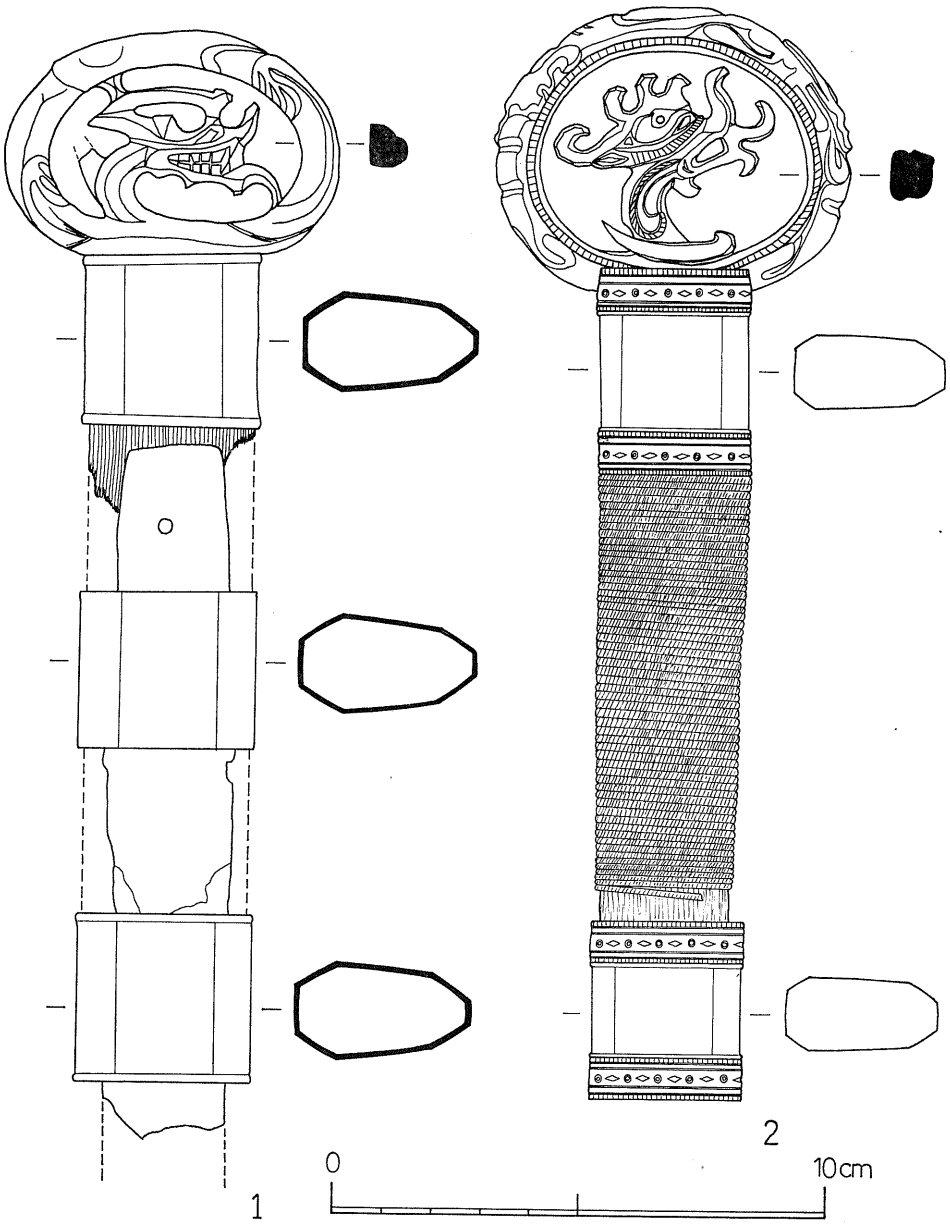
かけて検出された。第3号棺副葬かこれに先行する供献物の遊離混入かの判断が難しい出土るが，奥壁部一括遺物群に近く，現実に鉄鏃等の混入状況などから，遊離遺物の可能性が出土時にはほぼ全形を保って発見されたが，錆化と腐蝕が激しくてばらばらに砕け，原況をの取りあげはできなかった。したがって全長計測などは発掘時の現地における測定値で79.5った。刀身部は錆痩せが著しく刃巾や刃厚の原大は不詳である。柄頭と縁金具が遺存する。失製で柄頭は長さ6.2cm，巾3.35cm，厚さ2.4cmを測り，楕円筒形の袋状を呈するが，頭部面こ頂角をもつ逆隅丸三角形状を呈する。縁金具は長さ3.35cm，巾3.3cm，厚さ2.4cmを測り帯具である。ともに茎との間は木質が遺存し，元は木柄であったと推察される。茎端は円頭部1cm挿入され，目釘穴は円頭縁部から2.6cmに穿たれている。

玄室袖隅の遊離石材の下に敷き込まれた形で出土した全長43cmの直刀である。錆化して3損しているが，遺存度は比較的良好でほぼ完形に接合できる。茎長が 5.6cmと短く端部に目個を有するが，目釘が貫通された形状で遺存する。また鐔と鎺も保存が良好である。鐔は鉄卵形を呈し，短径3.6cm，長径5.0cm，厚さ0.4cmの素文平板の小形品である。鎺は巾 1.6cm n×3.2cmの倒卵形輪金具である。刀身部に木質が錆着し元木鞘に挿入しての供献と推察され

，玄室から約1mの羨道床面において遊離検出の刀身部断片である。3片の総延長約42cmを，両端とも欠損し，錆化による腐蝕も著しいため詳細は不明である。形状から直刀と判断で度であるが，断面が菱形を呈する部分もあり，あるいは剣の可能性も考えられる。

環頭太刀（図112・図版73）

号棺の下に敷き込まれた形状で遊離発見の環頭太刀の柄部2口分である（図版56）。両者と部を折損していて全形は明らかでないが，現存部の環頭および柄拵えの保存状態はかなり良る。いずれも単龍式環頭で表裏同巧のつくりで銅地に金が張られている。楕円形の環円中央



第112図　岩田第14号墳出土環頭太刀実測図

に側方を向いた龍頭首が透彫りされ，外環に龍身が表現されている。

環頭1，やや扁平な楕円環頭に，簡略された龍頭首および龍身が表現されているが，金の質および遺存度はともに良好で，若干の緑青錆の突出は見られるものの，今も器表のほぼ全面に黄金色の光沢を保つ。口は歯をむき出しているが開口はせず，通常見受けられる玉を噛んでいない。頭首と外環は首および下唇と頭部後方の角部を延長させた3個所で固定されている。柄部は茎の両側に木質が銹着遺存して，柄の両縁と中間の3か所に，金製の薄い帯板を扁六角形に巻いた飾り金具をもつ木柄である。飾り金具は実際には柄頭部のみが原況をとどめていたが，同種の金具が環頭の周辺

表66　岩田第14号墳出土環頭太刀計測値　（単位cm）

番号	現存全長	外径		内径		環部径		柄部			備考
		長径	短径	長径	短径	長径	短径	長さ	巾	厚さ	
1	21.2	6.8	4.6	5.2	3.05	1.05	0.75	16.7	3.6	2.0	
2	22.0	7.2	5.9	5.4	4.4	1.05	0.9	16.7	3.1	1.5	柄間銀線葛纏

から検出され，柄の木質部に残る剝脱痕跡等から，図示したように推定復元ができた。飾り金具は無文で長さは柄頭口から5.5cm，5.2cm，5.4cmを測り，両縁部金具は端部を玉縁状に折り曲げているが，中間の金具は切り離し状である。環頭は目釘で柄部に装着されていると思われるが，飾り金具が遺存するため実態は不明である。茎長は約2.5cmと推測され，刀身の茎端との間隙は1.5cmである。刀身茎は端部から1.5cmに目釘穴をもち，径0.6cmの目釘が今も 0.6cmの突出をみせて遺存している。

環頭２，楕円形の環内中央に目を見開き，口を大きく開いて昇龍を思わせる龍頭首をおき，外環に龍身を彫刻した均整のとれた精巧なつくりである。頭首部の彫りは深く立体的で大きく段差をつけ，最も器厚の厚い口部で 0.6cm，最も薄い頭髪部で0.25cmである。眼の縁部には朱を施して強調させ，外環体部は爪先まで表現し，また内縁部には斜行刻文帯を繞らしている。柄部の保存状態は把手の木質も含めて良好でほぼ原況をとどめ，両端部は金製の薄い帯板で扁六角形に包み，その間の柄間全体を細い銀線で葛纏きしている。飾り金具は柄頭部の長さ４cm，鞘口部3.6cmを測り，ともに中程は無文平板であるが，その両端は巾0.9cmの飾り彫金を施した金の帯板で押え巻きしている。その文様構成はいずれも同巧で，外縁部から刻文帯・沈線・珠文と菱形の交互列点文帯・沈線・刻文帯の順となっている。葛纏の銀線は柄間 9.1cmの間全域に整然と施しているが，巾0.16cm，厚さ0.9cmの細い紐状を呈し，器表部側にはすべて刻文が施されている。茎の形状および目釘孔等は柄拵えが遺存しているため不詳である。

3．蕨手刀子（図113・図版75）

第１号棺と玄室西側壁の間の床部整地替面下に，近接して検出された２口である。(6)はほぼ完形を保つものの，(5)は柄部を折損欠失している。ほぼ同巧同大の鍛造品である。断面がほぼ円形の棒鉄をつくり，その一端をくの字状に曲げて蕨手とし，他の一端を鍛造によって扁平に叩きのばしてメス状の刃部とした刀子である。刺す切るという機能よりも削る機能を目的とした感が強い。両者とも刃部から茎部にかけて織布痕が錆に圧痕となって遺存し，(5)では少くとも３重までは確認できる。織布痕は１cm巾に18～19条が数えられ，きめが細かく絹布と思われる。もと本刀子は織布に包んでの供献と推察される。

4．刀子（図113・図版75）

蕨手刀子２口分を除いて計18口分を検出したが，いずれも二次移動を受けた整地面下や羨道床部での遊離検出で，保存度も不良なものが多く，完存するものは皆無である。したがって図示できる

表67　岩田第14号墳出土刀子類計測値　（単位cm）

番号	全長	刃長	刃巾	刃厚	茎長	茎巾	茎厚	備考
5	(9.8)	4.9	1.55	0.5	(4.9)	1.1	0.9	織布痕付着，鍬手刀子
6	16.8	5.9	1.6	0.45	10.9	1.1	1.0	完形，織布痕付着，鍬手刀子
7	(8.8)	(4.5)	1.3	0.6	4.3	1.1	0.5	茎部木質錆着
8	(6.3)	(1.5)	1.8	0.6	4.7	1.2	0.4	茎部木質錆着
9	(5.5)	(1.3)	1.6	0.4	(4.2)	1.2	0.3	茎部木質錆着
10	(6.5)	(3.5)	1.4	0.4	(3.0)	1.1	0.4	茎部木質錆着
11	(6.6)	(3.9)	1.4	0.4	(1.6)	1.0	0.4	
12	(5.5)	(5.5)	(1.4)	0.5	—	—	—	織布痕付着
13	(12.4)	(12.4)	1.25	0.5	—	—	—	木質残痕付着
14	(10.6)	6.9	1.2	0.5	(3.9)	(1.25)	0.4	茎木質錆着
15	(11.0)	(6.0)	(1.2)	0.4	5.0	0.9	0.6	
16	(7.0)	(7.0)	1.8	0.6	—	—	—	短刀か？　織布痕付着
17	(7.5)	(7.5)	(1.25)	0.45	—	—	—	保存状況不良
18	(7.6)	(7.6)	(1.3)	0.6	—	—	—	保存度不良
19	(4.5)	(4.5)	1.4	0.5	—	—	—	保存度不良，織布痕多重付着
20	(4.5)	(4.5)	(1.2)	0.5	—	—	—	保存度不良，鋒部のみ残存
21	(3.2)	(3.2)	(1.1)	0.4	—	—	—	保存度不良，鋒部のみ残存

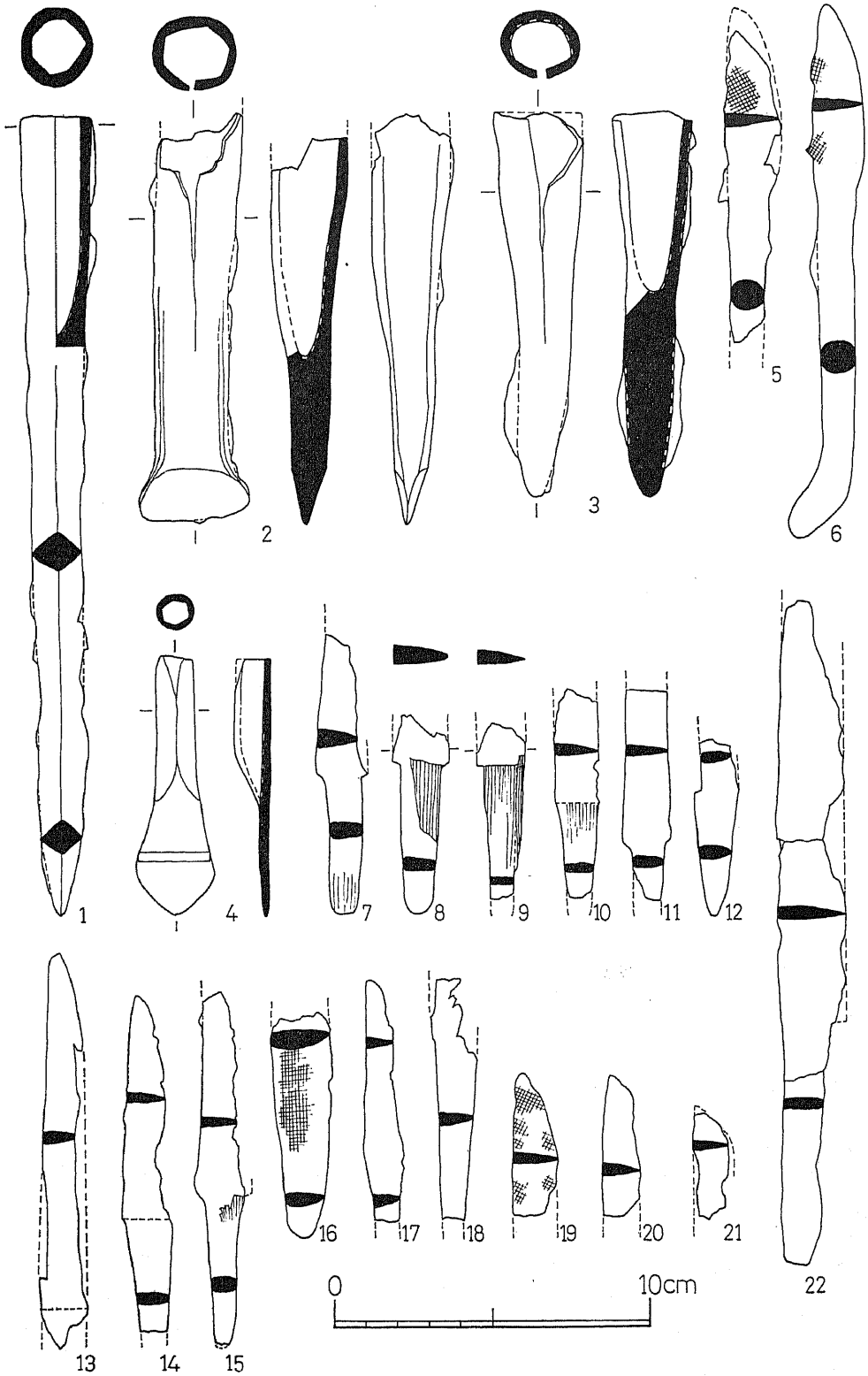
（　）内数字は現存部長を示す。

ものは極力図示および表示に努めたが，ほとんどが断片的な遺存のため詳細は明らかでない。いずれも鍛造によるつくりで，刃部断面が二等辺三角形を示し，茎等の形状などを合せ考えて，やっと刀子と認知できる程度のものが多い状況である。茎部に木質が錆着遺存するものが多く，木柄が施されていたらしいこと，また織布の錆化付着するものが多く，なかには幾重か重なるものが見られ，もと織布に包んでの供献が行なわれていたらしいことなどが指摘できる程度である。

5．鉾状鉄器（図113・図版75）

奥壁部一括遺物群の西半から第1号棺の床面下にかけて，比較的近接した状態で遊離検出された4点である。いずれも錆化はしているがほぼ完形を保ち，鍛造によるつくりである。大きさや形状に差があるが，すべて鋒部は鋭利な切先となり，突くあるいは刺すという機能をもち，柄部は円錐形の袋柄で木製等の長柄のつく形態を示す。一括出土の形態や実物の形状から工具とするよりも，同時期埋納の武具と観る方が妥当と考えられ，一応鉾状鉄器としてまとめて記述したい。

鉾1，全長25.5cmと細長い剣身形狭鋒の鉾である。3つに錆化折損していたが，ほぼ完形に接合



第113図　岩田第14号墳出土鉄製利器実測図

表68　岩田第14号墳出土鉾状鉄器計測値

番　号	全　長	柄頭外径	柄頭円径	袋柄内深	柄外壁厚	重　量	備　考
	cm	cm	cm	cm	cm	g	
1	25.3	2.5	1.7	6.9	0.5	176	剣身狭鋒形
2	(12.9)	(2.9)	(2.3)	(7.0)	0.3	(96)	鑿刃形
3	12.1	2.9	2.2	5.6	0.35	(85)	円錐形
4	8.0	1.25	0.8	4.6	0.25	23	圭頭形，織布痕有

（　）内は現存部計測値

復元できた。袋柄部断面は円形，身部断面は菱形を呈し，袋部から鋒に向って漸次細まる形状をみせる。したがって身部は縦方向に4条の稜をもち，切先部は鋭くとがりいわゆる細身の槍を思わせる。袋部は左右からの突合せ部が認められない全くの円錐形を呈する。

鉾2，柄頭端を若干錆化欠損するもほぼ完形を保つ。現存長12.9cmとやや短かく，袋柄から漸次細まる先端部を扁平に叩き拡げて，刃巾 5.5cmの鑿刃形の鋒をもつ。袋柄の突き合せは約1mm～3mmの間隙をもち，柄頭になるにつれてより開く。

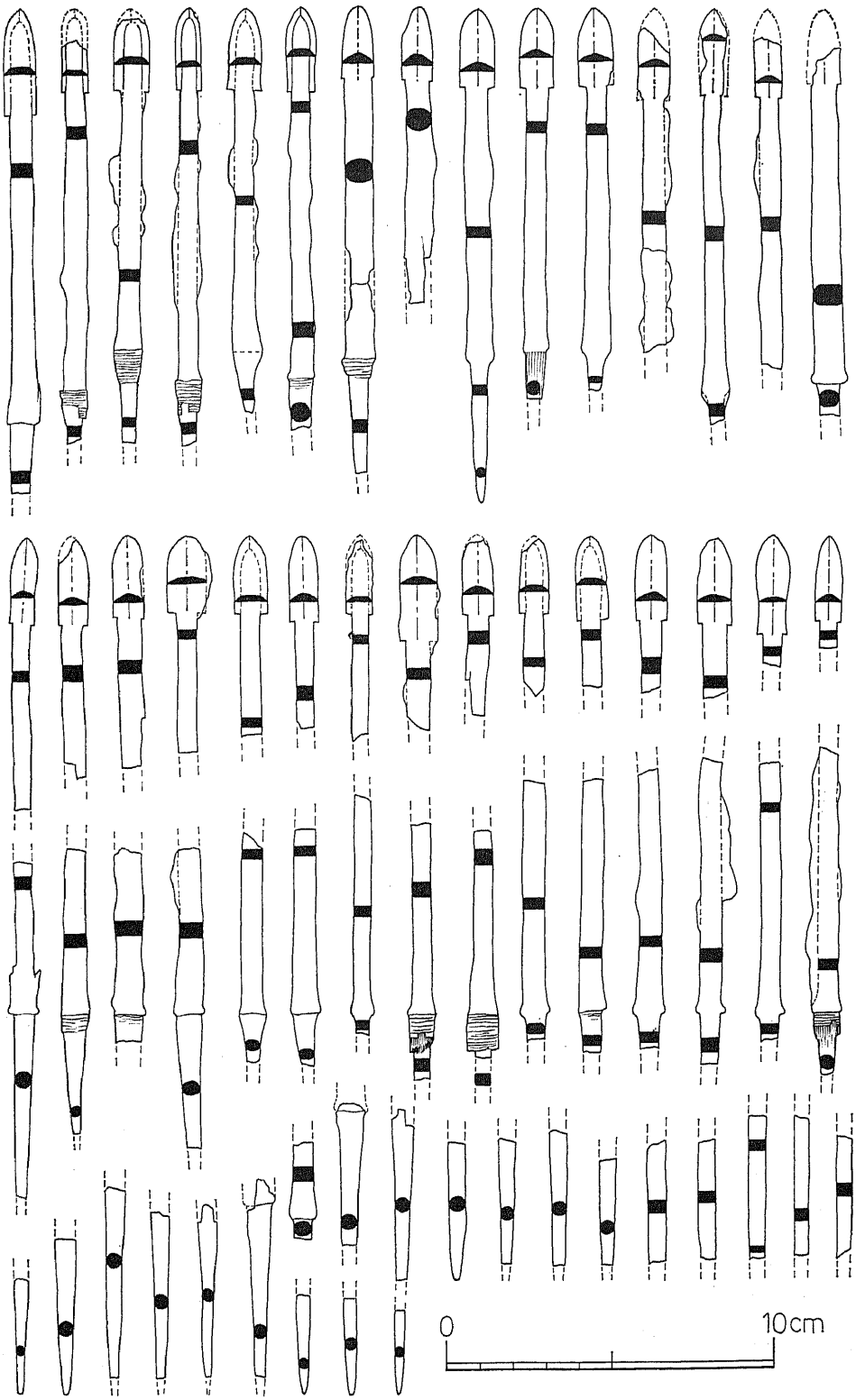
鉾3，袋柄端を一部欠損するもほぼ完形を保つ。全長12.1cmとやや短い剣身形狭鋒である。円錐形袋柄が漸次細まりそのまま鋒となるため，その横断面はいずれをとっても円形を呈する。鋒先がやや丸味をもって鈍くなり，(1)あるいは(2)にともなう石突の可能性も考えられるが，先端部に4方向から磨ぎだしたと思われる稜線も認められ，鉾先として取り扱かった。袋部の突き合せは間隙をもち，柄頭部になるにつれてその開きは大きくなり，約0.4cmを測る。

鉾4，全長8cm，袋柄頭部外径1.25cmの小形品である。鋒部は扁平な圭頭形を呈し，最大部巾2.6cm，厚さ0.5cmを測る。一見鉄鏃を思わせるほどである。柄部は左右から突合した円筒形につくられ，中央部は密着するものの，上下端部では約3mmの間隙がある。

6．尖根式鉄鏃（図114，115・図版74）

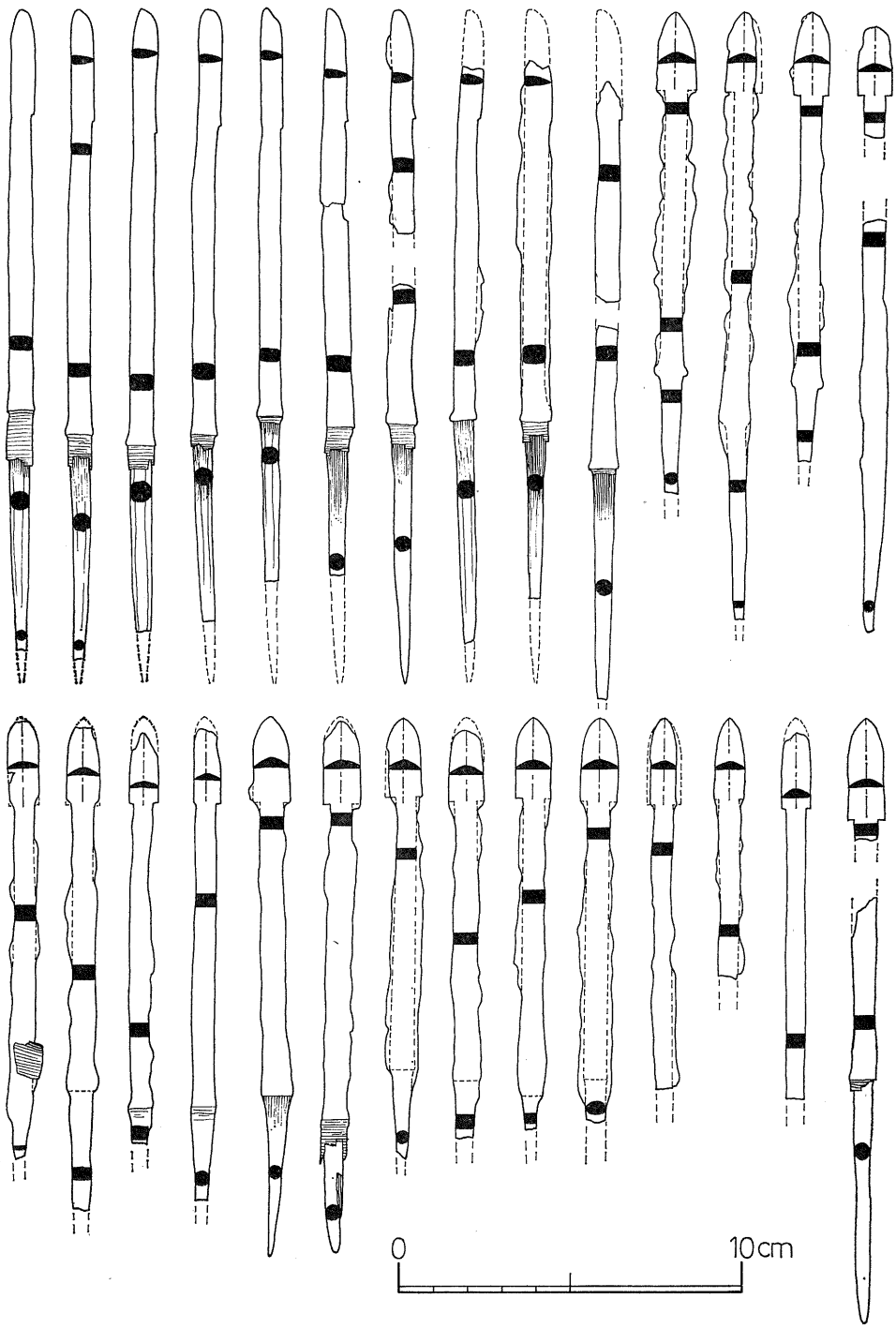
主として奥壁一括遺物群から第1号棺および第3号棺北半の棺床面下にかけて，集中的に遊離検出されたが，玄室内半や羨道床面などからも散見された。現存する木棺内に直接副葬された形状を示すものは皆無で，すべてこれら棺群に先行しての供献物らしく，二次移動を受けた遊離出土である。したがって完存するものはほとんど存在せず，大部分は錆化折損した状態で発見され，その総破片数は 428片を数えた。鏃身部を基準として個体数を検討した結果，少くとも90本以上存在することが判り，その内約60本を実測図示できた。いずれも鍛造によるつくりで，片関片刃のものと，片丸造りの2種類がある。量的には後者が圧倒的に多くその比率はざっと1対4程度である。なお鉄鏃計測値は完形またはほぼ完形に復元できるものを選んで，参考までに数本を表示したので了承願いたい。

片関片刃の鉄鏃は計測値に若干の差はあるものの，ほぼ均質の規格品である。平均計測値で全長約19.5cm，鏃身長 3.2cm，篦被長約9cm，茎長約7cmを測る。鏃身は片関であるが篦被とほとんど巾差がなく，刀子片に横断面が二等辺三角形を示す鋭利な鋒となる。平均刃巾0.7cm，背厚0.5cmで



第114図　岩田第14号墳出土鉄鏃実測図(1)

ある。篦被部は巾0.6cm×0.5cmの断面長方形をした棒鉄で，茎部は先端になるにつれて漸次細まる断面円形の長円錐形を呈する。先端部が鋭く尖り矢柄への挿入部が長い特徴を示す。茎部の篦被に接する部分に，篦被に密着して0.5cm～1.2cm位の間に細い糸で隙間なく緊縛されその上部にうるしが被膜となって遺存するものや，茎外表に錆着した矢柄材の竹が遺存するものがかなり検出され



第115図　岩田第14号墳出土鉄鏃実測図(2)

表69　岩田第14号墳尖根式鉄鏃計測値　　（単位cm）

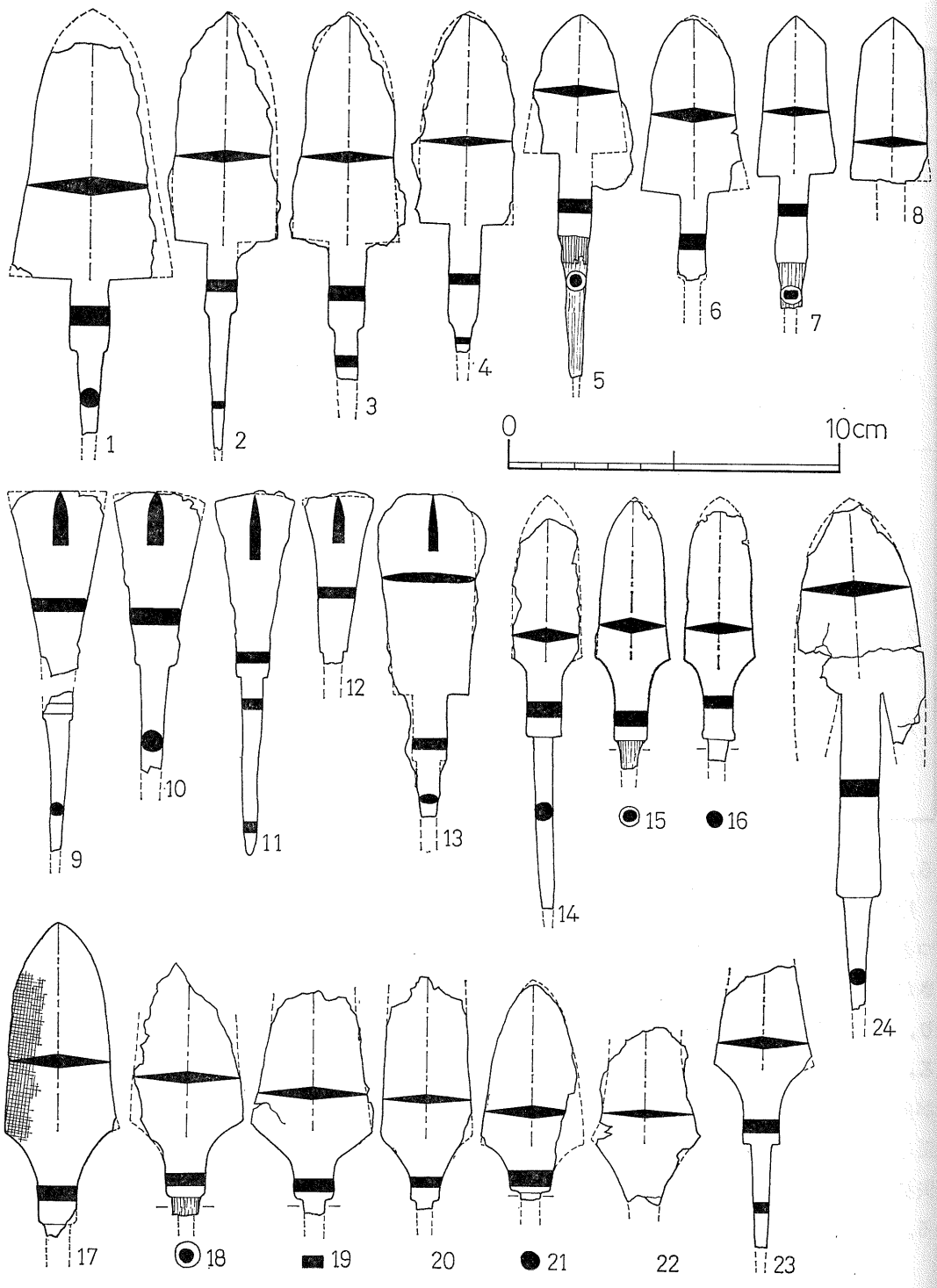
器種	全長	鏃身部			篦被部		茎部		備考
		長さ	巾	厚さ	長さ	巾	長さ	巾	
片関片刃形	18.5	3.0	0.78	0.5	10.3	0.55×0.55	5.5	0.5 ×0.5	巻糸痕有り
	19.7	3.1	0.65	0.45	9.2	0.6 ×0.6	7.4	0.5 ×0.5	巻糸痕有り
	19.7	3.6	0.8	0.5	8.9	0.6 ×0.6	7.2	0.6 ×0.55	巻糸痕有り
	18.1	3.4	0.7	0.45	8.3	0.65×0.5	6.4	0.5 ×0.55	巻糸痕有り
	17.9	3.1	0.65	0.5	8.0	0.6 ×0.45	6.8	0.55×0.5	矢柄材錆着巻
	17.4	2.8	0.8	0.6	9.7	0.6 ×0.6	4.9	0.55×0.5	糸痕矢柄材錆着
	17.8	2.8	0.9	0.55	9.6	0.65×0.6	5.4	0.6 ×0.45	巻糸痕有り
両丸形	15.7	2.7	1.2	0.5	8.52	0.7 ×0.5	4.5	0.5 ×0.5	巻糸痕有り
	15.7	2.2	1.1	0.37	8.4	0.7 ×0.45	4.0	0.4 ×0.3	—
	14.9	6.2	1.1	0.6	8.1	0.7 ×0.45	4.6	0.45×0.4	矢柄材錆着
	14.3	2.4	1.0	0.3	8.0	0.6 ×0.4	3.9	0.5 ×0.38	巻糸痕矢柄材錆着
	14.0	2.3	1.1	0.4	7.9	0.65×0.45	3.8	0.5 ×0.4	—
	15.4	2.6	1.1	0.35	9.1	0.65×0.45	3.7	0.5 ×0.45	—
	15.4	2.7	1.2	0.4	8.7	0.6 ×0.4	4.0	0.5 ×0.4	巻糸痕有り
	14.8	2.6	1.0	0.35	8.2	0.55×0.45	4.0	0.45×0.4	—

る。

片丸造りの鉄鏃は全長14cm～15cmと前者に較べてやや短かく，各部位の計測値にもかなりのばらつきが見られるが，基本的にはほぼ同巧のものである。鏃身は篦被部からほぼ直角に張り出した小さな関をもち，剣先形の形状を呈するが，刃部断面は片面のみが扁平なかまぼこ状に丸く盛りあがり，中心線上に鎬をもたない。刃部長は2.2cm～2.7cm，刃巾1.1cm～1.2cm，同厚0.3cm～0.6cmを測る。篦被部は巾0.6cm～0.7cm，厚さ0.4cm～0.6cmの断面長方形の平鉄板で，長さ８cm～９cmのものが多い。茎は篦被近くは断面長方形，先端になるにつれて断面が円形になって細まるが，先端部に至るまで角形のものもある。茎長は短かく平均４cm前後を測る。前述の片関片刃の鏃と同様茎部に矢柄竹材を錆着するものや，細い糸を巻いた上にうるしを塗った痕跡を残すものを若干見受けられる。

7. **平根式鉄鏃**（図116・図版74）

計24個体分を検出したが，出土の状況は先述の尖根式鉄鏃の場合とほぼ同様である。いずれも鍛造によるつくりであるが，錆化折損が著しく完形を保つものは１点のみである。しかし鏃身部の遺存度は比較的に良好で，検出例すべてについて実測図示とその大要を知ることができた。鏃身の形



第116図　岩田第14号墳出土鉄鏃実測図(3)

状で大別すると，三角形式8，鏨頭式5，柳葉式10，腸抉柳葉式1となる。同形式の中でも2～3点の割り合いで同巧同大のものが見受けられるものの，形状や大きさではかなりのばらつきがあ

表70　岩田第14号墳出土平根式鉄鏃計測値　　(単位cm)

形式	番号	全長	鏃身部			篦被部			茎部		
			長さ	最大巾	厚さ	長さ	巾	厚さ	長さ	巾	厚さ
三角形式	1	(11.8)	(7.0)	(4.2)	0.6	2.2	1.2	0.6	(2.6)	0.7	0.7
	2	(13.1)	6.9	3.1	0.4	2.1	0.9	0.3	(4.1)	0.6	0.3
	3	(10.9)	6.7	3.2	0.35	2.6	1.1	0.45	(1.6)	0.7	0.35
	4	(10.1)	6.3	2.9	0.3	3.1	0.9	0.3	(0.7)	0.5	0.2
	5	(10.9)	4.2	3.1	0.35	1.0	0.4	2.5	(5.7)	0.6	0.6
	6	(7.9)	5.4	3.2	0.45	2.4	0.8	0.45	(0.1)	?	?
	7	(8.75)	4.8	2.4	0.3	2.6	0.9	0.4	(1.35)	0.6	0.55
	8	(5.0)	5.0	2.4	0.3	—	—	—	?	?	?
鑿頭式	9	(10.8)	6.8	3.0	0.4	—	—	—	(4.0)	0.6	0.6
	10	(8.4)	5.2	2.75	0.5	—	—	—	(3.2)	0.75	0.75
	11	10.8	5.5	2.4	0.3	—	—	—	5.3	0.7	0.35
	12	(5.0)	4.6	2.1	0.3	—	—	—	(0.4)	0.6	0.4
	13	(9.6)	6.0	2.9	0.3	2.0	1.05	0.35	(1.6)	0.7	0.3
柳葉式	14	(11.6)	(4.5)	2.1	0.45	—	1.05	0.45	(7.1)	0.6	0.6
	15	(8.1)	7.2	2.25	0.5	—	1.0	0.45	(0.9)	0.6	0.6
	16	(7.5)	(6.8)	2.15	0.4	—	0.85	0.35	(0.7)	0.55	0.55
	17	(94.)	9.0	3.5	0.45	—	1.15	0.4	(0.4)	?	?
	18	(7.5)	(7.0)	3.5	0.35	—	1.2	0.35	(0.5)	0.8	0.8
	19	(6.6)	(6.2)	3.6	0.4	—	1.2	0.4	(0.4)	0.7	0.35
	20	(7.0)	(6.6)	2.2	0.3	—	0.9	0.3	(0.4)	0.5	0.3
	21	(6.6)	6.3	53.1	0.4	—	1.2	0.5	(0.3)	0.6	0.6
	22	(5.3)	(5.3)	(3.1)	0.3	—	?	?	?	?	?
	23	(8.5)	(5.3)	3.0	0.4	—	1.1	0.4	(3.2)	0.6	0.35
腸抉式	24	(15.1)	(5.6)	(3.7)	0.5	6.1	1.2	0.5	(3.4)	0.7	0.7

( ) 内数字は現存部計測値，柳葉式篦被覧数字は関部計測値を示す。

る。

三角形式鉄鏃（1～8），鏃身部は鎬造りで中央に稜をもち断面は菱形，関部は直角に張っている。いずれも篦被をもち断面長方形の平鉄であるが，茎部断面は方形のものと円形のものがある。(5)および(7)の茎には矢柄竹材が銹着遺存している。

鑿頭式鉄鏃（９～13），鏃身は平造りで横断面は長方形を呈する。関部は鍵形となって篦被を伴なわず直接茎部に連なるが，茎部横断面は円形のものと角形のものがある。ただし(13)は錆化が著しく細部については判然としないが，鏃身部は両丸造りの平板で篦被をもち，他の４例とは異るな形状を示す。

柳葉式鉄鏃（14～23），（14～16）のように均整のとれた細身のものと，（17～23）の刃巾の広い２種がある。いずれも鏃身部は鎬造りで横断面は菱形，関部は断面長方形につくりだされて篦被はもたず，直接茎部となっている。茎部断面は円形のものと角形のものがある。(15)と(18)の茎部に矢柄竹材の錆着遺存と(17)の鏃身部外表に織布目が圧痕となって遺存していた。

腸抉柳葉式鉄鏃(24)，現存長15.1㎝と大形の鏃であるが，錆化欠損部が多く詳細は不明である。基本的には前記柳葉式と同巧の造りと思われるが篦被が1.6㎝と長い。

第６節　馬　　具

轡２，鐘形杏葉５，雲珠１，辻金具１，留金具８，鋲具７のほか鐙や鞍金具片若干を検出した。これらの大部分は奥壁部一括遺物群から第１号棺床面下にかけて，敷き込まれた形状で遊離発見されたが，鞍金具や鋲具片等の一部は玄室袖隅部や羨道床面などからも散見された。いずれも前述の鉄鏃等と同様，本古墳への追葬の過程で石室床面が整地替えされる以前の，第１次埋葬時における供献物が二次移動を受けたものと考えられる。

1．轡（図117・図版77）

大小２組の轡が出土した。大きい方の轡は奥壁一括遺物群東端の底の方から土器などと共に混在し，小さい方の轡は第１号棺中央付近の床面下からの遊離発見である。いずれも断面円形を呈する棒状の鉄でつくられた同巧手法のもので飾りをもたない。各部位の接続はすべて遊環で連結している。

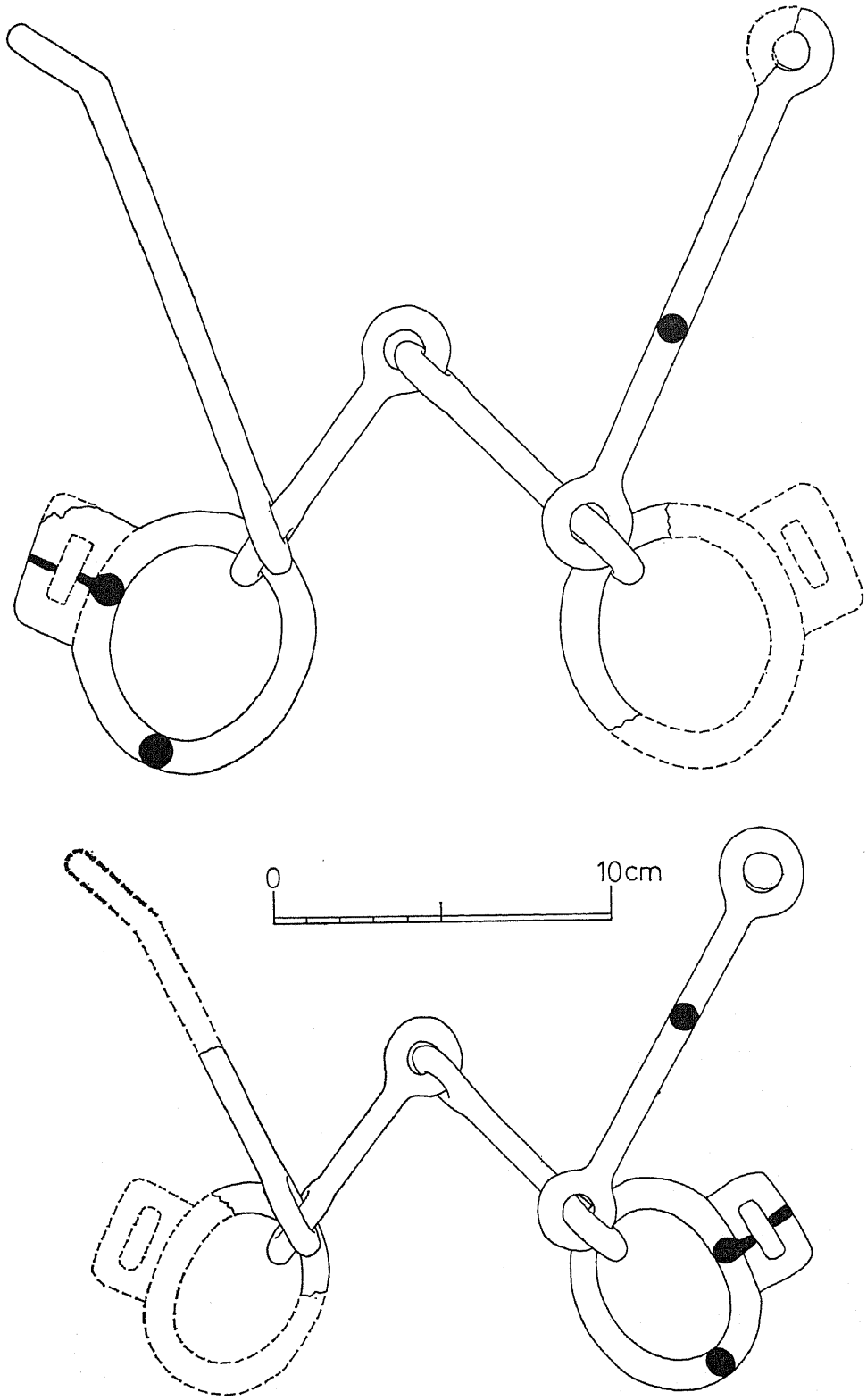
鏡板は楕円形の素環で外縁側方に長方形の立聞がつく。銜は中央で遊環連結された２本の棒鉄，引手は鏡側の銜遊環に連結された１本の棒鉄で構成され，引手壺となる環部は緩くくの字形に曲げている。

表71　岩田第14号墳出土轡計測値　　（単位㎝）

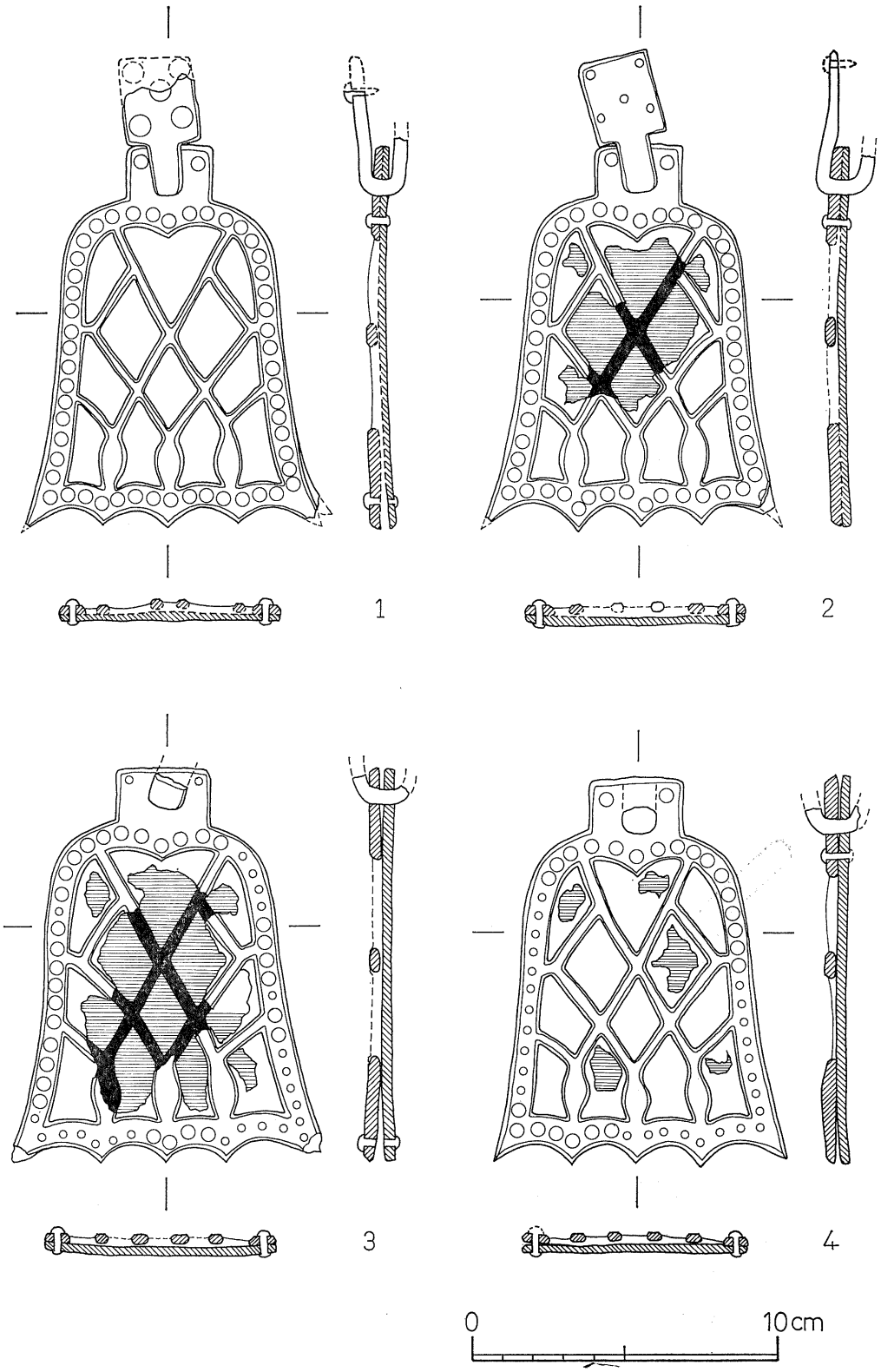
番号	鏡		総通し		銜		引手		棒鉄径
	外法長径	外法短径	長さ	巾	長さ	環外径	長さ	環外径	
1	7.9	7.1	4.1	2.1	10.0	2.6	18.1	2.7	0.9
2	6.6	5.2	3.4	2.0	8.7	2.3	13.9	2.7	0.8

2．鐘形杏葉（図118，119・図版76）

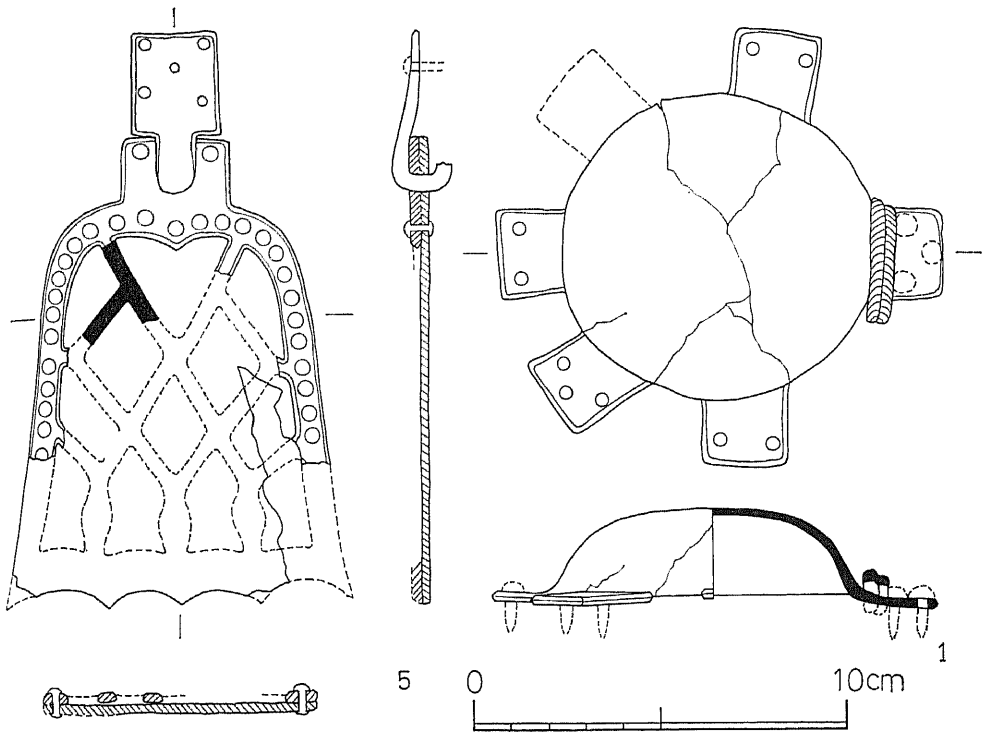
第１号棺床面下に敷き込まれた形状で３枚と，その周辺遊離の２枚の計５枚が比較的に近接して遊離検出された。いずれも本古墳への追葬の過程で二次移動を受け，全長約12.5㎝，下辺巾約 9.8



第117図　岩田第14号墳出土轡実測図



第118図　岩田第14号墳出土鐘形杏葉実測図



第119図　岩田第14号墳出土杏葉雲珠実測図

cmとほぼ同巧同大の1セットのものと推察される。銹化腐蝕のため一部を欠損するものもあるが，大部分はほぼ完形を保ち，表面に張られた金銀の遺存もかなり良好で，表面の斜格子文とともに注目された。

(1)は銀張りその他は金張りであるが，いずれも重ね造りの鉄地金銅張り鐘形杏葉である。下縁の5か所をとがらせて4波形をつくり，上端部に長方形の力革吊り部をもつ。台板は無文の平鉄で上板の外形と合せてつくり，その上に斜格子の透彫を施した上板を載せ，外縁部に沿って一列に笠鋲を打ち並べて，固着と装飾を兼ねさせている。器表の金銀の張りつけは，笠鋲の上から器表全面を覆うように施している。

笠鋲は鋲間約 0.6cmのほぼ等間隔で，杏葉外縁を繞るように整然と密着して打たれ，一周51～55

表72　岩田第14号墳出土鐘形杏葉計測値　　(単位cm)

番号	全長	底辺巾	上端巾	側縁巾	縁部厚	鋲頭径	鋲身径	備考
1	12.4	9.8	2.85	0.9	0.8	0.4	0.2	鉄地銀張
2	12.5	9.8	2.85	1.0	0.7	0.4	0.2	鉄地金張
3	12.7	10.0	3.10	0.9	0.7	0.4	0.2	鉄地金張
4	12.5	9.5	3.10	0.9	0.7	0.4	0.2	鉄地金張
5	12.6	(9.8)	2.80	0.85	0.6	0.4	0.2	鉄地金張

本を数えるが，力革受部の左右にも各１本の計２本が打ち込まれている。鋲は頭部が半球形の飾り鋲で径0.5㎝，高さ0.25㎝，鋲身径0.2㎝を測り，台板の裏面ではかすめ留めして若干の突出をみせる。実測図中小円で示した部分は笠部が脱落して鋲身のみの遺存するものである。力革受部は長方形鉄板をU字形に折り曲げて，杏葉頭部の貫孔部に接続しているが，いずれもその金具が錆着遺存するため，貫孔部の形状は明らかでない。

3. 雲珠（図119・図版76）

奥壁一括遺物群の西半部，第１号棺北小口外方の石材上で遊離検出の大形雲珠である。数片に折損していたがほぼ完形に接合復元できた。錆化した鉄製品で装飾や施文は認められないが，器表に緑青錆と金が僅かに遺存することから，原形は鉄地金銅製品と思われる。

扁平な半球形の外縁部に方形の６脚を有するが，脚の配置は等分割でなく，図示したごとくややかたよりをみせる。脚の先端部には飾り笠鋲２～３本が打たれ，その裏面には皮革状のものが錆置換されて遺存し，鋲端は折り曲げてあるのが見受けられる。また１脚のみであるが，脚と体部のつけ根部に鉄製遊環を残存する。対面する脚先端間の全長11.8㎝，体部径8.3㎝，器高2.4㎝，脚巾2.4㎝，脚長1.7㎝～2.1㎝，器壁厚約0.3㎝を測る。

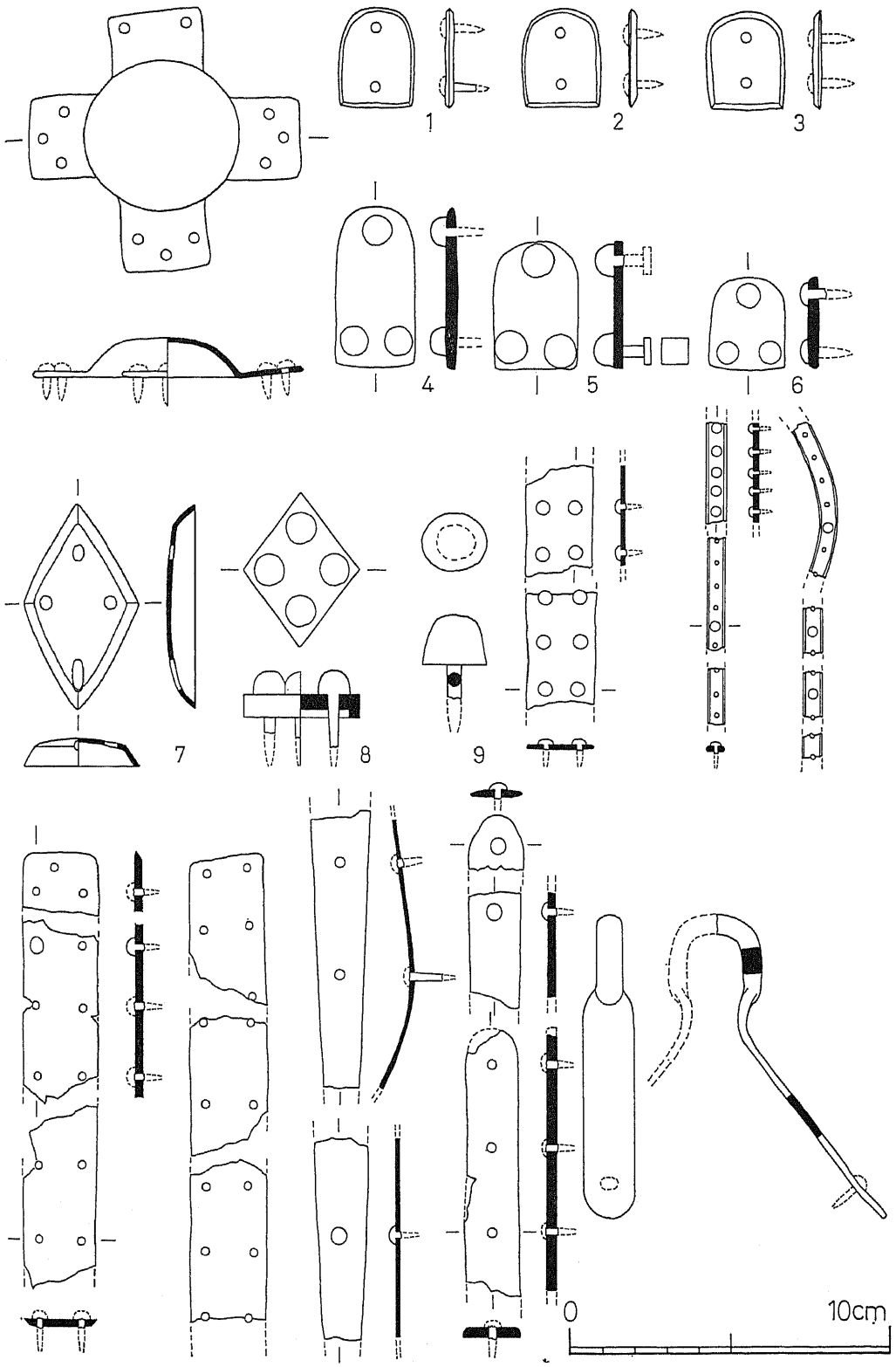
4. 辻金具（図120・図版76）

第１号棺床面下に敷き込まれた形状で杏葉などと共に遊離検出された１点である。扁平な半球形の体部に十文字形に方形脚をもつ。鉄地金銅製でほぼ完形を保つが，現況は鉄錆化が進み，金はやっとその痕跡を認知できる程度の遺存である。脚の先端部に各２～３本の鋲身の遺存と，裏面に鉄錆に置換した革状のものが遺存し，鋲先の突出が約 0.6㎝程度認められる。鋲はもと頭部が半球形の飾り鋲であったと思われる。対面する脚の先端間全長8.3㎝，円体部径3.5㎝，器高1.25㎝，脚先端巾2.4㎝，脚長1.9㎝器壁厚0.2㎝を測る。

5. 留金具（図120・図版78）

長方形の小口部一端が外ふくらみに丸く湾曲した形式のもの６と，扁平な菱形のもの２である。前者の長さは2.8㎝～4.9㎝と個体差があるが，巾 2.3㎝～2.5㎝，厚さ0.3㎝の平板で，長軸中心線上に２本または，湾曲部側を頂角とする三角形状に３本の，頭部が半球状の笠鋲が打ち込まれている。笠鋲は(1)(2)(3)(6)では頭部径0.7㎝，同高0.25㎝，鋲身径0.3㎝を測り，鋲の先端部は折り曲げられているが，金具長の長い(4)(6)では笠鋲頭部径１㎝，同高0.6㎝と大きく，(5)の鋲先端部は方形座金にかすめ止めされていて，その間隙巾は0.6㎝を測る。いずれも鉄地製品であるが，(1)の器表に金，(2)(3)の器表に緑青錆が認められ，原形は鉄地金銅張りのつくりと推察される。(2)(3)を除く他の裏面には鉄錆に置換された皮革痕跡をとどめている。

菱形のものは製作手法もかなり異なるので個別に記述する。(7)は器壁の薄い扁平な長菱形の鉄地金銅製である。長軸長6.2㎝，短軸長3.1㎝，器高0.85㎝，器壁厚0.15㎝を測る。各頂角部に小円孔をもち，原形は鋲を打ち込まれたものと推察されるが現存しない。(8)は鉄製品である。台部の器厚



第120図　岩田第14号墳出土辻金具，留金具等実測図

も厚く上部は水平側面は垂直につくられている。長軸長4.7cm，短軸長3.6cm，器高 0.7cm，水平部器厚0.45cm，側面器厚0.3cmを測る。各頂角部１本の計４本の頭部半球形の笠鋲が打たれている が鋲の頭部径１cm，同高0.7cm，鋲身径0.3cmを測り，裏面に0.9cmも先端が突出しているものもある。

以上の他に１本，頭部が丸味をもった載頭円錐形の大形笠釘状のもの(9)が検出された。頭部表面は鉄地金銅製で馬具にともなう飾り金具の一部と推察される。頭部径1.9cm， 同高1.5cm，釘 部 径0.4cm，同現存長1.1cmを測る。

6. 鞍金具（図120・図版78）

巾約0.6cm，厚さ約0.15cm～0.2cmの鉄地金銅張りの帯板に，0.5cm～0.7cmの間隔に小鋲を打ったもので，直線的なものと円弧を描いているものがある。鋲の頭は直径 0.3cm，高さ0.15cmの断面半円形の笠鋲で，裏面に僅かに先端が突出している。検出例は全部で７片のみでその総延長は16.1cmと少ないが，形状から推して鞍の縁金具と推察される。

7. 鐙（図120，121・図版77）

壺鐙外表の飾り金具と思われる笠鋲を打った鉄地金銅張りの平板片と，鐙を吊ったと思われる鉄製鎖片である。飾り金具片は玄室内のかなり広い範囲に散っていたが，鎖は奥壁一括遺物群の西半部，第１号棺北小口の外方の石材下から一括出土した。

飾り金具は図120にも図示したようにいずれも断片で詳細は不明であるが，巾2.4cm程度のやや広いものと，巾1.8cm程度の狭い２通りがあり，厚さはいずれも0.15cm～0.2cmほどの平板である。原則として巾広のものの器表に金がよく遺存し，両側の縁に沿って笠鋲が約1.4cm～2.4cmの間隔で２列に打たれ，巾狭のものは中軸線上に１列打たれ器表の金は認められない。鋲の頭部は径 0.5cm，同高0.25cmを測り断面半円形の飾り鋲である。部分によっては裏面に約 0.9cm突出するものもあり木質が鋲身および平鉄裏面に錆着遺存することから木製壺鐙の縁部飾り金具片と想定される。検出破片数は総数で16片，その総延長は約60cmである。

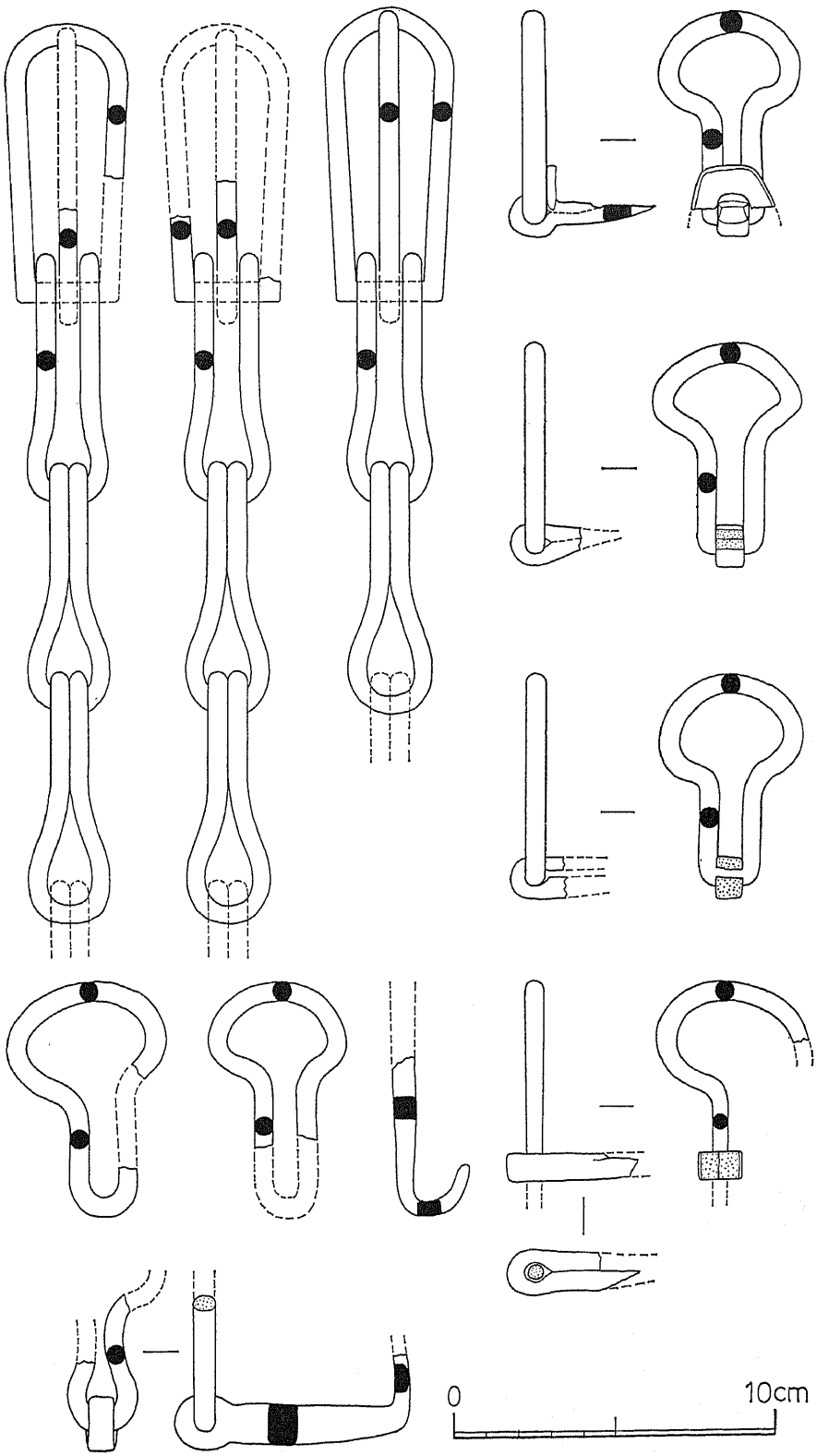
鎖は３連分の検出である。いずれも間巾の長い同巧同大の兵庫鎖で先端部に鉸具を付している。直径0.6cmの円棒鉄を二つ折りにして連結しているが，１間の長さ7.7cm，遊環部外法巾 2.6cmを測る。先端部の鉸具は長方形の一端を丸く湾曲させたつくりで，鎖側巾3.3cm，最大巾 3.9cm， 全 長8.5cmを測る。

8. 鉸具（図121・図版78）

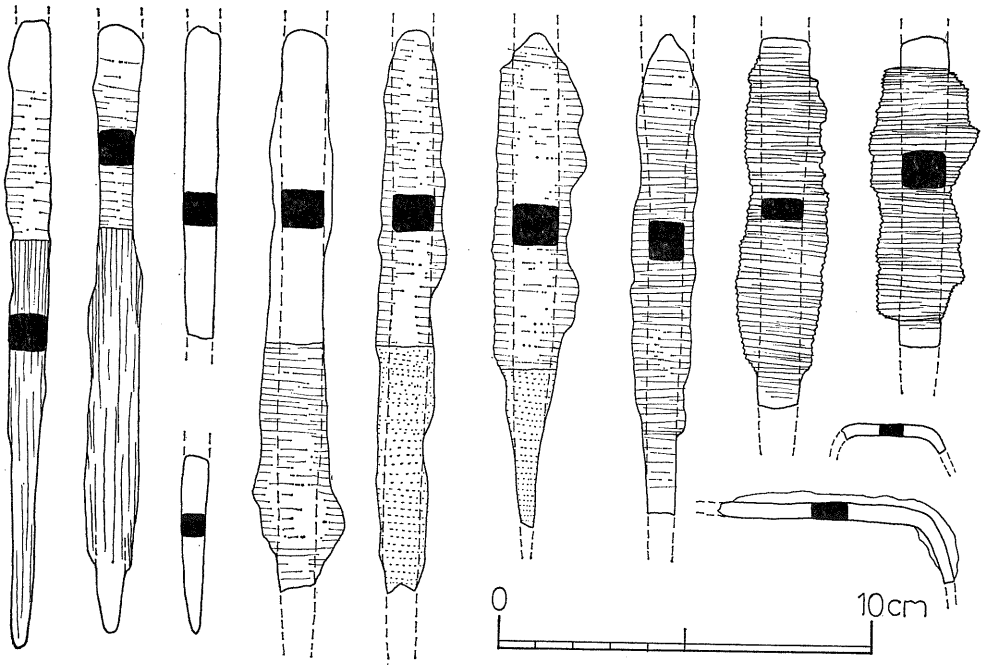
計８個体分を検出したが，いずれも断面円形の棒鉄を瓢形に曲げてつくったほぼ同巧同大のものである。全長約6.6cm，最大部巾4.3cm～5.1cm，体部断面径0.6cmを測る。なかに楔部を遺存するものがあり，約３cmの深さまで木質部に打ち込まれていた木質痕跡を残すものも認められた。

第７節　釘 ・ 鎹

本古墳の埋葬主体は木棺多数埋葬のため釘および鎹の出土も多かった。

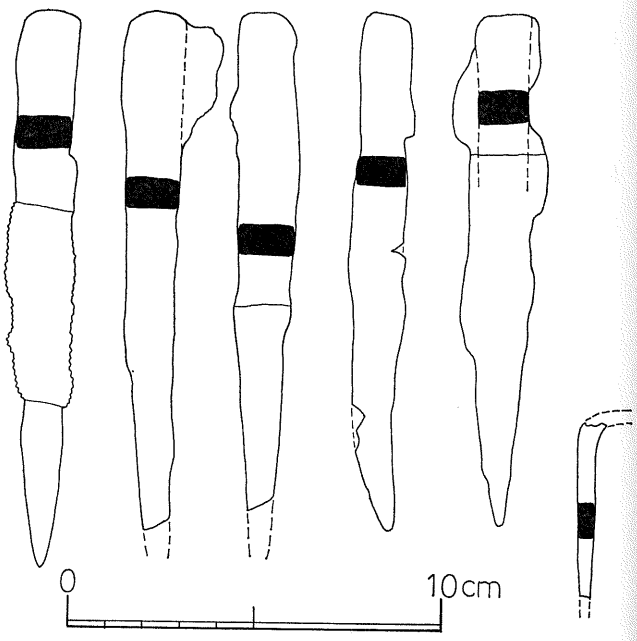


第121図　岩田第14号墳出土鐙鎖，鉸具等実測図

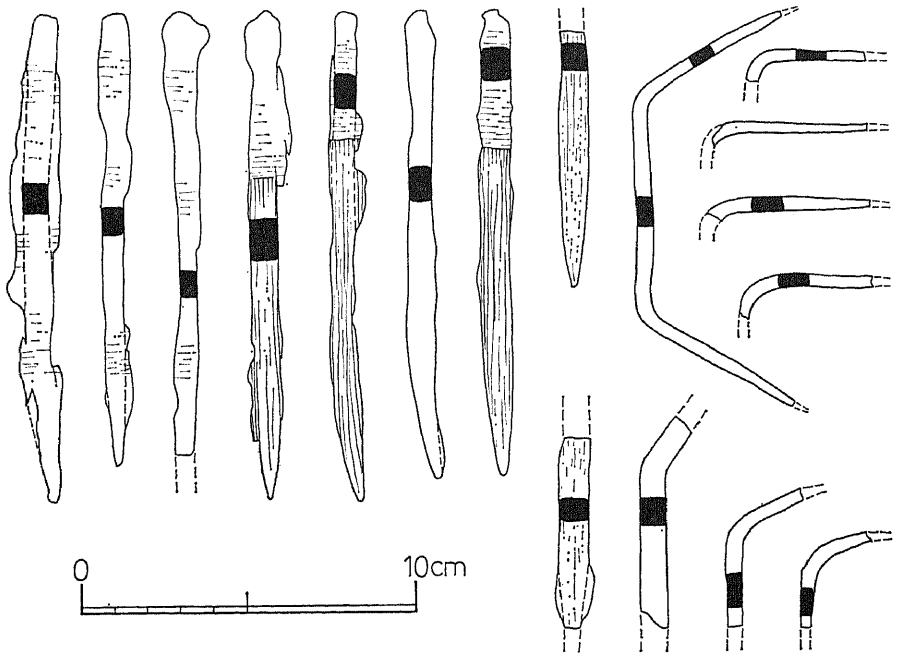


第122図　岩田第14号墳出土第1号棺鉄釘実測図

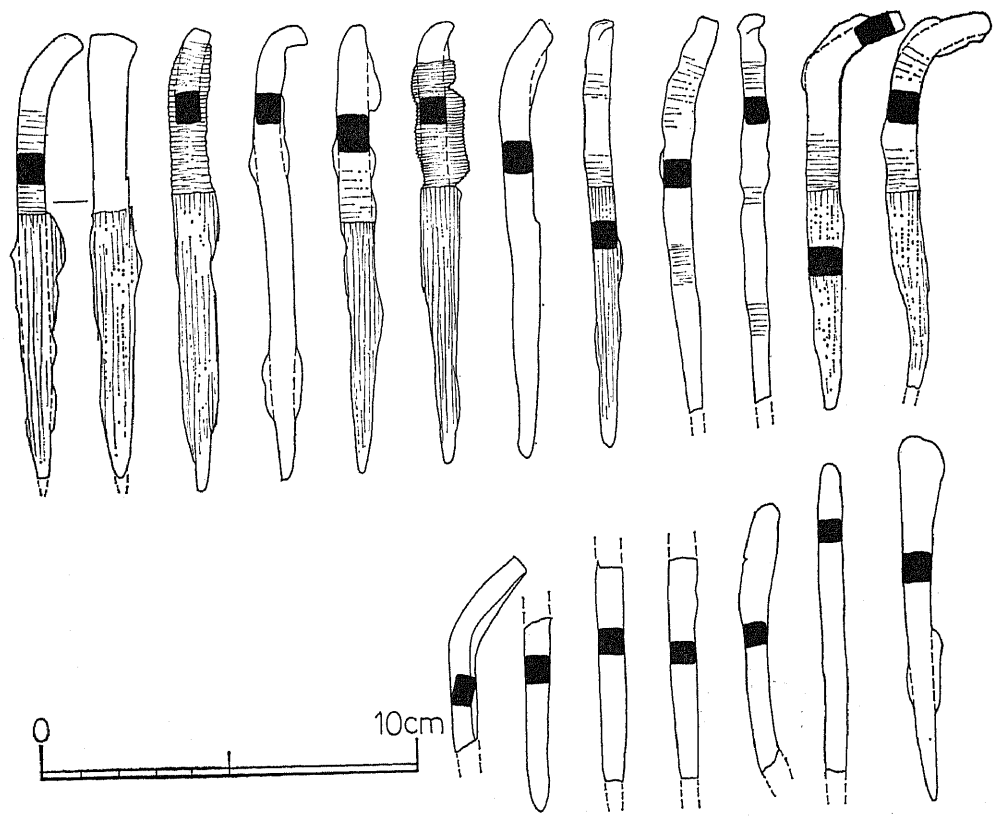
鉄釘はいずれも鉄道犬釘状の角釘である。総検出個体数は75本を数えたが，その大半は現存木棺と伴出するものが多い。各棺毎に分けて実測図示したので参照願いたい。第1号棺の釘は完存品で全長15cm～16cm，横断面は方形に近く，頭部付近で平均 1.1cm角を測るが太さはかなりのばらつきをみせる。第2号棺および第3号棺の釘は全長約14.5cmとやや短かく，横断面も0.7cm×1.4cmと長方形を呈する。第5号棺の釘はやや細形で全長約14cm横断面は0.8cm×1.0cmと方形に近いが太さにかなりのばらつきがある。第6号棺の釘は小形品である。完存品で全長11cm程度，太さも横断面方形に近い0.7cm方程度である。この他に遊離検出の鉄釘約20本がある（図127）が，現存木棺床面下に敷き込まれた形で，これらに先行すると思われる釘の中には，全長16cm，頭部巾1cm×1.5cmと大形のものが多い特徴をもつ。鉄釘の外表には当然のことながら，木棺材の木質を銹着遺存するものが多く，木目



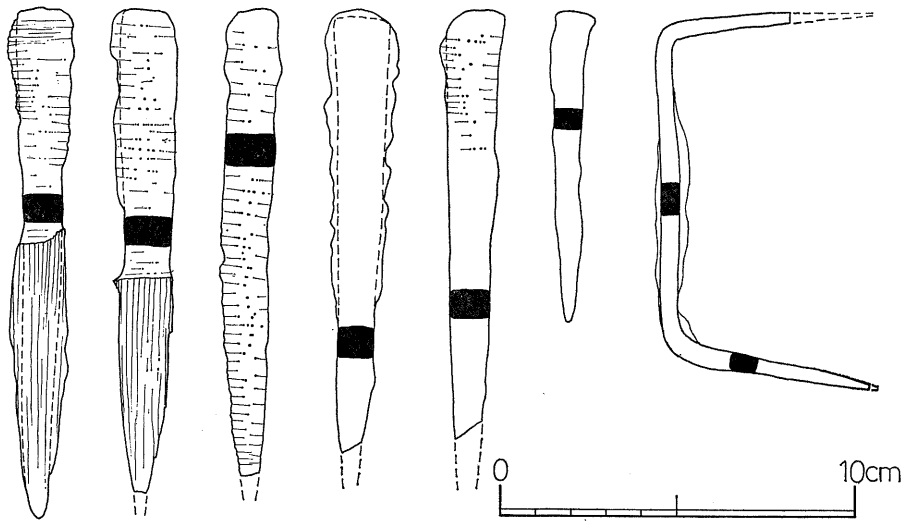
第123図　岩田第14号墳出土第2号棺鉄釘実測図



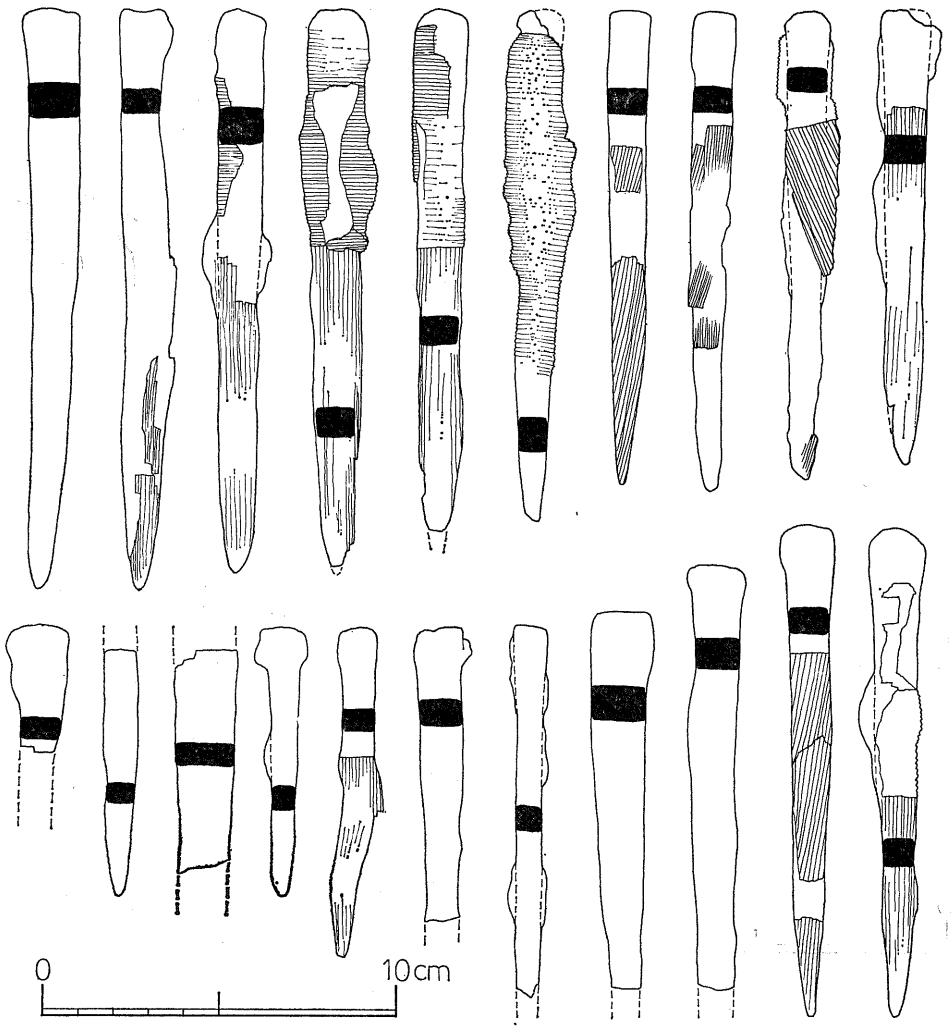
第124図　岩田第14号墳出土第5号棺鉄釘等実測図



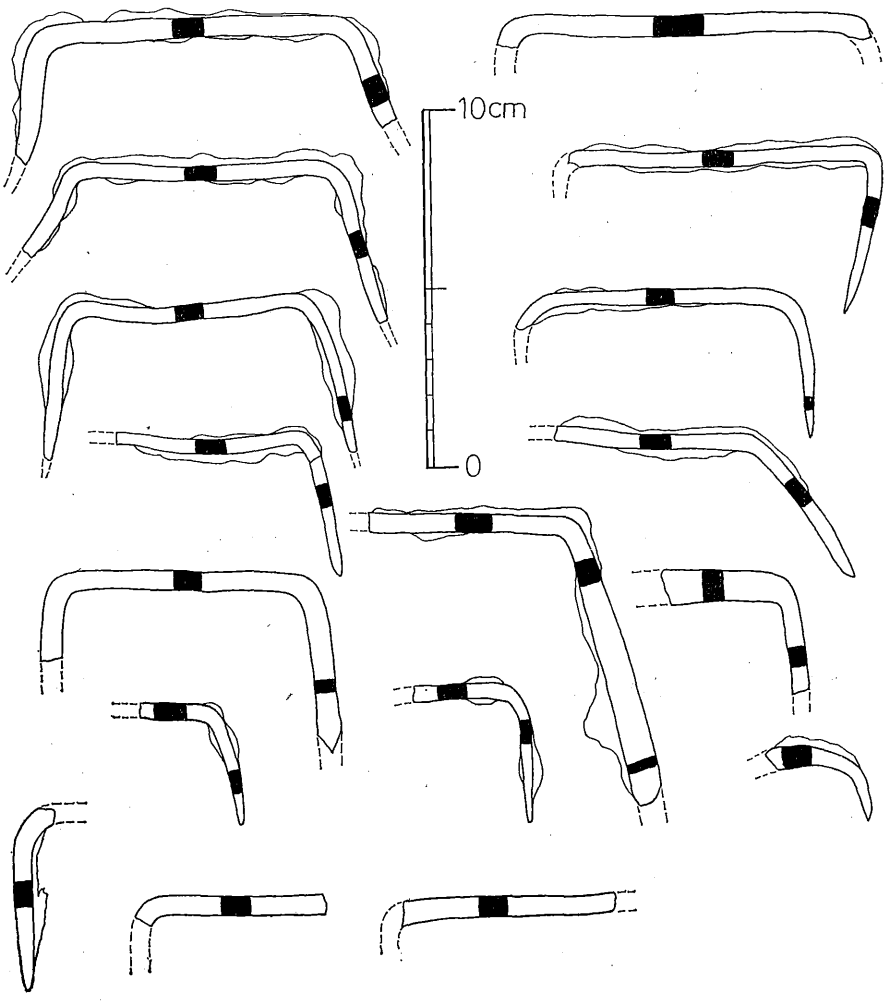
第125図　岩田第14号墳出土第6号棺鉄釘実測図



第126図　岩田第14号墳出土第3号棺鉄釘等実測図



第127図　岩田第14号墳出土遊離鉄釘実測図



第128図　岩田第14号墳出土鎹実測図

の走向で棺板の厚さを推察すると，現存木棺床面下釘で6.5cm～6.8cm，第1号棺底板8.4cm，側板5.5cm～5.8cm，第3号棺6.6cm～7.4cm，第5号棺4cm～4.8cm，第6号棺4.3cm～4.8cmとなる。

鎹は計58片の検出であるが，完形品7を含む23本分が確認された。ほぼ玄室底面全体に散った形状で散在し，現存木棺床面等に浮くものもあったが，大半は整地替面の下方に遊離するところから現存木棺に先行する埋葬に伴なうものと推察される。断面が長方形を呈するやや扁平な棒鉄をコの字形に折り曲げたつくりで，先端部は薄く鋭利である。大半のものが木質痕を銹着遺存することから木材すなわち，木棺組みたてに用いられた可能性が強いが，その実態は明らかでない。太さや大きさにもかなりの差をみせ，大は背部長9.2cm～10.4cm，爪部長4.5cm～6cmを測るが，小は背部長7cm～6cm，爪部長3cm～3.5cm程度のものもある。なかに1例だけであるが背部長2.5cm，断面の巾0.3cm×0.6cmの鎹が検出され注目された。

第6章　古墳の年代

本古墳は何回か繰り返し述べたとおり，数世代にわたる多数埋葬である。今次発掘調査において玄室床面いっぱいに整然と並ぶ７木棺の床部痕跡を確認することができたが，奥壁部の一括遺物群をはじめ，これら現存木棺の床面下に敷き込まれた形状で，遊離検出された多数の遺物や石材の出土状況などから，現存木棺のすべては本古墳への追葬が行なわれる過程で，石室床面を一度整地しなおした後の埋葬と考えられる。したがって本古墳への葬送は現存木棺に先行する第１次埋葬数体と，石室床面整地替え後の第２次埋葬７体以上の追葬が行なわれている。

現存木棺７棺の内第１号棺を除く６棺が金環を伴出し，いずれも同巧同大の２個を１対として，直接被葬者に着装した状態で検出され，ほかにこれらに先行する形で３対分が遊離検出されることから，本古墳の被葬者数を金環を基準にして考えると，第１次埋葬３体以上，第２次埋葬の７棺を加えて計10体以上の埋葬と考えられる。なお現存木棺の棺内副葬品は極めて簡素で，金環と若干の玉類を供献しているほかは，直刀を伴出する棺は第１号棺と第３号棺の２棺だけである。その他にこれら現存木棺に先行する遺物群の中に，環頭太刀２口を含む４口の刀が存在することから，第１次埋葬の棺の中にも１棺ないし２棺が直刀を副葬していたと思われる。こうした直刀を供献された被葬者を家父長層の棺と考えると，本古墳の被葬者は３～４世代の家父長およびその近親者の埋葬と考えられる。

次に視点を変えて土器群等の棺外副葬品と被葬者の関係について観ると，本古墳出土の副葬品は土器をはじめ武具や馬具など，種類および数量とも豊富であるにもかかわらず，若干の棺内遺物のほかは現存する木棺との共伴関係が認められない。少くとも玄室内出土の遊離検出の副葬品の殆んどは，石室床面を整地する以前，すなわち現存木棺のすべてに先行する第１次埋葬の，被葬者に対しての供献物と思われる出土状況を示す。したがって大量の土器をはじめ，鐘形杏葉５枚を含む馬具２組，環頭太刀や鉾および鉄鏃等の武具，それに紡錘車や装身具等の豊富な副葬品を供献された被葬者は，本古墳築成後の比較的初期の段階の人々に限られ，後半に埋葬された被葬者たちは，本古墳の石室規模が大形であるにもかかわらず，簡素な棺内副葬品のほかには，土器群等現代にまで遺存する棺外副葬品を石室内にあまり供献されていない。そのため 200点に近い大量の玄室内出土の須恵器も，被葬者数の多い割には形式変化もさして認められず，ある限られた期間内での副葬の形態を示すのである。

このことは横穴式石室を内部主体とする当岩田古墳群の調査でも，石室に袖をもち規模も大きく多数埋葬の第８号墳も同様の傾向をみせ，これらに遅れて築造された第９号墳，第11号墳，第12号墳等，袖をもたない小規模石室では石室内副葬品も簡素である。したがって同一地域内に群集する横穴式石室墳でも，他に先行して大規模な石室を構築して埋葬される被葬者は，質量ともに豊富な供献物を副葬された首長墓としての体裁を示すが，僅か数世代後に追葬される被葬者は，これらに遅れて小規模石室をやっと営造し得るようになった家父長層の被葬者と，副葬品の上では大差のない簡素な葬送のあり方を示し，階層分化の一端を如実に表わしているのである。また古墳築造の年代および葬送に用いられた期間についても，ただ単に出土遺物の形式観や年代観でもって機械的に論ずるのではなく，常に上記の事柄も充分留意しなくてはならないことを痛感した次第である。

本古墳の築造の時期は，石室の構造や規模，玄室奥壁部等の一括須恵器および環頭太刀や馬具の

鐘形杏葉等の，比較的初期の埋納と推定される諸遺物の編年観から，6世紀後半と考えられる。そして3～4世代10人以上の追葬が行なわれたと推察されるが，羨道部床面の利用状況が不詳のためその実態は明らかでない。しかし羨道部床面に並べて置かれた状態で検出された，擬宝珠つまみのついた須恵器蓋5点は7世紀初頭の所産と考えられ，少くとも7世紀代初頭までは継続的に追葬墓として利用されたものと推察される。

第7章　ま　と　め

1. 本古墳は埋積平地の一角に張りだした低丘陵の中腹斜面に築造された，右袖横穴式石室を内部主体とした円墳である。
2. すでに石材採掘の目的で盗掘され，墳丘も外観からはその存在がわからないまでに消滅し，石室も天井石のすべてと側壁の一部石材を持ち去られ，後の二次堆積によって埋没していたが，発掘調査の結果残存石室の遺存度は床面も含めて極めて良好で，その大要を知ることができた。
3. 本古墳の築成は丘陵傾斜面を利用して等高線に直交する石室掘り方を掘り込み，その中に右袖の横穴式石室を構築した後，地形の高い側に円弧状の周湟を掘って，墳域を画するとともに，その土砂をもって墳丘を築造した形式のものである。
4. 本古墳の墳形および規模は，地形の高い北側斜面に残る周湟の溝状掘り方と，現存石室の形状から推考して径20m，墳高約2.5m程度と推察され，葺石，埴輪等の外表施設はともなわない。
5. 石室は丘陵傾斜面に直交して掘り込まれた長大な掘り方内に，花崗岩の自然転石を利用して半地下式に構築された，大形の右袖横穴式石室である。すでに破損されている割には残存石室の遺存度は良好でほぼ原況を保っている。天井および羨門閉塞施設の状態は不明であるが，石室壁面は玄室側壁がやや持ち送りをみせるほかはほぼ垂直に築かれている。石室規模は全長11.8m，玄室長5.5m，羨道長6.3m，玄室最大巾2.68m，羨道平均巾1.7m，玄室奥壁高2.7m，羨道部推定高2.05mを測る。石室の長軸中心線の方位は北9度西を示し，ほぼ南に開口している。
6. 石室床面は地山マサ土を入れて水平に整地したもので，礫床とか粘土床などの特別な施設は施されていない。玄室床面いっぱいに整然と並ぶ横3列縦2列の木棺と，羨道部に近い第6号棺の上に重なる第7号棺の，計7棺の床面痕跡が確認された。しかしこれら7木棺はいずれも，本古墳への追葬の過程で一度石室床面を整地しなおした後の埋葬であり，これに先行する数人の被葬者のあったことを物語っている。棺内副葬の金環を基準として被葬者数を推定すると，少くとも10人以上3～4世代にわたる追葬が行なわれたと考えられる。
7. 本古墳出土の副葬品は表41にも示したとおり，器種および数量ともに豊富である。しかし現存する7木棺の棺内に直接副葬された遺物や，その他の棺内供献遺物は極めて簡素で，その大部分はすでに追葬の過程で撹乱消滅している。本古墳初期の被葬者に対して供献された出土状況を示す。このことから横穴式石室内に埋葬される被葬者もその前半と後半においては，葬送のあり方および社会構造に大きな変化のあることを伺うことができるのである。
8. 本古墳の築造年代は，石室の構造および伴出遺物の編年観から，6世紀中葉または後半の時期

と推定され，その終期については不詳であるが，羨道部床面出土の擬宝珠つまみ付須恵器蓋の特徴から，少くとも7世紀初頭までは追葬が行なわれたものと考えられる。

9. 本古墳の発掘調査において特に注目されることは，石室床面を整地替えしてまでもの多数被葬者の追葬の実態と，環頭太刀，鐘形杏葉を含む馬具，豊富な須恵器と土師器の伴出関係等の個々の遺物の資料集成に加えて，時代によっての供献品の変化等の貴重な資料を新らしく追加し得たことである。

Ⅷ 岩田古墳群総括

今回発掘調査した岩田古墳群９基は，埋積平地の一角に張りだした低丘陵群の，尾根支脈稜線やその斜面に群在する小円墳である。すべてが横穴式石室を内部主体とする，古墳時代後期群集墳の一般的様相を呈している。

当該地は花崗岩媒乱土で形成され，その自然転石も多く人里にも近いことから，古くより村人たちの採石山として活用されてきた。そのため丘陵上のあちこちに採掘坑が掘られ地形変化も著しい。当岩田古墳群も採石地として格好の目標とされたらしく，いずれも盗掘されていた。墳丘は採掘時の破壊や後の流土とか埋積のため消滅し，分布調査等の外面観察では，その存在を認知できないものが多かったほどである。当地に複合立地する弥生時代の集落址を発掘調査中に，偶然石室を掘り当てはじめて発見できたものも多い。中には石材を殆んど持ち去られ，やっとその痕跡をとどめる程度の古墳もかなりあった。

このため各古墳の墳丘や石室は原形を保たず，その構造や規模および副葬遺物の状況など不明な点も多い。またすでに消滅してしまい今次調査で確認できない古墳が存在した可能性も強い。しかし一方では，石室の天井石や羨門閉塞施設を失なっているものの，残存石室および床面の保存度が極めて良好で，その大要を知ることができたものとか，古墳を含む丘陵全域の完掘をすることによって，本古墳と併存する土壙墓群が検出できるとか，各古墳の比較検討から総合的な資料や古墳群としての問題点も，幾つか提起し得る成果をあげることができた。

各古墳の現存部の計測値や出土遺物の状況は表示したとおりである。概要を整理するなかで二三の問題点を列記して総括としたい。

岩田古墳群のなかで横穴式石室を内部主体とする９基のうち，最初に築造された古墳は第１号墳と推定される。第１号墳はさくら山から眼下の埋積平地に向けて，なだらかに下降する丘陵尾根支脈上に所在する径約17mの円墳である。平地の水田との比高は約40m，眺望視野の広い立地を占める単基独立墳の様相を示す。石室はすでに大破され石材もほとんどを持ち去られているため，その規模や構造は不詳であるが，抜き取り穴等の形状から原況は石室全長７m～８m，石室巾 1.8m程度の横穴式石室と推定され，土師質亀甲形陶棺片が検出された。石室は丘陵尾根部をあらかじめ円形に削平整地した面を基盤として構築され，いわゆる石室掘り方を伴なわず，墳高の高い円墳と推察される。外部施設は地形の高い側の墳外縁に半円形のしっかりとした周溝をもち，墳裾部に円筒埴輪列の囲繞が施されている。また周溝内に人物埴輪頭部と子持ち装飾付須恵器２個が認められた。副葬品は本古墳追葬の過程で石室外にかき出された形状で周溝内に散在していたが，多量の須恵器とともに，２枚の仿製鏡および扁円形杏葉を含む盛装用馬具一式，直刀や鉄鏃等の武具を出土した。出土遺物の特徴から６世紀中葉から後半にかけての築造と推定される。

当地域では横穴式石室を内部主体とし，外表施設に埴輪および装飾付須恵器を有する古墳は，平地を臨む丘陵端部や山麓部に独立墳として立地する場合が多く，比較的大形の石室でいわゆる後期群集墳にやや先行するものが多い。本古墳もそうした範疇に入り，首長層を構成する古墳の一つと

表73　岩田古墳群現存部計測値一覧　（単位cm）

古墳名	立地	周溝痕跡	外表施設	墳丘推定規模		現存掘り方計測値（床面）			
				径	高	方向	長さ	巾	深さ(最大)
第1号墳	尾根稜線	有	埴輪	17.0	(3.0)	尾根に直交	?	?	?
第6号墳	丘陵斜面	?	なし	?	?	斜面に直交	1.5	1.70	0.5
第7号墳	尾根稜線	?	なし	?	?	尾根に平行	4.0	2.5	0.7
第8号墳	尾根斜面	なし	なし	30.0	2.5	尾根に直交	12.0	4.0	1.4
第9号墳	尾根肩部	?	なし	8.0	1.5	斜面に直交	3.9	3.0	1.1
第11号墳	尾根稜線	有	なし	9.1	1.5	尾根に平行	2.75	3.1	1.1
第12号墳	丘陵斜面	有	なし	10.0	2.0	斜面に斜行	3.0	2.7	1.3
第13号墳	丘陵斜面	?	なし	?	?	斜面に直交	3.4	2.5	1.0
第14号墳	丘陵斜面	有	なし	20.0	2.5	斜面に直行	12.7	5.65	2.6

古墳名	形式	現存全長	玄室			羨道			長軸方位
			長さ	巾	深さ	長さ	巾	深さ	
第1号墳	?	5.1	5.1	1.8	?	?	?	?	北77度東
第6号墳	袖なし	1.5	1.5	1.0	?	—	—	—	北85度西
第7号墳	袖なし	3.6	3.6	1.2	0.7	—	—	—	北51度東
第8号墳	右袖	10.4	5.0	2.0	1.8	5.4	1.25	1.2	北25度東
第9号墳	袖なし	2.2	2.2	0.95	1.1	—	—	—	北14度西
第11号墳	袖なし	2.5	2.5	1.1	0.8	—	—	—	北74度西
第12号墳	袖なし	5.2	5.2	1.4	1.32	—	—	—	北53度西
第13号墳	袖なし	?	?	0.9	1.0	—	—	—	?
第14号墳	右袖	11.8	5.5	2.68	2.7	6.7	1.7	2.05	北9度西

推察される。

第1号墳に次いで築造された古墳は第8号墳および第14号墳である。ともに丘陵斜面を利用して石室規模に合せた長大な掘り方を掘り，その中に半地下式の大形右袖横穴式石室を構築した円墳である。どちらも奥壁から墳端までの距離がかなりあり，径20m～25m程度の比較的大形の墳丘をもつ。ともに用木山丘陵の同一支脈上に立地するが，両者間の距離は約 250m 離れ，その間に第9号墳等の小形墳が所在し，また眺望視野の開ける方角も異なることから，併存する別の家父長家族層の古墳と考えられる。

第8号墳は須恵質陶棺1を含む4体以上，第14号墳は10体以上の木棺の追葬が営なまれている。どちらも6世紀後半の築造と推定され，その終期は少くとも7世紀初頭までは追葬が継続した，数

表74　岩田古墳群出土遺物一覧

出土遺物		第1号墳	第6号墳	第7号墳	第8号墳	第9号墳	第11号墳	第12号墳	第13号墳	第14号墳
銅鏡		2								
装身具	金環	3	4		7	2		1		17
	勾玉	2	1		2					1
	管玉	3								1
	切子玉	2			1					
	棗玉				1					1
	ガラス玉	70	1		6					44
	土製練玉	125	11		11					21
	その他玉類				1					1
土器	須恵器	106	4	1	74	32片	2	3		308
	土師器	1		2	2		3	1		45
武具	直刀	1	1							8
	刀子	2	1		1	1		2		20
	鉾									4
	鉄鏃	17	2	1	15	4				114
馬具	轡	破片若干								2
	鐙	破片若干								2
	鞍金具	破片若干			破片若干					破片若干
	杏葉	2			1					5
	雲珠辻金具	2								2
	留金具	2								8
	鋲具				1					7
紡錘車										2
釘鎹	釘	10	3		40	10	20	36	20	75
	鎹	4	4		2					38
埴輪	円筒埴輪	約 20								
	人物埴輪	1								
検出主体数	陶棺	1			1					
	木棺				3	1	2	2	1	7

世代におよぶ家族墓と考えられる。ともに土器をはじめ直刀や刀子および鉄鏃等の武具と，盛装用馬具等の豊富な副葬品を供献されているが，これらの副葬品の多くは，古墳築造後の比較的初期の段階に葬られた被葬者に限られた供献の様相を示す。そして後半に埋葬された被葬者に対しては，各棺に伴出する副葬品は種類および数量ともに極めて簡素である。このことは後述の第９号墳等の後出の小形墳の，副葬品の出土状況とも深いかかわりがあるものと思われる。

中でも特に第14号墳は石室規模も現存長11.8m，玄室巾2.68m，玄室高2.7mを測る大形石室で副葬品の器種や数量も極めて豊富なうえに被葬者も多く，副葬品のセット関係や追葬の過程を知る貴重な資料を得ることができた。

その他の第６号墳，第７号墳，第９号墳，第11号墳，第12号墳，第13号墳は，いずれも石室巾0.8m～1.2m，石室長４m～６m程度の袖をもたない横穴式石室を内部主体とする，径10m前後の小規模な円墳で，石室長軸方向に長径をもつ楕円形プランを示すものが多い。古墳が小規模なだけに破損度も大きく，石室石材の殆んどを抜き取られているものもあって，原況の不明な古墳も多い。各古墳とも丘陵斜面に直交する方向に溝状掘り方を設け，地形の低い側に埋め出して石室床面を整地して，その中に半地下式の横穴式石室を構築した後，地形の高い側の傾斜面を円弧状の周湟を掘って墳域を整えるとともに，その土砂を巻き返して石室を覆い墳形を整えた築造である。石室床面も大きく損なわれ伴出遺物も僅かであったが，比較的床面の保存の良好な第９号墳，第11号墳第12号墳等の状況を合せ考えて，もともと副葬遺物は簡素であったと推察される。

これらの古墳は石室の構造や出土遺物の特徴などから，６世紀終末ないしは７世紀初頭の築造と推定され，第11号墳，第12号墳，第13号墳では少くとも２体以上の追葬が認められた。したがって前述の第８号墳，第14号墳に較べてやや遅れて築造されてはいるが，第８号墳や第14号墳への追葬の過程での築造となり，葬送は並行して営なまれた別個の家父長層の墓といえる。このことは当岩田古墳群の中において，他の小形石室に先行して築造された古墳は，石室規模も大きく副葬品も豊富で首長墓的な性格を呈するが，６世紀終末期において，小規模石室を内部主体とする群集墳が営なまれる時点では，埋納される石室の大小の差はあるものの，副葬品等は簡略化されたほぼ同等の葬送のあり方を示し，階層分化や墓制への大きな社会的変革をあらわすものと考えられるのである。

上記の古墳群の大半が複合立地する用木山遺跡等の弥生時代集落址の，発掘調査にともなって発見されたことは，すでに繰り返し述べてきた。同時にまたこれら集落址の発掘調査によって，さくら山，用木山，愛宕山一帯の丘陵斜面に埋葬された，須恵器２～３個を供献された土壙墓や蔵骨器，あるいは白磁とか八稜鏡を伴出する土壙墓など，約20基を発見し調査した。いずれも現状ではマウンドなどの他施設は全く認められず，前記集落址の調査中にそれと複合して墓壙掘り方や床面上の伴出遺物を掘り当て，偶然に発見したものである。したがって折角墓壙状の掘り方を検出しても，伴出遺物を伴なわなければ時代判別も困難であり，また逆にすでに流失遊離して消滅している墓壙もかなりあったと推察される。

このような土壙墓埋葬は，ある意味では当然のことながら，当山陽団地開発事業用地となった東高月丘陵群においては，四辻土壙墓遺跡や愛宕山土壙墓遺跡などのように，最初にこの地を生活根

拠地として選んだ弥生時代中期以来，引き続いて現代にまで観られる普遍的伝統的な埋葬形態である。こうした継起的な土壙墓埋葬が営なまれる一方で，さくら山方形台状墓，宮山方形台状墓等が発生し，初現的な古墳用木山古墳群，引き続いて野山古墳群，便木山古墳群等の系譜を径て，当岩田古墳群に至る特定な葬制としての古墳の系譜をたどれるのである。特に須恵器を供献された岩田土壙墓群は，当岩田古墳群の築造に先行する6世紀前半頃から始まり，岩田古墳群と殆んど併行しての時期の埋葬が営なまれ，さらに位置的にも同一立地に混在する形態をみせる。この両者が果してどのような関係を有するものか，現時点では明らかにする術をもたないが，今後こうした群集墳の発掘調査に際しては，その墳域のみならず周辺部一帯を含めた精査の必要性を示唆するものと考えられる。

岩田土壙墓群

第1章　序　説……257
第2章　立　地……259
第3章　各遺構の概要……261
第4章　ま と め……284

岩田土壙墓群

第1章 序　　説

岩田土壙墓群は，岡山県赤磐郡山陽町河本の埋積平地を臨む丘陵上に散在する，古墳時代後期以降の土壙墓約20基を，便宜的にとりまとめ総称したものである（図129Z番号）。

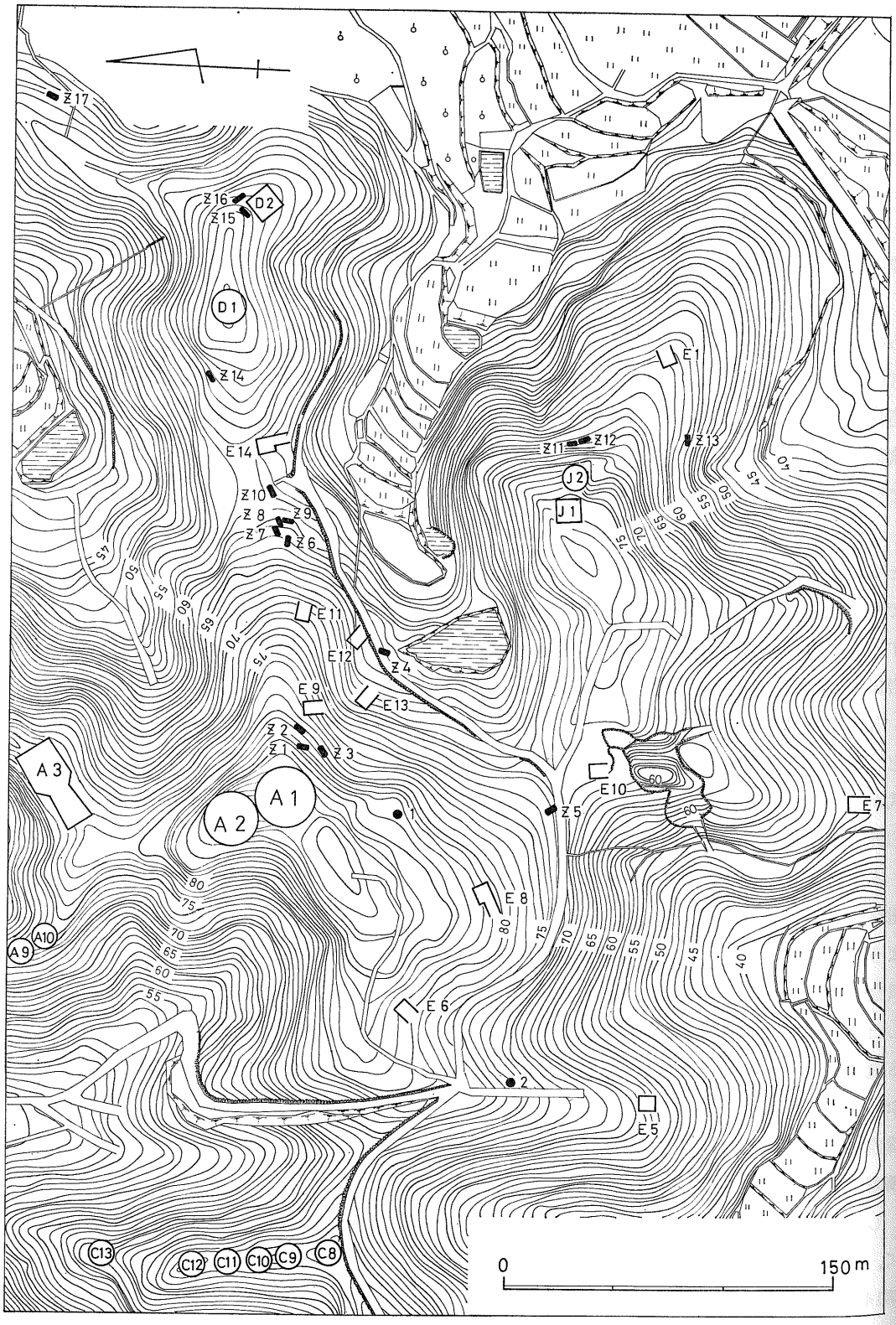
各土壙墓ともすでに埋没したり流失するなど保存状態も悪く，盛り土などの標識的なものも認められないため，事前の分布調査等の外表観察では全くその存在を知ることができなかった。岡山県営山陽新住宅市街地開発事業の施行にともない，事業地内に所在する用木山遺跡などの一連の弥生時代集落遺跡が，「記録保存遺跡」の対称となりその発掘調査中に，集落址と複合立地する本土壙墓群と，すでに破壊埋没していた横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群9基[①]とを，偶然に掘りあて発見調査した。

したがって，これらの各土壙墓は集落址と複合しているうえに，かなりの広い範囲に散在してまとまりをもたず，また古墳時代後期から平安時代にいたる各時代の遺構を含み，相互関係も明らかでないため，共通性をもった単位遺跡とは言えないかも知れない。しかし，混在する分布状態を示す岩田古墳群と時代的に併存する土壙墓も多く，前記集落址とは性格的にも異質な遺跡であるため岩田古墳群とともに集落址の報告とは一応切り離して，稿を改め本巻に集録した次第である。

各土壙墓は集落址内で二次埋積された遊離土層に掘り込まれたり，竪穴式住居址と切り合うなど，層序的な検討が困難なものや，墓壙を発見しても副葬品等の伴出遺物をもたないため，その年代が判別できないものもかなりあった。本稿では副葬品等が検出され一応埋葬年代が古墳時代後期以降と，明らかな墓壙に限って概述することとした。

本土壙墓群および岩田古墳群が発見される端緒となった弥生時代集落址は，用木山遺跡[②]，さくら山遺跡[③]，愛宕山遺跡[④]の3遺跡である。これら3遺跡は，石井谷と呼ばれる小谷水田を馬蹄形状に囲むようにのびる，2条の丘陵尾根支脈上に連続して立地している。3遺跡の発掘調査は山陽町教育委員会が岡山県の委託を受けて，昭和46年10月1日から昭和49年12月末日まで3か年余をかけて実施した。その結果各遺跡は個別に独立した遺跡ではなくて，本来は規模の大きい一集落址であった。3遺跡を総合して遺跡範囲は東西約400m，南北約300m，実質発掘調査面積は約45.000㎡におよぶ。丘陵斜面を階段状に造成して4～6棟程度の単位集落を営なみ，それが幾つか集まってムラを構成するのをはじめ，竪穴式住居址約200棟，ピット約50穴，弥生時代土壙墓約300基のほか，本土壙墓群や岩田古墳群9基等が発見されたのである。

しかしこうした貴重な遺跡群も住宅団地の造成工事により，発掘調査が終了すると後を追うように，次々とその基盤である丘陵ごと削平して，現在では協議の結果現状保存に計画変更できた岩田第14号墳1基を除いて，すべてその姿を消し去ったのである。



第129図　岩田土壙墓群周辺地形図および分布状況図